
ボンバー・ガールズ～妹は世界最強

NAO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボンバー・ガールズ〜妹は世界最強

【Nコード】

N5717C

【作者名】

NAO

【あらすじ】

妹がこの世から去った。白と黒で彩られた葬式のまっただ中、主人公である伊達ハルの目前で突然それは起こった。時を同じくして、起動する人型古代兵器。繰り広げられる人を越える戦い。巻き込まれていくハル。最強の古代兵器、最強のメイド、最強のツンデレ……最強と最強がぶつかり合う戦いの果てに、伊達ハルが見つける物とは！？ 人の強さ、それは人を想う心の強さ。

プロローグ

妹がこの世から去った。

言葉にすれば、息継ぎをする必要すらない情報。

けれど、嫌でも理解させられるその一行の文章が、この白と黒で彩られたしめやかなホールに溢れている。

伸びた前髪で表情を隠しながら、兄である伊達ハル（だてはる）はかみしめる。

死因は、ごくごくありふれたもの。

風邪をこじらせた肺炎。

伊達マキ（だてまき）。高校二年生。享年、十七歳。

あまりにも早すぎる、死。

たくさんの花束に埋もれたマキの遺影写真は、高校進学を記念して撮影したものだ。

妹の隣には、兄が仏頂面で写っているはずだった。遺影写真にするために必要だということで、ハルが業者に渡した写真。後日、マキの服はデジタル処理によって喪服にすげ替えられ、隣にいたはずのハルはそこに元々いなかったかのように排除されていた。

次々と焼香に訪れては涙を流すクラスメイトや、面持ちを悲しみ色に染める親戚一同。

彼らは写真の中で微笑むマキを見ては一礼し、たった一人の家族

であるハルに対しても深々と頭を垂れた。

ハルはその度に腰を曲げ、前髪で顔を隠す。

作業と化した返礼で腰を痛めながら、ハルは顔を上げる度に実の妹の写真を盗み見た。

すつきりとした鼻柱を中心線として、右側の前髪をかき上げ、赤い髪留めで留める特徴的な髪型。広いおでこなのに常に前髪をかき上げる髪型だから、否応なしにおでこはその広さを増す。

写真写りは良いようで、卵のようにつやつやで、血色のよい顔が朗らかだ。絶え間なく笑いかけている口角の広がり、まさにひまわりの縁取り。つぶらな瞳には純朴さが満ちあふれていて、疑うことを知らないようにさえ見える。

この世を去った者とは思えない可愛らしい笑みが、葬儀場を包み込む。

「ハル……しつかりしろよ」

「ハルちゃん、頑張るんだよ」

クラスメイトに続いて、近所に住んでいるおばさんが、ハルの肩に優しく手を乗せた。

普段から作り笑いをしたことがないハルは、気遣いからか無理に笑顔を浮かべようとする……が、あっけなく失敗してしまう。

そんなハルを見て感極まったのか、何人かの参列客が目元に手を持っていく。

対して、ハルの目には涙はない。

一番身近にいた人間がいなくなるという経験は、ハルにとっては

初めてではなかったからだ。

生まれたときから一緒に育ってきた愛猫のアルフレードが、朝起きて冷たくなっていたとき。

海外へ発掘調査に出た両親が行方不明だと知らされたとき。

ハルは心の中にぽっかりと空いてしまう寂しさを感じながら、どうにかこうにか生活してきた。

妹と二人きり、二人三脚と呼ぶには、あまりにも賑やかすぎて、逆にうざったくなるような生活の連続であったが、誰もいない家に帰ってみると、妹が家を明るくさせる太陽のような存在であることが、ハルは今更ながらに実感していた。

妹の存在。

たった一人の家族であり、人付き合いの苦手な自分となんの壁もなく向き合ってくれた同い年の妹。

絶対に訪れる悲しみという奈落を忘れさせてくれた……というか、奈落を埋めてなおお釣りが来るほどの賑やかさと無駄な喧噪を提供してくれた妹。

万華鏡のように、全ての鏡に妹との思い出が駆けめぐる。

ふと、笑いをこぼしてしまいそうなるハルがいた。

悲しみを越えた先に、妹との思い出があり、その思い出の中の俺はひどく困ったように頭をかいている。

邪険にしたことも何度もあった。困らせられた回数はその倍。本当に、はた迷惑な妹だった。

あまりの妹の醜態に暴言を吐いたこともあった。泣かせたことも数知れず。

どちらかというと、俺よりも妹の方に罪があったから、俺は今でも怒ったことは後悔していない。正しいことをしたという自負もある。

無洗米を洗剤で研ぐやつがどこにいる。

電子レンジでゆで卵を作ろうとするやつがどこにいる。

リンゴの皮をむくだけなのに中身が無くなるまで皮をむくやつがどこにいる。

無謀だ。そして、馬鹿だ。

馬鹿で、どうしようもない妹だった。

何とか返礼に隠れて顔の形を整えながら、ハルはさらに回想する。

父にさんざん引つ張り回されて海外の発掘現場を転々としていたとき、親子そろって大けがをしたときがあった。発掘調査中の事故で、死傷者も多く出た。近年では発掘技術の進歩や、出土品の調査も進んでいるからそれほどの大規模な発掘中の事故はないが、当時は手探りな部分も多く、危険な作業だったという記憶がある。父は俺を発掘調査員に育てたかったらしいが、全くはた迷惑な話だ。

「ハル……何かあったら私が力になってあげるからさ」

思い出に浸っていたハルを、同じクラスで委員長の南条こずえ（なんじょうこずえ）が優しい声で遮る。いつもの愛嬌のある笑顔には影。笑うとちらりとのぞくドラキュラのような八重歯も、外側にカールさせた元気の良い髪の毛も、今は水がしみこんだように湿っぽい。

「別に、心配はいらない」

目を合わせようとしないハルに、こずえは困ったように苦笑いを浮かべた。

「まったく、こんな時でも素直じゃないんだから。でも、それもハルらしいか……」

耳を澄ませば、生前、妹の好きだった曲が優しく耳元をなでていく。

ギターつま弾くバラードで、亡くした恋人を探してしまうという歌だった。

もう一度だけ、もう一回……そんな歌が、ホールを包み込む。

「ごめんね、私……こんな時に限って……気の利いたこと何も言えないや……」

壇上で微笑むマキを見たこずえの目に、大粒のきらめきがたまっている。

「気の利いたことを言えないのはいつもだろ。いまさら反省しても遅い」

初めて見るこずえの涙に、ハルはあわてて目をそらす。

「そつだよね……そつだよね……」

反撃する気力もなく、ぼろぼろと絨毯に涙を染みこませていく。

「……泣くなよ、みつともない。マキが見てるだろ」

着慣れない喪服の胸ポケットから、ハンカチを取り出す。

乱暴に差し出されたハルのハンカチに、目を丸くするこずえ。こぼれる涙もそのままに。

「……猫柄だね……」

「悪いかよ」

ハンカチには大小様々な猫の顔があしらわれている。デフォルメされている猫の顔はどれもかわいげがあり、思わず顔がほころんでしまいそうな癒しがある。

一方でそのハンカチは、長い前髪と切れ長の目、長身痩躯で強面のハルには不釣り合いだった。

美女と野獣ならずとも、苦笑いがこぼれる。

「ハル君猫好きだもんね」

「……悪いかよ」

「ハル君猫好きだもんね」

「……」

「ハル君猫大大」

「さっさと受け取れ」

涙顔にハンカチを押しつける。こずえは壊れそうな笑みを浮かべると、ハルに深く一礼してマキの元に歩いていく。

マキを見上げ、ゆっくりと焼香を済ませるこずえの頬を、涙がまた一つ流れていく。

「委員長を泣かせるとは、お前もやるな」

マキの浮かべ続ける笑顔は色あせることはない。今でもそこに生きているかのように輝き続けている。

マキの笑顔が、ハルを再び過去の情景へと引き込んでいく。

発掘調査中の大事故で大けがをした父と俺。気を失っていたので詳しい事情は分からないが、俺は生死の境を何日もさまよったらしい。目覚めてみればミイラ男になっていたのだから、相当な大けがだったのだろう。

発掘調査中の事故により、包帯ぐるぐるミイラ男……そこにファラオの呪いに似た特大の皮肉を感じなくもない。

怪我の後遺症として偏頭痛があるが、わめくほどではない。

それよりも、病室で目を覚ました俺に抱きついてきた妹の泣き顔が、今でも目に焼き付いて離れない。

開けてしまったパンドラの箱の隅に、実は希望があることを初めて知るような。

地獄の底で空を見上げたら、天から蜘蛛の糸が垂れ下がっているのを見つけたような。

とにかく、妹の極上の嬉し泣きがそこにはあったのだ。

後にも先にも　もう先にはないが　そんな妹の笑顔を俺は今でも克明に覚えている。

自分の命が助かったという以上に嬉しいことがある。

妹、マキは俺にそんな貴重な体験をさせてくれた。

「後にも先にも、か」

香の焼ける独特のにおいが、肺にたまっていく。

もう一度だけ、もう一回だけ。

マキが好きだった曲が、ホールを満たしていく。うるさくて、煩わしくて、時間を無駄に浪費していたと思えた毎日が宴たけなわな生活を、まさか懐かしむ日が来るなんて。想像もしていなかった。

病院でゆっくりとまぶたを閉じた妹の顔。かぶせられた白い布。

医師の瞳孔確認。

信じることができなかった。

今でもそうだ。

たくさんの花束に埋もれた妹の遺影や、次々に焼香に訪れる知人達、喪服に身を包んだ先生方、俺を励ます言葉の数々に、驚くほどときばきと妹の葬式を執り行う喪主としての自分自身も。

全部が全部、信じられるわけがない。

妹がいなくなっただけの毎日は、悲しむ暇なんてなかった。地に

足がつかない状態で、足を棒にして忙しく走り回った。まるで何かから逃げるようにして、俺は駆け回っていたんだ。

そして今、ようやく、何かを実感しはじめた。

何かがじわじわと染みこんできた。

頭痛がハルを襲いはじめる。

「……………」

手のひらに爪が食い込んでいく。忙しさから解放され、第三者のように見えていたハルの視点が、ようやくハル自身の元へ返ってくる。

自分自身の目で、ハルは現実という名の残酷をにらみ付けた。妹の笑顔を鋭い眼光で。花束を吹き飛ばすような鬼気を持って。ぎりりと奥歯をかみしめて、拳をふるわせる。

怒りに震えているのではない。

大地震の後、波が引き、しばらくして巨大な津波が押し寄せる。ハルが直面しているのはまさにそれだった。

妹の死という衝撃。

忙殺されていた感情が、痛みを増す頭痛を伴って津波のように押し寄せる。

壇上の中央で花咲くマキの笑顔。もう二度と兄の名を呼び、笑いかけることのない笑顔。

唯一無二の家族というかけがえのない人。伊達マキ。

たった一人の妹。真っ直ぐで、しつこくて、煩わしくて。

でも、主人の足下を嬉しそうに駆け回る子犬のように楽しそうで。

もう一度だけ、もう一回だけ。

何度も何度もサビの部分を繰り返すアーティスト。一オクターブ上がり、つま弾くギターの音が胸を締め付ける。

拳を握りしめて絶えるハル。そんな彼の心の琴線をつま弾いていく。

震える心。きしむ胸。流れ込む歌声。

全てが感情と一緒にたになって、脳の内部でふくれあがる。天地が逆転するのではないかという激痛が、ハルの頭を揺らす。

もう一度だけ、もう一回だけ。

何度も妹を罵った。

黙っていると云った。うるさいと云った。

馬鹿と言った。目障りだと言った。

一人になりたいのにさせてくれなかったし、勉強の妨げにもなったし、頭痛の種にもなった。

怒鳴ったし、叩いたこともあった、無視もした。

心底ではないにしろ、いなくなってしまうと思ったこともあった。

……でも、それでも、本当は。

まぶたをありったけの力で閉じた。眉間が釣りそうなほど。

鈍器で殴られるような偏頭痛。
導火線に火がついた感情のダイナマイト。
両方とも臨界寸前。

もう一度だけ、もう一回だけ。

アーティストのしわがれ声が最高潮を迎える。
肺を振り絞って、声高らかに歌い上げる。

頭痛。激痛。頭痛。

気が狂いそうになる痛みに、意識を持って行かれそうになる

まさにそのときだった。

焼香に訪れた客から、悲鳴が上がる。

戸惑いの声と、怒号が入り交じって、ホールは一瞬のうちに阿鼻
叫喚と化した。

目を開ければ、ホールはまばゆいばかりの光に包まれている。整
然と並べられたイスが蹴飛ばされ、飾られた造花がうつぶせに倒れ
込む。

焼香の粉が舞い、灰色の絨毯は真っ白なグラデーションに変わる。
喪服の黒が、光の中で幾重にも浮かび上がり、まるで閃光弾でも
落とされたかのように影を引き延ばす。

俺は激しさを増した頭痛にいいよ意識がとぎれそうになりなが
らも、何とか手のひらでひさしを作る。

ホールで何が起こっているのか。テロか、戦争か。

よぎる不穏な想像を、光は容赦なく消し去っていく。

あまりにもまばゆく、それでいて暖かい光の奔流。

それは神々しささえ感じられる光だった。

人々の叫びが四方八方に散っていく中で、光は急に放つ光を集束させはじめた。

光が帯になり、帯は壇上で互いを絡ませあう。

まるで猫が転がす毛糸玉だ。光が球体に集束を終える頃には、ホールを覆っていた光は収まり、荒れ果てた葬儀場だけが残る。

ハルは頭痛に必死に耐えながら、光球をぼうぜんと見つめていた。

まばゆい光を放つ球体は、やがて卵が割れるような音を伴って四散する。同時に、再度巻き起こる光の爆発。

ハルは目に飛び込んできた閃光に視界をつぶされてしまう。

しかし、光の欠片は特に何か被害を与えということはなく、すぐに光を失った蛍のように、すうっと消失していった。

ハルは徐々に視界を取り戻しつつある両目の中に、淡い影を見た気がした。

ぼやけた視界の中で、ハルの目は焦点を取り戻す。

やはり気のせいではなかった。

淡い影はぼうつと浮かび上がるように未だそこにある。

未知との遭遇か、はたまたこの世の終わりか。

少しずつ遠ざかっていく頭痛の中で、ハルは視界を取り戻していく。

事態は好転していくかに思えた。

しかし、影は風前の灯火のように揺らめいたと思った瞬間、ハル

に急速接近する。ハルの視界の回復を待つつもりはないらしい。
獲物を見つけたかのように猛然とハルに飛びかかる。

よけられない。

ハルは死を覚悟した。

けれど、死を呼ぶ激痛や、吹き出す血潮はいつこうに訪れない。
それどころか、暖かさに包み込まれた。
顔に何かを抱きついている感触。
柔らかい。まるで人肌の温もりのような……。

ハルは何とか顔面に取り付く影を引きはがす。

「お兄ちゃん！」

歡喜の顔は、病院で焼き付いた笑顔とური二つ。

もう一度だけ、もう一回だけ。

伴奏の伴わないかすれ声が、余韻を残してフェードアウトしてい
く。

消えるかすれ声は、物語の終わりと始まりを人知れず告げていた。

第一話・「GO! GO! GO!」

爆発だった。

天を貫かんとする炎の柱は、周囲の建造物を吹き飛ばして、夜の闇に大きな手のひらを広げた。

原形をとどめない建造物の残骸は、まるで積乱雲から降り注ぐ巨大な雹だ。

冷蔵庫ほどもある岩石が、炎を纏って空中から降り注ぐ。噴火かと思紛うばかりの光景。

屈強な兵士達を乗せた輸送車の車列が、炎をかくぐって爆発の根本へとスピードを上げる。

「……なによ、まだ着かないわけ？ こっちは待ちきれないっていうのに」

黄金色の瞳を輝かせ、装甲車に備え付けられた銃座のガンサイトから事件現場をのぞく。ガンサイトに装填されたガンベルトが、地上に落ちる岩石の衝撃でじゃらじゃらと音を立てる。

「暗いからよく見えないわね」

目を細めたまま、胸元でぶら下がっている黒縁めがねをかける。銀色のメガネチェーンが閃光にきらきらと輝いている。

「しかし、何でこの私がこんな扱い……」

つぶやいた女の装甲車は最後尾。目の前には事件現場に急行する三両の装甲車。

そのどれにも兵士達がすし詰めになっていると考えると、なんだか気分が悪い。

筋肉と、筋肉と、筋肉。

ふと自分の乗っている装甲車の車内を見回すと、褐色の肌をしたスキンヘッドの兵士と目が合った。

スキンヘッドの男は、女と目が合うとニヤリと下品な笑みで応える。

「……うげ」

舌を出して吐き気を催す女の耳に、生々しい爆発音。

爆発の閃光から音が聞こえるまでのタイムラグは、ほばないに等しい。

緊迫した状況の中で、周囲の男達は皆興奮を隠せない。

立ち上る水蒸気は男達の意気盛んな汗なわけで、メガネを外した女は自分の首を絞めるように呼吸系を絶った。

これ以上、一秒たりともこの密室空間の悪臭をかぎたくはない。

「カレン、気持ちは分かりますが、ここは気持ちを落ち着けるようにしてください」

涼やかな声は、カレンと呼ばれた金髪女の隣。カレンは流れるような金髪を後ろに振り払って、瞑想にふける女に顔を近づける。

「そう言うつるわはだいぶ静かね？ 緊張してるの？ それとも怖い？」

つんと伸びた鼻先をぶつけるように、面と向かって物静かな女
うるわに挑発を仕掛ける。

うるわはカレンの無遠慮な言葉には一切応じずに、ただ目をつぶ
って長く深い呼吸を繰り返す。閉じられた長いまつげが、目の下に
影を作っている。肩で切りそろえられたおかっぱのような黒髪は、
車の激しい上下運動に従うようにゆらりゆらりと揺れている。

一見して何事にも動じない平常心は、まるで明鏡止水のごとし。

「緊張はしていますが、怖くはありません。カレンはどうなのです
か？」

「もちろん、やる気満々。久々に私の活躍の機会が巡ってきたんだ
から」

拳をばきばきとならして口角をつり上げる。

悪戯を思いついた子供というよりは、愉快犯を思わせる嗜虐的な
笑み。

そんな二人のやりとり見ていたスキンヘッドの男が、突然笑い出
した。

「活躍、いいねえ……その響きと自信。獲物も持たずに活躍できる
ほど残念ながらこの世界は甘くはないぜ？ どちらかというとお嬢
ちゃん達が活躍できるのは風俗街だと思うが？ それとも都市最大の
電気街かな？」

二人の女の子を指さして笑う。

確かに、男のいうことには一理あった。

兵士達は皆、防弾チョッキや暗視ゴーグル、アサルトライフルにサブマシンガン、最近導入されたばかりの多目的ヘッドセットのおまけ付きだ。そんな念には念をの最新武装を身に纏った兵士達の中。

カレンはゴシック調の黒いロングコートを身に纏い、襟元にはリボンに似せたレースがあしらわれている。袖は大きめで、腕がもう一本はいるのではないかというほどの不可解な隙間がある。

大きめのサイズというわけではないようなので、オーダーメイドといったところか。

漆黒のゴシッククロリータに金髪、どこの世間知らずのお嬢様だ、と言われても反論する者はいないだろう。

もう一方、うるわはうるわでワンピース型の漆黒のエプロンドレス。

首元にはふりふりしたコットン仕様のヨークが揺れ、黒髪には真っ白なレースのカチューシャ。まさにお嬢様付きのメイドという出で立ち。もちろんこの場合、お嬢様はカレンだ。

まだ年端もない少女二人に、男はいらだたしげに顔をしかめる。

「まったく、非常事態にこれはどういう訳だ？ いつからここは託児所になった？」

男達がサブマシンガンの弾倉を念入りに確認する向かい側で、メイド服の女はあからさまな皮肉にも物静かに目をつぶって座っている。

カレンに至っては、馬鹿にしたようににやついている。

それが気に入らなかったのだろう。

男はサブマシンガンのレーザーサイトを開いて、赤い光点をカレンの額に向ける。

明らかな度を行き過ぎた挑発に、周囲の兵士が舌打ちをした。

「ふうん、そのヘッドセット、一応、最新鋭のインフォメーション・リンクでしょ。自分では見えない場所の情報を自動的に視界に届け、なおかつ部隊内で逐一共有できる。でも、過信しない方が良好いわよ。戦場では結局、誰かの届ける情報を信じるよりも、自分で見た情報を信じる方が生き残れるのよ」

「知った風な口を」

「カレンの言うことは正鵠を得ています。私もその機器を試しましたが、しつくりときませんでした。戦場は一秒一秒、刻々と変化していきます。生きた戦場で情報が届くのを待つ数秒は、死を待つと同義です」

深紅のレーザーポインタがカレンからうつるわへ。

「試した、だと？」

「世間では最新鋭といわれていますが、私たちにとっては二年前までのことです。現在はバージョンアップされて、よりタクティカルに進歩しています」

目をつぶったまま、淡々と告げるうるわ。

「はったりを」

「知らないのは幸せよね。井の中の蛙でいられるもの」

手を広げてため息をつく。

妙に芝居がかった仕草が男の坎に触ったのか、男は銃底でカレンに殴りかかる。

男の攻撃に隙はない。

筋肉が一瞬にしてふくれあがり、最短距離でカレンの右側頭部を襲う。

車内の男達がとっさの行動に腰を浮かしかける。間に合うはずはない。

男の攻撃は、言葉や行動で止められる速度ではないのだから。打ち所が悪ければ、頭蓋を傷つけられてもおかしくない一撃。

銃底を受けたカレンのこめかみはぱっくりと裂け、血がほとばしる。

金色の瞳が男の視界から消えるのは、意識を失った合図だ。

「……うるわ、私は別によかったのよ？」

男の見た未来図は、筋書き通りの結末へは至らない。

「ですが、カレン」

座席の上で瞑想していたうるわはいない。

遅れて男のスキンヘッドに届いた風が、男の汗を冷や汗に変えた。左手で銃底を押しとどめて、右肘を男のあご下へ。

まるで首筋に押しつけられたナイフのように、肘は正確に男のあご下で停止していた。

「いいわよ、私もいい加減この臭いにいらいらしているんだから。早く外の空気が吸いたいわ」

カレンの纏うゴシック調のコート。

その袖元で何かがうごめいた。

「それは困ります。カレンが本気になってしまったら、装甲車がただではすみません。カレンは狙いがおおざっぱすぎますから」

「面倒くさいのよ。やっぱり派手さが一番でしょ？」

「駄目です。ここは自重してください。それと……」

うるわはカレンに向けていた黒瞳を男へと戻す。

「無駄な抵抗はやめてください。敵は他にいるでしょう」

空いた左手で胸元のコンバットナイフを取り出そうとする男を、うるわは言葉で制した。

サブマシンガンを押しても引いてもびくともしない。

二の腕の筋肉を限界まで振り絞って、いくら血管を浮き立たせようが、うるわは涼しげに受け止めている。

奇妙な光景だった。

羊がライオンを食らうような構図だ。

周囲の屈強な男達も、さしもの光景には口をあんぐりと開けっぱなし。

「くっ……」

うるわが受け止めたサブマシンガンの銃底が、みしりと音を立てて歪みはじめた。軽量化されているとはいえ、握力で銃を変形させるのは人間業ではない。

メイド服を着た怪力女。

どこの戦場を探しても、そんな兵士は見つからないだろう。

男は背筋を凍らせながら、奥歯をかみしめて力を抜く。

どさりと腰を落着けた男は、限界まで力比べをした真っ赤な二の腕をさする。

奥歯をかみしめているのは、少なからず傷つけられたプライドのせいだ。

「……聞いたことがある」

最奥に座っていた東洋風の男がうるわを見やる。

スペシャル・アサルト・メイド

「要人警護型戦闘家政婦、通称SAM……大統領級の要人警護のために世界中から選抜される、世界で最強最高のメイド集団……その内の一人が君か」

うるわはぺこりとスカートの裾を取り優雅に一礼する。

しかし、振る舞いに見合うような笑顔はついてこなかった。

「へえ、関心関心。結構物知りね。そ、うるわは日本でただ一人のメイド・イン・ジャパンよ。史上最年少でメイド・インの称号を受け取った屈強な乙女ってわけ」

「カレン、それは褒めているのですか？ 屈強と乙女は、どこか対義語に近い響きがあります」

カレンの表現がお気に召さないようだ。わずかに眉間に皺を寄せている。

我がことのように胸を張るカレンはなおも続ける。
人差し指をたてて、得意満面。

「ちなみに、表情に関する審査は軒並みマイナス。その他は満点。前代未聞よね」

「はは……同意していいのか、困るな……」

カレンの背後でぴくりと眉を動かしたうるわに気がつき、男はあわてて語尾を濁した。

「それにしてもよく気がついたわね。褒めてあげてもいいわよ？」

腕を組んで男を見下ろす。

「ありがとう。俺はこう見えても、昔は要人警護をしていたんだ。メイド・イン・アメリカとはちょっとした顔見知りだね。それで君のことも多少聞いていただけだ」

メイド・イン・アメリカの単語が飛び出して、うるわは頬を少しだけこわばらせた。

「でも、詳しくは知らない。そう、表情審査がマイナス評価だったってこともね」

表情の変化に乏しい少女は、男の意地悪な言葉に唇をとがらせた。

どうやら、気にしているらしい。少しだけ恥ずかしそうに頬をそらすうるわ。

白い頬に朱がさしていた。そのほんのわずかな表情の変化を見つけた周囲の男達は、自分のことでもないに恥ずかしそうにしている。男達には免疫がなかった。

頬を指でかいたり、あわてて銃を持ち直したり、マガジンを足下に落したり。

けれど、少女の顔は形状記憶のようにすぐさま元に戻る。男達の残念そうなため息が聞こえるようだった。

「……メイド・イン・アメリカは苦手です。彼女はカレンと似て、手が早いのが玉にきずですから。私は専守防衛こそがメイドの本分だと自負します。宣誓式でも誓いました」

「やられるまでやらない……日本人らしい解釈だな」

うるわを肯定するわけではなく、男は苦笑いをこぼした。

「まったく、あんな女と一緒にしないで。少なくとも私の方が何倍も上品でおしとやかだし、なにより強いわ」

会話の間に割ってはいるように、カレンが足を踏みならした。揺れる車内でこうもバランスよく立っていられる足腰は驚嘆に値する。

「後者は否定しませんが、前者は同意しかねます」

首を横に振るうるわ。

「煮え切らないわね……スマートに物事を解決できるという意味だよ」

「力で解決することはスマートではありません。加えて、カレンが何かをしでかした後には、それはもう大量の瓦礫の山と、被害報告書、請求書、関係各省からの抗議文の山が残ります。カレンはそれを全部私に押しつけます。カレンは面倒くさがりです。カレンは後片付けを知らない子供と同じです」

カレン、カレンとあえて名前を強調するのは、特大の嫌味だろうか。

「いちいちうるさいわね……で、当然、私のことも知っているんでしょうね?」

口では勝てないと踏んだのか、反撃をあきらめて矛先を東洋系の男に向ける。

「じゅめん、君のことはあいにく……」

「ぶざけてるの? うるわは知っていて私は知らないってどういう

訳！？ カレン・アントワネット・山田と言ったら、その筋では超有名でしょうが！」

男が首を横に振るのを見て、カレンは髪を逆立てる。

「すまないが、俺はその筋の人間じゃないのね」

冗談めかした風に手のひらを広げてみせる。

「その厳つい顔は、思いつきこの筋でしょうが！」

カレンが髪を振り乱す背後から、うるわがあわてて羽交い締めにした。

「落ち着いてください、それが越えられない知名度という壁です」

「うるわ、アンタね！ いいわ、いい機会だからその極小の脳みそにたたき込むといいわ！ 私はあの」

うるわが素早くポケットに手をつ突っ込む。

「カレン、乾燥梅です。落ち着いてください」

言下を遮ってカレンの口に赤い粒を押し込んだ。

乾燥梅を右に左に口の中で転がしながら、カレンは酸味に口をとがらせる。

「ん……む……許す」

「はは……」

これには男も苦笑いを浮かべるしかない。
まるで母親と子供だ。

そう言おうとした口をあわててつぐむ。

「それにしても、この味…… たまらないわね。このブランドの乾燥梅じゃないと真似できないのよ。ちょうどいいリハビリになるのよね……」

干し梅は右の頬にある。小さい口の中でころころとよく転がすから、干し梅の行方がはつきり分かる。

激昂していたかと思いきや、スイッチを切り替えるように落ち着きを取り戻すカレンもそうだが、メイド・イン・ジャパンという肩書きにもかかわらず、人間らしい反応を見せたりするうるわ。

東洋系の男同様、乗り合わせた兵士達は一様に疲れを感じていた。

実は、今いるのは装甲車ではなくスクールバスの中で、任務は武力鎮圧ではなく喜劇鑑賞なのではないかとさえ思える。すぐそばまで迫った爆発音を耳元に感じながら、男達はあわてて気を引き締め直すのだった。

乾燥梅に舌鼓をうっていたカレンの体が、前触れもなく宙に舞う。

カレンはうるわに手を取ってもらい、どうにか転倒をまぬがれた。全速で道を駆け抜けていた装甲車が、急停止している。

兵士の一人が倒れた体を持ち上げながら、運転席に何事かと叫んでいた。

「レディを乗せての運転とは思えないわね……！ バラバラにして

やろつかしら」

「どうやら前方の車列が敵にやられたようです。行きましょう」

燃え上がる先頭車両が左右に備え付けられた銃座から確認できる。数名が銃座に取り付いて、残りの人間は腰を低くする。

後部ハッチが開く時間すら惜しい。

サブマシンガンのグリップを握りしめる兵士達の握力が強まる。インフォメーション・クロスの起動音ですらうるさいと感じられるほどに、研ぎ澄まされる感覚。

野獣のごとく腰を丸めて戦闘態勢を取る様は、さすがの歴戦の間が持つ鬼気だけある。

「敵がいること、すっかり忘れていたわ」

コートの両袖口が、カレンの腕とは別に蠢き出す。

何かが入り込んでいるような奇妙な動きだ。

「思い出したようでよかったです」

丸腰で奇異な服装をした二人だけが、この場の空気から取り残されていた。

戦場への道が開く。

後部ハッチが開放され、男達は一斉に軍靴を鳴らして飛び出していく。

「!OG
!OG
!OG
!OG」

第二話・「……にや？」

重武装の男達が、デルタチームを残し一斉に散開していく。

カレン達の目の前に広がっているのは、一面火の海とかした事件現場。

遺跡の残骸と思われる円柱や、足場に使った鉄筋、工事用の重機やプレハブが火に飲み込まれている。

遺跡の発掘現場。

無惨にも火炎と爆発にさらされているここにあるのは、世界中に点在する古代文明の残り香だ。昨今急成長を遂げる人類の英知は、そのほとんどが古代文明の英知を拝借したものと言っても過言ではない。

現在の人類では及びもつかない圧倒的な技術力。それが地中にごろごろと埋まっているのだ。欲深い人類がそれを放って置くはずがない。

「ブラヴォー、リンク接続良好。インフォメーション・シェア情報共有開始」

うるわと会話した東洋風の男が、先頭に立つ。

流れ出す汗をぬぐって右を見れば、先頭の装甲車はすでに火だるまで、後部ハッチがはじけ飛んでいる。

周囲には重武装した兵士達が血を流しながら横たわっていた。

銃座にもたれかかるようにして炎に焼かれている兵士もいれば、上半身と下半身が離ればなれになった無惨な死体もある。物言わぬ

屍はすでに多数。銃痕はほとんど見あたらない。

つまり、引き金を引く時間すら与えられず、地獄へと引きずり込まれたということだ。

「なんてことだ……」

スキンヘッドの男が、インフォメーション・クロスより伝えられる情報に顔をしかめた。味方の生体反応の半数が、すでに画面から消え去っている。

炎の温度と、外気の温度、そして、味方として登録者されている人間の温度。

それ以外の温度が存在すれば、それがすなわち敵ということだ。状況の判断はたやすい。

温度を伴った立体的な映像が、男の左目に映し込まれていく。

「すでに半数が全滅だと……？ 最新鋭の部隊だぞ、俺たちは！」

限りある物陰に身を隠しながらの進行。

三人一組の陣形を取り、一人が移動しているときは、二人がバックアップ。先にたどり着いた一人はその場の安全を確保といった具合に、入れ替わり立ち替わり索敵を繰り返す。先行し、クレール車に身を隠した東洋風の男が、後方の部隊に指で合図を出す。

「無駄口を叩くな。俺たちはベストだ。これじゃ、あのマリー嬢に笑われる」

「うまいこと言うじゃねえか。あの高飛車ぶりは、確かに現代のマリー・アントワネット嬢だ」

体勢を低くしながらクレーンを迂回すると、横倒しになった遺跡の円柱に素早く身を隠す。

上体を起こし、円柱から顔を出して視界を巡らす。焦点を合わせると、目を覆うバイザーに距離の表示が浮かび上がった。

二十メートル前方。

自らが率いる隊員達全てにその情報が即送信され、共有される。ズームアップして見れば、遺跡に常駐しているセキュリティの車が確認できた。

ボンネットがへこんでいて、窓ガラスには蜘蛛の巣状のひび。車内には飛び出すこともかなわなかったセキュリティの死体が、シートに深く腰掛けている。

左胸から溢れる血液。

狂いなく心臓を一突きにされたようだった。

体温がほとんど失われている。インフォメーション・リンクは、それを生体反応として感知しなかった。

情報の残酷さに、男達は奥歯をかみしめる。

「それにしても敵の姿がちつともだ。妙じゃねえか」

スキンヘッドが円柱に背中を預けた。

夜空に吹き上がっていく火の粉の行方をいらだたしげに眺める。

「……いや、アルファが見つけたようだぞ」

接敵の表示が目の前を駆け抜けていく。

東洋風の男が、素早く指示を出す。物陰に隠れながら、素早くア

ルファチームの援護に向かう。訓練のたまものか、流れるように安全確認と移動を交互に繰り返す。

「くそ！ また一つ反応が消えた！」

一分と絶たないうちに、味方の生体反応が、一つまた一つと消えていく。

まるで、蝋燭の火のように簡単に吹き消されていく命。

偶然に装甲車に同乗しただけの、なんの絆もない関係に過ぎないのに、作戦を共に遂行する仲間だと考えるだけで、それはとてつもない怒りに変わった。

敵に銃口を向けて、ありったけの銃弾をたたき込んでやる。

これは、正当な復讐だ。

仲間がやられて、はいそうですか、そんなお人好しにはなれない。

なりたくもない。

「チャーリー全滅！ デルタ残り一人 馬鹿な！ アルファもやられた！」

スキンヘッドの男が怒鳴り散らす。

退路確保のために装甲車防御にあたらせていたデルタが危機に瀕している。

もし全滅すれば、退路を断たれたということになる。

敵の戦力も把握できていない今、それは最悪の事態を招くことになる。

全部隊全滅。最悪のシナリオだ。

「デルタ……全滅」

現場に到着したとき、インフォメーション・リンクからデルタ隊員の光が消えた。

機械は死亡と判断した。

信じたくない。奇跡すらも否定する、あまりにも無慈悲な情報。恋人への手紙を受け取ることも、約束でつなぎ止めることも、気休めの言葉を言うことも許されない。

インフォメーション・リンクが死んだと言えば、それは真実だ。

人間は機械ではない。機械に徹することはできても、そのものになることはできない。

押さえきれない悔しさに、男達は反撃を決意する。銃のグリップを握りしめ、互いにつなずきあった。

そして、ブラヴオーチームの面々は、敵、を目にすることになる。

「……女？」

遠く物陰に隠れながら、スキンヘッドの男が目を丸くした。

彼我距離八十メートル。

インフォメーション・リンクが反応を示さないそこには、小柄な女が立っていた。

視界、ズームアップ。

黒いレザースーツが体にぴったりとフィットしていて、曲線的なラインがなまめかしい。凹凸の少ないしなやかな体は、炎の赤を浴

びて悪魔のように浮かびあがる。短い髪の毛を一带を焼く熱風に揺らしながら、女は天を見上げていた。

まるで夜空を仰ぐように美しく幻想的な構図だが、女の足下は幻想的にはほど遠い。

アルファ、チャーリー、デルタの亡骸が、至る所に転がっている。女の真下には、今し方絶命した最後のデルタ隊員の死体。

背中に一振りの日本刀が突き立っている。刃こぼれはなく、炎を浴びて刀身が鏡のように光を反射している。

周囲の惨状が物語るほど、激しい戦闘があつたようには思えない。不気味なほど周囲は静まりかえっている。炎のはぜる音だけが、時間の流れを伝えていた。

「あの女……なぜ、インフォメーション・リンクに反応しない？
くそ、壊れてやがるのかよ。他のところは正常に機能してるのに…

…」

血管の浮かぶスキンヘッドから、汗がしたたる。

視界をズームし、さらに目を細めても、銃撃戦の痕は数えるほど。屈強な仲間達が、何もせず死を待っているはずがないから、油断がそうさせたのだろうか。だとすれば、それは兵士としては最低だ。

戦場では、子供でさえ武器を取るのだから。

兵士達の緊張が、正体不明の女によって引き上げられていく。

「……………にや？」

女の耳がぴくりと跳ね上がる。そしてゆっくりと振り返ると、足下に転がったデルタ隊員の背中から、無造作に日本刀を引き抜いた。引き抜くとそこから血が吹き上がる。

心臓を一突き。

東洋風の男は思い出す。

間違いない、セキュリティを殺したのはこいつだ。

女は兵士達に気がついたようで、刀を地面に引きずったままゆっくりとこちらに歩いてくる。

索敵には十分な距離のはずだった。気配も殺していた。十分物陰にも隠れている。加えて、夜の闇にも紛れやすい黒い戦闘服。それでも存在を気取られた。しかし、逃げるつもりはない。

「殺るぞ、いいな」

スキンヘッドの男が呟いた。

東洋風の男もスキンヘッド同様、サブマシンガンを構える。

「釣りはいらねえ……これはサービスだ！」

銃口から閃光が飛び出す。

何十という銃創が、女のレザースーツにうがたれるはずだった。

男達の目がガンサイト越しに見開かれる。

女の姿が一瞬にして闇に紛れたのだ。

銀のひらめきがガンサイトに写ったかと思った瞬間、スキンヘッドの男は、視界が二つに割れていることに気がつく。両目の視界が分断され、右の視界は地面へとうつぶせに倒れる。スキンヘッドの男が、何事かと足下に目をやると、そこには自分の半身が転がっている。

「俺の、体……かよ」

それは右の体が発した声だったか、それとも左の体が発した声だったか。

絶命した男にはそれを判断することもできない。一刀両断された男の体は、それでも引き金を引き続け、銃弾が夜空をむなしく打ち抜いた。

血しぶきが東洋風の男の焦りを引き上げる。

そして、女はまた視界から消失した。

「くそ、情報がリンクしない！ 熱探知、モーションセンサー、音波ソナー……どれにも反応がない！」

全ての機能をフルに駆使して、女の攻撃に備えようとする。けれど、どれも女の行方を特定するには至らない。

死が、少しずつ背後に忍び寄る感覚。
ぞわりとする悪寒が、背中を痛めつける。

銀のひらめきが頭上に輝いては消える。
壁を蹴り、地面に着地、さらに伸び上がって宙返り、演舞のごと

く刀をひらめかせながら、東洋風の男に襲いかかろうとする。

無駄な動きを繰り返すのは、どこか遊んでいるようにも見受けられる。

それが余計に男の恐怖を増大させた。

恐ろしさに押しつぶされた男は、もはや引き金を引くしかなかった。

男の放つ反撃のマズルフラッシュが、夜の闇を切り裂いていく。命中するかに思われた銃弾は、後方にある重機のガラスを粉々に打ち抜くだけ。

レーザーーツにマズルフラッシュを反射させながら、女は地面に背中をこすりつけるように、立ったまま体を反らせる。

なんとという柔軟性が。人間の関節を無視している。

銃弾が女の胸をかすめていき、女はそのまま刀の遠心力を利用して、体を立て直す。

引きつばなしだったトリガー。フルオート射撃の反動。

夢中で引き金を絞る男の体は、銃を押しとどめることもできない。暴れる銃身が女の刀に切り落とされても、男は銃を手放すことができなかった。

ホルスターに入ったハンドガンを引き抜くことさえも、頭から抜け落ちる。

続けざまに、切られた銃身が前触れもなく発火、爆発し、男は仰向けに地面に転がってしまう。

切り口が異様な熱を持ち始め、引火するように破裂した。

それは暴発ではなく、明らかに何かによって引き起こされた爆発だった。

地面に転がった東洋風の男は、次の光景が自分にとって最後だと悟る。

どんな悲惨な死を迎えるか。

できれば、暖かいベッドの上か、恋人の膝の上で眠るように死にたかった。

男は、瞬きすら許さない高速の空間で、それだけを願った。

「だから言ったでしょ？ 戦場では、誰かの届ける情報を信じるよりも、自分で見た情報を信じる方が生き残れるのよ」

風切り音がしたかと思うと、男の周囲をすさまじい破壊の衝撃が襲った。どこから発せられているのか特定できない風切り音が耳に入り込んでくる。

それは男の周囲、三百六十度から聞こえてくる。

まるで竜巻の中にいるような感覚だ。

「そうです。戦場は一秒一秒、刻々と変化していきます。生きた戦場で情報が届くのを待つ数秒は、死を待つと同義だと言ったこと、聞いていませんでしたか？」

建設現場のコンクリートに立っている標識を握りしめると、難なく標識を引き抜いて見せた。

一緒に引き抜いたコンクリートが、ぱらぱらと地面にこぼれる。

「それにしても……これがあの遺跡の禁断、人型古代兵器だとはね。実際に動いているの見るの初めてよ、私」

カレンの大きく開いた袖口が、風もないのに激しく揺れている。

「……にゃ？」

カレンをして古代兵器と称された女は、首をかしげて自分の周囲を巡る力の行方を追っている。

やがてそれがカレンのしていることだと分かると、猫のような可愛らしい笑みを浮かべた。

つぶらな瞳が、おもちゃを見つけた子供のようにららんと輝く。

「……多分、好かれたわ、私」

腕を組んで渋面を見せるカレン。二の腕をさすっているのは、鳥肌が立ったからか。

「少なからず嫉妬します」

引き抜いた標識を軽々と相手に突きつけると、うるわは静かに一言。

「とにかく」

標識に描かれた絵が、周囲の炎によって照らし出される。標識の意味、それは。

「ここから先へは行かせません」

進入禁止だった。

第三話・「メイド・イン・ジャパン失格ね」

火の粉が天に昇り、燃え尽きて光を失うまで三秒。

その三秒間に一連の攻防はあった。

まず、うるわの制止に耳を貸さない黒いレザースーツの女は、余裕の笑みを浮かび続けるカレンに直線的な攻撃を仕掛けた。

カレンの右の袖口がいつそうはためく。

すると男の周囲を覆い尽くしていた風切り音が、レザースーツの女にも発生する。

男の周囲に発生していた風切り音が消えたところを考えると、どうやら発生したのではなく移動したようだ。

風切り音を継続させたまま、地面を切り裂き、あるいは火の粉を消し去り、車のボンネットをめくりあげる。

衝撃が移動する様は、まるで台風の暴風域。

周囲を破壊しながら移動し、レザースーツを切り裂くべく八方から何かが強襲した。

台風を作る原因となるもの。

暗闇に紛れながら四方八方から目標を襲うそれは、どこから仕掛けられた攻撃なのか、また幾重に及ぶ攻撃なのか、全く計り知れない。

まるで何人もの見えない敵に包囲され、絶え間なく斬撃を受けるようなものだ。

迫り来る破壊の嵐。

直線的な加速を得ていたレザースーツの女は、耳をぴくりとそば

だてる。

周囲から迫り来る複数の攻撃に感づいたようだ。しかし、攻撃の方向は一貫して変えない。

愚直とも取れる一直線。

がりがりがり。

刀を引きずりながら地面を這うように駆ける。蹴る度に地面では砂埃が舞い、女の黒いレザースーツが闇に紛れる。

消えたように見えるのは、スピードがそうさせるのか。

圧倒的なスピードと、人が視認する速度。

肉体の限界に迫ろうかという超人的なせめぎ合いだ。

地面と刀の摩擦で火花さえも巻き起こす加速度は、常人の域を超えている。

「カレン！」

うるわの声が届く頃には、一連の攻防は終わっていた。

敵は、地面を切り裂きながら駆けていた体を急停止。

アキレス腱に最大限の負荷をかけながら、ブレーキ。

そして、跳躍。

前方宙返り。

追いついた嵐が、跳躍した足場のアスファルトをバラバラに砕く。飛び散る破片。えぐれる地面。

敵は右手で握りしめていた刀を空中で両手持ちに変えた。

燃える夜空とえぐれる地面を何度も目に映しながら、女は重力落下の力と、回転力を加えた一撃をカレンにたたき込む。

紫電一閃。

ひらめきは一刀両断の電光と化した。

カレンの左袖がはためく。

なんの前触れもなく、嵐の暴風域が勢力を増した。

後方から襲い来るだけだと思われた嵐が、今度はカレンの正面から発生したのだ。

きらめきがカレンの頭上をとらえるよりも早く、袖口から発生した新たな波動がレザースーツの女をとらえた。

殴りつけられたように腹部をくの字に曲げて吹き飛ばされる。

きりもみ回転しながら、レザースーツの黒が燃えさかるプレハブ小屋に飛び込んでいく。

ガラスの割れる音。遅れて、内部からは激突音。

一步も動くことのなかったカレン。

その悠然たる姿は、動かざること山のごとし。

「まさか、これで終わりじゃないわよね？」

カレンの巻き起こす暴風域が、カレンの周囲に停滞し続ける。

左袖は全く動かなくなり、今は右の袖だけがゆらゆらとなびいている。

二つあった暴風域は、いつの間にかカレンを覆う一つへと減少していた。

割れた窓ガラスからは、炎が酸素を求めて手のひらを突き出している。

数秒後、半焼していたプレハブ小屋のバランスが崩れた。基部がまっぴたつに折れて、大量の火の粉を吹き出す。まるでへたくそなサンドイッチでも作るように、燃えさかる火炎を噴き出しながらプレハブは倒壊した。

「大丈夫ですか、男の方」

アスファルトから引っこ抜いた標識を、再びアスファルトに突き刺す。うるわ。

そのうるわの手に助けられながら、男が転がっていた別のサブマシンガンを持って立ち上がった。すぐさま空のマガジンを地面に転がし、リロードする。

兵士としての本能。戦闘の意志は薄れていないようだ。死の恐怖にとらわれた目も、怒りが再燃しはじめる。

「畜生……なんて日だ」

サブマシンガンを崩れたプレハブに向けるのを見て、うるわはゆっくりと男の視線をなぞった。

倒壊した屋根の部分から、キノコでも生えるように短髪の女が顔を出す。

プールから顔を出すような、すがすがしい顔。

「……ふにゃ……ナナと戦える人、ひさしぶり。ナナ嬉しい」

周囲が火に包まれているのに、涼しげに微笑んでいる。

赤い炭に苦もなく手を乗せると、手のひらからは、じゅう、と焦げる音。

痛覚に顔をゆがめることも、煙にまかれることもない。

「ナナの刀…… ナナの刀はどこにいったかな？」

ひっくり返したおもちゃ箱の中から、お気に入りを探し出すような風景に似ている。

やがて焦げたパイプイスの下敷きになっている刀を見つけると、あどけない顔が花咲くようにほころんだ。

刃先を満足そうに確認すると、よいしょ、のかけ声と共に瓦礫から抜け出した。

揺らめく炎の向こうから、大量の煙を纏い悠々と歩んでくる少女。

「俺は醒めぬ悪夢の中にいるのか……？」

それは、現実を越えた存在。

「やはり人型古代兵器はひと味違うということかしら」

カレンが口の端をつり上げ、ニヤリと笑う。

「のようですネ」

標識を引っこ抜いて、斜めに構えるうるわ。

「私の《サウザンド・アームズ千手》をまともに受けて、なおかつ平然と立っていられるのって、なんか無性に腹が立つわ」

夜風がコートの裾をなびかせ、首から提げたメガネのチェーンを揺らす。

カレンは外しっぱなしだったメガネをかけると、遠くからにこにこしながら歩いてくるナナをにらみ付けた。

「あの余裕、いらいらする」

左手で肩に掛かっていた髪の毛を乱暴に払う。

黄金の髪が、炎の中で輝かしく踊る。

「……カレン、どうしたのですか？ 冷静に。落ち着いて深呼吸を」

「もういらいらするし、面倒くさいから一気にバラバラにしてやるうかしら」

メガネの黒いフレームに周囲の赤い色が写り込む。

同じように漆黒のレザースーツに赤を反射させたナナが、刀を地面に引きずりながら歩いてくる。

頑張って探していたわりに、刀を大事に扱うつもりはないらしい。

「カレン、深呼吸を」

「うるわ、あれ、ちょうだい」

うるわの言葉を拒絶し、左手を差し出す。

メガネの奥の金の瞳ににこりが混じる。

「駄目です。乾燥梅で我慢してください。それともまたあんな思いをしたいのですか？」

標識を握る手を片手に変えて、ポケットから梅干しの種を出す。
うるわが差し出した乾燥梅のパッケージを見て戸惑い、すぐにカ
レンの目が熱を帯びる。

それは強い意志を宿した目ではなく、どこか懇願に似た目だった。

「……あれがないといらいらするのよ。それに体が要求するんだか
ら仕方ないじゃない。欲しい、欲しいって、全身がうずいてしかた
がないのよ。うるわ、いいから黙って私によこしなさい」

カレンの目が揺れはじめる。

まるで焦点を失っていくようだった。

カレンの周囲を覆っていた暴風域が乱れはじめる。

一定速度で保たれていた風切り音が、速度も距離も不規則になり
始め、身勝手に周囲を巻き込んでいく。東洋風の男のマシンガンを
はじき飛ばし、地面に横たわる死体をなぎ払う。

男は何事が起こったのか分からず、尻餅をつくのをごらえるのが
やっと。

破壊された弾倉から、実弾がきらきらと散っていく。

その瞬間、男は見た。

今まで見えていなかった風切り音の正体。

地面をのたうつように、黒い軌跡がひるがえったのを。

黒い放物線は、周囲に組まれた足場ごと遺跡の柱を何本もたたき
割り、小さな宮殿のような遺跡が発掘調査もまだのまま崩れていく。
トラックの荷台に積まれた土砂を叩き、砂を巻き上げ、ついには
トラックごとひっくり返す。

横つ面を叩かれたトラックのガラスは運転席に入り込み、横倒しになったトラックのシャフトも簡単にひしゃげる。

意味もなく地面をはぎ取り、何十と空を切った。

それこそ天災のたぐいとは思えない有様だった。

「カレン、口を開けてください。乾燥干し梅です。カレンはこのブランドの梅が好きでしょう？ 美味しいですから、ゆっくりと口を開けて」

うるわが標識を地面において、カレンの腰に優しく手を添えた。

右手でつまんだ乾燥梅をカレンの口元へ持つて行こうとする。表情審査でマイナスだとは思えないほど、その顔は慈悲に溢れていた。

「いやよ、うるわ……それじゃだめ、気休めじゃ駄目なのよ！ あれがいいの、あれがいいのよ！」

うるわの胸ぐらをつかむ。

首元の真っ白なヨークが引きちぎれそうなほどの握力。

それでもうるわはカレンに笑顔で応え続ける。

二人の周りでさらに乱れ広がる暴風域。

セキュリティの車が、縦回転をしてブルドーザーにつっこんでいった。フロントタイヤが外れて転がり、東洋風の男は大あわてでタイヤをよける。

「次から次に、一体何が起きている！」

周囲が絶大な破壊力を持てなぎ払われていく。男の叫びには同情するばかりだ。

男の視線の先、嵐の中心では、うるわの細い指先がカレンの頬を撫でていた。

「カレン、自分に負けては駄目です。いつものあなたはもつと気高く、強い心の持ち主。こんなところで欲望に流されてはいけなはずです。あなたは誰ですか？ 誰も触れることのできない高嶺の存在 《アンタツチャブル》と称されるカレン・アントワネット・山田でしょう？ 世界で最も美しく、強い人。私が、メイド・イン・ジャパンが身を捧げると誓った人なのですから。どうかカレン、口を開けて……」

うるわの言葉にカレンがゆっくりと口を開く。

まるで愛しい我が子に母乳を与えるように、細い指でカレンの口内に梅を落とした。

カレンはしばらく焦点が合わない視線をうるわに見せていたが、ようやく美しい黄金色の瞳を取り戻す。

暴風域が、その範囲を狭めていく。

百メートル四方に及んでいた破壊の嵐は、何事もなかったかのようにはカレンを中心として集束していった。

一本だけ残っていた遺跡の円柱が横倒しになった轟音を最後に、現場に静寂が訪れる。

激しく揺れていたカレンの両袖も今は静かだ。

「……悪かったわね。久しぶりすぎて、調子がつかめなかったわ。我ながら馬鹿ね」

カレンはメガネを外し、チェーンを揺らす。
手のひらで額をおおい、ゆっくりと深呼吸をした。汗が頬を伝い、

砕けたアスファルトに落ちていく。

お気に入りのゴシック調のコートもいつの間にかほこりだらけだ。

「私が至らなかったのです。私はメイド・イン・ジャパン失格です」

カレンの服についた汚れをはたき落としながら、かすかに眉根を下げる。

「確かにメイド・イン・ジャパン失格ね」

腕を組んだカレンが、うるわに残酷な決断を下す。うるわの手が止まり、悔しさに握りしめられそうになる。

「でも、私のメイドとしては十分合格よ」

握りしめかけた拳がゆつくりとほどかれていく。カレンが、うるわのおかっぱ髪に手を置く。

撫でると、頭の上で輝くレースのカチューシャがくしゃりとゆがむ。

うるわの表情もまた、カチューシャのようにくしゃりとゆがみ、かすかだが強ばった顔がほころびはじめた。

だが、それも一瞬。

「その言葉とても嬉しいです」

カレンに背を向けて、無表情な顔をナナに向ける。

ナナは刀をぐるぐると振り回して遊んでいるようだった。暴風に吹き飛ばされてきた自動車のドアや、ホイール、岩石。それらが綺麗な切り口と共にナナの足下に転がっている。

「カレン、私が代わります。いいですね？」

背中でカレンに問いかけた。

「……そうね。残念だけど、代わってあげるわ」

口の中で乾燥梅干しを転がしながら、乱れた金の髪をすく。

「ねえ……もういいの？ ナナ我慢できないよ？」

教鞭を生徒に突きつける教師のように、刀の切っ先をカレン達に向けた。とても兵器を冠する者の発言とは思えない。もちろん、特殊部隊をたった一人で片付けたとも思えないほどの軽い発言に、東洋風の男は奥歯を噛み鳴らす。

「人型古代兵器にもそういう気遣いはあるんですね」

カレンより一歩前に出て、地面に落とした標識を拾い上げる。つるわを目に留める。

「にゃ？ ナナは金髪と戦うの！」

頬をふくらませ、刀を感情的に地面にたたきつける。かなりの業物のようで、折れたり曲がったりはしない。

「私が相手でも失望はさせないと思います」

うるわは二度、標識を人型古代兵器ナナに向ける。

「ふうん……じゃ、いくね」

例えるならば、鬼ごっこ。子を捕まえる鬼のように、笑顔を浮かべたナナは地面を蹴った。

第一歩。

加速。踏ん張ったアスファルトの地面にひびが入る。

第二歩。

再加速。残像が、台風一過のような事件現場を駆け抜ける。

第三歩。

最大速。音もなく、うるわの懷へ飛び込んだ。

東洋風の男を殺そうとしたときよりも、カレンに飛びかかったときよりも速度は上だ。

ためらいもない必殺の斬り上げ。

まるで神速の抜刀術。

地面ぎりぎりから放たれた一閃が、うるわの持つ標識を野菜でも切るように容易に両断した。半分の長さになった標識が、地面に転がる。進入禁止のマークが描かれた側はなくなり、残るのは切り口が鋭利になった根本のみ。

とっさにうるわが身をさばいていなかったら、首から上が地面に転がっていただろう。

視界に残像を伴うほどのスピードと剣速は、恐怖を通り越して絶望に値する。

その様子を見たカレン。

口内で転がしていた梅干しの動きが止まった。酸っぱさに舌鼓を打つのを止める。

加えて、喜色が頬を彩り、組んだ腕に力が入るのが分かった。

ナナがさらに踏み込んだ。

刀を抜刀した右手。開いた体。

それは回転によって攻撃へと変換された。

未だ辺りをただよう暴風域の余韻。

砂ぼこり。

回転力で巻き込んで、右足の回し蹴りへ。

初手をよけられることを見越しての予備策か、あるいはとっさの機転か。

早さとしなやかさを兼ね備えたナナの柔軟な攻撃に、うるわは胸元に直撃を受けてしまう。

打撃の威力はどれほどのものか。

エプロンドレスがアスファルトにこすれて汚れていく。小柄なうるわの体が十メートル後ろに蹴り飛ばされ、カレンの横を勢いよく滑っていった。飛ばされた先には、ひっくり返って炎上していた車。助手席にぶつかり、うるわはようやく止まる。

レースのカチューシャがナナの目の前に舞い、カレンとナナを結ぶ視線を遮った。

「……にや？」

うるわがやられたにもかかわらず、カレンは微動だにしない。余裕の笑みを浮かべたまま、胸を張り、腕を組んでいる。

カチューシャが地面に落ちると、カレンの後ろで、むくりと立ち上がる気配。

肺を圧迫されたのか、一つ大きな咳払いをして、うるわは顔を上げた。

無表情は相変わらずだが、うるわの放つ意志は静かに燃えているように見える。

汚れたエプロンドレスの裾を払うと、半分になった標識を右手に持つ。

「本当にやっかいよね、あんたもそう思うわよね？ 人型古代兵器？」

カレンが組んでいた腕を広げて、肩をすくめて見せた。質問の意味が分からず、首をかしげるナナ。

「だって、うるわは専守防衛。一度やられないと、やり返せないんだから」

カレンが肩越しにうるわを見る。

「うるわ、行きます」

うるわの背負う炎が、うるわを避けるように揺らめいた。

第四話・「……なんか面倒なことになったわね」

武器の長さが半分になろうが、うるわの表情は変わらない。
カレンをいたわっていたときの顔はまるで別人だったかのように
さえ思える。

冷静に、静かに。

それでいて圧倒的な威力をたずさえて、攻撃は繰り出された。

半分に切断された標識をナナの頭上に振り下ろす。ナナは一瞬き
よんとした顔を見せる。それは自分の間合いに簡単に入り込まれ
たことによる驚きだった。

レザースーツをかすめる標識。

数センチの間隔を残して、ナナはひらりと身をさばいた。
標識が地面を砕く。

破碎音がしたかと思えば、今度は横薙ぎの一撃。ナナはそれも圧
倒的な身体能力でかわして見せる。

男の銃撃をよけて見せた体の柔らかさだ。まるで猫のように柔ら
かく、しなやかに、連続で繰り出される攻撃をいとも簡単によけて
いく。だが、うるわはかわされ続ける攻撃に動揺したりはしない。
無表情のまま、集中力を高めていく。

「よっ、ほっ、はっ！」

対してナナは楽しそうに笑っている。口をつく擬音語と笑顔は、
まるでアトラクションを楽しむようだ。足を狩りにきたうるわの足

払いを、後方宙返りで逃げる。

それを見越してさらに踏み込むうるわ。

標識の先端をナナに定め、目にもとまらぬ突きを放つ。

足から地面に着地する隙をねらい澄ました突き。受ければ間違いなく体を突き抜けるだろう。

「にゃ！」

それでもナナは笑みを崩さない。

片手を地面につけたかと思えば、その片手一本で自分の体を再度空中に舞わせたのだ。空気を貫く標識の先端。

空中でひねりを加えて、ナナは空振りに終わった標識の上に乗る。

挑発にも似た言動に、うるわのエプロンドレスがはためいた。

突きを放ち、伸び上がってしまった腕を折りたたむ。

「わわっ！」

標識の上に乗っていたナナは、バランスを崩して無防備な体をさらすことになった。

尻餅をつく格好。

うるわは標識の中心部を持って、両手でくるくると回転させる。

あっと言う間に間合いに飛び込んだうるわ。

巻き起こされる白い旋風。

加速をつけた標識が鞭のようになって見えた。手数を繰り出す戦法に切り替えたうるわが、右から左から標識の両端を繰り出す。持ち手を標識の中心に切り替えたことで、素早く攻撃に移ることができる。

「わわわ……！」

「まだ行きますよ」

体力勝負といわんばかりに、徐々にそのスピードをあげながらナを追い詰めていく。

軟体動物のように体を反らしたり、曲げたり。人間の関節を無視した動きで、ナナはよけることにだけ専念していく。

「メイド・イン・ジャパン……まさかこれほどのものとは」

古代兵器を追い詰めていくつるわに、驚きを隠さない兵士。

「あら、うるわはまだこんなものではないわよ？ あれでまだ五分も力を出していないかしら」

「五分だと……？」

カレンの言葉に、力の抜けたような声を出す。

「ちなみに言っておくけれど、私はうるわより強いわよ。……ある条件下をのぞいては」

メガネチエーンをもてあそぶのを止めて、ポケットからハンカチを取り出す。

「条件下だと？」

「ちなみに今は、悪いけどその条件下なのよ。だからうるわが殺されないように神にでも祈ることね」

興味なさそうに、ハンカチでメガネのレンズを拭き始める。

大きく口を開けてレンズに温かい息を吹きかけ、曇ったメガネをぐりぐりと拭き取っていく。

「……メガネか？」

男が呟いたタイミングで、うるわの空振りした標識が煉瓦を吹き飛ばす。

「残念だけど、そんな便利にはなれないわ。メガネはただ目が悪いだけ。最近はコンタクトにしようか悩んでいるの。でも、面倒なのよね、コンタクトのお手入れ」

金色の髪がうるわとナナの攻防の余波に揺れる。

男が苦笑いを浮かべ、カレンが拭いたメガネを装着した。

クリアになったその視線の先では、うるわがナナを追い詰めていた。

倉庫のシャッターに背中をぶつける音。ナナがあわてて背後を見やれば、飛び退くスペースがない。左右は崩れた壁に遮られている。

「もう逃げられませんよ。恨みはありませんが、これも任務なので」

エプロンドレスのスカートが、うるわの回転を得て大きく広がった。まるで社交ダンスでも踊るかのよう。

「……やーめた」

ナナは唇をニヤリと嬉しそうにたわめて、腰を低く構える。逃げ

の構えではない。迎え撃つつもりのようだ。

ぶつかり合う刀と標識。

夜闇に散る火花。

うるわの頬を標識の半分が回転して飛んでいく。

うるわは動じない。斬り飛ばされた標識に目をくれることもなく、ナナにさらに一歩踏み込んでいく。アスファルトにびきりと亀裂が入るほどの加速。

ナナはこのうるわの行動に虚を突かれたのか、回避動作に入れずにいる。

無邪気な笑顔が驚きに変わった。

鋭利な切っ先を追いかけるナナのつぶらな瞳。

「終わったわね」

目をつぶるカレン。

うるわの放つ白い槍が、黒いレザースーツを貫く。まるで天使に断罪される悪魔。

貫かれた胸からは破壊された内部機構がのぞく。バチバチと電気回路がショートしていく音。回路が無惨に裂けて、熱いオイルがどくどくと吐き出される。

ビニールが焦げるような異臭が漂い、カレンは思わず顔をしかめそうになる。

「……まだだ！」

目をつぶって古代兵器の惨状を思い描いていたカレンが、男の声によって現実に取り戻される。

「ばーん」

ナナのわずかにふくらんだ胸に突き刺さるその刹那。
うるわの放った標識の先端部が、爆発を起こした。

うるわとナナが一瞬にして爆炎に飲み込まれる。灰色の煙に混じって、炎の赤がふくれあがっていった。

巻き上がっていく噴煙を突き抜けて、うるわが飛び退る。

エプロンドレスはすすけていて、火が燃え移っている。首元のレースは黒こげで見る影もない。

ひざをついて着地したうるわがごほと咳き込む。

口からは灰色の煙。すぐさまスカートをはたいて火を消し去ると、無表情に初めて忌々しげな色が浮かび上がった。

「とんだ隠し球ですね」

「うるわ、それどんな球技？」

カレンがメガネのフレームを持ち上げる。

「違います。球技ではありません」

うるわが追い詰めていた場所は、今や爆炎によって蹂躪されていた。

シャッターはひしゃげて黒く焦げてしまっている。周囲の窓ガラスは総じて粉々で、えぐり取られた地面の砂やらアスファルトが遅れて地面に降り注ぐ。

「敵も一筋縄ではいかないということです」

「縄？ 縛るの？」

「もういいです」

ため息をつきながら、近くに転がっていたカチューシャを拾い上げた。

「何よ、説明しなさいよ」

「切断された標識から発火しました。切り口が爆発したのです。摩擦や、引火……考え得る限りの前触れはありませんでした。私見ですが、一瞬で発火点に至ったように見受けられました。木材の発火点は摂氏四百度ほどですが……金属の切り口では考えにくいことです」

カチューシャの汚れを丁寧に取ると、頭に装着した。

カレンは黄金の瞳をぐるりと思案げに一周させると、ぼそり。

「……あっそう」

「理解していませんね？」

うるわの言葉が間髪入れずに入り込む。

「う、うるさいわね……」

メガネの向こうでそらされる瞳。腕を組んだカレンが態度だけでも威厳を保とうとする。

「それより、ほら」

プレハブにつつこんだときと同じように、煙と炎の渦中から平然とナナが歩いてくる。刃こぼれのない美しい刀が、炎を受けてきらめいている。耐火性があるのか、肌に張り付くレザースーツに焦げ目はない。変化があるとすれば、避けきれなかった灰が、ナナの頭の上をねずみ色に染めているぐらいだ。

「加減を間違えちゃった……」

周囲を見回すナナががつくりとうなだれる。

「次はうまくやらなきゃ！」

反省は終わりとばかりに刀を構える。

「……………にや？」

猫耳があつたらぴょんと立っているだろう。

何かに気がついたナナは、背後で燃えさかる炎や、崩れ去った倉庫、タイヤを空回りさせる自動車など、周囲をきよろきよろと見回し始めた。

やがて、うつむいて唇をとがらせると、肩をがつくりと落として低く呟いた。

「……………分かった。ナナ、帰る」

あわてたのはカレンら三人だ。あれだけ好戦的だった人型古代兵器が手のひらを返すように帰ろうというのだ。肩すかしを食らうのは当然だろう。

「ちょ、ちよっと待ちなさいよ！　うるわ！」

「分かっています」

カレンの指示が届く前に、うるわは地面を蹴っていた。エプロンドレスが風にはためく。

「……ナナはハチに怒られるのやなの」

ナナは、唇を真一文字に結ぶと、持っていた刀で足下のアスファルトに軽い切り口をつけた。八つ当たりにも思える行為。加え、ナナ自身は明らかに無防備だ。うるわは拳を握りしめる。

腹部に一撃をたたき込めば、戦闘を終わらせることができる。

自信を持った未来図だった。だが、うるわが到達するよりも早く、アスファルト全体に亀裂が入った。ぼこりと盛り上がったかと思うと噴火するように爆発し、炎と共に粉塵を巻き上げた。

「くっ……!!」

爆炎に飛び込もうという勢いだったうるわの足が止まる。

「まさか、逃げられた？」

眉をぴくぴくさせているカレンが、うるわの横に並ぶ。

「どうやらそうみたいですわね」

視界を遮る大量の煙の向こうで消える気配。

「あのだ畜生！」

地団駄を踏むカレン。

背後で警戒していた東洋風の兵士が、びくりと肩を震わせた。

「落ち着いてくださいカレン。はい、乾燥梅です」

ポケットをまさぐると、灰で黒くなった干し梅をカレンに差し出す。

「焦げ臭いし、すすけた乾燥梅なんていらないわ」

「美味しいのに……残念です」

差し出した乾燥梅をすぐすことポケットに戻す。

「そういえば、妙なことを言っていたわね」

「はい。どうやら人型古代兵器は最低でも二体は起動しているようですね」

煙に紛れる直前、ナナが言い残した台詞を反芻する。

「……なんか面倒なことになったわね」

「そうですね」

空に向かって手を伸ばす炎を眺めながら、頬を堅くする二人。周囲を見渡せばここが発掘現場であるとは到底思えない。クレーン車は横倒しになり、ショベルカーはショベルを失って炎に飲み込まれている。プレハブはことごとく倒壊し、地面から掘り起こされた近代的な建造物も、もはやひびの入った柱一本を残すのみだ。

瓦礫と火炎。

まるで絨毯爆撃を受けたような惨状だった。

それらを見つめていたカレンが、悲しそうにぼそり。

「うるわ……………被害報告書、お願いね」

「嫌です」

うるわの言葉と同時に、最後の柱がむなしく崩れ去った。

第五話・「おひひはん、ひほひ」

目の前で消えていく命の音。心音。

それは曲の終わりを予感させるデクレッシェンド。

お兄ちゃん、私、生きていたいよ……。

ハルは何もできないまま、拳を限界以上に握りしめる。

悔しさのあまり、手の中で血があふれ出していることにさえ気がつかない。

何もできない無力な存在。ただの普通でしかない人間。自分の周囲すら思い通りにならない。

ただ力のなさばかりが身に染みていく。

目の前で喘鳴をあげる妹を楽にしてやることもできずに、ハルは奥歯をかみしめた。

大好きだった飼い猫のアルフレードが朝起きて冷たくなっていたときも、両親が発掘調査中に行方不明だと知らされたときも、ただ指をくわえて見ているしかなかった。成り行きを見守るしかなかった。

何という他力本願だろう。

そして、病院のベッドの上でいまわの際を迎えようという妹を助けられないでいる。

そうか俺は、両親も、妹も、飼い猫も。

ハルは頭を貫く強烈な激痛に目がくらんだ。

大切な家族を、誰一人として救えなかったんだ……。

バットで殴られたような痛みには視界が歪む。

ときおり悩まされる偏頭痛に慣れることはない。自分自身を戒めるような痛みだからこそ、ハルは甘んじて耐えてきた。無力であることの罪深さ。苦しみ続けることが、救えなかった家族へのせめてもの贖罪だと信じて、ハルは痛みを耐える。

救いたかった。助けたかった。笑顔を取り戻したかった。

今でも夢に見る。

両親と兄妹。家族四人で食卓を囲んだあのときを。

そこに広がっていた笑顔の華やかさを。

もしも、その笑顔を取り戻すことができたなら、俺は全てを捨ててもいい。

俺が持つもの、健康も、生活も全て、世界ですら犠牲にしてもいいと思える。

お兄ちゃん……私……。

弱々しく差し出された手を、まるで繊細なガラス細工にでも触れるように両手で包み込むハル。

冷たい。

俺の体温が高すぎるから冷たく感じるだけだ。
ごまかしだと分かっているけど、ハルはかたくなに思いこんだ。

もっと、お兄ちゃんのそばにいたかった……。

そばにいていい。

さんざん敬遠してきた妹だった。迷惑をかけられ通しの妹だった。喧騒を連れてきた妹だからこそ、この祭りの後のような寂しさを深く感じてしまう。

ハルは体温を失っていく妹の手を握りしめながら願ひ続ける。
激しい頭痛を押し込めて、強く祈り続ける。

そばにいて欲しい。いなくならないで欲しい。

現実残酷。ハルは氷のように冷たい妹マキの手に、死の気配を感じ始める。

そばにいろ。いなくなるな。

強い願いも空しく、心臓の鼓動が途絶える。

呼吸を忘れたマキは、寝息すら立てずに眠りにつく。
恐ろしいほどの静寂が辺りを包み込みはじめる

そこで、目が覚めた。

「……夢、か」

見慣れた天井。

体にまとわりつく大量の汗に驚くハル。額を手の甲で拭くと、びっしょりとぬれた汗の感触。まるでバスタブから出て、体も拭かずにベッドに入ったような感覚に、ハルは大きなため息をついた。

時計を見ると午前五時。

朝に弱い一介の高校生としては早起きすぎるだろう。

目覚ましの音が起床を告げるまでにはまだ一時間ほどの余裕がある。ただでさえ貴重な朝の時間。睡魔ともう少し戯れても問題はな
いはずだ。

「ふぁ……おやすみ」

誰に挨拶するでもなく、あくびをしながら掛け布団をかぶった。

慣れ親しんだ掛け布団は、睡眠欲を促進させる香りと温もりで充ち満ちている。

ハルは寝返りを打ちながら、体に巻き付けるように掛け布団を手元に引き寄せた。

……一分と経たず、ハルはぱちりと目を開ける。

寝汗に浴びる外気がひどく寒くて、目が覚めてしまったのだ。

目をつぶって一分もしないうちに布団を失ってしまったようだ。

そんな奔放な寝相をかくことのできる自分に新鮮な驚きを覚えながらも、ハルは再び布団を手元にたぐり寄せて睡魔を受け入れた。

……一分と経たず、ハルはまたしても目を開けた。

肌寒い。どうにも肌寒い。

見れば、布団はベッドの隅っこに移動していて、ロールケーキのように丸まっている。ハルは自分の寝相に激しい落胆を覚え、白昼夢でも見る奇妙な体質なのではと空恐ろしくなる。

「そついえば子供の頃、自分が夢に落ちる瞬間を見たくて、夜中まで我慢して起きていたことがあったな……結局は朝になって目が覚めて悔しがっていたっけ」

懐かしさに表情をほころばせながら、ハルは隅っこで丸まっている布団を手元に引き寄せて三度目の眠りにつく。

……一分と経たず、ハルは自分のくしゃみで目が覚めた。

「嘘だろ……本当に白昼夢か？」

頬をつねって現実であることを確認する。

痛い。間違いなく現実のようだ。

布団は予想通りベッドの隅っこで器用に丸まっていて、わずかな上下運動を繰り返している。

「……ん？ 上下運動？」

首をひねって目をこらす。興味本位で布団をつつくと、生まれる前のさなぎのようにもぞもぞと動くではないか。

ハルは一抹の不安を感じながら、なおも指先で布団をつつき続けた。

「……………ううん……………お兄ちゃんの、えっちい……………そんなとろ触っちゃだめだよ……………むにゃむにゃ……………」

悩ましげな声が布団の中から漏れてくる。

その声にハルは己の内に沸々と沸いていくある感情を感じていた。それが力に変換され、つつく指の力は増し、すぐに握り拳になった。

布団にめり込んでいく拳。

「おぐっ……………うぐう……………お、おにいちゃん……………そんなに激しくしないで……………マキ壊れちゃうよう……………」

悩ましげな声は一転して苦悶の声に変わっていく。

「明日のためのその一、とにかく打つことだ」

サンドバッグでも殴りつけるような光景。

布団を奪われた怒りか、次第にジャブが強烈になり、勝負を決める右ストレートからアッパーへのワンツーパーンチへと変貌した。

「おうつ！……………はぐっ！……………うえっ！」

まるで車にひかれた蛙のような声が布団の中から聞こえ、布団は

びくびくと痙攣し始めた。

「次はローキックの練習だ」

眠りへと誘う睡魔は、すでに諸手を挙げて逃げ出している。
ただでさえ細く鋭い目が、それはそれは嗜虐的な光で輝いているのだ。

それに加えて、薄ら笑いを浮かべるハルを見れば、誰でも逃げ出したくなるだろう。

ベッドの上に立ち、足をほぐし始めるハル。

ヨーロッパのサッカーリーグでも通用するようなサッカーボール
キックの練習が始まった。

「タ、タイム！ レフェリータイム！ タイムです！」

布団の隙間から白魚のような白い手が突き出された。今度は遅れて、亀のようにぴょこんと顔が飛び出る。

カーテンから漏れてくる朝の光が、くしゃくしゃになった栗色の髪を鮮やかに照らし出す。

黒くてつぶらな瞳は子犬のようにうるうると揺れており、長いまつげが目元を強烈に主張する。小さな口は悲しみをこらえるようにぎゅっと閉じられ、ときおり小さい鼻でぐずぐずと鼻水をすすり上げる。

マスコットキャラクターのようにまるい顔の少女は、懇願するように足を振りかぶった兄を見上げた。

「仮にも、一週間前に奇跡の復活を遂げた妹に対する所行ではないと思います……」

「ほう、最近の布団はしゃべるのか」

「ぐす……お兄ちゃんが悪魔に見えます……。マキはこうしてお兄ちゃんに調教されていくのですね？ お兄ちゃんに従順な……まるで、欲望を満たす奴隷のように！」

目元の涙を拭う。

手を伸ばして自らの悲劇を叫ぶ姿は、まるで舞台女優のそれだ。

しかし、容赦なく兄による制裁は実行される。

布団にくるまっているので正確な状況は把握できないが、兄のサッカーボールキックを受けた妹は、見事なまでにくの字に折れ曲がった。

「ス、ストマック！ ストツマック！ エイク！」

どうやら腹部に直撃を受けたようだ。

布団にくるまったまま、芋虫のようにベッドをのたうち回る。

ちなみにストマックとは、英語で腹を意味する。同様にエイクは痛み。

ストマックエイクで腹痛というわけだ。

「マキが、世界で一番お兄ちゃん思いなマキが何をしたと言っのですか！」

それでも布団を離そうとしないマキが、必死に兄の足にしがみつく。

「なぜ俺のベッドにお前がいる」

「え……お兄ちゃん、昨日のこと覚えていないの？ あんなに、熱く、それでいて激しく契りをかわし　ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

兄の必殺の左足が振りかぶられるのを見て、態度を豹変させる。

「うっ……今日はいつにもまして厳しい兄の仕打ち……」

兄のひざに頬を寄せながらしくしくと泣き崩れる。

それでも布団は離さない。

「マキにも分かりません。気がついたらお兄ちゃんの布団のなかに……」

そこで何かに気がついたようにはつと顔を上げるマキ。頬は次第に紅色を帯び始める。

「……もう、お兄ちゃんたら、そんな照れ隠ししなくても……マキには分かっちゃいますよ。辛抱できなかったんですね？　こう、若気の至りというか、抗いがたい人間の三大欲求というか、青春の先走りというか……思わず抱き枕の要領で妹を自らのベッドに連れ込んでしまったんですね？　そんな照れ屋で奥手で不器用で、ちよっぴり強引な兄に………萌え」

まるで体をくねらせる芋虫。

布団から飛び出た両手で頬を挟み込み、恥ずかしさにもだえている。

マキの黄色い声のおまけ付きだ。

そんな妹の両頬をがっちりとつまんで、左右に引き延ばすハル。

可愛らしい顔立ちもこう引き延ばされてしまったては形無しだ。

「いはい……おひひはん、ひほひ（直訳・痛い、お兄ちゃん、ひどい）」

「天地神明にかけてそれはない」

頬を左右に引き延ばしたせいか、マキの整った白い歯がよく見える。

「ほんほおひ、はひへはひはひんへふ……（直訳・本当に、マキは知らないんです）」

ぼろぼろと涙をこぼす妹の哀願に、ハルは少しだけ罪悪感を覚える。

ぱつと手を離すと、煮え切らない気持ちを抱えたまま頭をぼりぼりとかいた。確かに朝から妹を泣かせることはなかった。

死んだと思っていたはずの妹が帰ってきたという喜びが、一週間経った今でも変な形で現れてしまっているのかもしれない。

「分かった、信じてやる」

何となくそんな自分を認めてしまうことが照れくさかった。

マキに背中を向けて腕を組む。

「うふ……うふふふ……お兄ちゃんのそんな表情……マキの大好物です」

今にもよだれを垂らしそうなマキの物言いに、思わず手が出ていた。

素早く頭上にげんこつを落とす。マキの頭上で星が何個か輝いた気がした。そのまま簀巻き状態のマキの布団をはぎ取ろうとする。

「お兄ちゃん！ 堪忍しておくれやす！」

誰が悪代官だ、とは決して言おうとしないハル。
なおもぐいぐいと布団を取り戻そうと力を込める。

「自分の布団を取り戻して何が悪い」

「それでも、人には譲れないものがあるんです！」

「いや、もともと俺のだ」

「それでも！」

端から見れば、妹の服をはぎ取ろうとする兄の構図に見えなくもない。ハルはそんな思考を都合良くすっぱりと捨て去って、自らの布団を取り戻そうと踏ん張る。

布団が引きちぎれるほどの攻防戦は、マキの譲れない強さによってハルの敗北に終わる。

ただ単にハルの手が滑ってしまっただけなのだが。

「くそ、頭が」

引く力が強すぎたのか、簀巻きのまま両者共に壁に激突してしま

う。

後頭部に走る激痛に思わず体を硬直させるハル。痛みに片目をつぶりながら、ハルは床に尻餅をつく格好で妹を見上げた。

「うつ……た、たんこぶできてます……」

マキは頭のでっぺんをさすっていた。

部屋の隅っこ、天井付近　　空中にぷかぷかと浮きながら。

まるで種も仕掛けもないマジックだった。

簀巻き状態だった布団は乱れ、そこから健康的な足がのぞいている。つま先、くるぶし、ひざ、太ももと渡るしなやかなラインは、兄でさえ思わず生唾を飲み込む脚線美。

「……まさかお前」

顔中を桃色に染めて、マキは重力落下しそうになる布団を胸元に押しつけている。

「……だ……なん……です」

マキが天井付近まで浮かんでいるので、尻餅をついているハルからの角度は限りなく九十度に近い。つまり、それだけ見上げているということ。簀巻き状態は解除され、ずり落ちそうになる布団と格闘しているマキ。

視線を上げれば、まとうもののない少女の小さな両肩と鎖骨が見えている。

絹のようになめらかな肌色だった。

「なぜか……裸……なんです」

空中に浮かびながら、恥ずかしそうに隅っこに逃げていく。つまりは、布団の下には間違いなく生まれたままの姿があるということ。理由が分からないとはいえ、裸の妹と一緒に布団で寝てしまったという事実、ハルは顔面が真っ赤に沸騰するのを感じた。

こういうとき、自分の免疫力のなさを呪いたくなる。

「は、早く何とかしろよ」

伸びた前髪で視界を隠すのがハルの精一杯だった。

「……お兄ちゃん、マキの下着、返して？」

「ああ、分かった　って、俺は知らない！」

上げてしまった顔をあわててそらす。

「なら、マキはどうして裸なんですか？」

「知るか。それより、布団は貸してやるから、さっさと着替えを取りに自室へ行け」

「むっ……」

乱暴な兄の物言いに頬をふくらませ、滑るように出口に空中移動していくマキ。

このまま何事もなく兄の目前を通り過ぎていく……が、その直前、マキが悪戯を思いついた子供のような笑みを浮かべていた。

「おっとっと」

わざとらしい棒読みの後に、体に貼り付けた布団をずらしてみせる。

ハルの目に飛び込んできたのは、形の良いお尻。

カーテンの隙間から入り込む朝の日差しに白桃がきらめく。

知らず息をのんでしまうハルがいた。

「お兄ちゃんの、むつつりえっち」

ハルは、林檎のように赤い顔のまま、布団ごと妹をドアの外に蹴り出していた。

第六話・「愛情貯金なら無尽蔵です」

制服に着替えたハルが階段を下りていくと、キッチンの方からいいにおいが漂ってくる。

食卓にはすでに朝食が並んでいた。

キュウリの浅漬け、サンマの塩焼き大根の味噌汁という割と手間のかかる料理を鼻歌交じりに作ってのけるマキに、ハルは心の中だけで感心した。

「おはよう、お兄ちゃん」

「ほう、少しは進歩しているみたいだな」

「オフコース！　いつまでも電子レンジで卵を温めるマキだと思ったら大間違いです！　それ、に！　成長しているのは料理の腕だけではありませんよ？　大事なところもきっちり女らしく……わわっ！」

キッチンの方から聞こえた悲鳴にだけ、ハルは耳を閉じた。

テレビでは人気キャスターの苦々しい表情と、怒りにも似たコメントーターのまくし立てる声がニュースの重大さを伝えていた。

事件の映像が断片的に放映され、大げさなテロップが画面上に現れては消えていく。

そもそも政府の遺跡問題に対する楽観的な見方に問題があるのです。年間あれだけの予算をつぎ込んでいながら、今回の大規模な事件……国民に対して不信感を抱かせるには十分です。政府には

もつと毅然とした安全対策と、危機管理を望みますね。

そうですね。今回の被害額は数億円とも言われています。加えて、遺跡の管理に当たっていた警備員と、現場作業員、鎮圧にあっていた特別編成部隊にも多数の死傷者が出ています。これに対して、今回の事件に対する遺跡管理局のコメントです。

特に好奇心が沸くわけでもない。

右耳から入ってきた情報が、左耳からこぼれ落ちていく。

ハルはイスを引くと、朝のけだるさと一緒に腰を落ち着けた。

湯気が立ち上るつややかな白米の隣には、白いパックに入っている納豆。

伊達兄妹の一日の始まりを告げる献立。

「ふっふん、兄ちゃん、おまたせ」

鼻歌交じりにことりとサラダボールを置くマキ。

最後に食卓に上った一品は、新鮮な生野菜と、二種類のドレッシング。

マヨネーズで食べるも、イタリアンで食べるもお好みで。

最近のハルはもっぱらイタリアン。今日も今日とてお気に入りイタリアンドレッシングを手を取った。自分の取り皿にサラダを盛りつけながら、どぼどぼとドレッシングを注いでいく。一方のマキはマヨネーズだった。

「いただきます」

息のあった声が二人だけの食卓に広がる。

「なんか、最近は物騒なニュースばかりだね」

テレビを見ながら話しかけるマキに対して、ほどよく焼けたサンの身を口の中に入れるハル。大根おろしと醤油が奏でる豊潤なハーモニーに、頬が喜び出すのが分かった。

「みたいだな」

「この事件、電車で三つ先の場所で起こってるんだよね？」

「ああ」

頬が自然に喜びだしてしまうので、なんとか表情を押さえるのに必死になるハル。嬉しそうな顔をしたら、この妹は絶対に調子に乗るだろう。

ハルはそんな危機感を持って、なるべく無表情を装い続けた。

「遺跡を狙った犯罪なら、マキの町も世界遺産級の遺跡がごろごろしてるし、大丈夫かな……？」

毎朝の牛乳にのどを潤して、ハルもマキの視線を追いかけた。

荒れ果てた事件現場では、遺跡の復旧作業のめども立たないらしい。

現地のレポーターがキープアウトと書かれたビニルテープの外で現地報告をしている。

切り替わった映像には、横倒しのクレーン車や倒壊した遺跡群が無惨な傷跡を残していた。

「まあ、なんとか大丈夫だろ。俺たちが住む町は、政府直々に特別政令指定都市に認可されてる。何たって世界に誇る発掘都市だぞ」

ニュースが伝える、遺跡を狙った原因不明のテロ事件。いまだ犯人が特定されているわけではないらしく、番組が元警察官をゲストに犯人のプロファイリングを始めていた。

それによると、動機は近く開かれる遺跡に関するサミットを妨害、牽制するためらしい。近年活動を活発化するテロ組織の犯行である可能性が高い、と元警察官は目星をつけていた。

「ま、誰が犯人であるにせよ、わざわざ捕まる危険を冒してまで、嚴重なこの町の遺跡を狙ったりはしないさ」

テレビに興味をなくして朝食を再開する。

「……ま、俺たちがこうして呑気に暮らせるのも、親父達が頑張ってくれたおかげか……色々、大変な目にも遭わされたけどな……」

小さい頃に父親に連れられて各国の遺跡を回った思い出が蘇る。白米から立ち上る湯気の向こうには、大けがをして手術まで経験したハル自身がベッドに横たわっていた。毎日お見舞いに来てくれた妹の笑顔が、何よりも心強かった。

口には出さずとも嬉しかった思い出がある。

「うんうん、施設はどれも最先端だし、年に一度にお金は振り込まれるし、観光名所にも、娯楽にも事欠かないし、なにより安全対策もばっちり、あとはお兄ちゃんさえ私に愛を誓ってくれば言うことなし、オールオッケー、万事順調、母体健康、生後良好」

向かい側から聞こえた明るい声がハルの思い出と、湯気を吹き飛

ばした。

「子供の名前は何かいいかな？ お兄ちゃん！ マキは男だったらハルキ、女だったらマキコが良いと思うのですがっ！」

「どっちでもいい」

前言撤回。納豆をぐるぐる乱暴にかき混ぜながら、ハルは誓った。

「淡泊すぎます！ 二人の子供でしょう！？」

「知らん」

納豆に付いている醤油のパックが思うように空けらず、少しこぼした。加えて、妹の納豆の糸のようなしつこさに、ハルの怒りのボルテージが上昇を始める。

「認知しないのですか！ 最低です！ マキとのことは遊びだったんですね！ 人でなし！」

「それはお前だ！」

直下型のチョップで黙らせる。あまりの勢いに、マキはテーブルに頭をぶつけている。

「いつからなのでしょう、この痛みが快感に変わったのは……マキってばなんてマゾヒスト……」

テーブルに涙の川を作りなら、キュウリの浅漬けを頬張っている。

「そうです、言い忘れていましたが、共用のパソコンが壊れました」
数秒前の涙はどこへやら、兄が相手をしてくれなくなると、とたんに別の話題を探し始める。

「……壊れた？」

茶碗をとんと置いて渋い表情のハル。

「そうです。壊れました」

「壊したんじゃないか？」

「日本語って難しいですね、マキもまだまだ勉強不足です」

まるで他人事。腕を組んでうんうんと頷く。何ともわざとらしい。

「マキ、貯金いくらあったっけ？」

「愛情貯金なら無尽蔵です」

「……」

ハルは何も言わずに目をつぶって大きく深呼吸をした。まるで戦の前に精神統一をするように。目を開けたハルの瞳の中には青く揺らめく炎。

もちろん、それは妹マキにだけ分かる特大の怒りだ。

「はうつ！ 壊れたんじゃないかもしれませんね、壊したんです。あはは、マキってばうつかり。もちろんお金は責任を持ってマキが出し

ます。いや、出させてください」

血の気の引いたマキが、ネズミのように体を小さくさせてしつぱを巻く。

「よろしい」

「だ、だからお兄ちゃん、放課後……放課後にマキと一緒に電気街で、デ、デート」

指と指をくつつけたり離したりしながら、体をもじもじさせる。愛玩動物のように上目遣いで兄を見やると、兄がちょうど箸を置くところだった。

「うちそうさま」

食べ終わった自分の食器を流し台で洗い始めるハルを見て、マキはハンカチで目元を拭う。

「うっ……そんなリアクションの薄いクールなお兄ちゃんに、今日もマキは容赦なく惹かれていくのだった……」

独白のような言葉を繰り返しながらも、マキは今日も兄が朝食を残さず食べてくれたことに胸を温める。

無表情だけれど、一定のペースで黙々と手料理を食べてくれる。好き嫌いなく、バランス良く箸をつけてくれる。

マキだけに任せず、洗い物を手伝ってくれる。

時々見せてくれる照れた表情がとても嬉しくて。

怒られると分かっている、痛い目に遭うと分かっている、あ

えてドジを踏んだり、悪いことをしてみたくなくなってしまう。

マキは悪い子だけれど、それはお兄ちゃんのせいだ……なんて言ったらまた怒られるかな、えへへ。

「……って、あれ？ お兄ちゃん？ お兄ちゃん？」

洗い場でぼけつと妄想と現実の狭間を漂っていると、隣にいたはずの兄がいない。

マキはきよろきよろと首を回す。

どうやら兄はすでに玄関口に行ってしまったようだ。

「待ってください！ お兄ちゃんの愛する妹マキが忘れ物にされています！」

鞆を手にとると、自分の身の回りを透明化させる。

鞆や制服、自分の全身が半透明になっていることを確認すると、よし、と意気込んだ。

壁をすり抜けて一直線に兄の元へ。

テーブルを音もなく飛び越えて最大跳躍。

愛しの兄に向かってヘッドスライディングを敢行。

「マキって、お茶目？」

靴箱から顔を出すと、兄が口のはしを引きつらせていた。

靴箱から顔だけが飛び出ている朝は、さらし首のように恐ろしい光景だ。

「疑問形で言うほど不安なら、最初からするな！」

人間離れして蘇った妹に眉をしかめる。

「うっ……また怒られた」

ゾンビのように靴箱の中から体をはい出しながら、マキは透けた体に再び色を取り戻す。

「それはそれとして、お兄ちゃん、いつものやってください。マキを惜しみなく貸しますので」

何の反省もなく、玄関を開けようとする兄の前に立ちふさがる。
怒られることに慣れすぎているのか、怒られた気まずさも何もあつたものではない。

「なぜそこで目をつぶる。つま先立ちで唇をとがらせる必要がある」

「はうっ！　　つつい練習の癖で!？」

胸を押さえて、玄関の扉に背中をぶつけるほどに後ずさる。

「練習？」

兄の疑問に、両手を目の前でぶんぶんと振り回すマキ。

「あわわ、何でもないですよ？　お兄ちゃんといつどこでそういう状況になってもおかしくないように、むしろその確率が非常に高い昨今、キスの一つや二つで緊張していたらキスの先に進めるものも進めなくなってしまう。それでは駄目。男は才オカミなの。発情期

の猿のごとし！　こうなったら女は度胸！　マキ頑張る！　という
ような、けなげな感じで毎日鏡の前で理想のファーストキスの練習
をしているだなんて、そんなこと……お兄ちゃんの前で恥ずかしく
と言えるわけじゃないですか！」

「……………」

本日二度目の兄の無表情な沈黙に、マキの額からは汗がたらたら
と流れ落ちる。

「ほ、ほら、お兄ちゃん、今がまさにチャンス到来ですよ。自分で
言ってるやんか！　っていう王道漫才です。つつこむチャンスです
よ？」

身振り手振りで何とか兄の興味を引こうと必死だ。

「……あ、それとも確率が非常に高いわけじゃないだろう！　って
方でつつこもうとしているのですか？　でも、どちらにせよ妹の胸
を貸します。さあ、このマキの形のいい胸に容赦なくつつこみを入
れちゃってください。マキはいつまでも待ってますので」

ハルがゆっくりとマキの両肩に手を置く。

「はう……心の琴線をつま弾くお兄ちゃんのしびれるような真剣な
まなざし……どこか危ない香りが漂っていますが、甘んじて受ける
この寛容さ、懐の広さ、胸の大きさ」

胸をときめかせながらも覚悟を決める。すると、兄の両手が包み
込むように頬にあてがわれた。

撫でられるような感触に、マキは胸が高鳴り出す。

これは、もしかして。

マキはピンク色の妄想に頬を染めた。

「マキ」

どきん。どきん。どきん。

胸の鼓動が最高潮を迎えていた……。

「黙れ」

こめかみで兄の拳ドリルが始動する。

「痛い痛い痛い！ 頭がつぶれます！ ……うつ、こうなることは分かっていますよ、分かっていますけど、ぐすん」

頭蓋骨に亀裂が入るかと思える攻撃に、マキは玄関にぺたんと崩れ落ちた。

ハンカチも顔も、すでに涙でぐしょぐしょだ。

ハルはマキにため息をつきながらも、かすかに微笑んでしまう。

世話が焼けるけれど、どこか憎めない妹。

いなくなったときは胸が張り裂けそうだったが、いざいとなると

といじめたくなってしまう妹。

一度は失われた日常が、また戻ってきた。
だからなのか、ひどく新鮮に思える。

ハルは、そんな自分に気がついて、すぐさま咳払い。

「……ったく、ほら、その、あれだ」

頬をぽりぽりとかいて、ばつが悪そうなハル。

「いつものやってやるから」

鼻先に手がさしのべられると、マキはしばらくその兄の行為が信じられないように目をぱちくりさせていた。

「あ、うん……」

鞆から大事そうに取り出した真つ赤な髪留めを、ハルの手のひらに載せた。

ハルは座り込んだままのマキの右前髪をかき上げて、髪の本根で留めてやる。

そのときのマキは、普段の落ち着きがないマキとは思えないくらいにおとなしく、兄にされるがまま。

「今日もばっちり、いつものマキの完成ですね」

鏡で確認し、につこりと笑う。小さな太陽が照り輝くよう。

「えへへ……」

鏡で何度も確認しては、顔がだらしく崩れていく。

左の前髪はたれたままで、右の前髪だけがかき上げられたまま赤い髪留めで留められている。

マキの髪型は小さな頃から変わらない。
使っている髪留めも、昔と同じ。

「じゃあ、お兄ちゃんはずと……制服オツケー、寝癖オツケー、最後にいつもの猫ハンカチです。今日は、アルフレードをモチーフにしたマキの手作りハンカチです！」

かつて寝食を共にした愛猫がワッペン化され、丁寧に縫いつけられていた。

数ある猫ハンカチの中でも、ハルの一番のお気に入りだった。無愛想で鋭い目を持つハルも、このときだけはたれ目で無防備になってしまう。

マキは兄の顔をちらりと盗み見た。
ワッペン同様、ほころんだ顔をしっかりと心の中に縫いつける。

「さっ！ 張り切っていきましょー！」

出発の玄関を開け放つと、朝の強い光が二人を包み込んだ。

第七話・「そ、測定不能！」

学校、昼休みを迎えるころには、ハルの機嫌は最悪を迎えようとしていた。

頬杖をつき、眉根を寄せて、メトロノームのように指でとんとんと机を叩いている。

「怒ってるよな？」

「ああ、怒ってる」

「間違いない、背後に鬼が見えるぞ」

「犯人はやっぱり……」

「前の時間であんなことをしたらさすがのハルでも……な」

遠巻きに観察するクラスメイト達。窓際最後尾に座るハルの机から、半径十メートル以内の席に着席している生徒はいない。

つまり、ほとんどの生徒が教室の外。

皆がドアの外に退避し、廊下側の窓やドアの隙間から恐る恐るハルをうかがっている。

「何とかしてよ、男子」

「こ、こういふときこそ女らしさの見せ場だろうが」

「あー、そういうの男尊女卑だー」

「最近はおっぱい女尊男卑と聞いているぞ」

教室の外で会議するクラスメイトを無視して、ハルは空中をにらみ付ける。

伸びた前髪が今にも逆立ってしまいそう。目つきのせいで普段から機嫌が悪いと勘違いされているハル。そのハルが実際に頬を強ばらせて、体中に怒りをみなぎらせている。

「もう、仕方がない。ここは私が行けばいいんでしょ？」

クラスメイトでさえ簡単には近付けない状況の中で、クラス委員長である南条こずえが大胆でハルに向かっていった。

「さすがクラス委員長様！」

「南条大明神！」

口々に歓声を上げる男子。しかし、音量は虫が鳴くようにとてもし小さい。

「こずえ……アンタの骨は私が残さず拾ってあげるからね」

「あの背中、あなたの勇気、私、一生忘れない」

目元を拭う女子多数。両手を合わせて祈るものもいる。

「ハル、ちよつといいかな？」

外巻きの髪を揺らしてハルの前に立ったこずえが、ハルの机に手をついた。

「ハルが怒るのも無理はないと思う。私だって、いきなりあんなものを見せられたら、怒りたくなるよ。まさに青天の霹靂。あ、私ね、一度でいいから日常会話で青天の霹靂って使ってみたかったんだよ。理知的な感じがするでしょ？　するよねー……ははは」

委員長の言葉にリアクション一つ見せず、怒りをみなぎらせるハル。

「ハル、その……あれよ、あれ！　一事が万事塞翁が馬って感じ。実はこの言葉も言ってみたかったんだー……というわけで、人生の幸とか不幸とか、明日雨が降るとか槍が降るとか、そういうことは予測不能なの。誰にも止められなかったし、予知できなかったってわけ。ハルが怒るのは無理もない。無理もないんだけど、そこはほら、兄の兄たる寛大さと言うか何と言うかでね……」

委員長は言葉の先を見失って、思わず教室の外で様子をうかがっているクラスメイトを顧みる。

た、す、け、て。

視線と、口をぱくぱくさせる二つの手段で救援を要請した。それを見たクラスメイトは、一糸乱れず全員で大きなバツ印を作っていた。

こんな時だけ協調性があるんだから！

委員長は思わず中指を突き上げたくなるのをこらえた。
息を大きく吸い込んでハルに向き直る。

「ええと、ハル？ ハルが怒っているのは私にも分かるわけで、私
が分かっているってことはクラスのみんなも分かっているわけで。
……えーと、確かに、確かにマキはやりすぎたと思うよ？ やり過
ぎというか、まさかあんな風になるとは思っていなかったというか
……」

腕を組んで考え込むこずえ。肺の奥から自然にため息がこみ上げ
る。

こずえ自身もいまだに信じられない。
思い出せば思い出すほど夢であったのではないかと思えてしまう。
昼休みを控えた四時間目の体育の時間。

……そこで事件は起こった。

本日の体育は体力測定。

全員がジャージに着替えてグラウンドに集合。

全員でわいわいがやがやと談笑しながら準備運動、柔軟体操をす
る。体育教師のホイッスルで測定場所に集合し、測定の仕方や方法
を説明していく。

体育教師のデモンストレーションを終え、いざ測定開始。

最初の測定はハンドボール投げだった。

出席番号順に測定が進み、マキの番。

「ふふん、お兄ちゃん、見ててねー！」

葬儀会場で奇跡の復活をしたマキが、何事もなくボール投げのサークルに入り、ぐるぐると腕を回している。

ハルとマキは双子の兄妹で同じ学年。クラスも同じなのは何の偶然だろうか。

「思いつきり投げるからねー！」

元気いっぱいなマキが死んでしまったというニュースは、学校中に深い衝撃を与えた。一方で、蘇ったというニュースは死んだというニュースほど衝撃を与えたりはせず、意外に学校は簡単にマキの復活を受け入れていた。

最近、世界中から集められた奇跡映像をオンエアする番組が増えているせいだろうか。

こずえは帰ってきたマキを見て何気なくそう思った。

クラスメイトのみんなも、そんな感じに捉えているのかもしれない。

両手でメガホンを作って、マキの背中に声援を送っている。

「マキー、張り切りすぎて転ぶんじゃないよー！」

「マキちゃん頑張ってね！」

体育教師から手のひら大のボールを受け取ると、高らかにホイッスルが鳴る。

マキは真剣な表情で大きく振りかぶった。

……そこまではよかった。そこまでは。

ボールをリリースする瞬間、ボールを持ったマキの腕がクラスメイト全員の視界から消えた。

次いで訪れるのは、マキを中心にして発生した突風。グラウンドの砂埃が巻き上げられ、周囲で足をたたんで座る生徒達の顔にたたきつけられる。

砂埃の中でマキを見れば、投球動作を終えて満足そうに胸を張っていた。

手でサンバイザーを作って、呑気にボールの行方を見守っている。ボールといえば、遙か向こうに見える校舎の屋上、貯水タンクを突き抜けて、どこか遠くへ消えてしまったようだ。

こずえは我が目を疑いながら、悪役がヒーローに殴り飛ばされたときに、星のようにきらりと輝いて消えていくアニメを思い出していた。

貯水タンクから大量の水がこぼれ出す光景。

体育教師の口から、くわえていたホイッスルがぼとりと落ちた。

「そ、測定不能！」

大声で競技終了を告げる体育教師の声と、頭痛のあまり頭を抱え

るハルの顔が印象的だった。

次の測定種目は、五十メートル走。

四人一組で並び、ホイッスルと共に全力疾走というシンプルな測定方法。

いまだクラスはざわめきの中だ。誰もが口々に先ほどの大遠投に目を丸くし、身振り手振りで興奮を伝えあっている。

「信じられないのは私の方よ……でも、負けられない」

こずえは五十メートル走には自信があり、常にクラスでは一番だった。実はハンドボール投げも、その他の測定もクラスでは一番。今回も去年の自分を越えて、なおかつクラス一番が目標だった。圧倒的な大差で出鼻をくじかれたにもかかわらず、こずえの瞳からはやる気は失われていない。意気込むこずえの隣では、先ほど測定不能の大投擲を見せたマキが、ハルに手を振っていた。

「お兄ちゃん、マキは頑張ります！」

手を振る先を見れば、ハルが眉をぴくぴくさせている。かなりいらだっているのは端から見ても明らかだった。そんなハルには失礼だが、こずえはなんだかくすりと笑ってしまいそうになる。

「位置について！」

体育教師が白い旗を頭上に掲げた。

気持ちを引き締める。

白い旗が振り下ろされたときがスタートだ。

こずえらスタートラインに立つ四人に緊張が走る。

ちらりと隣をつかがえば、真っ直ぐな目でゴールを見据えるマキがいる。

負けられない。

こずえは力をみなぎらせ、爆発の時を待つ。

「スタート！」

振り下ろされる白旗。切って落とされる戦いの火ぶた。

こずえが思い切り腕を振り、加速への第一歩を踏み出したとき、隣で何かが碎ける音がした。こずえが音の正体を探るよりも先に、体の側面を横殴りの風が襲った。

転んでしまうかと思うほどの強風の中でも、こずえは何とか耐えて走り続ける。

「ゴール！」

まだ半分も走らないうちに、ゴールからあがるマキの勝利宣言。腰に左手を当てて、右手には大きなVサイン。

クラスメイトの視線のほとんどが、スタートしたばかりの私たちを眺めていた。

しかし、マキの声が信じられない方向から聞こえてきたので、まるでホームストレートを駆け抜けるレーシングカーを目で追う観客のように、クラスメイトは一斉にゴール地点に顔を振る。

「お兄ちゃん！ 見ててくれましたか？ マキの活躍を！」

ウサギのようにぴょんぴょんと跳びはねながらハルに大手を振っ

ている。

タイムを計っていた生徒は開いた口がふさがらないようで、今頃あわててストップウォッチを押していた。

走るのを止めたこずえが、ふとスタート直後に気になった音を思い出して振り返れば、マキが立っていたスタートラインには、第一歩を記す足形が残っている。

それはまるで固める前のコンクリートを踏んでしまったように、あるいは月に足跡を記したアームストロング船長のそのようにくつきりとへこんでいた。

体育教師が、持っていた白旗をぽとりと地面に落とす。

「そ、測定不能！」

それから目を疑うような光景は続いた。

持久走では非公式ながら世界新記録を軽々と更新し、空を飛ぶような走りを見せたかと思えば、懸垂では授業が終わるまで延々と続けようとし、幅跳びでは砂場を軽々と越えて体育用具室の屋根に着地してしまった。

「そ、測定不能！」

なにか人間という枠を軽々と超えてしまったマキの測定結果に、

こずえは笑うしかなかった。

授業が終わる頃にはなぜかクラス中がそんな違和感に慣れ始めてしまつて、まるで手品でも見せられているように、拍手喝采の嵐。次は何が飛び出すのか。

マキの測定にわくわくどきどきして、順番を譲る者まで現れてしまふ始末。

「マキちゃん！ 握力計握りつぶせる？」

「いやいや、それは余裕だろ。ここはやっぱり地味に立位体前屈だろ？ どうなるか気になってしかたがない」

「体力測定はやめて、陸上十種競技なんかどうかな？ 全種目で世界新記録を記録したりして」

「お、それナイス」

授業はそうして脱線し、思ったより楽観的に自然消滅していったのだつた。

…… たった一人、怒りで我を失いそうになる人物をのぞいては。

思い出しながら苦笑いをこぼすしかないこずえ。クラス一番の座をいとも簡単に奪われてしまったのに、どこかすがすがしい。

ま、あれだけ、圧倒的ならね。

窓の外で戯れる小鳥に平和を感じながら、こずえはハルを見下ろした。

「とにかく、ハルは少し心を落ち着けて。今頃マキは先生方にこつてりと絞られてるよ。ここは心の広い兄として、怒られてしょげているだろ。マキを許してあげないとさ」

我ながら格好良いことを言っているなと感心してしまう。

「俺は怒ってない」

どうにも難攻不落だった。

第八話・「ツンデレよね」

「怒ってる」

こずえがハルの鼻先に指を突きつければ。

「怒ってない」

ハルは眉間にしわを寄せたままそっぽを向く。

「怒ってるじゃない」

「怒ってない」

「どこが怒ってないのよ」

「怒ってないって言ってるだろ」

「どう見ても怒ってるじゃない」

外巻きの髪がふるふると震え始める。

ハルの机についたこずえの両手は、今にも机をひっくり返しそうな勢いだ。

教室の外で待機するクラスメイトは、こずえの発火点が近いことを敏感に感じ取る。

説得を試みる者が先に爆発してしまつては本末転倒だ。ミイラ取りがミイラになっては意味がない。それでは収拾がつかなくなつてしまつ。

あわてて窓の隙間や入り口から身を乗り出して、身振り手振りで退却して来いと訴えている。それでもきっちり教室の敷居をまたぐことはない。

何はともあれ、へたれなクラスメイト達なのであった。

「しつこいな……」

ハルの目がここで初めてこずえの目に向けられる。

心底わずらわしそうににらみ付けたハルの眼光が、ついにこずえの導火線に火をつけた。肩から真っ黒なオーラが立ち上り始め、外巻きの髪もさらにカール度を増している。

委員長を視覚的に判断できるバロメーターが、周囲に警鐘を鳴らす。

やばい。やばいぞ。あの委員長はまずい。こずえ、怒っちゃ駄目。お願い、我慢して。こらえてくれ。

戦況を見守るクラスメイトの小さな叫びが聞こえる。

「しつこくもなるわよ!」

ハルの机を叩いて額と額をぶつけ合う。

「悪いけど余計なお世話だ」

負けじとハルも、長い前髪の隙間から泣く子も黙る眼光をあらわにする。

「あ、そんなこと言うんだ……へえ、ハルはせっかく助け船を

出してあげようとしている私にそんなことを言っちゃうんだ」

一歩引いたかと思えば、イスに座るハルを見下すように腕を組む。

「放っておいてくれ」

「放っておけるわけじゃない！」

もう一度ハルの机を手のひらで叩く。

耳をつんざく音に、廊下にいる全員の肩がびくと跳ね上がる。

衝撃は、前列の席で広げられていた弁当箱も飛び上がるほど。

ごくり。

廊下で何人が息や唾液を飲んだことだろう。

息をのむ静寂が、教室の中に緊張を作り出す。緊張の針が教室の外にも飛び出しているのか、外で戯れていた小鳥が大あわてで飛び去っていった。

広げた弁当箱と、雑談でにぎわうはずの昼休み。

しばらく続くと思われた膠着状態は、ハルの低い声量で破られた。

「……何でだよ」

怒りが少しだけ消失したハルの言葉に、こずえは面食らったようだ。

「何でって……それは、その、あれよ、合理的な理由よ」

廊下をちらりと見れば、全員が目をそらす。

顔を手でおおっている友人達。

決めた。委員長権限で、全員の宿題を増やしてもらおう。

こずえは心に誓った。

「うーん……そう！ クラスのためなの。みんな迷惑してるの！
いつもそんなにむすつとしてたら、何か色々ハルはもったいないの
よ。第一印象から損してるの！」

オブラートに包もうとしても、うまく言葉として出てこない。

結局は思い浮かんだ言葉そのまま。

委員長としてそれはやっぱり未熟かな。

こずえの脳の冷静な部分がそう反省をする。

「ハルが怒るとみんな怖がるの！ みんなハルと色々話したいのに、
いつもしかめっ面で、無愛想で……ハルはいい加減にそれら辺を理
解してよ！」

半ば懇願のような物言だった。

身を乗り出してハルに気持ちをぶつけるこずえ。

クラスメイト達は、その様子を廊下から眺めながら、自分たちの
選出は間違っていないのだと一様にうなづく。

感情を包み隠さず、正直に、誰にでも対等にぶつかっていける。

それが、こずえがクラス委員長に選ばれた理由だ。

……存外、怒りっぽいところをのぞけば。

うなずきながらも、全員がその後付けした。

「ハル、そうやっていつも怒ってばかりじゃ、眉間のしわが当たり前になっちゃうよ？ もっと明るく行こうよ。樂觀的にさ。少しは妹のマキみたいに年中ニコニコする努力をしてみたら？ ……そんなハルを見てると、こっちだって苦しいんだから」

ハルはこずえの瞳を見ることができなくなつて、とうとう視線をそらした。

偽りの葬式となつてしまつたが、妹の死を悼んで本物の涙を流してくれた委員長。

人相が悪くて、人に避けられがちなのに、かまわず突つかかつてきてくれる委員長。

罪悪感がハルの胸を締め付ける。

窓の外に顔を背けたまま、ハルは下唇を強くかみしめた。

本当は何がしたいか。どうしてあげたいか。どうして欲しいか。心の中では分かっているつもりだった。

でも、それをしてたら自分が自分でなくなってしまう気がする。行動に移してしまった瞬間に、自分という人間が崩れ去ってしまうような気がする。

それはとても怖いことだ。

ハルは悔しさを隠すように、表情を伸びた前髪でおおった。

「ハル ……ん？」

ここが勝負だと理解した委員長がさらなる一手を打とうかというとき、上履きに何かがぶつかった。

滑ってきた方向を見ると、どうやら教室の窓際にいた女友達数人

が、同じタイミングで自信満々に親指を突き上げていた。

最終兵器よ、受け取って、とても言いたそうな爽やかな笑顔が窓際に整列している。

目元がきらりと光ったのは、マスカラのせいだと思いたい。

……でも、これは確かに最終兵器だわ。

足下に転がったあるものを拾い上げて、こずえはにたりといやらしい笑みを浮かべる。女友達同様、目元がきらりと輝く。

「ハル、実はね、言い忘れていたことがあるの」

ハルには悪いけれど、卑怯だと分かっている、時には心を鬼にしないで。

こずえの先ほどの怒りはどこへやら。

最終兵器を手にしたこずえは、今、圧倒的な捕食者へ成り上がったのだ。

「私ね、昨日、ゲームセンターに行ったの。ふと見かけたあるゲームに私は心惹かれてしまった。何か分かる？ はい、分からない。では教えましょう。そう、かの機械の御名はクレーンゲーム！」

唐突な司会進行と、ナレーション。加え、へたくそな芝居でも演じるようにクレーンの輪郭を指で描いた。声もどこかわざとらしく、ハルは眉をびくりと上げていぶかしがる。

「ハル、これがその戦利品なの」

大げさな芝居は突如消え失せて、ハルの机の上に戦利品をそつと

置いた。

まるで殿様への献上品の如く、こずえの手のひらに収まる物体がその姿を現した。

「可愛いでしょ？」

猫。

三百六十度、どこから見ても猫のぬいぐるみだった。

茶色の毛並みに白い斑点。真つ黒でつぶらな瞳が、外光を浴びてうるんでいるように見える。耳はぴんと立っており、手は頬に添えられている。

長く垂れたひげと柔らかかそうな肉球は、まるで甘えるような仕草。二本足で立ち、体が丸くなっているのは販売会社の仕様だろう。

最近クレーンゲームの景品として登場したばかりの新作だった。バリエーションも多く、ちまたでは密かなブームとなっている。

お尻の方にある商品タグには、ぬこたん、とひらがなで書かれていた。

長いしっぽがトレードマークな、キュートなぬいぐるみ。

ハルはその出会いに目がくらむような錯覚を覚えた。

「……きよ、興味ない」

顔をそっぽ向かせながらも、視線だけはちらちらと猫のぬいぐるみを牽制してしまうハル。

みるみる落ち着きがなくなる。まるで妻に浮気を見破られた夫の

よう。

こずえはハルの軟化していく怒りが嬉しくて、ほっとして、今にも頬がほころびそうになる。

「……………くれ」

「え？ 何か言った？」

ハルに耳を向け、良く聞こえるように手を添える。
怒りの切っ先が刃こぼれをし始めていた。

手に取るように分かってしまうので、こずえはどんどん楽しくなってしまう。

「べ、別に」

「もう、ハルは素直じゃないんだからー」

ついに耐えきれなくなったこずえが、前髪で顔を隠し続けるハルの肩を叩く。

「あいな！ 俺はそんなことでごまかされたりは！」

ハルがイスを倒して立ち上がった。

背の高いハルの顔を下からのぞけば、顔を真っ赤にしている。
前髪では隠しきれない表情があらわになっていた。

「これ、実はもうーこ同じもの持っているのよね」

「……だ、だからどうした」

こずえの言葉に、交渉の予感を感じ取ったのだろう。ハルは冷静な口調を取り戻す。

「どうしてもって言うなら、ハルにあげてもいいかな？……なんて」

「いい加減にしろよ……！」

ハルはハルで譲れないプライドがある。
拳を握りしめて、胸の前で震わせている。

これ以上ハルを挑発したら、鉄拳が襲ってきてもおかしくない。
慎重を期すこずえ。

教室内でマキが幾度となくたたきのめされるのを目にしていたせいか、ハルの鉄拳が飛んでくるまでの怒りの境界線は分かっているつもりだ。

ここは楽しさや、嬉しさを二の次にして、確実に。

「いいよ。ハルにあげる。さっきは大声出したりしてごめんね」

ここはスマートに。

ハルの机上に猫のぬいぐるみを置いたまま、教室の外で待機するクラスメイト達の中にあっさりと戻っていく。

去り際、肩越しに振り返ると、ハルが複雑な顔をしたまま倒した

イスを起こしているところだった。

少しか嬉しそうに、少しか苦しそうに。

こずえはハルに、ごめんね、と声に出さずに告げていた。

ぬいぐるみでごまかしてしまったこと。

ハルの慌てぶりを楽しんでいたこと。

その二つを込めた謝罪だった。

でも、怒りっぱなしのハルも悪い。

こずえは教室の外で待つクラスメイトにガッツポーズを見せながら、自己弁護した。

教室に張り詰めた緊張の糸が切れたとたん、教室に生徒達が次々になだれ込んでくる。

思い思いに弁当を食べ始め、雑談に興じたり、トランプをしたり、本を読み始めたり。

あつとう間に日常が戻ってくる。

こずえはぬいぐるみを渡してきた女友達と弁当を広げながら、ちらりとハルを盗み見た。

一番再奥の席に黙って座りながら、窓の外を見ている。

猫のぬいぐるみは、相変わらず机の上でハルを見上げていた。

ハルはきよろきよると視線を教室に巡らせたあと、顔を向けずに猫を見る。

どうやら、誰も見ていないことを確認したようだ。

残念ながら、こずえは見ていたのだが。

「……………か、かわいい……………じゃないかよ……………ぬこたん」

人差し指で猫の鼻先をはじくと、仰向けに猫が倒れる。

無意識のうちに微笑みがこぼれてしまうハル。心なしか頬は赤く染まっている。

「ツンデレよね」

「うん、ツンデレだわ」

「胸がときめきます、きゅんってなります」

こずえと同じ風景を目にした女友達は、胸を押さえてうつとりと
呟く。

輝く瞳は、まるで恋する乙女。

「あんたらね……………」

こずえの握りしめたはしが、みしみしと音を立てていた。

第九話・「それがメイド・インの称号が持つ力です」

二人の人間がオタクの聖地と呼ばれる電気街へ降り立ったとき、改札口でひととき大きな歓声が巻き起こった。

ある者は足を止めて目を丸くし、ある者はメガネを外してはかけ直し、あるものは口笛を吹き、あるものは携帯電話のカメラで、あるいは望遠鏡のような巨大なカメラを向けて撮影を開始する。

連続でえられるシャッターの音は、まるでスキャンダルを撮影する週刊誌のそれ。お忍びでやってきたアイドルに群がるように、二人はあつと言う間に群衆に取り囲まれた。

黒山の人だかりの八十パーセントは男性で占められ、汗臭いことこの上ない。

ただでさえ身長が高いわけではない二人の人間は、波にのまれるようにその身ごと沈んでいった。

真っ先に飲み込まれてしまったおかつぱ頭の少女は、物怖じもせず足踏ん張って耐えている。押し寄せる波浪を眉毛一つ動かさずに受け止める少女は、白銀のエプロンドレスを身にまとい、同じく銀に輝くカチューシャを頭に載せている。

押し寄せる熱気がヨークやフリルを揺らし、おかつぱをかき分け、少女の綺麗なおでこをあらわにさせた。

「大丈夫ですか？ カレン」

エプロンドレスの少女が背後を見ると、うんざりしたように肩を

すくめている金髪の少女がいる。

「人混みは苦手なんだけど……特に体臭。ふと思い出すと、なんか最近こういうシチュエーションが多いことに気がつくわ」

髪と同じ黄金色の目は半眼で、けだるさを隠そうともしない。

漆黒のゴシック調コートをまるで引きずるように歩き出す。胸元でチェーンにつながれているメガネが、少女の歩幅に合わせるように右に左に揺れている。

「カレン、我慢です。これも任務のためです」

「分かってるわよ、いちいち言われなくても」

つばでも吐き捨てるような物言い。

「分かっているのよ。分かっているんだけど、でもやっぱり嫌。嫌ったら嫌。嫌、嫌、嫌、うるわ、何とかして。今すぐよ。一秒たりとも待てない」

まるで、だだをこねる子供。ここが玩具店なら仰向けになってじたばたしていそうだ。

「なら、片っ端からたたきのめしますか？」

「あ、それいいわね。ちょうど私の《千手》は対師団用の戦略兵器だし？ ごみごみしたものが減って、少しは空が広く見えるようになるかもね」

空をふさぐビル群を見回すカレン。

大きく開いた袖口を周囲のビルに向けると、ニヤリと笑った。

「それは却下です、カレン。冗談を真に受けなくてください」

「あ、今の冗談だったの？ うるわが冗談を言うなんて思っても見なかったわ」

わざとらしく驚いてみせると、大発見でもしたかのように手のひらをぽんと叩いた。

「……………」冗談ぐらい私も言います」

ぼそり。

「うるわ、傷ついたのね？」

おかっぱ頭の少女をこれ見よがしにのぞき込むカレン。

「ノーコメントです」

うるわのいつもの無表情がカレンの反撃を許さない。

「言葉を返すようですが、空が広くなるのには同意しますが、地上はそうもいかないでしょう。後は野となれ山となれ、カレンにぴったりの言葉です。カレンが不用意に動けば増えるのはゴミの山ばかりです。ちょっとした夢の島ができてしまうほどです」

「ちよ、ちよっ」

カレンの言下を遮り、丁寧口調でまくし立てる。

「それに」

鼻と鼻をぶつけるほどに詰め寄るうるわ。

「先週の事件の被害報告書、関係各省への謝罪文、その他三十をこえる報告書、始末書を誰が書いたか覚えていますか？」

「うるわでしょ？」

にべもなく言つてのける。

「どの口でそう言いますか？ カレン」

うるわの無表情にほころびが生じる。頬の筋肉がわずかだが引きつっていた。

「分かったわよ、分かった、分かりました！ まったく……」

大きなため息を足下に落とすと、うるわの横に並んで歩き出そうとする。

……が、できなかった。

「それにしても……なんだか腑に落ちないわね。というか納得でき

ないわ」

今更周囲を見回すまでもなく、奇抜な格好をした二人を中心に
して黒山の人だかりができあがっている。

彼らは話が終わったと分かるやいなや、うるわにどっと押し寄せ
た。

かけられる声援に、うるわは黙々と応対しはじめる。

「あ、あの！ メイド・イン・ジャパンのうるわさんですよね！？
俺、ファンなんです！」

「ありがとうございます」

握手を求められては握り返す。

「うるわたん！ 視線こっちね！」

「分かりました」

視線を要求されれば振り向き。

「あ、こっちにも視線お願い！」

「分かりました」

くるくると立ち位置を変える。

「やべえよ、メイド・イン・ジャパン！ 超可愛いよ！ 涼しいと
格好良いの二つの意味でクールだよ！」

「ありがとうございます。……でも皮肉にも聞こえます」

他方、サインをねだられば。

「サインください、サイン！ これペンです！ シャツに書いて下さい！」

「う、る、わ……どうぞ」

ひらがな三文字を一筆書き。まるで舞を踊るが如くに流麗に書き上げた。

手つきが慣れている感じだ。

「あ、あの！ 私がこの業界に入ったきっかけは、うるわさんに憧れてなんです！ 尊敬しています！」

「頑張ってください」

同じメイド服姿の女性に握手を求められる。

そしてうるわは、偏愛すらこもったまなざしも泰然と受け止めてみせた。

「うる様……こんなにお近くで拝見できるなんて……ああ、まさに
お名前の通り麗しゅうございます……きゅっ」

うるわを模したのか、おかっぱ頭の女の子が熱を上げて倒れてしまった。

さらには雑誌記者風の男まで、ボイスレコーダーを持って現れる。

「メイド・イン・アメリカと仲が悪いって本当ですか？ メイド・イン・チャイナの最近の活躍をどう思われますか？ メイド・イン・イングランドが前評判通り本年度のメイド・オブ・オナーに選出されましたが、日本代表として一言！」

「前者は苦手です。後者は侮れません。メイド・イン・イングランドは尊敬に足る人物です。結果は当然だと思います」

返答もばっちりだ。

「しかし！ その実態は無表情で無愛想、愛敬ゼロ！ しかも、世界一の美女と世界中で絶賛されるカレン・アントワネット・山田とは、美貌、戦闘、知識、どれをとっても圧倒的すぎて、というかむしろ当然だけど とにかく手も足もしっぱも出ないと聞きますが、本当でしょうか？ 本当にね、本当だと言いなさい、言え。今すぐ言え」

「……カレン、何のつもりですか？」

ボイスレコーダーをつるわの口元に向けているカレン。

質問をしていた雑誌記者風の男は、カレンの後ろで気持ちよく気絶していた。

頭の上には特大のたんこぶが見える。

「何でうるわは人気爆発で……私は人気がないのよ！？」

「それがメイド・インの称号が持つ力です」

「……………ちっ」

舌打ちをして、つまらなそうにボイスレコーダーを放り投げる。
あっけにとられたのは周囲の人間達だ。
空気の読めない人間が現れた、とても言いたそうに眉をひそめ、
愚痴をこぼす。あからさまに顔をしかめるものまでいた。うるわは
取り巻く人達を慌てて取りなそうとするが、言葉はカレンに上書き
されてしまう。

「いい加減にしないと、一人残らずぶち殺すわよ？」

風もないのにばたばたとはためく袖口。
怒りの余波が、周囲を取り囲んでいるカメラ小僧達を五メートル
後ずらせた。

それでもシャッター音だけは途切れることはない。

「落ち着いてください、カレン。まずは深呼吸です。それと、どう
ぞ。乾燥梅干しです」

「ふん！ 悔しいけど、認めてあげるわよ」

差し出された乾燥梅を、乱暴に口内へ放り込む。
右から左へと乾燥梅干しを口内で転がす度に、頬にくつきりと干
し梅の形が浮かび上がる。

まるで夢中になってキャンディーをなめる子供。

その純朴な仕草に、シャッター音が急増した。

どうやらカメラマン達に、その仕草がシャッターチャンスだと認
定されたらしい。

「……………沈黙は金。用法は間違っています、カレンの美しさはそう

いうところなのです。知らぬは本人ばかりなり。そこが唯一の難点です」

小さくつぶやいてカレンを見る。

見渡せば、カレンに見とれている人間もいる。その数が徐々に増していくのがはっきりと分かる。悪口をこぼしていた人間でさえ口をつぐみ、カレンの純粹さに釘付けになっていた。

ころころと口の中で転がる梅干しの種。満足そうに喜色に染まる頬。輝く金色の髪、金色の瞳。黄金比を体現する磨かれた顔貌。

浮世離れた雰囲気は、まるで後光を背負うようだ。

《千手》と命名されるカレンの切り札も、もしかしたらカレン自身から来ているのかもしれない。

うるわはふとそんなことを考えていた。

高圧的で自尊心の高い少女が、大好きな梅干しを頬張ることとげとげしさを忘れ、幼さを、純粹さを取り戻す。

喪失したものを取り戻す過程というのは、一般的に感動を伴うもののだ。

ひっきりなしにシャッターがきられ始める。

ここでシャッターをきらずにどこできるというのだ。

そんな意気込みが、カメラマン達に沸々とたぎり始めていた。

「カレン、味の方はいかがですか？」

乾燥梅干しからにじみ出る酸味が少女の舌を喜ばせるに伴い、はためいていた袖は静けさを取り戻していく。気が立っていても、一

流ブランドの乾燥梅干しの味はいつも通り少女を落ち着かせる。

「やっぱりこのブランドじゃないと駄目ね。他のはなんて言うか、安っぽいのよ。梅の原産地が悪いのね。それか作業行程」

「そう思いまして、ストックは多めに用意してあります。万が一底をついても、通信販売できるそうです。海外発送も承るとか」

どこからともなく乾燥梅干しのパッケージを取り出して、扇のように広げて見せた。

手品のようなるわの妙技に周囲がどよめく。

「今回は思い切って箱買いしました。世間では、大人買いと言われるており、潤沢な資金を持つ者にのみ許される特権行為のようです」

「私にぴったりにゃない。むしろ、この私にこそふさわしい言葉ね。大人買い……覚えてわ」

取り囲む野次馬の群れをひっさげて、二人は電気街を歩き出す。

第十話・「……ニヤリ」

「さてと、気分も落ち着いたところで……本命、探すわよ」

うるわを追い越して中央通りへ出る。

右を見ても左を見ても家電量販店が建ち並ぶ。反対側に見えるひとときわ目を引くデパートのような場所は、最近オープンしたばかりの巨大な家電ビル。

カレンは上京したばかりの田舎者のように空ばかりを眺め、科学万能の時代、というかつて流行した言葉を思い出しているようだった。

「ここから探すのは容易じゃないわね」

高架線をくぐって、メインストリートを並んで歩き出す二人。

すれ違う人、店から出てきた人が二人に道を空けていた。店の前で呼び子をしている者でさえ、カレンが通り過ぎようとする声で失った。

ティッシュを配ろうとしていたメイド服姿の女の子は、渡そうとしたティッシュに逆にサインを求めてしまうほどだ。

うるわはそれに流れ作業のように対応しながら、

「任務のこと、忘れていなかったのですね」

わざと感心した声を出す。

「当たり前じゃない。さっさと見つけ出さないと、また上からとかく言われるもの」

頭をぼりぼりとかいて苦虫をかみつぶす。

「やれ、何で取り逃がした。やれ、遊びでやってるんじゃない。やれ、職務怠慢で給料を下げる……本当に公僕って嫌よね」

指折り数えるだけできりがないのだろう、カレンはすぐに数え上げるのをやめた。

「そういえばカレンは、就職して以来ずっとボーナスを返上しているのでしたね」

「嫌なことを思い出させるわね。そう……あれはまさに悪夢。ちょっとぐらい建物を壊しただけなのに」

「ちょっと……？」

大きく首をひねる。

うるわの記憶をよぎるのは廃墟と化した町並みと、恐怖におびえる犯罪者達。

書いてきた何百枚、何千枚という始末書の山。

いつのまにか完全にマスターしてしまったタッチタイピング。

「そ、ちょっと。ほんのちょっとよ。だってのに、がみがみがみ。み。上は頭が固くて嫌になっちゃう。本当、上司は選べないってよく言ったものだわ」

「カレン、声が大きいです」

衆人環視もなんのその。オーバーアクションが余計に好奇の視線を集めている。

「ていうか、上層部はもつと柔軟性を持てていうのよ。許可とか手順とか、面倒な書類ばかり。大げさな手続きで手間取って、せっかくのチャンス逃したらそれこそ一巻の終わりじゃない。無能って言うのよ、そういうの」

道路を挟む家電製品にはまったく目もくれずに、歩道の中央を我が物顔で闊歩する。

こぼし続ける愚痴はとどまるところを知らなかった。うるわはどこで息継ぎをしているのか不思議に思ってしまう。

「……それでカレンは独断専行、猪突猛進、獅子奮迅、被害甚大、賠償請求、賞与削除、不満蓄積、鬱憤解消、独断専行　以下無限ループですか」

「まさにスパイラルよね」

金色の髪を指にくるくると巻き付けてほどく。

芯の通った髪は、すぐにカレンの背後に戻っていく。まるでシャンプーの宣伝だった。

「尻ぬぐいの書類を書いているのはもっぱら私です。知っていますか？ デスクワークは地味で辛いんです」

恨みがましい声が、カレンの背中に寒波を吹き付ける。

「さて！ 本命はつと……」

冷や汗に頬をぬらす。

カレンは混雑したメインストリートから逃げるようにして道を一

本それた。

「カレン……」

足下に小さなため息をついて、うるわは気持ちを切り替えたようだ。

カレンにはいくら言ったところで分かってはくれないのかもしれない、そんな気苦労をため息に変えているようだった。

同情を隠しきれない周囲のうるわファンも、そんな二人のやりとりが大きく頷いていた。

「まだ確証はつかめませんから、ここはしらみつぶしですね」

そうして三十分ほど人通りの多い道を歩き回った末に、カレンが下した結論は。

「面倒くさい」

だった。

「我慢してください。人型古代兵器の起動確認からすでに三百時間以上経過しているのにもかかわらず、以前有力な手がかりは私たちが交戦した記録のみ。危険性の高さから公開捜査に踏み切れないとはいえ、野放しにさせておいていい時間はとうに許容範囲をオーバーしています。本来ならば、ファーストコンタクトで目的を果たさなければいけないところです」

涼しい顔をしているうるわに比べて、カレンはひどくつかれた顔をしていた。

太ももに手を置いて、大きく息をしている。

「相変わらず体力がありませんね、カレン」

カレンの額にシルクのハンカチを押し当てる。

「仕方ないじゃない、私はこういうスタイルなのよ」

鼻先から大粒の汗が地面に落ちる。

「その場を一步も動かずに相手を圧倒する……《アンタツチャブル》の名に恥じないことは分かりますが、日常生活に支障を来すのはまた別であると考えます。カレンの面倒くさがりは直したほうが賢明です。ついでに、好き嫌いの多さも」

「……なによ、私に説教する気？」

「いいえ。でも、前回の戦闘の折に体力、および集中力のなさが露呈していたのを見かけましたので」

「う……」

言葉に詰まった。

「今回こうしてめばしい場所を歩いているのもそうですが、いざ戦闘行動に移ったらどうするのですか？ 今回の任務、おそらく立っているだけでは済まされません」

「人型古代兵器はその希少性から破壊せずに捕獲しろ、だっけ？ 上層部も軽く言ってくれるわ。そんなに欲しいんだったら、自分でやればいいのよ」

息を整えて鼻で笑う。

二枚目のハンカチで残りの汗を拭ってやりながら、うるわはカレ
ンの言葉に続けた。

「上層部としては、そうしたくても自分たちできない。そして、そ
れができる人間に限られているから、私たちにしか特命を与えてい
ません。ですから、無理難題を押しつけられたと悪態をつくよりは、
私たちの実力が認められ、信頼されていると捕らえた方がポジティ
ブ思考だといえます。それに伴い、私たちには非常時における特権
行為が許されています」

二枚目のハンカチをポケットにしまう。

顔を上げるとカレンがきよとした顔でうるわを見ていた。

「聞いていないわよ、そんなこと」

「カレンは私にばかり任せず、通達書を一読してください」

拭うほどの汗もかいていないうるわは、やはり涼しい声だった。

「ま、次回から読むからいいわ。で、その特権行為ってどこまでで
きるわけ？」

「お金で解決できることなら、ほとんど許容範囲でしょうね」

「……ニヤリ」

うるわに見えないように顔を背けるカレン。

その顔には特大の嫌らしい笑みが浮かんでいた。

警察が見つけたら思わず職務質問をしまいそうだ。

「カレン、あなたの考えていることを当てて見せましょうか」

「ふふん、うるわに分かるのかしら？」

腕を組んで胸を張る。

「大人買いをする気ですね？」

「さ、行くわよ」

拭ったはずの汗が頬を伝っていった。

「カレンは単純すぎます」

その声から逃げるように、カレンは歩く速度を速めるのだった。

第十一話・「《彼岸》という古代兵器を知っていますか？」

「聞いていますか？」

「……聞いてるわよ」

中央道路を挟んで反対側に移動した二人。

「ならいいのです。先日破壊された遺跡から、起動が認められた人型古代兵器は二体と断定されました。一体目は少女型の古代兵器、つまり私たちが交戦したものの。もう一体は目撃例もなく依然として行方不明のままです。それについて情報部から興味深い報告があります」

歩き始めて一時間、収穫はまったくと言っていいほどない。

「興味深いのはうるわだけでしょ。私は興味ないもの」

カレンはゴシック調に彩られた洋服店に興味を奪われている。

「……話の腰を折らないで、素直に興味を持ってください」

カレンは十分ほど前から任務に飽きてしまって、ウィンドウショッピングを始めてしまっている。

「この服、フリルがいい感じじゃない」

腕を組んであらゆる方向から眺めながら考え込んでいる。
ウィンドウの中には、ギザギザとしたフリルが特徴的なワンピース

スが飾られていた。フェイクレザーのドクロパッチ使いが大人っぽい。

いかにもカレンが好きそうなゴシック調の洋服店だ。

「カレンは『彼岸』という古代兵器を知っていますか？」

「少しは知ってるわよ……へー、なかなか良さそうな店じゃない、入るわよ」

中の様子を確認して、カレンはためらいもなく店に入ってしまった。

うるわはそれに顔色一つ変えないで追随する。

洋服店の店内は少し暗めだが、商品にはそれぞれスポットライトが当てられていて、際だつ個性をさらに強調するように仕掛けられている。

店員は袖口の広いロングコートを着こなすカレンが気になるようで、ちらちらと視線を向けていた。

「『彼岸』は、かつて古代文明を一夜にして滅亡させたと言われる禁断の兵器。あまたと現存する古代兵器の中でも最高峰 《神器》に数えられる逸品です」

うるわはちらりとカレンを見る。

カレンは先ほど外に飾られていたワンピースを手にとってなにやら分析している様子。

「ふーん、裾がアシンメトリー（左右非対称）になっているから、ここからさらにロングスカートを履くっていうのもありなわけね…

…」

うるわの話を聞いているのかいないのか。

任務をどこかへ置き去りにしてしまっているカレンに、普通の人間なら文句の一つでも言うところだ。

しかし、そこは付き合いの長いうるわ。

カレンに聞いてもらおうと、淡々と言葉を継いでいく。

「その昔、古代文明の突然の滅亡にはいくつもの説がありました。天変地異説、戦争説から隕石衝突説まで。しかし、十年前……当時世界選りすぐりの発掘隊であった、チーム・ダテによって『彼岸』が北米で発見されてから、全ての説が覆されました」

「よく見れば全面のグラフィックプリントもなかなか凝ってるじゃない。……でも、やっぱりドクロパッチが鬼門なのよ。私にドクロってあり得ないわ。五十点」

手に取った洋服にカレンが興味を失ったところで、うるわはタイミングよく話を切り出す。

「『彼岸』と同じ場所で、現代科学では足元にも及ばない論文の数々が出土……今でもその半分は解明されていません。それが古代のたった一人の科学者によって書かれたというのですから、さらに信じられないことです。そして、その科学者が発案、設計、プログラミングしたもの……それが古代兵器であり、人型古代兵器。『彼岸』はその科学者が生み出した究極形といわれています。強く願えば全ての事象をねじ曲げてしまう。破壊も再生も思いのまま。そのあまりにも強大な力を恐れた科学者が、『彼岸』が起動させられないように人型古代兵器を使って守護させたと言います」

ハンガーを横にずらしていくなかで、気になったものを素早くピツクアップ。

面倒くさいが口癖のカレンにすれば、本当に無駄がなく俊敏な動きだ。

「へー……あ、このベルト付きのスカート、なかなかやるじゃない。ベルトが赤で、スカートが黒。こういうの嫌いじゃないわ」

洋服を選ぶカレンの俊敏さに無表情のまま感心しながら、うるわはカレンの背中に語り続ける。

飽くことなく語り続ける姿勢が、馬耳東風とばかりに右から左に流される。

なんとも空しく感じられる光景。

「なによこれ、ヒップバッグがついているの？ 王冠がモチーフになっていて……へえ、取り外しもできるのね、やるじゃない。スカートの裾にはフリルか……セクシーさでも出そうっていうのかしら。デザインはいいんだけど、私には少し裾が短すぎるわね。同じゴシック調でもパンクファッションは私の分野じゃないし。六十点」

少し乱暴にハンガーを元に戻す。

ハンガーがポールにかかる、かちゃり、という音が静かな店内によく響く。

その横で、念仏のように語り続けるうるわ。

「しかし結局は、時の権力者達の欲望の到達点にされ、それによって幾多にも及ぶ世界大戦が繰り広げられた……。その様を見た科学者は、人間に絶望し、自ら世界の崩壊を願ってしまった。書物にはそのように記されていたそうです。古代文明破滅の日、《彼岸》が

願いを受け入れた日であると。そして、人型古代兵器は《彼岸》と共に長い眠りについたので。二度と《彼岸》が起動させられないよう……」

「この黒のジャケット、色遣いはいいけど、フード付きでさらに燕尾裾ってというのが私の守備範囲外ね。五十五点」

意外に厳しいカレンの採点に、店員が顔をしかめている。

「そのため、チーム・ダテは《彼岸》の発掘と同時に、起動した三体の人型古代兵器に襲撃されてしまうことになった。そう……人型古代兵器にしてみれば、守護を破らんとする者を排除するために、なによりも世界の破滅を未然に防ぐために、チーム・ダテの排除を開始したのです。《彼岸》はその後、長く激しい戦闘の中で紛失。現在まで起動すら確認できていませんでした」

「ふーん……あ、このフリル付きのコート、私好みでナイスな感じ」

「ですが……今回の事件、その例に酷似していると情報部が報告してきました」

話の核心を突こうというのか、うるわの声が幾分高くなる。

「一週間前に、この地域である強力な古代兵器の起動を観測。ほぼ同時刻に、離れた遺跡で人型古代兵器二体が起動……偶然ではありません」

力説したうるわの目の前には、ハーフ丈のコートを手に取り、鼻歌を歌いながら自分の体に合わせているカレン。

うるわは、自分の背後に木枯らしが吹きすさぶような錯覚を感じていた。

「チエツクのフリルが私の心をくすぐるわね……。最近こういうアクセントのあるデザインのを買ってなかったから余計に。パンクな感じなんだけど、どこかロリータなところが私に歩み寄って来る感じ。黒が八、赤が二の色配分もよし、と。襟が高くて、ボタンも大きいのもポイント高いし……。背中もコルセットみたいにひもで縛るおしゃれな感じになっているし……。こうしてひもを背中から垂らす感じの遊び心も……。やるじゃない、合格点を上げるわ」

店員がレジの後ろでガッツポーズをしていた。

「カレン、《彼岸》の起動は、必ず人を不幸にします」

うるわの声に感情が加わり始める。

「一度は古代文明を滅亡に追いやり」

普段は聞くことのできない声色に初めてカレンの手が止まった。

「二度目は、十年前……。人型古代兵器三体との死闘で、メイド・イン・フランス、メイド・イン・スペイン、メイド・イン・イタリア……当時世界最高と謳われた三人のメイドが命を落としました。もちろん、発掘隊チーム・ダテにも多くの死傷者が出ました」

合格点を与えたコートを胸に抱えたまま、カレンはハンガーだけを元に戻す。

「カレン、あなたと同じ古代兵器の使い手も、その戦いで命を落と

したのです。カレンはそれを知っていても何も感じないのですか？
この任務に無関心でいられるのですか？」

静寂の中に、強い口調が突き刺さった。

店内の薄暗い雰囲気、暗い過去の歴史を語るに一役買っている。
明るい場所で語れるほど、うるわは度胸があるわけではなかった。
尊敬する先人達が命を落とす。それは、メイド・インの称号を持つ
つるわにとっては胸を切り裂かれるほどに苦しいことだった。

奥歯をかみしめ、静かにうつむく。

白い指先は、いつのまにかエプロンドレスの裾を握りしめていた。
「言いたくなかったけど」

止まっていたカレンの手が動き出す。

再びハンガーに掛かった洋服を手に取り、素材やデザイン、縫い
目などを確認していく。

「私の母もその戦いで死んだ一人よ。血はつながっていないけどね」

「……初耳です」

顔を上げたうるわに驚きが宿る。

「同情されるのは大嫌いだから」

手に取った洋服が気に入らなかったのか、ハンガーを戻していた。

乾いた金属音が、店内に緊張感を漂わせる。

「……うるわ」

カレンにしては珍しく感情のない声。

「……はい。なんでしょうか、カレン」

振り返ったカレンは、申し訳なさそうに唇をかむうるわを瞳に納める。

かつてない真剣な顔のまま、黄金の瞳の少女は静かに言葉を紡いだ。

「この服、特権行為の一部として買えないかしら？」

胸に抱いたコート掲げてみせる。

「カレン……」

カレンは微笑んでいた。主の微笑みを受けて嬉しくないメイドはいない。

うるわは心の奥で大きくなっていく温かみを感じながら、何とか微笑みを返そうとする。

うまくできる自信はないけれど、何とか感情を主人に伝えてあげたいと思った。

感謝を伝えたいと思った。

「……領収書は、上様で」

カレンの髪の色と同じ色のクレジットカードをポケットから取り出す。

「任せて」

不器用な笑顔に、カードを受け取りながら笑顔で応えるカレン。うるわの手からカレンの手へと渡りかけたところで、カードはぽとりと床に落ちた。

店内を駆け抜ける振動。

洋服に当てられたスポットライトが揺れている。

「……今のは？」

振動と音が遅れて二人の体に到達する。

「この感触は……衝撃波です。地下からの突き上げるような物ではありません」

「地震でないとすれば」

胸に抱えた洋服を棚に置く。

服に興味を示しているときではないと悟ったのだろう。

カレンの瞳には、電気街を歩いていたときの疲労の色は微塵もない。

「爆発である可能性が高いと思われます」

クレジットカードを拾い上げながら、うるわがカレンと視線を交わす。

「それにしても妙な感じね。胸騒ぎがするし、いらいらする」

「古代兵器同士は、当人の感情はどうあれ引かれあう存在です。チーム・ダテはそれを証明し、《彼岸》にたどり着くことに成功しました。それが起動した《彼岸》であるならば、全ての古代兵器を引き寄せるほどの強さでしょう」

洋服店を素早く飛び出した二人。

何があったかと周囲を見回す人々の肩をはねとばして走るカレンと、人々の間を器用にすり抜けるうるわ。

「なら、起動しているというの？」

「完全ではないにしろ、起動していると考えられます」

「その根拠は？」

息を切らしながらも、カレンは全力疾走で衝撃波の発生源に迫っていく。

「もしも完全に起動していたら、遺跡で人型古代兵器と戦う前に、カレンに今のような兆候が現れたはずですよ。それがないということは、まだ起動が不十分ということ。加えて、胸騒ぎというものは別物です。今はその二つが混在している。ということは、両方が近くにあるということの間違いはないはずです。覚えていますか？ 遺跡での戦いを。あのとき感じたカレンの感情を」

息ひとつ乱さないうるわが、冷静に分析する。

ガードレールを足場にしたかと思うと、そのまま高く舞い上がり、宙返りをしてカレンの隣に着地する。

「確かにね、何となく分かってきたわ、色々と」

金色の髪が走りながらはためく様は、まるで光のアートワーク。
人々の瞳に鮮烈に焼き付く美しい流線。

「ですから、この爆発は……」

「あのナナって奴の仕業かもしれないってことね？」

「そうです」

楽しそうに唇を持ち上げるカレン。

「それでもって、その近くに《彼岸》がある、と」

「そうです」

うるわが大きくうなずくそばで、恐ろしい笑いがこぼれ出す。

「ふふっ……ふふふ……《彼岸》を追っかけていれば人型古代兵器が現れる……私を餌に釣りってわけ？　うちの上層部もやってくれるわね！」

吐き捨てた言葉と共に、大きく開いたカレンの袖口がばたばたとはためき出す。

カレンが街路樹の下を駆け抜けけると、葉が散り散りになって落ち

てきた。

「カレン、冷静に。落ち着いて対処してください」

「さあ？ やって見ないと分からないわね……！」

駅前の高架線の先にそびえる家電製品店。

世界中のマルチメディアが集う巨大なデパート。

その外壁から大きな煙が立ち上っていた。

第十二話・「今回で二回目？」

午後四時を回り、学生達でこった返す電気街。

まるで大行列のように歩道を人々が行き来している。

休日ではないため車道が歩道として解放されていない。それでもこの活気と町並みは独特のものがある。

路上でたたき売りされるパソコンのパーツ、フィギュアやゲームで埋め尽くされた店、異世界に紛れ込んだのかと思うほど非日常的なコスチュームを着ている人……今日が平日でなければ、大勢の力メラマンを従えて撮影会がそこかしこで開かれていたり、道路の真ん中でメイド姿の女の子が歌い始めたり、流行の曲に合わせてアニメの制服を着てダンスをしたりすることもある。

「今日はやけに人が多いな」

電車から降りて改札口を抜けると、そこには黒山の人だかりができていた。

平日にもかかわらずに何かの催しが開かれているのだろうか。

ハルは首をキリンのように伸ばして確認しようとするが、なんだか恥ずかしい気がしたのでやめてしまう。

「お兄ちゃん、すごい人です。きっと何かのイベントですよ！ 見に行きましょう！」

声優の握手会にしては場所が場所であるし、向かう電車の中でもそんな話題は何一つ聞かなかった。

袖をぐいぐいと引くマキを引きずりながら、ハルは目的の家電量販店に向かっていく。

最近オープンしたばかりの国内最大級のマルチメディアビル。

首都高速を背にして立てられたそれは、休日平日を問わず人でにぎわい、くまなく見て回ればそれだけで一日がつぶれてしまうほどの広大な規模を誇る。四百台を超える駐車場を確保し、駅にも近く、交通の便は申し分ない。海外のスポーツ選手も多く訪れ、その度に店内全てが貸しきりになるのは有名な話だ。

「おーにーいーちゃん！ イベントですよ！ 野次馬しに行きましよう！」

野次馬の話を漏れ聞くところによると、どうやら名高いメイドとそのマネージャーがやってきているらしい。ファンの一人が大事そうに抱える色紙をのぞき見ると、流麗な一筆書きが見えた。達筆すぎる字体なので、なんて書いてあるのかは分からない。自動的に誰が来ているのかも分からなかった。

「興味ない」

「そんなこと言わないください！ ちょっとだけです！ 決してお兄ちゃんを煩わせるようなことはありませんから！」

前髪を逆さまに留める特徴的な髪型と、無邪気な笑顔が印象的な少女は、足踏みをして兄に訴えかけている。

「絶対に行かん」

対して、長い前髪と細い目を持ち、どこか冷たい印象が先行しがちな少年は、かたくなに妹の提案を拒み続ける。

「けち！ けちけち！ デートなんですから、彼女のことを少しは考えてくれないじゃないですか！」

「誰が誰とデートだ」

「愚問ですね。お兄ちゃんと私に決まって」

足早にマキを置き去りにするハル。

「おーにーいーちゃん！ お願いします！ 一生のお願いです！」

すぐさまハルに回り込んで手を合わせる。

「前にもそんなことを言っただろうが」

「前は前！ 今は今！ だから、一生のお願いです！ お兄ちゃん、ちらつと見るだけですから！ あわよくばサインもらいましよう！ そして、オークションで転売するんです！ そうすれば、壊れたパソコン」

「壊した。壊したパソコン」

鋭い兄のつつこみに意気をそがれるマキ。

「……。とにかく！ オークションで高値で転売すれば、壊れ……壊したパソコンの費用が稼げるといふものです！」

兄の周りをぐるぐると回って懇願する。まるで星に願いをかけるようだ。

「一生のお願いです！」

涙を目に貯めている。度量のすわった野次馬根性だ。

「一体お前の一生は何回あるんだ？」

「えーと、今回で二回目？」

「確かに」

「え？ それじゃあ！」

「ああ……さつさと行くぞ」

マキの肩に手を置いてかすかな笑みを浮かべたと思ったが最後、ハルはさつさと横断歩道を渡ってビルの方へ行ってしまう。

「お兄ちゃん……マキの心をそうやって弄ぶなんて卑劣です。でも、マキは耐えられる女なんです。ドメスティック・バイオレンスもまた愛の鞭として受け取ってみせるのです！ だから、マキはあきらめません！ 野次馬しに行くまでは！ 欲しがりません！ 勝つまでは！」

周囲が目丸くするのもお構いなしに、人混みを飛び越えて、兄の背後に音もなく着地する。

「お兄ちゃん！ マキと、愛する彼女とデートしましょう！ イベ

ントを観に行きましょう！」

綱引きでもするように制服の袖を引つ張るから、ハルの制服がずれて肩からシャツがはみ出てしまっている。

すれ違ふ人は、お兄ちゃんであり、彼女だと声を張り上げるマキに小首をかしげていた。

中にはねたましげにハルをにらんでいる人もいる。

「お兄ちゃ　　ぎゃふん！」

ついにマキの脳天に雷が落ちた。

ハルは路上で頭を抑えて泣き崩れるマキに他人のふりを決め込んで、さっさとビルへ歩いていく。

「うう……公衆の面前でこの羞恥プレイ……でも、こういうのも悪くないなと思ってしまふマキは、もはやお兄ちゃんには逆らえないんでしょうか……？」

まるで舞台女優のように、スポットライトの下、足を崩して観客に語りかける。

マキに好奇の視線を向ける人々は、きっとマキの周囲にはブロードウェイの舞台が見えたことだろう。

それぐらい迫真の演技だった。

「否！　否、否、否！　駄目です。そんなことから、きっとお兄ちゃんは振り向いてくれないんです！　マキ、ここは心を鬼にしてお兄ちゃんに背を向けなければいけないんです！　頑張れ自分！　負けるな自分！　押して駄目なら、引いてみるしかないんです！」

勢いよく立ち上がり、唇をかむ。遠ざかっていく兄の背中。

「お兄ちゃん、後できつと後悔しますよ？ 後で泣きついたって知らないんですからね？ マキは行っちゃいますからね？ どうなっても知りませんよ？」

兄のすらりと伸びた背中が自動ドアの向こうに消えていった。すぐにたくさんの背中にかけ消され、姿形さえ見えなくなってしまふ。

「ど、どうなつても知りませんよ……後悔先に立たずなんですからね？ マ、マキは帰っちゃいますよ？ 帰ってこいって言つたつて帰らないんですからね？ 土下座どころでは許しませんよ？ マキがないのに気がついて、わんわん泣いて、マキの存在の大きさを思い知ればいいんです！」

地面を踏みしめて主張する。

「あ、あの、お兄ちゃん……？」

五分経つても兄は戻ってこない。

居ても立つてもいられなくなったマキが、指を絡めながらそわそわし始めた。

「は、早く、マキの偉大さに気がついてくださいよう……」

たくさんの靴音が耳の中をかき混ぜる。
ハイヒール、ブーツ、スニーカー。

行き交う混雑の音に、思考にノイズが生じ始めてしまう。
地球上にただ一人置き去りにされてしまったかのように寂しさ広がっていく。

周囲は見知らぬ人ばかり。
時間の狭間に取り残されてしまったような不安。
落ち着かない心。

「うっ……うっ……やっぱり駄目です！ お兄ちゃん待って！
マキも行きます！ 置いていかないでください！ マキが間違っていましたあああっ！」

哀れ、伊達マキ。

彼女はどこまでも追いかける女なのであった。

第十三話・「みつけた!」

エスカレーターを上った先、四階にあるパソコンのパーツ売り場を眺めているハル。

しかめっ面で、ショーケースの中にあるグラフィックボードを眺めながら、ため息を一つつく。

「もう家にあるパソコンは寿命なのかもな……」

何年も前から妹と共有してきたパソコンだった。

二人でハードディスクを分け合って使っており、デスクトップの右と左に、互いがよく使うショートカットが作成してあるのが特徴。

右にマキ、左にハルのショートカット。

プライベートがないように感じるかもしれないが、実のところハルはとても気にしている。

しかし、どんなにパスワードをかけても、マキはたちどころに通り抜けてしまう。

一時はハッカーの才能があるのではないかと疑ったこともある。

マキが言うには、お兄ちゃんのパスワードは単純なんですよ、マキが分からないわけじゃないじゃないですか、だそうだ。

ハルがいくら頭をひねっても簡単にパスワードを突破していくマキに、ハルはとうとうパスワードをかけることを止めた。

それが伊達家のプライベートが崩壊した瞬間でもあった。

「さて、どうしたものか」

パソコンのパーツと懷具合を比べながら、パソコンの破損箇所を思い出す。

電源を入れればハードディスクの起動音はする。しかしディスプレイがつかない。

ディスプレイ自体に問題はなかったので、分解して確かめたところ、グラフィックボードはぴくりとも動こうとはしなかった。

間違いようのない、ご臨終だった。

「アルフレードの写真ぐらいは、なんとか救出してやりたいよな……」

愛猫の可愛らしいあくび姿。カーテンのそばで丸くなって寝ている姿。猫じゃらしと戯れている姿。足にすり寄ってきたり、肉球をもまれて喜んだり、ケンカしてぼろぼろになって帰ってきたこともあった。

それら数々の思い出が、パソコンのフォルダの中に詰まっている。思い出だけでは保管しきれない大事な画像達。

愛猫アルフレードの生きてきた証。

ハルにとっては宝物にも等しい大事なデータだった。

思い出すだけで頬がゆるんでしまうハル。

「とにかく、この際だからパソコン本体ごと新しくするか……？ いや、それだと今月の生活費が厳しいか……でも、最近はインターネットを立ち上げるのでさえ遅くなってきているし、今のパソコン

は安くて早いのがそろってるから、今が買い時なのかもしれない。いつハードディスクごと壊れるかっていう不安を抱えながら生きながらえるよりも、新品にした方が、安心なんだよな……」

愛猫アルフレードの写真を眺めたり、可愛い猫画像を見るのがハルの数少ない趣味の一つだ。

集めた猫画像が消えてなくなることだけは、なんとしても避けたい。

「仕方がない、久しぶりにパソコンを一から自作してみるか。幸いハードディスクは生きているんだし、後でデータを吸い出せば何とかなるだろ」

マザーボードコーナーに足を運ぶ。

「このマザーボードに適応するCPUは……これでいいか。別に3Dゲームをするわけではないし。デュアルコアで二ギガヘルツあれば大丈夫だろう。メモリは……五百十二メガバイトは欲しいから……」

頭に想像上の筐体を思い浮かべて、そこに購入予定のパーツを詰め込んでいく。

「ハードディスクは……嘘だろ？ 使い切れないほど大容量なのに、こんなに安く買えるものなのか……。月日が流れるのは早いな」

日々、新製品が飛び出してくる現代にあつて、パソコン業界の栄枯盛衰は光陰矢のごとし。

革新的なアイデアが、まるで湯水の如くあふれ出してくるようだ。もちろん、そこにはたゆまぬ企業努力がある。

それに加えて、古代文明研究家の過去の技術を現代に蘇らせる尽力、世界中を飛び回る発掘家の危険を顧みない勇気など、計り知れない汗水が毎日流されているのだ。

「それにしても問題はOSだ……何でこんなに値段が高いんだ？詐欺じゃないのか？」

買い物かごにめばしいパーツを詰め込んでいくハルに、そんな企業努力など知るよしもない。

「電源は今使っているパソコンのを使い回せたはずだ。そうするとあとはマキが壊したグラフィックボードか」

最初に立ち寄ったグラフィックボードコーナーに舞い戻り、腕を組んで考え始める。

「……………それにしても」

かこの中にあるパーツ群にちらりと目を落として、ハルはエスカレーター付近に目をはせた。

「パソコンを壊した張本人はどこに行った？」

エスカレーターから吐き出されていくのは、学生や、会社帰りのサラリーマンばかり。

赤い髪留めをしたマキはいっこうに現れない。

あれほどしつこかったマキがいないと、世の中はこれほどまでに静かなものなのだろうか。

メガホン片手に高いところでたたき売りを実行している店員の大声でさえも、耳をかき回すまでには至らない。

父親の手を引いてはしゃぐ子供、女子高生達の甲高い笑い声、ア
ニメ話に興奮するどもり声や、ときぱきと対応する店員の張りのあ
る声も、全てが無味乾燥な音に聞こえてしまう。

それだけマキの喧騒がひどかったと考えることもできる。

腕を取られ、裾を握られ、ぐいぐいと引つ張られる。

嫌だと言っても、自分勝手にわがままを押し通そうとする妹。
確かにそれはうざったいことこの上ない。

……でも、なくなると今度は静かすぎて落ち着かなくなる。

祭りの翌朝、道ばたに残った大量のゴミを見るとときと同じだ。祭
りの賑やかさの裏側で人のモラルが悪化していくような。笑顔の裏
で、密かに悲しみが募っていくような。

「駅前ですらイベントでも観に行っただろうな」

やるせなさ。

残念だと一瞬でも考えてしまったハルがいた。

「……別に、寂しい訳じゃない。そんなんじゃない」

誰に言うでもなく、ハルはグラフィックボードを眺めながら呟い
ていた。

ショーケースに映るのは、前髪で隠された冴えない顔。

鋭い目つきは何者をも拒絶するかのように。

その瞳の先に陽炎の如く浮かび上がるのは、白と黒で彩られた葬
儀場。

悲しみが充満し、涙滂沱として流れ、焼香の煙が鼻の奥をつく。

失ったはずだった。二度と戻ってこないはずだった。

「グラフィックボードを買って終わりなんだ。買って、さつさと帰ろう。猫画像……なによりアルフレードの画像を取り出さないと」

パソコンが壊れたなら、買い換えればいい。

パーツが故障すれば、交換すればいい。

貴重なデータなら、二重三重にバックアップすればいい。そうすれば、二度と失うことはない。

壊れて悲しむことはあっても、新しい物を買って悲しみは消える。すぐに忘れ去っていく。

でも、発掘調査に向かったまま帰ってこなかった両親は。

冷たくなっていた愛猫のアルフレードは。

ただの風邪なのに、ただの風邪だったはずなのにこじらせて消えていった妹の心音は。

泥濘から伸ばされるいくつもの冷たい手。底の見えない泥沼に引きずり込まれそうになるハル。ぶつけられる泥のつぶて。沈んでいく心。

「くそ……どこで油を売ってるんだよ、うちの妹は……！」

ざわつく胸の内を吐き出すように毒づく。

次に会ったら、げんこつどころでは済まさない。

マキはすぐに周囲に被害を及ぼすだろう。なにせ生粋の変態で、人並み外れた馬鹿力を身につけた歩く爆弾のような女なんだから。

俺の目の届くところに置いておかないと、何かと人様に迷惑をかけるに決まっている。

そう、監視役、ストッパーとして、兄である俺がいる。

仕方なく一緒にいてやるだけだ。あくまで、仕方なく。

これは義務感なのであって、決して寂しさなんて軟弱な気持ちではない。

「……早く来いってんだよ、まったく……」

考えすぎたせいか、脳が痛みを発した。

ハルはグラフィックボードのパッケージを乱暴に買い物がごに突っ込むと、素早くきびすを返す。

そして、気がついたときにはもう遅かった。

目の前に小柄な影が向かってくるのが見える。考え事をしていたせいか、振り返った拍子に、肩と肩をぶつけてしまった。

「あ、すみません。考え事をしていて……」

前髪を垂らしてハルは小柄な影に陳謝する。

「みつけた！」

嬉しそうな声が聞こえて下げた頭を持ち上げれば、目の前には小柄な少女が何事もなかったかのように立っていた。

白いスニーカー、デニムのショートパンツ、丈の短いティーシャツ……とハルは視線を上げていく。

凹凸の少ない少女の体が目の前にある。シャツはぴったりと体に張り付いているので、体のラインははっきりと見て取れ、かつ可愛らしくへそを出し、それでもかと言っほども太ももを露出させていて、無駄のない二の腕までばっちり見える。

凝視してはいけなないと分かっているながらも、ハルは目を離すことができなかった。

「……にや？」

ぽかんと口を開けたままハルに見つめ続けられたせいだろう。

少女が不思議そうに首をかしげる。

ボーイッシュな髪型は活発さを体現しているようで、つぶらな瞳はまるで猫のよう。

無垢な笑顔で笑う少女に、ハルは恥ずかしさを覚えた。

「ま、いいや、返してもらっね」

ハルの顔にびしつと指を突きつける少女。

「返すって？ 人違いじゃ……？」

見知らぬ少女に返せと言われて戸惑う。鼻先に突きつけられた指は、まごうことなくハルを指示している。周囲を見回しても、ハル以外誰もいない。

「人違いじゃないよー！」

手のひらが伸びてきたと思ったら、少女はハルの胸に飛び込んできくる。ハルの胸に頬ずりし、柔らかな体を押しつけてくる。

まるでハルの中に入ろうするかのように耳を押し当ててくる少女。ハルは目の前が真っ白になりかけながらも、なんとか意識を保ち続けた。

凹凸がない体といえども、そこにある感触は間違いなく女の子だった。

「ほら……聞こえる。起動してるよ」

緊張のあまり間接という間接にブレーキが掛かり、動くことができなくなるハル。

その分、感覚は鋭敏化し、少女から与えられる女の子という膨大な情報が頭に流れ込んでくる。

「手遅れにならないうちに、ナナが取り出さなくちゃ！」

女の子が体を離す。

ハルは名残惜しいと思ってしまふ邪な心を、首を振って振り払った。

「……ナナが取り出す？」

「うん、だから覚悟してね！」

くるりと一回転するナナ。

まるでスイッチだ。

映像でも見せられていたかのように衣服にノイズが走ったかと思うと、次の瞬間には、黒いライダースーツがナナの体をびつちりと覆っていく。

右手には店内の照明を受けて輝く一振りの日本刀。

「なっ……！」

ハルが視認したのは銀の線。

無意識のうちに後退できた自分自身を誇りたいと思う。

ハルは切り落とされた数本の前髪と共に、腰を抜かしていた。

持っていた買い物かごは、見事な切れ口と共にその用途を失った。購入予定の品々がバラバラと床に転がる。マザーボードやその他部品は箱ごとまっぴたつで、切断された回路が床に散らばった。

驚きのあまり助けを呼ぶこともできない。

できるのは願うことだけ。持病の偏頭痛をもてあますことだけ。

「これで終わり！」

ハルは死から目をそらすように必死に目をつぶる。

何かがまぶたの奥に浮かんだ。

これは走馬燈だろうか。

……お兄ちゃん……私……。

一度は病床で命を落とした妹。

喜怒哀楽、様々な感情。

共有した家族。

兄と妹。

絆。

「……マキ」

ハルが心から漏らした言葉の先に。

いつまでも訪れない死の先に。

開けた目の先に。

「お兄ちゃん、置いてけぼりは寂しかったです」

いつもより大きい妹の背中があった。

第十四話・「お兄ちゃん、下がってて！」

「むう……ナナの邪魔をするなら手加減しないよ？」

「お兄ちゃんとのデートの邪魔をするなら、マキだって容赦しないんだから！」

にらみ合う二人。

刀を構えるナナに対して、武器を持たないマキは、立って獲物に襲いかかる熊のような構えを見せる。マキに武術の素養はない。まるでつかみかからんばかりのこの構えでさえ、深夜のプロレス放送から学んだ知識だ。付け焼き刃ですらない。

「いつくよー！」

ぺろりと唇をなめて風になるナナ。

「お兄ちゃん、下がってて！」

ハルは四つんばいの姿勢のまま、ショーケースの向こう側に身を隠す。

言われて素直に従ってしまったが、ハルは慌ててマキの様子を探る。

ショーケースから頭を出してマキの姿を視界に納めようとするが、マキはそこにはいない。

頭をめぐらすと、隣のマザーボードのあるブースからガラスの割れる音が聞こえてきた。

ガラスの中に身を埋めているのはマキだ。制服にガラスの雨が降る。上から襲い来るは斬撃。

天井の蛍光灯をかすめながら、刀が振り下ろされる。

高く舞い上がったナナはまるで重力を無視している。マキはガラスの中から身を起こすと、手近にあったマザーボードを両手につかんだ。

一枚、二枚と、基盤が投てきされる。

手裏剣のような軌道を描いたそれを、ナナは難なく刀で切り落とす。

どうやら時間稼ぎにはなったようだ。

マキがガラス片の中から身を起こし、商品棚の間を駆け抜ける。ナナがマキのいた場所に着地すると、今度は待ってましたとマキの反撃。

陳列棚の中にあつた乾電池パックを大量にひっつかむと、大きく振りかぶる。

体力測定で見せたハンドボール投げを思い出させる。

力強く投げられた大量の乾電池は、ショットガンから撃ち出される散弾そのもの。

人間の視力では認識できるかすら怪しい。

だというのに、マキは信じられないような柔軟な体さばきで銃弾をことごとくかわしていく。

マキが投げ続ける乾電池は、見た目にはことごとくナナを打ち抜いていた。

しかし、それは現実のナナには命中していない。全身を覆うライダースーツがナナの速度でかすんで見える。その残像をマキが打ち抜いているに過ぎなかった。

マキの頬に汗がしたたる。

商品棚の乾電池が底をつき、接近してきたナナの剣撃がスカートを切り裂く。

全力でバックステップをしたはずだった。背後を気にする余裕もない。背後がもしも壁だったならば、確実に体は右と左に分かれていただろう。

マキは背中に冷や汗が落ちていくのが理解できた。

ちらりと兄に目をやれば、隠れていると言ったのにこちらに向かってくるのが見えた。

手にはノートパソコンが握られている。

武器にするつもりだろうか。相手にならないかもしれないのに。

マキは兄の夢中になる姿に嬉しくなり、表情を崩しそうになった。

そこに視界をよぎる黒い姿。瞬間的に体が反応する。冷や汗を拭う必要すらない。バックステップ直後の横っ飛びで、汗は飛び散っている。

ナナの刀が汗を切り裂いて、さらに陳列されたキーボードの山を切り落とした。

棚からは、有線無線を問わずに様々なキーボードがキーをまき散らして崩れ落ちていく。

マキは床を転がりながら立ち上がると、背後から高らかな悲鳴が上がる。

一般客が激しい物音に気がつき始めたらしい。女性客の悲鳴で何事かと周囲を見回す客。回した視線を釘付けにする惨状が、パソコンコーナーに広がっている。次いでナナの刀と、崩れ落ちるキーボードの棚を目に納めた。

近くにはガラスの割れたショーケース、壊されたパーツ群。事の重大さを認識させるには十分な情報だ。

一般客が蜘蛛の子を散らすように階段やエスカレーターに向かっていく。

さすがの店員も事の収集に当たることができず、慌てて逃げ始めた。

パニックを過ぎ、貸し切りになった店内で、マキは陳列棚に突っ込んでいた。

袈裟斬りをよけて安心したのもつかの間、流れるような回し蹴りがマキの胸に炸裂する。脳が発する危険信号に、腕で胸元をカバーするのがやっとだった。

腕が折れるかと思うほどの衝撃で、体が宙に舞う。

風を切る音の後で、背中に硬質な感触。

カーゴセール中のスピーカーの山にマキは体を埋めていた。

「……うつつ……」

崩れ落ちる段ボール。もみくちやになるマキ。背中に走る激痛。三万円のところを一万円。顔面に張り付いていた値札を引きはがすと、床を蹴るナナの姿が見えた。

刺突に構えられた刀の切っ先に、マキは慌ててスピーカーを蹴り上げる。常人を越える脚力で蹴られた箱は真っ直ぐにナナを捕らえたはずだった。

ところがナナのスピードは衰えない。木製のスピーカーを突き抜けて、切っ先が露出していた。焼き鳥にされる。マキの脳内で打ち鳴らされる警鐘。

漂ってくる絶望の気配。

スピーカーの入った段ボールは思った以上に重量がある。体を覆うように崩れた段ボールの山のせいで、マキは素早い身動きが取れない。

取り除いている間に刀は胸を貫くだろう。

かといって埋もれたままでは後退も、左右によける事もできない。弾丸のように加速するナナの切っ先が眼前に迫る。

圧倒的な早さ。圧倒的な強さ。

全てが生まれて初めて経験するもの。

不思議な力のおかげで、誰よりも強くなったと思っていた。二度と大好きなお兄ちゃんと離ればなれにはならないための力を手に入れたと思っていた。

颯爽とお兄ちゃんのピンチを救って、好きになってももらえると思っただ。

でも、それは全て思い上がりだった。

お兄ちゃん、ごめんなさい。マキはお兄ちゃんを助けられそうにありません。

マキの懺悔が心の中で形作られそうになる。

「マキ！」

これから襲うであろう痛みに身構えるマキの耳に、手を伸ばす兄の声が飛び込んできた。

兄と離ればなれになる最後の時に見た表情。

もう二度と会えなくなる……。

ベッドの上で何度絶望したか分からない。その度に病気に打ち勝つ力が欲しいと思った。

兄が手をつないでいてくれた。何度わがままを言ってもつないでくれなかったのに、そのときだけはしっかりと手をつないでくれた。それは最後だからというあきらめじゃなくて、最後まで祈っていたからなんだ。

ハルの伸ばした手のひらから、力が流入してくる感覚。
マキの体に力がみなぎっていく。

錯覚でもいい。思いこみでもいい。あきらめちゃ駄目だ。

迫る切っ先をぐつとにらみ付けると、ぎりぎりまで引きつけた。
集中力が視界をクリアにする。少しでもナナの動きを捕らえられ
ればいい。

それだけに力を注いでいく。感覚を研ぎ澄ましていく。

胸を貫かれる恐怖をはねとばし、マキは胸の前で迫る刀を挟み込
んだ。

刀を捕らえた手のひらに凜とした感覚。

俗に言う、真剣白刃取り。

目を見開くナナ。うまく白刃を捕らえたはいいが、勢いまでは殺
しきれない。滑り込むように、切っ先がマキの胸元へ迫る。

胸まで二十センチ。

命まで十センチ。

絶望への直線運動。

そのせめぎ合いに耐えるマキに冷静さが宿る。

力比べはしない。刀にこもった力を別方向にそらせるだけでいい。
制服の脇の下を通過する刀。

「反撃のお兄ちゃんキック！」

ありつたけの力を込めて、ナナの肩口に右足をたたき込む。黒いライダースーツがスピーカーの棚を突き抜けて、マウスの棚にぶつかった。マキはひりひりする右足をさすりながら、兄の元に駆け寄る。

「マキ、お前……大丈夫なのか？」

眉根を下げてマキの肩をつかむハル。

長い前髪の向こうで心配そうに瞳が揺れている。

「お、お兄ちゃんがマキを心配してくれてる……！ マキは、マキは感激ですっ！」

痛みをこらえてマキは兄に抱きついた。

体中が兄の温もりに喜ぶのが分かる。痛んだ体が生き返るような心地だった。

「……別に、心配なんて」

ハルはマキを引き離そうとはせずに、頬をぼりぼりとかいている。恥ずかしそうな顔をそらし、前髪で隠そうとする。

「そんなお兄ちゃんの照れた表情が、マキを今以上に変態チックにさせます……えへへ……でも、今は」

もう少しこうしていたいという欲求を我慢すると、マキは兄の胸を抜け出して袖を引く。

一刻も早く、この場から逃げ出した方がいい。マキ自身、本気でたたき込んだ蹴りだが、そんなにあっさりと終わるような相手では

ないような気がしていた。

ハルもマキの様子を感じ取ったようで非常階段に向かって駆け出そうとする。

「逃がさないよー！」

マウスに埋もれていたナナが、マウスの山を吹き飛ばして立ち上がる。

空中から雨のように落ちてくるマウスをくぐり抜けてナナは刀を繰り出す。

マキは兄を背中へ押しやり、迎え撃つべく駆け出した。

兄から譲り受けたノートパソコンが武器と化す。

「お兄ちゃんには、絶対に触れさせないんだから！」

降り下ろされた刀をくぐり抜けて、マキがノートパソコンを振り回す。風を切る一撃がナナの腹部を狙う。

持ち前の柔軟さで後方宙返りをする、着地したその足で地面を蹴り上げる。

刀を体から後ろにため込んだそれは、居合い抜きを想像させた。

二歩のためを経た刀は、絶対的な切れ味を有する。マキが手に持ったノートパソコンを切り落とし、さらにはマキの制服の胸元を切り裂いた。露わになる下着をそのままに、マキは捨て身の覚悟で距離を縮める。

ナナの背後に回り込むと、胴体に抱きつき、高く跳躍する。その跳躍力たるや、体育の時間、幅跳びで見せたものを軽く上回る。

磨かれた床に亀裂を生じさせ、ロケットのように床を離れた。天井で輝く蛍光灯を壊すだけにとどまらず、その天井ごと突き抜

ける。

豪快な破壊音が響き、煙と破片が降り注ぐ。上の階にあった巨大な液晶テレビが、遅れてハルの目の前に二台三台と落ちてきた。派手に割れる液晶パネル。

学生には到底手が出せない何十万円もする代物。ハルはもったいないという思考すら忘れて、慌てて手近な非常階段を駆け上る。

その場を妹に任せて逃げ出すことはできなかった。

それは兄としてだけでなく、人間として醜い行為だと思えたから。

足をフル回転させて上った五階、そこには大きな液晶テレビが所狭しと並べられていた。

メーカーごとに綺麗に分けられ、日々進化を遂げていく液晶テレビ。

どの画面にも美しい自然風景が映されていて、その合間を二人の少女が駆け抜けていく。

追いかけるのはナナで、後退を余儀なくされているのはマキだ。

四階の天井を突き破るような衝撃を受けても、まったくこたえた顔をしていないナナ。日本の美しい風景をまっぴらにしたかと思うと、突き出した刀でアマゾンの動物たちを貫いていく。

両断され、貫かれた風景はどれも液晶テレビに映ったもの。

火花が散り、内部配線が露わになる。

マキは制服をぼろぼろにしながら、奥に奥に追い詰められていく。

効果的な反撃には転じられないでいるようだ。

振り向きざまに小さな液晶テレビを投げつけるが、ナナは難なく体をひねってよけていく。

戦闘においては大人と子供。

マキもそれを分かっているようで、無理に戦うことはせずに回避に専念しているようだった。

苦しそくに肺を押さえて、肩で息をしながら液晶テレビを飛び越える。

「もう鬼ごっこは終わりだよっ！ もたもたとするとハチに怒られるんだから！」

頬をふくらませて液晶テレビを踏み台にするナナ。

刀を床に引きずりながら加速する。

火花を上げながらマキに迫っていく。まるで着火した導火線そのものだ。

その火花がマキにたどり着いたとき、全てが終わってしまうような気がした。

ハルは何もできないと分かっているながらも、二人に向かって駆け出していく。

足が悲鳴を上げる中で、ハルは横倒しになったプラズマテレビを踏みつけて走る。

破壊されてむき出しになった鋭利な部品にひざを切られながらも、ハルは足を奮い立たせた。

置き去りにした痛み。流れ出す赤い血。

足がもつれて転びそうになるのを何とかこらえて、マキを見据えた。

そこには危機という言葉が当てはまる光景があった。

壁際に追い詰められたマキ。かすむナナの右腕。ひらめく白刃。マキは身をかがめて床を転がり、火花散る一撃をやり過ごそうとする。

コンマ一秒を巡る攻防の果て。

ハルが痛みに歯を食いしばる音に続いて。
マキが地面を蹴る音に続いて。
ナナが壁を切り裂く音が続いた。

三つの音が続けざまにフロアに広がる。

「あれ、外しちゃった……？」

舌を出しておどけたナナが、慌てて斬りつけた壁から離れようと
する。

マキが飛び退った方向とはまったく逆。追撃ではない何かに備えるように見えた。

難を逃れたマキに溜飲を下げる暇もなく、ハルの目に火花散らす
白壁が飛び込んでくる。

切り裂かれて内部のコンクリートがあらわになっているだけで、
火花散る要因は全くないはずだった。

「……なんだ？」

こぼした瞬間、ハルは息をのむしかなかった。
切り裂かれたコンクリートの切り口が、ふくれあがるように爆発したのだ。

火を噴き出し、轟音が鼓膜を叩く。

舌を出したナナや、体を転がして逃げたマキが爆炎に巻き込まれる。少し遠くにいたハルもただでは済まず、爆風で吹き飛ばされた。プラズマテレビに背中を打ち付けて、床を転がる。

もうもうと巻き上がる噴煙が巨大なフロアの三分の一を埋め尽くしていった。

壁の一部だったコンクリートが頭の上にはらばらと落ちてくる。

背中に激痛を背負いながら首をめぐらすと、すぐそばでマキが咳き込んでいるのが見えた。

離れていたのにここまで吹き飛ばされてきたと考えると驚きだ。

「うほ、うほっ！……うっ……」

爆炎を浴びて制服が焼けこげているが、どうやら大きな怪我はないらしい。

「だ、大丈夫か……マキ？」

マキのそばに這っていき、肩に手を置く。

「なんとか動けるくらいには大丈夫です……それよりお兄ちゃんは

……？」

「大丈夫な訳あるか……体中が痛いぞ」

ひざに手をついて立ち上がる。痛みでひざが落ちそうになる。

「……あ、やっぱりマキも痛いです。特に胸が痛いみたいです……これは治療が必要です。今すぐに、愛情を持ったお兄ちゃんの手厚い介護が！」

床にぺたんとお尻をつけたまま、立ち上がったハルに手を伸ばす。甘えるような声は涙を伴っていた。

「よし、大丈夫だな」

乱暴にマキの手を払うと、マキは力なくその場に体を横たえた。割れた液晶テレビのパネルを手にとって、床に文字を書いていた。

「いいんです……お兄ちゃんにとって、マキなんてそんな存在じゃないんです……しくしく」

愛、という字を書いているようだったが、変、という文字を書いてしまい、慌てて書き直していた。

クリアになっていく煙の向こうには青空が見える。

どうやら爆発は壁を突き抜けたようだった。

白い雲が空いた穴の向こうを流れていく。

風穴の空いた壁の鉄筋は折れ曲がり、高価な液晶テレビが全て傷物になっている。

最後まで残っていた液晶テレビの画面も砂嵐に変わり、やがて力を失ったようにぷつりと消えてしまう。

「何でうまくいかないのかな……またほこりだらけ……」

そのテレビに手をついて姿を現す黒いライダースーツの少女。

短い髪を灰で汚したまま、ゆっくりと歩いてくる。
刀を引きずりながら、つぶらな瞳をハルに向ける。

「……にや？」

猫のような声は驚きだろうか。

そのまん丸の瞳がハルから離れる。
ハルもつられて視線をなぞった。

「どうやら、上層部の読みは正しかったようですね」

「もう駄目。面倒くさすぎるわ……体力の限界よ……」

声はハルが上ってきた非常階段からだった。

第十五話・「アレ、使ってもいい？」

メガネチエーンを首からぶら下げた金髪の少女が、激しい呼吸を繰り返している。

非常階段をノンストップで駆け上がってきたのだから、その消耗は頷けるというもの。

「体力のないカレンにすればいい運動だったと思います」

カレンの背中を丁寧にさする。

メイド服の少女は破壊されたフロアを一別すると、小さなため息をついていた。こちらはまるで息を乱していない。

「うるさいわね……余計なお世話よ。私はうるわみtainな体のつくりをしていないのよ」

汗をハンカチで拭くと、カレンは鼻で笑った。

「それでは私が人外の化け物のように聞こえます」

心外だといわんばかりに、無表情だった唇をとがらせる。

「私からすればうるわの体力は十分化け物よ」

「私からすればカレンの方が十分化け物に感じるのですが」

馬鹿にするような笑みを浮かべたカレンに、うるわはしれとこたえる。

「なによ」

「なんですか」

主従で火花を散らし始める奇妙な光景に、傍観していたハルが呆けたように口を開いた。

「あれはなんだ？」

「マキにも分かりません……メイド喫茶の店員さんではないでしょうか」

腕を組んでさも考えるように装うマキ。

「どうしてこんなところに来るんだよ」

「マキに聞かれても分かりません……。マキはお兄ちゃんのことは何でも分かるんですけど、他のことには案外無知だったりします。ちなみに、お風呂で一番最初に洗う場所は、右腕で、次に胸回りですよね？」

「ああ、よく分かったな……。って、なんだと？」

ぎろりとマキをにらみ付ければ、マキは頭の上に大きな雲でも浮かべて記憶の再生をしているようだった。目がうつろで、とろけるように頬をだらしなくさせている。よだれが今にも口のはしからこぼれ落ちそうになっていた。

「お兄ちゃんの……お兄ちゃんの服の上からでは分からない、想像以上にたくましい胸板がシャワーをはじく……うつっ、思い出すだ

けで感涙のサービスシーンです！ きゅっと引き締まったお尻や、力こぶ、盛り上がる背筋、伸びた前髪からしたたる水滴……うへへ……えへへ……じゅるり」

兄の握り拳がマキの背後で震え始める。
まったく気がつかないマキ。

「……はっ！ まずいますい、よだれがこんなに出てしまいました……あれ？ お兄ちゃんがない？ お兄ちゃん？」

マキの後頭部が影に隠れた。

マキが背後で蠢く巨大な殺意に体をすくめる。
間髪入れず、熊でも殴り倒さんばかりの力強い断罪の拳がマキの脳天に炸裂した。

銅鑼を叩くような大きな音がフロアに響き渡る。

「あれは何よ？」

「私には分かりません……仲のよい兄妹ではないでしょうか」

息を整えたカレンの問いに、あごに手を当てて考え込むうるわ。

「どうして一般人がこんなところにいるのよ？」

「私に聞かれても分かりません。……しかし、現状を把握すると、ただの一般人が人型古代兵器と対峙した場合、ものの数秒で肉塊と化してしまうのは明白です。先の事件で最新の機構を身につけた特殊部隊でさえ一分とちませんでしたから」

分析した声は表情と同じく平板だ。

「カレン、先ほど感じた古代兵器の波動、抱いた感情をここでも感じますか？」

「え〜と、そうね……」

腕組みをして精神を集中させた。大きく息を吸い込んで、ゆっくりと吐き出す。

「相変わらずあの黒チビ古代兵器のいらいる感じはするわね」

「黒チビ古代兵器……？ 黒とチビ……あ、そういうことですか。分かりました、続けてください」

理解に苦しむ表現をかみ砕き、それでも理解してみせるうるわ。

「あとは……かすかだけど胸騒ぎは感じるわ。特定はできないけど、このフロア中に充満しているような感じ。私が感知できるのはこれぐらいかしらね」

鼻息荒く胸を張る。

威張るようなことでも……と言いかけて、うるわはこちらをうかがう二人の兄妹に目を向ける。

兄妹が警戒していたのは最初だけで、すぐに興味は失せ、すでに自分たちの世界に入り込んでしまっている。

下されたげんこつ。頭を抱えて床をごろごろ転がる少女がとても痛々しい。

「この場にいるのは私とカレン、人型古代兵器 通称ナナ。加え

て、あの一般人二人。どうやら、目的は果たせそうですね」

金色のメガネチェーンがしゃらりと清澄な音を響かせた。

目を開けてメガネをかけるカレン。

視力の悪いカレンが一般人二人をしげしげと観察する。

「ふうん、じゃあ、あの前髪が長くて、暗そうで、人付き合いが苦手そうな冴えないひよろつとしたもやし男か、その下でもだえ苦しんでいる女が《彼岸》を持ってるって訳？ …… 女ならともかく、男の方だったら何とも頼りなさそうね」

メガネのブリッジを指で上げる。

企業面接の試験管も真つ青の審美眼。

「うるわは男性相手となると容赦ありませんね。表現が偏ってます」

「悪臭を発する人間は例外なく男。厳しくもなるわよ」

肩をすくめて、首を横に振る。大きく開いた袖が広げた腕に従ってゆらゆらと揺れる。

「もう！ ナナを無視するなー！」

刀をぶんぶん振り回して、人型古代兵器が声を張り上げた。地団駄を踏むと液晶パネルがぱりんと割れて、フロアにひびが入る。無邪気さはあれど、力は人を優に超えている。

「あ、忘れてたわ」

「カレン、あなたって人は……」

ぽんと手を叩くカレンに、うるわがため息。

「その二人！ この私が直々に助けてやるんだから、ありがたく思いなさいよね！」

カレンの大声に二人の肩がはねる。

居眠りをしていたら教師に指されてしまった。そんなリアクションを見せるハルとマキ。

「では、私はあの二人を保護します」

つま先を兄妹に向け、メイド服の裾がひるがえる。

「待ちなさいうるわ。人型古代兵器は二体。その内の一体があの人の中のどちらかって事もあり得るわ、十分注意なさい」

組んだ腕をだらりと下ろすと、大きく開いた右の袖口が生き物のように動き出す。

揺れる勢いは、弱から強へ。

「……その気になってくれたようで嬉しいです、カレン」

相好を崩すうるわに、カレンはどこか恥ずかしそうだ。

「ふん、言ってなさい。……それと、いざって時の話なんだけど、そのときは」

まじめな顔で訴えかける。うるわは言われずともその先を予測で
きていた。

「アレ、使ってもいい？」

袖口をはためかせながら、うるわに視線を合わせる。

風もないのにばたたと揺れる袖口に目を落としたうるわは、乾燥梅が入っているポケットとは反対側のポケットに手を当てて、頬を強ばらせる。

脳裏をよぎる思い出に唇をかんでいるようだった。

絞り出した声も、いつもうるわが発するフラットな声ではない。

「……駄目です。その代わり、乾燥梅ならいくらでも」

手を添えた方とは反対側のポケットから、一粒の乾燥梅を取り出す。手のひらに載せた乾燥梅をカレンに差し出すと、カレンは仕方ないわね、といったように受け取り、口の中に放り込む。

「……分かったわよ。これで我慢してあげる」

「お願いします。なるべく冷静に、自分を抑えてください」

心底からカレンを憂慮する声だった。

カレンはそれに軽くうなずいて返し、地面を蹴るうるわを見送る。

「やっぱりこの梅美味しいわ」

ぺろり。

妖艶な舌なめずりに呼応するように、カレンの周囲に無数の風切り音が発生した。

第十六話・「……お兄ちゃん、駄目なの」

カレンを中心にして暴風域ができあがる。

カレンから吹き上がる暴力的なまでの風圧に、散乱した電子部品やら、液晶テレビやらが、がたがたとざわめき出す。

砂埃や、回路、ネジなどは身の軽さから真っ先にカレンの周囲から消え去り、カレンの足下は掃き掃除でもされたかのように綺麗になっっていく。

カレンを守護する無数の風切り音は、敵対者に対する警告音。接近すれば容赦なくたたき伏せるという絶対的な意思表示。

「上層部は捕獲を第一に考えているようだけど、それって逆を言えば稼働さえしていればいいってことよね」

ゴシッククロリータをまといながら金糸のような髪の毛を揺らす。だらりと下げた右腕の袖はためかせ、平然と風を受け続けるナナを見る。

天井に設置された蛍光灯が、暴風で次々に割れていき、ガラスがフロアに降り注ぐ。

店内が暗闇におおわれていく。

蛍光灯が破碎する火花がフロア全体に及んでいった。蛍光灯があらかた破壊しつくされると、唯一開いた外壁の穴から太陽光が入り込み、ナナとカレンを照らし出す。

光を背負ったナナと、対峙するカレン。

「この前逃がした分、腕の二本や三本は破壊してあげる」

吹き飛ばされてきたテレビのリモコンを、首をかしげてよけると、ナナはにっこりと笑った。

「ナナの腕は二本しかないよ？」

納刀するように刃を後方に構えて体を落とす。黒のレザースーツがよれる独特の音が、まるでたわめた筋肉の音を体現させるように聞こえる。

今にも爆発せんばかりの力。

引き絞られた矢。

引き金を引けば飛び出す弾丸そのもの。

「カレン、古代兵器にも揚げ足を取られるのですね」

兄妹をかばいながらうつるわは目を伏せた。

「あんたは一体……？」

強風に目を細めるハル。

「あ！もしかしたらお兄ちゃん、この人！」

ハルの腕を引くマキに、うるわは背中ごしに伝える。

「お分かりいただけましたか。察しの通り、私とカレンは」

「メイドとそのマネージャーの人だよ！あのイベントの！」

「あー……お前がさんざんだだをこねていたアレか」

兄妹間で一方的に納得していく様に、うるわがあっけにとられる。頭の上で輝くカチューシャがバランスを崩したように見えた。

そんなうるわを見て含み笑いをこぼしていたのはカレンだった。

どうやら、うるわの知名度がこの兄妹には通用しなかったことが痛快らしい。

「うんうん！ でも、イベントにしては派手な演出だね、これだけ派手だって事はテレビカメラなんかあるのかな？ もしそうだったら兄妹で芸能界デビューだね！」

急に拍手をし出したかと思えば、兄の小脇に寄り添うマキ。

どことなく立ちマイクを前にするような仕草を見せる。

「まあ、そんなこんなで頑張っていかなあかなと思うんですけど、ところでお兄ちゃん、私、お嫁さんになりたいという夢があるんです！ というわけで、お兄ちゃんが夫役で、私が新妻役やりますね！ あなた、お帰りなさい！ ご飯にしますか？ お風呂にしますか？ それとも……た、わ、し？」

背後から茶色のたわしを取り出す。

「私とたわしをかけたのですか。面白いですね。……少なくともカレンよりは」

カレンにちらりと視線をくれるうるわ。

視線を受けたカレンは袖がはためく右手ではなく、左手で握り拳を作っていた。

カレンの悔しさあらわに、うるわのリベンジ完了といったところか。

「……………なんでや　ねん！」

つつこみにはいささか度が過ぎるげんこつを受けて、フロアに沈むマキ。

出来たてはやはやの巨大なたんこぶから湯気が立ち上っている。湯気はカレンが作り出す風の勢いに飲まれて、あっという間に消し飛ばされてしまった。

「馬鹿は放置決定として、そろそろ始めるわよ」

「にゃ？　やつと始めるの？」

おどけてみせるが、ナナはすでに臨戦態勢。微動だにしないまま、刀を居合いの定位置に止め続けていた。

「そうよ、始める　にゃ！」

ナナの真似をしたカレンが眉間にしわを寄せると、風切り音が喜びの声を上げる。

天井を引き裂き、転がる液晶テレビをたたき割り、複数の衝撃がナナを襲う。

見えない衝撃の接近に、ナナの体がかすむ。やはり想像通りの弾丸ぶりだった。

歩数が二を数える頃には、最大速へと自らを連れて行く。舞い上がる破片に、ハルが慌てて顔を背けるなか、ナナは大きく

カレンを迂回して切り込もうとしていた。

カレンの背後に回り込み、向かい風をくぐり抜ける。

風切り音を背後に感じながらの接近にも、恐れを抱かないナナ。刀を滑らせて、カレンを胴体ごとまっぶたつにしようとする。

軌跡は寸分の狂いなくカレンをとらえたかのように見えた。

「短絡的」

ナナがその声を耳にしたときには、すでに体は暴風域の外にはじき飛ばされている。フロアを滑っていき、テレビ台に背をぶつける。木片に変わるテレビ台。

「まだまだ〜！」

体に反動をつけて起き上がると、ナナは再び切り込んでいく。

風切り音を左右に感じて舞い上がれば、下から襲った風切り音に迎撃されて天井にたたきつけられる。

五階の天井を突き抜けた先は、どうやらおもちゃ売り場のようだ。天井から落下してくる最新のゲーム機器とソフト。

メモリーカードを口にくわえたナナが、おもちゃと一緒に落ちてくる。

口からメモリーカードを吐き出すと、ジャンプして六階に舞い戻る。

戦いを放棄して何をする気かと首をかしげると、カレンの背後の天井が爆発した。

滝のように落ちてくるフィギュアに紛れて小柄な影が見え隠れする。

ニヤリと笑うカレン。

風切り音を走らせて、他のフィギュアごと影をめった打ちにする。何十という打撃を受けて転がる首。断面を見たカレンが舌打ちをする。

それは等身大のフィギュア。

「ぶぶ〜！ はずれ〜！」

最初に開けた穴から落ちてくるナナ。顔中に歓喜を花咲かせ、刀をカレンの頭頂部に振り下ろす。吹き荒ぶ風をもつとしない斬り下ろし。

まさに風を切る光だ。

しかし、カレンは回避運動を取らない。

それは取れないのではなく、取らないだけ。

カレンの不敵な笑みがそれを証明して見せた。
またしてもナナは、カレンに斬撃を加えることもできずにはじき飛ばされた。

天井をかすめて、プロジェクターコーナーに突っ込んでいく。誤作動なのか、上映を始めたプロジェクターに照らされながら、ナナはふくれたように頬をふくらませた。

一連の攻防を見守る兄妹は、吹き飛ばされてくる破片をうるわに守ってもらいながら、ただただ感嘆を漏らすしかなかった。

「人の域を超えてる。すごすぎる」

「あれがカレンの姿……《アンタッチャブル》と恐れられる所以です。面倒くさがり屋が出した戦いの結論とでも申しましょうか。その場を一步も動かず、相手を近付けさせず、当然触れさせもしない《千手》を持つカレンにしかできない、カレンだけが作り出すことのできるテリトリ。ゆえに、カレンを中心にした半径百メートルはカレンの絶対領域と言っても過言ではありません」

流暢に説明するうるわの姿は自慢げだ。

「絶対領域……」

「そうです、絶対です」

激突の激しさに目を奪われるハルの裾を、我知らずぎゅっとつかんでしまうマキ。

「お兄ちゃん……」

寂しそうな声は風にかき消される。

力と力のぶつかり合いに関心しながらも、マキは胸の奥を突く痛みに顔をしかめた。

ハルの目をこつとも簡単に奪ってしまえる攻防が繰り広げられている。

大好きな兄の視線を浴びることのできる二人。
敵味方はこの際関係なかった。

マキがお兄ちゃんを助けるはずだったのに。
大好きなお兄ちゃんに見てもらえと思ったのに。

二人でピンチを乗り越えて、気持ちを通じ合うと思っていたのに。今は、ナナ、カレンという二人の少女に取って代わられてしまった。

目を輝かせて見つめるお兄ちゃんの瞳の中にマキがない。

マキはお兄ちゃんの妹で、お兄ちゃんを守りたいの。

奇跡的にお兄ちゃんのそばにすることができて、生きていた頃よりずっと強くなったのに。

守れると思ったのに……。

たまらなく悔しかった。

「……お兄ちゃん、駄目なの」

私を見てくれなきゃ駄目なの。

言えない言葉の先は、飽くことなく攻撃を仕掛けるナナが起こした爆発によってかき消された。

カレンの周囲をぐるぐると周回し、転がっている液晶テレビを軽々と持ち上げる。左手一本でカレンに投げつけていく。四方八方から投げ込まれる巨大なテレビの影に隠れつつ、カレンに接近しようという魂胆だ。

テレビからテレビへ、残像を残してカレンに迫る。

「下手な鉄砲数打ちや当たるって、言い得て妙よね」

戦いの中で深呼吸をする。右の袖に加えて、左の袖が震え出す。十数個という液晶テレビがカレンを押しつぶそうと空を舞う。そのなかを小柄な影が移動し、一撃必殺の機会を待つ。刀が反射する光は、舌なめずりをする捕食者の牙。

ナナがしなやかに獲物を狙う豹ならば。

「全部破壊すればいいんだもの」

カレンはまさに破壊を司る神。

肺から吐き出す息は、体から放出される力に同じ。

風切り音が倍になり、耳に幻聴を残すほど重なり合う。

カレンを取り囲んだ液晶テレビが粉々に破壊されていく。

一が二に。

二が四に。

四が八に。

乗算のように解体されていく液晶テレビ。

しなやかな豹の牙はカレンの破壊的な衝撃波によって脆くも折られてしまう。

テレビに身を隠すも、そのテレビが全て破壊されてしまつては意味がない。

体を露呈させたナナは、右からくる風切り音に体を強打され、さらに左から来た風切り音にはじき返される。

天井からつり下げられた看板を巻き込んでナナは地面にたたきつけられた。

小柄な体がバウンドし、ナナの口から初めて血のようなものが吐

き出された。

ナナは後転を繰り返して体を起こすと、口のはしから流れ落ちる血を手の甲で拭った。

レザースーツは所々が破れ、赤みさす肌が見えている。

ボーイッシュな短髪はほこりまみれにしながらも、ナナは刀を構え直した。

戦意を失うことのない瞳は、古代兵器である証だろうか。

「まだまだまだ〜！」

可愛らしい声を出して跳躍する。

カレンはやはりその場を一步たりとも動かずに、ナナを鼻で笑った。

やるならとことん付き合ってやるわよ。

実力に裏打ちされた自信が体からあふれ出る。

左手の袖が落ち着きを取り戻したのは、ハントでも言うのだろうか。

メガネの橋を左手で持ち上げて、三日月の形に唇を歪める。

乾燥梅を口内で転がしながらの戦闘は、もはや余裕としか表現できない。

「むう、ナナも負けないよ！」

ほこり一つないゴシッククロリータに一撃を加えるべく、ナナは動き出す。

カレンとは逆の方に走り出し、天井に刀傷をつける。

カレンはそれを馬鹿にしたように笑い、風切り音を向かわせる。刀をやたらめっばう振り払いながら、ナナは天井、床、テレビ等、手近にある物全てに傷をつけていく。

カレンの放つ正体不明の風切り音を自慢の柔軟性を生かして回避しながら、ナナはカレンの周りを疾駆し続ける。

増え続ける刀傷は、どれもカレンには無関係のように思える。

素人目には、古代兵器といえども故障で錯乱したとしか思えないだろう。

「この黒チビ兵器……！」

いらだちは意外にもカレンだった。

これまで立て続けにヒットさせてきた風切り音が、ここに来てかわされ続けている。

支離滅裂なナナの動きに惑わされるように、カレンの心もかき乱される。

「カレン！」

「分かってるわよ！」

うるわが発した声をいらだたしげにたたき落とす。

いつまで経っても向かってこないナナに舌打ちをして、カレンは風切り音を増やそうとする。

落ち着いていたはずの左袖が緩やかになびき始めた。

右袖が発した風切り音を棒高跳びの要領でかわすナナ。

そのまま一回転して地面に着地。

刀を居合いの形に構えると、切っ先を地面に引きずりながらカレンに突貫する。

愚直なまでの猪突猛進。

一直線にカレンに疾走する。

火花を散らしながらカレンに急速接近。

「馬鹿の一つ覚えみたいに！」

いらだちを破壊の衝動に変換するカレン。

熱波がカレンから放出する。暴れ回る風切り音は、ナナだけではなく、周囲をなぎ払う。

天井を瓦解させ、柱を粉碎し、床を陥没させる。

龍がその身をよじるようにフロアが揺れ、構造がきしみ始めた。

均衡を失いつつあるフロアを気にも留めずに、ナナは火花を床に残しながらカレンを狙う。

それだけならば、単純な攻撃だった。

単純な攻撃のはずだった。

カレンの直感が愚直なまでのナナの行動に疑問を持たせる。

それは数多の戦場を経た者にしか得られない、生きるための経験。

単純な攻撃の前の、不可解な行動。

カレンが対策を練るためには、時はすでに経過しすぎていた。
背中を駆け抜ける汗。

周囲を見るまでもない。

ナナが刀傷をつけたその全ての箇所が赤くふくれあがろうとしていた。

爆発する刀傷、ふくれあがる炎。

着火。

爆音。

煙と破片がフロア全体を灰色に染めていく。

いくら暴風域を巻き起こすカレンの《千手》といえども、フロア全てに及ぶ煙を払拭するには時間を要する。そして、人型古代兵器でありスピードと柔軟性を武器とするナナには、それは絶対的な好機とも言えた。

「カレン！」

二度目の叫びは、うるわが加勢に向かう合図。

エプロンドレスを振り乱し、煙の中に突っ込んでいく。

もうもうと舞い上げる煙と吹き荒れる暴風の中、ナナの刃が光る。

背中を走る悪寒を受けて、カレンは眉をつり上げた。

久しぶりに感じる生と死の狭間。

煙を切り裂き、抜刀されるひらめきは、迷いなくカレンの首に伸びていく。

肌に張り付いた黒レザースーツがカレンに最接近した瞬間だった。

……数秒後、煙が風でいく暴風によって吹き飛ばされる。

唯一の光源である壁の穴からの光が、舞うほこりと共に命の是非を映し出す。

消失していく暴風域。

風が、止んだ。

カレンの首を襲った一閃は、カレンの黄金の髪を切りとただけにとどまる。

うるわによって刀は軌道をそらされ、フロアの床に突き刺さっている。

ナナは目を丸くしてバックステップし、右腕を確認した。間接を失った腕はぶらりと垂れ下がっている。

切り裂かれたエプロンドレス。じわりとにじむ赤はうるわの腕から。

本人は涼しい顔をしてナナを見据える。

「……この私を」

カレンは地面に落ちた自分の髪に体を震わせる。

恐怖ではない、武者震いでもない、怒りでもない、もう一つの感情。

「私を動かしたばかりか……触れた……ですって？」

ナナの放った刀に、一步、後退してしまった自分。

「この私を！」

それは純然たる、悔しさ、だった。

第十七話・「黙りなさい」

コートの裾が揺れ、髪を逆立てる。

黄金の髪は燃え上がるように波打ち、カレンの放つ鬼気が微妙な均衡を保つフロアを揺らす。

柱には大きな亀裂が入り始め、コンクリートがぱらぱらと剥落していく。

爆風のごとき波動が再びカレンを中心にして発生していた。

「壊してやる……跡形もないくらいにバラバラにしてやる。上層部なんて私の知った事じゃない。塵芥にしてやる。この世から跡形もなく消してやる。生きていることを後悔させてやる。内部機械を引きずり出して、ネジの一本一本まで破壊してやる！」

「カレン、冷静に」

拳を握りしめ、大きく開いた袖口を震わせる。

カレンの怒りの余波がうるわの肌にぴりぴりとした痛みを発生させた。

風切り音がその秩序をなくす。

通常ならばカレンの周囲で規則的に発生し、カレンの意識が敵に向いた瞬間に襲いかかる。それが今は、カレンの意識のたがが外れ、無秩序に周囲をのたうち回るばかり。

床をはぎ取り、天井をうがち、テレビを粉々にする。暗闇の中で胎動する力の放出は、カレン以外の全てを敵視しているかのようだった。

「うるわ、よこしなさい」

「カレン！」

「いいから、よこしなさい。持つてるんでしょ？ 《遺片^{いへん}》を」

「カレン、冷静になって下さい。冷静になったあなたなら、古代兵器を制することは決して困難ではないはずです。ですから」

ナナに無防備な背中をさらすことになっても、うるわは主を止めたかった。

自身の腕を流れ落ちていく血を拭いもしないでカレンをなだめようとする。

「黙りなさい。逆らうの？」

カレンのメガネ越しの眼光が、うるわの背を凍らせた。

黄金の瞳は、闇夜に瞬くどう猛な獣そのもの。

牙を立て、血をすすり、肉をはぎ取る。飛び散った血で大地は深紅に染まる。

カレンのメイドであるうるわでさえ、そんな錯覚を見、噛み殺されるような心地を味わった。

「それは……」

カレンの歯ぎしりが聞こえてきた。梅干しの種が噛み砕かれ、カレンは口からつばを吐くように吐き捨てる。

梅干しの種は本来持つ色よりも赤く染め上げられていた。
それは主の血。悔しさのあまりに口内を傷つけたのだろう。

「申し訳ありません」

ポケットに手を入れ、《遺片》の感触を確かめる。

カプセル状になったそれは一見するならただの風邪薬にでも見え
たかもしれない。握りしめれば簡単につぶれるし、姿形も小指第一
関節にも及ばない大きさ。

ただ白いだけのカプセル。

それ以上、外観の説明は必要なかった。

カレンは感謝の言葉もなくうるわの手から奪うと、口を大きく開
けて舌の上にぽとりと落とした。胃で溶かそうとはせずに、噛み砕
いてから嚥下する。

味わうようにごくりと飲み下すと、美しいのど元がいやらしく蠢
いた。

「さすがの乾燥干し梅でも、この味はやっぱり出せないわね」

体を震わせるのは快感の証だろうか。怒りを忘れて舌鼓を打つ。

「……カレン、私は」

「気に病む必要はないわよ。私が望んだ。うるわはそれに従った。
メイドとして正しい行いをしたまだよ。どうどうと胸を張ればいい」

唇をかむうるわ。

自らの頭に冠しているカチューシャを、床にたたきつけてしま
いたい衝動に駆られる。

カレンが望んだことをした。

結果的に発生する幸か不幸かを考えるのは私ではない。主が幸福であることが、私の幸せそのもの。たとえそれが刹那的でも、たとえ仕える者を守るのがメイドたる自分の役目だとしても、全ては主が望んだことだから。

異議はない。正しいと思う。

しかし、理解したはずの頭が納得に苦しんでいる。

「……いかなる時も、冷静・笑顔・優雅であれ。かつ、最大の犠牲心を持つて奉仕せよ」……私はそう誓いました」

国際家政婦条項、冒頭の一節であり、宣誓式でも誓った言葉。

笑顔すら満足に浮かべられないのにメイド・インを名乗る自分自身にいらだちを感じながらも、それを認めてくれたカレンという存在。

主従関係にとられない自由奔放な、一風変わった主人。

最大の犠牲心をかけて 命を投げ出すこと に足る大切な主人であると、真っ先に心が告げた。

「なのに私は……。最低のメイドです」

主人の身にこれから起こる出来事を知っていながら、止めることもできずに、従ってしまうしかない。

心の弱い自分。正しいことが何かも分からず、言いなりになるしかない自分。

「言っておくけど」

風切り音がその鋭さを増す。

殴りつけて破壊するようなスタイルから、斬りつけて両断するスタイルへ。前者が致命的な打撃の連続だとすれば、後者は全てが必殺の連続。

威力も、速度も、領域も、全てにおいて格段に進化を遂げようとしている。

「うるわ、アンタは最高のメイドよ」

「いえ、最低のメイドです」

「もう一度言っわ。最高のメイドよ」

「いえ、最低のメイドです」

メイドとは主人に誠心誠意仕えること。

でも、それはただ唯々諾々仕えることではない。

最大の犠牲心を払ってしかるべき大切な主人、カレン。彼女が苦しむのを目の当たりにしなければいけない。守ること、いたわること。それすらできない自分自身。

メイドなのに。日本でただ一人のメイド・イン・ジャパンなのに。

「言ってなさい。そうやってずっと」

エプロンドレスの裾を握りしめて向かい合ううるわを通り過ぎる。かけられた言葉に慈悲はない。向き合っていた主人とは、背中合

わせになったうるわ。

「待ってください、カレン」

「何？」

背中越しに語り合う主従。

うるわは耐えられなくなったように振り向いて、カレンの背中に言葉をぶつける。感情的になる自分を止められなかった。他人目には無表情、無感動に見えるうるわでも、胸中は痛みでふくれあがっている。

痛みに耐えられなくなって叫び声を上げるような感覚に似ていた。

「専守防衛は私の理念です。援護させてください」

「邪魔しない程度に頼むわ。それと、後はよろしくね」

後が何を意味する言葉なのか、うるわはその全てを理解した上で、しっかりとうなずいた。

カレンが地面を蹴る。

うるわもそれに続いた。

「ナナの腕が動かなくなっちゃったよう……」

左手で地面に月立った刀を引き抜くと、ナナは迫り来る二人を視認した。

第十八話・「《遺片》を服用した私は無敵よ」

「腕だけでは済まなくしてやるわ」

駆け出したカレンが、ナナに向かって両手を突き出す。

袖が裂けそうなくらいにふくれあがり、それがナナの周囲をことごとくなぎ払った。

舞い散るガラス片は、まるでブリザード。

ナナに向かう途中に存在する障害物が細切れになり、火花が散る。壁も、床も、天井も。

例外なくずたずたにしながら風切り音がナナの四方を取り巻いた。ナナは右腕をだらりとさせたままバックステップ。外気が吹き込んでくる壁の穴へと下がっていく。

「逃がしはしません」

風切り音に意識を傾けていたナナの背後を取る。うるわに手加減はない。

狙いすましたようにナナの足に蹴りを放つ。ナナは刀を地面に突き刺して足場にし、空中に飛び上がった。武器を捨て、足場にしたナナは空振りしたうるわを飛び越える。

その背後に迫っていたのはカレンの放つ風切り音。

ナナの目に映る黒い軌跡は、確実に下半身を狙ってきていた。

ナナの武器である機動力をそぐつもりか。

「《遺片》を服用した私は無敵よ。誰にも負けない、それが絶対」

ヤマトノオロチがスサノオノミコトと正々堂々と戦えば、おそらくは八つのしっぽと八つの首の攻撃にさらされただろう。

それぞれが切り裂き、執拗に食らいつく。まさに現代に再現された戦い。

《千手》をようつするカレンの数え切れない多重攻撃に防戦一方のナナ。

「むう……ちょっとくやしけど、ナナ頑張るもん！」

思考より体が先に動き出す。

空中で開脚し、風切り音を飛び越える。後は重力落下に身を任せるのみ。

うるわが着地点に素早く回り込んで右腕を引く。

「早々に終わらせませう。《遺片》を服用したカレンには時間がありませんから」

待ち受けるは渾身の一撃。

追い立てるはカレンの袖もとから放たれる黒い軌跡。

決まった。

戦闘を見守る兄妹がそう確信する。

「にゃ！」

地面に着地すると思いきや、天井からは見出した配線に左手一つ

でぶら下がり、さらなる退路を導き出す。ケーブルにぶら下がり、大車輪のように体を回転させて、元いた場所へ着地する。

突き刺した刀を引き抜くと、低い体勢を維持してカレンに斬りかかった。

左手といえど剣速は落ちない。

スピードに劣るカレンには驚異となるはずだった。

「だから」

カレンは待つてましたというように笑い、目の前の敵に意識を傾けた。

「私は無敵だって言ってるじゃない」

黄金の髪が美しく広がる。

腕を開き、袖口を右と左に広げると、カレンの前方に防壁が築かれた。

ナナの繰り出した刃に食らいつく風切り音。

金属防止がぶつかり合う音の後に、ひもがたわむ音。

黒い流線がナナの剣戟を相殺した。

速度が落ちて見えたそれは、黒い鞭のようなもの。

それがカレンの袖口から飛び出し、速度を増して、風切り音を作り出している。

「卑怯だよ！ 卑怯！ 数が多いもん！」

「古代兵器のアンタが、卑怯も何もないと思うけど?」

火花散る視線。

「卑怯じゃないもん！ ナナは頑張ってるもん！」

「どちらかと言うとあなたは存在自体が卑怯です」

ナナの背中に言葉をたたきつけたうるわ。追い打ちをかけるべく疾風をまとった。

「ナナは一人だよ！ たぜいにぶぜい！」

「私、馬鹿だから言っている意味が分からないの」

カレンが笑う。

人の認識速度を超えて繰り出されるのは高速の鞭。まるでハイエナのように動き回り、風切り音という牙を研いでそのときを待つ。いざカレンの意思が加われれば、相手が一人であろうと四方八方から襲いかかる。

《遺片》を飲む前後で、その手数が倍以上に増えている。回避できるスペースを見つけることすら困難。

加え、人型古代兵器といえど、作用反作用の法則はつきまとう。

「それだけあなたの力を認めているということです。人型古代兵器ナナ」

死に体をさらしたナナの腹部に、うるわの拳が入り込む。

硬質な音と共に、小さな体は軽々と吹き飛んだ。

カレンの目が吹き飛んでいくナナを捕捉する。とたんに黒い軌跡は方向を変え、ナナを襲い始めた。食らいつく蛇を連想させる。

六階から落下してきたおもちゃと瓦礫を切り刻み、殴り飛ばされたナナのレザースーツを切り刻む。

「私は違うわね、うるわ」

ナナは苦しい体勢ながらも剣を振るい、黒い流線を打ち払う。飛ばされた先の内壁に着地すると、壁を走り出す。うるわが壁際で待ち受けるのを目にしながらも、速度はゆるめない。

ナナの走った後には、彫刻刀で刻んだような文様がうまれる。

「私は古代兵器を認めるんじゃない。否定するのよ」

それは全て、襲いかかるカレンの《千手》が作り出した傷。無数の軌跡が間断なく襲いかかっている。うるわは腰を低くし、壁を走ってきたナナに正拳突きを見舞う。

ナナはそれに真っ向から立ち向かうことはしなかった。

刀を振りかぶり躊躇なく投げる。

意外な形で刃を向けられたうるわもさすがに驚いたようだ。

うるわのカチューシャをかすめて、プロジェクターに突き刺さる。その隙に壁を離れ、うるわの横を通過する。慌てて繰り出したうるわの回し蹴りは、左手一本の前転で置き去りにした。

「相変わらずトリッキーですね」

エプロンドレスを翻し、すぐにナナへ接近する。

「ナナの刀！ ナナの刀つと！」

途中でプロジェクターに突き刺さっている刀を回収すると、回り込まれた黒い攻撃を受け流す。

三秒の攻防で、刀を交えたのは二十を軽く上回っていた。

その間にもナナは後ろから接近するうるわの攻撃や、絶え間なく襲ってくる黒い風切り音にさらされる。

「うにゃ！ …… 劣勢かも」

鋭さと手数を増したカレンの攻撃に防御するのがやっと。

刀を振るう左手にもしびれが残る。先ほどから右手に信号は渡っていない。打撃を受けた腹部の調子も思わしくない。

警告信号が脳内にけたたましいアラームを鳴らす。

ナナは使い物にならない右手に難しい顔を見ると、それでも残る左腕で風切り音と切り結ぶ。

「うつ…… ナナ、きつと八ちに怒られる……」

呟いた瞬間に、右足を鋭い衝撃が襲った。

見れば、強化仕様のレーザースーツが切り裂かれ、肌があらわになっている。防刃、耐圧仕様を切り裂かれる衝撃に体がよろめく。

「うるわ、仕上げよ」

アイコンタクトが、言葉より先んじる。

「はい」

ここぞとばかりにうるわが仕掛けた。

幾度となく接近戦に持ち込みながら、とらえきれなかったナナの腕をつかむと、大外から足を払って背負う。

地面に叩き伏せられたナナの背中中でフロアに亀裂が入る。受け身を取り損ねたナナの口から大量の空気が吐き出された。

素早くうるわの背後にひざをくれて引きはがす。

地面を蹴って後退するも速度が得られない。

「カレン！ 今です！」

ナナの頭で巻き起こる警報アラームが予想するとおり、数を増したカレンの風切り音がナナの体を取り巻いた。

全身。もはや全身だった。

刀ではじき、受け流し、あるいは体を曲げ、そらし、柔軟性を駆使して回避してきたナナが、ついによきれなくなったのだ。

ピンボールのように体を弄ばれ、風切り音に囲まれたまま空中に放り出される。

とどめとばかりに、うるわの体全体を使った掌底に打ち据えられた。

液晶テレビの残骸へ突っ込んでいくナナ。

刀を握りしめることもできなくなったのか、吹き飛ばされる中でその手を離れた。

「ナナ……もう動けないよ……」

瓦礫からはい出してひざを着く。刀を求めて手を伸ばすも、届きはしない。やがて力尽きるようにうつぶせに倒れ込んだ。ナナは砂埃の中に頬をこすりつけたまま動けなくなったようだ。

カレンは地面に転がる刀を手にとると、軽く品定めをする。

「ふーん、これも古代兵器なのかしら。一見すると変哲もないただの業物って感じだけど。類推するところ、刀で切った部分から発火するのかしらね」

「ナナの……刀……だよ」

ナナの声を聞いて、カレンは乱暴に刀を投げ捨てた。嗜虐的な表情がカレンを女王様へと変貌させる。うるわはそれを見て少しだけ頬を強ばらせる。

いくら主人とはいえ、好ましい部分でないことを知っているのだろつ。

「一目瞭然だけど、私の勝ち。はじめはつけさせてもらっわよ」

うつぶせに倒れるナナの目の前にわざとブーツをさらし、これ見よがしに頭に足を押しつけた。

弱者を踏みにじる絶対強者の構図。

「カレン、お願いします。冷静になって下さい。上層部は古代兵器を稼働したままの捕獲を命じています。そこまでする必要性はありません」

せんし、破壊しなかったところであなたの勝利は揺るぎません」

「いい、うるわ？ 私は私のしたいようにする。上層部なんて知った事じゃないわ」

ブーツに力を込めるとナナの頭蓋がみしみしと音を立てる。

風切り音は以前猛威をふるったままで、ぐるぐるとカレンの周りを回り続けている。いまだたぎる力の放出を垂れ流しにしているようだった。

流動する力は、フロアをのたうち回り、破壊対象を探し回っているようにさえ見える。

まだ足りない。もっと破壊したい。

そんな破壊衝動を《千手》が訴えかけているようにも見えた。

他方、カレンの額に浮かぶ玉のような汗。

勝負がつく前後で、カレンの手が震え始めていた。微震だったそれが大きな振動へ変わろうとしている。

一瞬、貧血のように上体がふらつく。

カレンは神経の系をつなぎ止め、傾いた体を何とか持ち直す。

「カレン、副作用が……！」

「分かってるわよ！」

金切り声に近いカレンが、大声を張り上げた。

汗が流れ落ちる中で、狂気をまとうように唇をつり上げる。

金色の目はさびを帯びるようによどみ始めていた。

「壊してやるの。バラバラにしてやる。配線の一本一本を引きずり

出して、引きちぎってやるのよ！」

フロアにめり込んでいくナナの頭部。
まるでトマトを踏みつぶすように。
ゴキブリを踏みつぶすように。
しいたげる狂気に染まったカレン。

……ブーツのかかとに、よりいっそうの力が込められた。

「まったく、ナナときたら見ていられないんだから」

聞いたことのない声は、穴の空いた内壁から。

「これだからナナは進歩しないんだよ。お父さんが見たら悲しむよ？
僕だったら少なくとも見ていられないね！」

五階から見える青空を背景にして、太陽光を背負っていた。
小さなシルエットが黒く映り込む。

「にや……？ ハチ……だ」

その場にいた五人が一斉に振り向く。

第十九話・「まさに最悪のタイミング」

「ハチだ……じゃないよ。人間なんかにてんぱんにされるなんて……ナナはすぐ遊ぶのが駄目だっていつも言ってるじゃないか」

飛び散ったガラス片を踏みしめながら、肩をすくめてみせる。

青空を背負う細身の体躯。声質から判断するに、それはまだ少年の域を抜けてはいはない。声変わりを控えた幼ささえ感じられる。

「人間にしてはやるよね。僕も結構びつくりしてる」

腕を組んでフロアを見渡す。

自信を醸すその出で立ちは、声音とは異なり、実に少年らしさを感じさせないものだった。

入り込んでくる外光で少年のストレートヘアーが淡い光を放つ。

「《彼岸》は本格的にはないにしろ、どうやら起動しているみたいだね。存在してはならないものまで存在してる。良きにしろ悪しきにしろ使用者の望みを全て具現化させてしまう最大最強の兵器……やっぱり僕のお父さんは偉大だね」

事態について行けない兄妹を目に留めてにつこりと笑う。

「そんな偉大なお父さんが手塩にかけてくれたのにさ。……ねえ、ナナ」

細く長い髪質は白く、銀髪と表現しても差し支えはない。
その場にいる誰もが想像したとおりに幼い顔立ちに愛敬はあるが、

大人でさえ顔をしかめるような軽薄さが見て取れた。

白い歯を強調させるように笑う様はどこか小賢しく、いやらしささえ見え隠れする。

黒い高級そうなスーツ姿で、ジャケットのボタンを全て外している。

中に着込んだ白いワイシャツも第三ボタンまで開かれていて、襟元から着崩した感じは、少年ながらに高級ホストクラブのそれを思わせた。

暗闇におおわれた中でも浮かび上がる瞳は、ガーネットのように赤々と輝いている。

「僕たちは至高の兵器なんだよ？ そんな無様にやられちゃってるけど、自覚してる？ してないでしょ？」

額に指を当てて、頭痛でも耐えるかのようだ。

「にやう……ハチ……ごめん……」

カレンの靴底に踏まれたまま、ナナが謝罪する。

「あ、いいよ、いいよ、あやまらないで。ナナは旧型だし、そういうところは僕の監督不行届ってやつもあるから。……でも、ナナがそんなだとさ、最新型である僕も疑われるじゃない？ ああ、《人機》もこの程度なんだな、ってさ」

手を広げて笑う。

「《人機》？ うるわ、このガキは何を言ってるの？」

踏みつける力を強めるカレン。

いらだちがガラス片を震えさせた。
大粒の汗があごからしたたり落ちて、地面に大きな斑点を作っている。

ナナを踏みつける足も細かく震えていることから判断するに、悠長に構えている時間は限られているようだった。

うるわはカレンの汗と体の震えを見て、よりいっそう焦りを募らせる。

「まさに最悪のタイミング。カレン、気をつけてください。少年の口ぶりからすると、彼が以前の事件で起動した二体目の人型古代兵器のようです」

カレンににじり寄っていくうるわ。

主人のサポートを第一に考えようとしている。

「ああ、ごめんごめん、僕はハチ。お父さんに作ってもらった《人機》……君たちの世界で言うところの人型古代兵器だよ」

ハチは地面に転がるナナを指さす。

「ちなみに、そこで踏みつけにされてるナナは、一応だけど僕のお姉さんってことになるのかな。僕の一世代前のタイプだから」

「しゃくに障る奴ね。人型古代兵器ってこんなのばかりなの？」

「変な言い方しないでほしいな。こう見えても僕は紳士だよ？」

襟を正してカレンに目を合わせる。

「それに、そんな乱暴な物言いばかりしていると男の方から離れていくよ？ もったいないと思わない？ せっかく可愛い顔しているのにさ。えっと……カレンだっけ？」

くすくすと笑いながら八ちは腕を組む。

「発言の訂正を求めます。でなければ、カレンを侮辱していると見なします。もちろん、ただでは済みません」

うるわの内側から放たれる怒気に、エプロンドレスの裾が揺れる。

「うん、君はもっと表情豊かにした方がいいと思うな。それじゃあ、ナナにも劣るよ。……いや、実際に劣っているかな……？ クールなうるわさん？」

緋色の目が楽しそうに揺れた。

「許しません」

言葉が早いか、行動が早いか。

うるわの背後から、黒い軌跡が躍り出る。

風切り音を発現させながら、駆け出そうとするうるわを追い抜いた。

カレンの放った《千手》が、縦横無尽にフロアを走る。フロアを乱舞しながら八ちに襲いかかる無数の風切り音は、繰り出される剣舞そのもの。

「　　そうだなナ、僕がナナの代わりに汚名を返上してあげるよ」

ナナにウインクをすると、ハチは右腕を横に突き出した。

何かの鼓動が聞こえたかと思うと、一瞬のうちに右手がふくれあがっていく。

金属が勢いよく飛び出し、次に機械が飛び出し、続いて配線が飛び出す。重火器らしき物が現れたかと思うと、ミサイルの残骸、手榴弾、鉄の甲冑、折れた銃剣さえも現れる。

古今東西の武器が、膨張する手のひらから生み出されては、すぐに飲み込まれていく。

そうして溶岩のように膨張を繰り返すと、やがて一つの物に集束していった。

「レトロだけど、これがいいかな」

右腕に握られていたのは、身の丈ほどもある大鎌だった。

第二十話・「自殺行為だぞ！」

細身の体で大鎌を肩に担ぐと、四方から襲いかかる風切り音に笑顔で応える。

「ナナが負けるのも頷けるな。過去にもこれほど使いこなせる人間はいなかったからね」

スーツのジャケットを翻して、宙を舞う。

体を伸ばしてひねりを加え、宙返りをする。回転を加えて華麗に舞う様は、新体操を思わせる美しさ。

まるでおもちゃのように大鎌を片手で扱う。

回転を加えながら、襲いかかる風切り音と切り結んだ。

火花が散り、打ち払われた風切り音が、地面をたたく。

はじかれた黒い鞭のうねりが地面をのたうつ、ばしん、という鞭を叩く音が周囲に響き、その度に砂埃が吹き上がり、破片が飛ぶ。

ナナほどのスピードと柔軟性は感じられないが、それでも十分に人間の領域を逸脱している。

「そもそもの話をすれば、君が使っている兵器は《人機》専用の武器なんだよ。僕でも扱えるかどうかは難しい……いや、扱えないというわけではないよ。ただ、あまりにも効率的ではないんだ。僕が言っていること分かる？」

左手で柄の末端を、右手を柄の真ん中付近を握りしめ、着地する。断頭台を思わせる巨大な刃が、外光を跳ね返す。

「例えるなら、ゴキブリ一匹を駆除するのにチェーンガンを持ち出すようなものだね」

少年の口唇の形と重なるような三日月型の白刃が、鋭い軌跡を描く。

一度に三本の風切り音がなぎ払われた。
大振りの後、少年の体が無防備になる。

しかるべき死に体と化したのだ。

風切り音に続いて、うるわが天井から拳を繰り出した。
地面から襲いかかる風切り音と、天井から振り下ろされる拳。

カレンとうるわの連係攻撃。

「人の話は最後まで聞けって言われなかった？ 兵器である僕でも知ってるよ？」

死に体のまま体をさらにもう一回転させる。

大鎌の柄を握る右手を解放。

両手持ちから左手のみへ。

体の回転から遅れて現れた右手。

「ちょっと黙ってもらわないと、おちおち話もできないよ」

諸手のはずの右手は、一瞬にしてチェーングアンへと変貌を遂げる。
砲身がすさまじい勢いで空回りし始めた。拳を振り下ろそうと天井から急降下するうるわに、回転する銃口が向けられる。

うるわの顔が驚愕に歪められる。

膨大な汗で額をぬらし、床にひざを突くカレン。

「くっ……！」

命令と共に、うるわに右手を伸ばす。

「うるわ！ 下がちなさい！」

目もくらむような銃口の回転から、暗闇の広がるフロアに火が放たれる。

少年の背後で鞭のようにふり乱れるガンベルト。吐き出される数百という薬莢の嵐。消えることのないマズルフラッシュと、オレンジ色の弾道。

無邪気なハチの笑い声が、チェーングンの咆哮にかき消される。

チェーングンから吐き出される銃弾は、フロア中を蹂躪していった。天井を蜂の巣にしたかと思えば、柱を根こそぎ削り取る。ストロボのようにハチの表情を照らすマズルフラッシュ。流れ星のようにきらめき、落ちたフロアで跳ねる薬莢。

「なんだって言うんだよ！ なんでもありかよ！」

「お兄ちゃん！ 逃げて！」

右往左往する兄妹。

「どっどこー？」

「そ、それは……！」

二人はフロアにうつぶせになり、耳を両手で覆っている。

「助かりました、カレン」

「礼は今じゃなくていいわ」

うるわは急降下していた体をカレンによって絡め取られていた。カレンの意思を伝導した《千手》がうるわの腹部に巻き付き、難を逃れさせたのだ。カレンが操る黒い触手に助けられたうるわは、カレンの隣に着地し、素早くカレンの肩を抱える。

汗が干上がってしまったカレンの容態は、もはや自力では歩くことさえも困難なようだった。

風切り音を辺りに停滞させておくことですら、顔をしかめる原因になりつつある。

「話を戻すけどさ。君が使っているその兵器。さっきのゴキブリの例えを引用すると、無駄が多すぎるんだよ。今のように攻撃を周囲に停滞させておくことですら、力の浪費だとは思わない？ 繰り出す攻撃だって大雑把。規模も大きい。比例して、消費する力も増大する。たった一発の銃弾で解決するはずの物事に、わざわざ軍隊を持ち出している。それって税金の無駄遣いに等しいよね」

肩をすくめてみせる。

チエーンガンはいつの間にかもとの細い右腕に戻っている。

「たかが人型古代兵器に言われたくはないわ」

「いや、僕は君を認めているんだよ？ たかが人間が《人機》専用の兵器を使えるんだからさ」

軽薄な笑いに、怒りを爆発させるカレン。

汗が乾いた顔は青白く、怒気に輝くはずの金色の瞳もくすんでしまっている。

カレンをここまで突き動かすのは、もはや意地でしかない。

「そのたかが人間にやられるのよ、アンタは！」

うるわを突き飛ばして、風切り音を加速させる。

両手を八ちに向けて広げると、滞空する全ての風切り音が、八ちに殺到した。

「せっかく心配してあげてるのに、意地っ張りだねえ」

軽口はカレンに届く前に切り裂かれた。

蛇のように八ちに食らいつく《千手》の軌跡。

カレンの両袖は破れんばかりにはためき、内部からすさまじい力が放出される。

限界を超えて吐き出される力に押しつぶされるように、カレンの体がよろめいて、ひざを突く。

「カレン、これ以上はもう止めてください！ このままではあなたの体が！」

声を振り絞るうるわに、カレンはがんとして応えない。

ただ敵だけを見据えて、悔しさに歯がみするばかり。
自らの体よりも、敵の殲滅を先んずる。
そこまでしてカレンを支える矜持。

風切り音がさらに数を増し、ハチの逃げ場を消していく。

《千手》の力は決してゆるめない。

攻撃して、攻撃して、攻撃して。

追撃して、追撃して、追撃して。

破壊して、破壊して、撃滅する。

常に自分優位でいなければ気が済まない、カレンらしい無限に続く攻撃の手。

戦略級の圧倒的なごり押しこそ、カレンの本領。

「カレン！ 聞いているのですか！」

壊れるのはカレンか、それともハチか。

どちらが壊れるのが先にしろ、カレンの体が壊れることに代わりはない。

ハチが破壊された後に、カレン自身も二度と立てなくなるだろう。
乱れ散る風切り音が、フロア全体を飲み込んでいく。

暴走するカレンの力は、本人の限界を超えて破壊の限りを尽くす。

「さてと、汚名返上はこんなもんかな？ …… ナナ？」

乱れ飛ぶコンクリートの欠片の中に、壊滅的な構造のきしみを聞き取る。

日本最大級のマルチメディアビルが崩壊しようとしている。

チーリングや、《千手》によって粉碎された柱が、上の階を支えきれなくなったのだ。亀裂がフロア中を満たしていく。

「帰るよ、ナナ？」

体の半分が天井から落ちて生きた瓦礫の下敷きになっているナナを見る。

ナナは返す言葉すら失っているようで、もはや起動しているから分からないほど沈黙を保っている。

「残念だけど、ナナは駄目みたいだね」

わずかに物憂げなため息をつく、ナナに背を向ける。

手に持っていた大鎌が液状の金属になり、腕の中に吸収されていく。最後に手のひらに残ったのは、二個のスモークグレネードだった。二個のピンを器用に口で引っかくと、ゴミを捨てるようにカレンに向かって放り投げた。

転がる二個のスモークグレネードが爆発し、煙が一気に噴き上がる。

「色々勉強になったよ。じゃ、またね」

内壁に空いた穴から空に向かって飛び出していく。
吹き出す煙の向こうで青空の中に吸い込まれていく少年の背中。
黒いスーツのジャケットが白い煙に塗りつぶされる。

「逃げる気!？」

後を追おうとするカレンが、うつぶせに倒れ込んだ。頬を地面にこすりつけて転んだ衝撃で、口内に血の味が広がった。手をつくこともできず、頭をしたたかに打ち付けていたカレンから意識が飛んでいきそうになる。

メガネのレンズが割れ、フレームがひしゃげていた。

風切り音が消失し、ビルの崩壊する音だけが、不気味なほどに耳にまわりつく。

「しっかりしてください、カレン。ここから脱出します」

「ハチとか言う……いけ好かない古代兵器は……?」

倒れたカレンを引き起こすと、メガネチェーンが切れてカレンの首から滑り落ちていった。

「逃げました。私が見るに、カレンに恐れをなしたのでしょう」

不器用な笑顔しか作れない自分を呪ううるわ。

「……………嘘が下手ね、うるわ」

凍えるように全身を震わせ、生気が失われていく。

体温さえも奪われて、うるわの手を握り返すことすらできない。

うるわはしっかりと主人の体を支え、崩壊寸前のマルチメディアビルに目をはせる。

「そこのお二人！ 早く外へ脱出してください！ ここはもう保ちません！」

うるわがカレンの肩を抱きながら、兄妹に叫んだ。
フロアが揺れて、ハルがバランスを崩す。

「も、保たないっ たって！」

「言葉通りですよ、お兄ちゃん！ 早く行きましょう！」

ハルの手をぐいぐいと引っ張るマキ。

「だから、さつきからどこへ行くって っ て、まさか！」

「そのまさかですよ、お兄ちゃん！ あそこから飛び出すのです！」

マキが指さした先は、内壁に空いた穴。

スモークグレネードからもうもうと立ち上った煙が、穴に吸い込まれていく。

「ば、馬鹿だろ！ 自殺行為だぞ！」

「お兄ちゃん、マキは今ならきつとできるような気がするんです。
今のマキなら、お兄ちゃんを助けることができるような気がするんですー！」

兄の手首をぎゅっと握りしめて、強い光を瞳に灯す。

「お兄ちゃんが信じてさえくれれば、マキにできないことはないって……バカみたいだけど、そんな気さえするんです！」

必死に訴えかけるマキに、ハルはうなずいた。

マキがハルにここまで強く訴えかけたことは今までにない。

だから、初めて見るマキの真剣なまなざしに、ハルは頷くしかなかった。

カレンを気遣いながら、うるわは兄妹のやりとりに補足する。

「私も、彼女にはその力があると思います。あくまで客観的な視点に過ぎませんが、人型古代兵器と渡り合って、生きていられる人間はそうはいません。信じるに足ると思います」

天井が崩れ去り、上の階にあった商品が雪崩のように落ちてくる。

「行きましょう」

うるわが先陣を切って内壁から身を投げた。

「お兄ちゃん！ マキを信じてください！」

手をつなぐ兄妹が、内壁に向かって走り出す。

それに連動するように、フロアが崩壊を始めた。

天井が次々に瓦解していき、その瓦礫の重さで下の階の床ごと陥没していく。吹き抜けのように次々に穴の空いていくフロアでは、配線がちぎれ飛び、あちこちで火花が散った。崩壊する天井が、兄

妹の背中に迫る。

フロアの中心から外側へ、足場が失われていく。

フロア自体が斜めにかしぎ始め、兄妹は思わず転びそうになった。

まるで二人三脚。

転びそうになりながらも、すんでところでお互いがお互いを支え合う。

両足でしっかりと地面を蹴る。

「マキ、待ってくれ！」

地面に転がっている刀を目に留めて、ハルは急ブレーキを敢行した。

兄妹のつないだ手が離れて、マキが盛大に転ぶ。

「お兄ちゃん！ 何をやっているんですか！」

マキが崩れゆくフロアの中で見た光景は、にわかには信じられないもの。

ハルが瓦礫を力一杯に持ち上げて、その中からナナを助け出していたのだ。

首と額に走った血管が今にもちぎれそうなほど、力一杯に瓦礫を持ち上げて、ひっくり返すハル。

びくりともせず、眠りについた子猫を腕の中に抱きかかえる。

小さな体はカレン達との戦闘で傷つき、様々な耐性を持つレザースーツも破けてしまっている。のぞく肌色も傷だらけで痛々しい。

「お兄ちゃんは馬鹿ですか！？ 襲われたんですよ！？」

転んでこすりつけた頬を拭いながら、マキは叫ぶ。

「……………にや……………」

うつすらとのぞかせたナナの瞳にハルが映り込む。

ハルを不思議そうに見つめてはいるが、抵抗はないようだ。まるでゼンマイの切れかけた人形のように。お姫様だっこの状態でハルに抱えられているナナ。消えかけの灯火を瞳の中にたたえながら、ハルをじつと見つめ続ける。

「おおああああっ！」

全力疾走。

フロアの床が下層に消えていく恐怖に背中を焦がしながら、ハルは走った。

底なしの沼に飲み込まれぬよう。

奈落の底に落ちぬよう。

ナナを抱えて地面を蹴り上げた。

地面に転がる破片で足を切りつても、走った。

落ちてきた石に額を打ち付けられ、血が目飛び込んできても、走った。

力を緩めない。

外へ。

とにかく外へ。

けたたましい崩壊音と、舞い上がる噴煙に背中を押されて、ハルは内壁から外へと飛び出す。

外に広がる青空に吸い込まれたかと思った瞬間、今度は自由落下。当たり前だ、人間は鳥ではない。

飛び出したところで、重力に引かれて落ちるのが関の山だ。外光のまぶしさに目を細めながら、ハルは猛スピードで地面に落ちていく。

野次馬が、崩れゆくビルから遠ざかるように逃げていくのが見えた。

狂乱する人々の叫びが、逃げまどう姿から遅れて耳に飛び込んできく。

次第に人々の輪郭がはつきりし始める。

地面は近い。

腕の中に感じる人型古代兵器を抱きしめるようにハルは目をつぶった。

暗闇の中で覚悟を決める。

痛みに耐える覚悟。死を恐れぬ覚悟。腕の中で眠る子猫を守ろうとする覚悟。

自己満足かもしれない。

逃げ出す際で、愛猫とアルフレードを重ねてしまった。

永眠するアルフレードの安らかな顔が脳裏をよぎった。気がついたときには駆け出していた。

どうしようもない。体が反応してしまったんだから。

耳に打ち付けられる激しい風の音。
子猫を強く抱きしめる。

……マキ。

信じろと言った。

俺が願えば、何でもできる気がする。メイド服の少女もうなずいていた。

もしも、それが本当なら。

もしも、それが現実になるのなら。

「なんとかしろおおおおっ！」

叫んでやろうじゃないか。

「マキiiiiiiiiiiiっ！」

我が妹の名を。

「了解です！ お兄ちゃん！」

待ち望んだ声に目を開けると、マキが弾丸のように壁を駆けてくるのが見えた。

崩れてくる瓦礫を足場にして加速、さらには外壁を利用して崩れ落ちる壁を追い抜く。巨大な瓦礫の隙間に体を滑り込ませながら直滑降。自由落下するハルに迫っていく。

崩壊するマルチメディアビル。

全てが落下してくる。

看板、瓦礫、ガラス。大小様々な崩壊の欠片。接近してくる。

手をさしのべるマキ。

手を伸ばすハル。

兄妹の手。

紡ぐ絆。

「お兄ちゃん、先に謝っておきます！」

はがれ落ちた大きな外壁が兄妹に迫る。

「何！？」

「少し揺れますよ！」

マキはハルの襟首をつかむと、力強く外壁を蹴って、崩壊するビルから離れる。

空を駆ける少女。

狂乱する人々を俯瞰するように空高く飛翔する。

電気街が一望できた。崩れ落ちて噴煙におおわれたマルチメディビル、駆けつける救急隊員、消防隊、警察、機動隊。輝くパトライト。

それらを後ろに置き去りにして、マキは別のビルの屋上に降り立った。

慣れない着地にバランスを崩したのか、ハルを放りだしてしまう。ビルの屋上で回る換気扇に体を預けるマキ。換気ダクトに背中をぶつけるハル。

ブラックアウトしそうになる意識を何とかたぐり寄せて、ハルは胸の中に抱くナナを確認する。

「だ、大丈夫か？」

「……………にや……………？」

ナナはやはり不思議そうな表情を浮かべたままでハルを瞳に映していた。

ハルの頬を小さな手のひらで撫でると、自分の頬に持っていく。

「……………ナナ、生きてる」

うつすらと微笑むと、まるで主人に懐いた子猫のようにハルに体を預けるのだった。

第二十一話・「お兄ちゃんはマキのものです!」

「……………ナナ、生きてる」

うつすらと微笑むと、まるで主人に懐いた子猫のようにハルに体を預けるのだった。

機械的な声を漏らした後、ナナはすぐにまた動かなくなった。

口下に耳を寄せると、わずかに呼吸はしているようだ。

人型古代兵器、人型古代兵器と言われていたわりには、信じられないほど　　こういう構造をしているのかは分らないが　　人間そのものだった。

そう思ってしまうから、ハルは心臓の鼓動を確かめるのが一番確かだと思い、手を伸ばしかける。

だが、腕の中に抱いているのは曲がりなりにも女の子だ。ハルは柔らかいナナの感触を感じ、今更ながらに顔を真っ赤にさせて目をそらす。

「お兄ちゃん!」

兄がそらした顔を逃がすまいと、顔を向かい合わせるマキ。

体の痛みで立ち上がれないハルを、腰に手を当てながらにらみ付ける。

「お兄ちゃんは何をしたのか分かっているんですか!」

自分が襲われたこと。日本刀で斬られかけたこと。危うく命を落

としかけたこと。

ハルは目の前で繰り広げられる現実、危機感に身を震わせたはずだった。

「……分かってる。それは分かってる」

「ちつとも、分かってません！ お兄ちゃんには私という恋人がありながら、他の女の子をお持ち帰りするなんて！」

「……悪かった、つい出来心で」

ハルの斜め上に行くマキの想像にのせられて、ハルは危うく謝罪しかける。

「まったくもう！ 浮気は男の甲斐性と言っても、マキ相手には通用しませんよ！ マキは独占欲が強いんです！ お兄ちゃんは他でもないマキのものです！ たくましい二の腕も、強ばった頬も、筋肉のついた背中と、肩甲骨も……も、もちろん！ たくましい、か……下半身も……」

拳をぐつと握りしめ、天に向かって宣言する。

後半は顔を真っ赤にしながらも、小声で言っただけ。

「……三秒待ってやる」

腹の奥から絞り出すようなハルの声には気がつかない。

「あ……あれですか？ 猫ですか？ 猫がいいんですか？ にゃ、ですか？ にゃ、って言っただけですか！？ だったら、そん

な得体の知れない女の子よりも、マキの方が絶対にいいに決まっているにゃ！」

ハルのまぶたが落ちてくる。

眠いからではない、眉間にしわが寄っていくからだ。

「マキは猫にゃ！ お兄ちゃんの可愛い飼い猫にゃ！ あまりの可愛さにお兄ちゃんは、足下にすり寄ってくるマキを抱きしめて、頭や首もと、あんなところや、こんなところまでを撫で……違う違う愛撫！ してくれるんです……！」

納得のいく表現がマキの妄想の引き金を引いたのか、瞳がハート型に変わっていくようだった。

ダクトに背を預けて休んでいる兄の腕を取り、顔をすり寄せていく。

「うーん、ごろごろ……お兄ちゃん、くすぐったいにゃあ……もう、手つきがえっちだにゃあ……お返しに顔をぺろしてあげます……えへ、えへへ、うへへへ……じゅる」

待てを命令されている動物のように、口からよだれをしたたらせる。

我が姿のはしたなさに慌ててよだれを回収すると、頭の上に浮かんでいた甘美な妄想をかき消そうとする。

やっとのことで雲の中に飛んでしまった意識を取り戻したときには、すでに兄のチョップが脳天に炸裂していた。

「ふぎゃん！ あうっ……痛いにゃん……お兄ちゃんが、マキをいじめるにゃん……」

「ペットに手をかまれる前にしつけるのは、飼い主として当然だ」

兄のチョップの勢いに、ダクトに顔面をぶつけるマキ。

無惨に崩れ落ちながらも、執念深く顔を上げる。

今にもダイイングメッセージを書きそうなほど地面にはいつくばっていた。

「妹からペット……可愛がる、奴隷、調教、お兄ちゃんに染色されるマキ……！ うっ、お兄ちゃんのサディスト……はぐっ！」

とどめを刺された。

容赦なく打ち下ろされるエルボー。割れた脳天から立ち上る煙が、屋上に吹く風と戯れる。

容赦のない兄だった。

「でも………その、感謝はしてる」

不器用な兄だった。

第二十二話・「…………お兄ちゃんは…………私のことなんか」

「お話中、申し訳ありませんが」

兄妹の賑やかなやりとりの中に、深刻な声が混ざる。

声がした方向を見れば、カレンに肩を貸すうるわがいる。カレンは力すらも入らないようで、ひざを折ってしまっている。体そのものを預ける、と言いかえてもいいような苦しさを伴ったカレンの表情に、生氣は感じられない。

「どうか、私とカレンを助けて欲しいのです」

「…………… 必要ないわよ」

「カレン、そうやって強がるのがあなたの悪いところです」

悲しげに眉を下げ、衰弱したカレンを気遣う。

自らの体が傷ついていることは後回しにしているようだった。腕を伝う血の流れは、ハルの腕の中で眠る人型古代兵器によって傷つけられたものだ。

「…………やめてよね、私は強がつてなんかない。強がるのは弱い人間だけ。はじめから強ければ、強がる必要なんてないもの」

「それが強がるということです」

しっかりと手を回し、カレンの肩を抱えた。

「どうか、お願いします」

頭を下げるうるわ。

ダクトに預けていた体をおこして、ハルは腕の中で眠るナナを見る。

「この子は……またこの子と戦うのか？」

「必要があれば、そうなります」

ハルの腕の中で子猫のように眠るナナ。

見た目からは想像できない、力とスピード。

死と背中合わせの中に放り込まれてしまった恐怖を感じながらも、ハルは体が自然に救出に動いてしまった。

かつての愛猫アルフレード。

今は亡き愛猫と、小柄な人型古代兵器。

似ても似つかないもののなにハルは心を揺り動かされる。

「俺は、何も知らない。この子に襲われた理由も、あんた達が何で戦うのかも何もかも。当然、説明してくれるんだろうな？」

鋭いまなざしでうるわをにらみつける。

ただでさえ鋭いハルの視線が、怒りを増して鋭く研ぎ澄まされる。

「……その必要が、あるのならば」

「説明してくれるんだったら、いい」

「お兄ちゃん、私は反対です！」

兄とつるわの真ん中に割り込むマキ。

「お兄ちゃんは、殺されかけたんですよ！ 自分から飛び込んでいく必要はないはずです！ マキと一緒に平和に暮らしていきましょー！」

振り絞った声が、屋上に広がる。

「そのメイド服の人もです！ お兄ちゃんを巻き込むのは止めてください！ お兄ちゃんは、それでなくても小さいころから大変だったんです！なのに、また、また……！」

「……遅かれ早かれ、こうなる運命なのよ、あんた達兄妹は」

か細い呼吸を繰り返していたカレンが顔を上げる。

「……あのくそ生意気なハチとかいう人型古代兵器の目的は、そいつなんだから」

カレンの黄金の瞳が、ハルをとらえる。

「でたらめです！」

何をもってでたらめと断ずるのか。

それすらも分からないで、マキはただ意思のままに首を振った。

「もういい、マキ。説明はするって言っているんだ。文句を言うにしろ、否定するにしても、今は手当てしてやるのが先だ」

「お兄ちゃんはそのやって！ マキのことはどうでもいいんですか

「！」

兄の腕を揺り動かすが、その腕の中には小柄な少女がいる。マキは自分の体の奥に眠る、黒い炎に火がつくのが分かった。

「お兄ちゃ
」

が、ハルはマキにまったく耳を貸さず、うるわと会話を始めてしまふ。

「一つ条件がある」

「どのような条件でしょうか」

「この子の手当もする。それだけだ」

遠く、マルチメディアビル崩壊現場からは、緊急車両のサイレンの音が鳴りやまない。

もうもうと立ち上る崩壊の粉塵が、まるでその昔の世界大戦の折り、自国に落とされた原子爆弾の煙を思い出させた。

人々の叫びや怒声、報道陣の事件を伝える熱弁が耳元に聞こえてきそうなほど、熱い風がハルらの肌を焼く。

報道用のヘリコプターが、一機、また一機とハル達の頭上を飛んでいき、とびのようにマルチメディアビル跡を周回していた。

「……わかりました。条件に従います。カレンもそれに従ってください」

「……………従ってあげるわよ」

カレンの返答に、うるわの無表情がわずかにゆるむ。

「決まりだな」

腕の中をのぞき見て、決意にも似た大きく息を吐く。
しっかりとした足取りで階下に向かおうとする。

静かな寝息を立てるナナは、ハルにとって古代兵器とは到底思えなかった。

「住所を教えてください。私たちは人目を避けて合流します」

「あ、ああ、分かった」

「ちなみに嘘は教えなくてください」

「あ、当たり前だ」

心外だと言わんばかりに、むっとするハル。

「……案外分らないわよ、コイツ人相悪いから、変な店に売り込まれたりして」

衰弱しながらも横やりを入れるカレンに、手当は必要ないのでは
思ってしまうハルがいた。

「あなたは存外そういう方なのですか？」

「俺は存外そういう方じゃない」

「……よかった」

うるわが微笑んだ。

それはそれは小さな表情の変化だったが、ハルにはそれが手に取るように分かった。

不器用な感情表現しかできないハルだからこそ、気がつけたのかもしれなかった。

突然見せられた笑顔にどきまぎしながらも、ハルは丁寧に住所を告げる。

三度復唱したうるわは最後に、ありがとうございます、と頭を下げた。

恥ずかしさにハルが目を離した隙。

エプロンドレスがひるがえる音がしたかと思うと、すでにその場にうるわとカレンはいなかった。

残ったのは、封の切られていない乾燥梅干しのパッケージと、白色のカプセルが一錠。

慌てていたのか、エプロンドレスに穴が空いていたのか。

ハルはそれらをズボンのポケットに突っ込む。

「落とし物は持ち主に届ける」

つぶやいて屋上を去ろうとする。

腕の中では相変わらぬ子猫のような笑顔。

ハルもつるわ同様微笑みをこぼしてしまいそうになり、慌てて首を振った。

「マキ？」

お姫様だっこをしているため屋上の扉を回せないことに気がついて、マキを振り返る。

「……お兄ちゃんは……私のことなんか」

マキは顔を下げて下唇をかんでいるようだった。

「……マキ？」

いつも明るい妹には、ついぞ見られない姿。
屋上で回る換気扇の音でマキの声を耳にできなかったが、その様子に不自然さを感じてハルは声を大きくする。

「マキ！ 帰るぞ？」

兄に呼ばれていることに気がつくと、マキは深刻な表情を一変させてはしゃぐようにハルに寄り添う。ハルをせかすように先導するマキの姿を見て、ハルは先ほどの風景を忘れていった。

「そういえば、結局パソコン買い換えられなかったな」

「ぎく」

パソコンを壊した張本人が、ハルの数歩先で背中を強ばらせる。

「そ、そういえば、そんな気もするようないような……」

体を強ばらせたままのマキを追い抜くハル。

「そういえば、結局お前に助けられたよな」

兄の背中から聞こえる声。

「お兄ちゃん……？」

「パソコンは、割り勘にする」

遠ざかる兄の背中に、マキは胸を締め付けられる。

「……それでいいです。ううん、それがいいです！」

思わず兄に飛びついていった。

第二十三話・「……俺を馬鹿にしてるのか？」

カーテンの隙間から、白み始めた明け方の光が入り込んでくる。ハルは一日中開けっ放しだった自分の目をねぎらうように、ぬれタオルを目にのせる。

食卓のイスに深く腰を落ち着けると、天井にため息を漏らした。

黒に落ちた視界に映し出されるのは、自身が垣間見た死線と崩壊だった。

瓦礫が落下してくる。

人一人を簡単に押しつぶす大きな瓦礫だった。ハルは子猫のような少女を強く抱きしめて、迷わず妹の名前を叫んでいた。

なんのためらいもなく、自分でも信じられないくらい気持ちよく叫ぶことができた。

それが不思議で不思議で仕方がなかった。

もう一度、ハルは肺からため息を引き出す。

「起きていらしたんですね」

「そつちこそ起きていたんだな」

風がわずかに揺れる。

「……あの女の子の様子は？」

「カレンです。カレン・アントワネット・山田。私の主です。どうぞ気軽にカレンとお呼び下さい。それと、私のことはうるわ、と。」

呼び捨てで読んでくださって結構です。お気になさる必要もありません」

「……メイドが決めることなのか？ そついうことは」

「私とカレンは特別です。そして……あなたも」

「俺、も？ どういう意味だ？」

ぬれタオルの隙間から声のした方向をのぞけば、そこにいるわけではない。

いつの間にかハルの背後を通り過ぎて、キッチンの方へ。
ハルの問いかけには答えずに、背中を向ける。

「人型古代兵器はどうしたのですか？」

「人型古代兵器……？ あ、ああ……よく、眠ってる。まるで猫みたいに体を丸めて」

いまいちぴんと来ない言葉と、子猫のような少女を無理矢理一致させる。

「猫がお好きなのですか？」

「……好きだけど、悪いか」

「いいえ」

うるわが目を留めたのは、ハルの目にあてられたぬれタオル。猫の顔がたくさん描かれた可愛いタオルだ。

さらにコーヒーマーカーの横に置かれた猫のマーク入りコーヒークップに目を移す。

「コーヒーでもいかがでしょうか、ハル」

「いきなり呼び捨てとは一方的なんだな」

「嫌ですか？　でしたら、お兄ちゃん、とお呼びすれば？」

「止めてくれ」

「では、やはりハルと」

むっとして唇をとがらせるハル。

その仕草にうるわのまとう空気が揺れる。相変わらずの無表情だが、どことなく笑った気がした。凜とした無表情と日本人らしい和を彷彿させる端正な顔立ちは、さながら日本人形を想起させる。

「く……それでいい。ハルで」

綺麗に拭われたエプロンドレスには戦闘の傷跡はない。着替えを用意したのか、繕ったのか。新品同様に輝きを放ち、コーヒーマーカーの前に立つ。

カチューシャの角度も、おかつぱ頭の髪型も、完璧に整えられていた。

「では、改めて。コーヒーでもいかがでしょうか、ハル」

「……いただきます」

ほとんど初対面に近いのでどうしてもかしこまってしまう。

「かしこまりました、ハル。砂糖はいくつお入れすればよろしいでしょうか？」

「ブラックで」

「ハルは大人ですね」

「……俺を馬鹿にしてるのか？」

「冗談です、ハル」

「……」

勝手知った我が家のようにうるわはてきばきとコーヒーを用意していく。そのよどみない動作は、長年寝食を共にした使用人そのものだ。訪問者とは思えない手際。

「う、うる……」

いきなり呼び捨てにしてしまうのに多少なりとも抵抗を感じたが、ハルは改めて言い直した。引き締めた顔には真剣さが帯びる。

「うるわ、約束通り説明してくれないか」

「……わかりました。ハルがそう望むのでしたら」

うるわの手によって目の前に置かれたコーヒー。波紋を広げる黒い表面から湯気が立ち上る。安物のインスタントだが、鼻腔をくす

ぐる良い香りをただよわせていた。うるわは自分の分のコーヒーは用意せずに、ハルの正面に立つ。

「……座らないのか？」

「私はメイドです。お気になさらず」

「冗談は言つくせに、そういうところはきっちりしているんだな」

冷気を失ったぬれタオルを顔面からはぎ取ると、ハルは立ち上がる。

そのままコーヒーマーカーの前まで来ると、自分の分が用意されているにもかかわらず、カップにもう一杯コーヒートを注ぎ始める。

「お気に召しませんでしたか？」

ハルの返答はなく、黙々と粉末コーヒーにお湯を注いでいく。

やがて湯気を立ち上らせながらうるわのそばによると、ハルの座る正面にカップを置いた。イスを引くと足がフローリングにこすれて高い音を響かせる。

どれも多少乱暴さが混じっていた。

「座ればいいだろ。それとこれはうるわの分だ。俺の分じゃない。話すのはそれからだ」

顔を背けながらのハルは、どこか微笑ましく、それでいて不器用さに溢れていた。

「ハル……」

「勘違いするなよ。これは……そう……あれだ。あ、あくまで客人に対して当然のことをしたまでなんだからな」

手に持ったぬれタオルで再び顔面をおおった。

「ハルは優しいんですね。でも、なぜでしょうか、嬉しいと思ってしまっ自分がいます。親近感、そんな言葉がふとよぎってしまいました」

「……うるさい」

イスに座り、両手でカップを持ち上げる。

カップから漂う芳香を小さな鼻で吸い込んだあと、そっとコーヒーに口づける。香りと味を楽しむ。インスタントには大げさすぎるほどの所作。

「いい香りです。それに　美味しい」

「安上がりな舌なんだな」

目が合い、ハルは慌てて吐き捨てた。

「そうかもしれません」

うるわの無表情がコーヒーの熱で溶かされたのか、かすかに笑みに崩れる。

ハルは自分のコーヒーを飲むのも忘れて、ぬれタオルで顔を隠し

続ける。ぬれタオルは急激にぬるくなっていく。顔の熱さはいつこ
うに収まってはくれなかった。

「ハル」

次にうるわが発した声は、うるわの雰囲気を一変させていた。
ハルはぬれタオルの隙間から、うるわをつかがった。

「今から告げるのは上層部が私とカレンに正式下した任務です。私
にはどうすることもできません。カレンにもです」

うるわはじつとコーヒーの湯気をつめていた。フラットな声が
機械的で、冷たいものに感じられる。コーヒーの表面に落としたう
るわの顔もまた、感情のないペルソナそのものだった。

「特命により、私、メイド・イン・ジャパンうるわは、本日より任
務が完了するまで、伊達ハルのメイドとなります」

「……な！」

ハルの顔面からぬれタオルが落ちていった。

「『いかなる時も、冷静・笑顔・優雅であれ。かつ、最大の犠牲心
を持って奉仕せよ』……国際家政婦条項、冒頭にある通り、ハル、
あなたの身の安全は最大限の犠牲心を持って私がお守りいたします」

イスから滑り落ちそうになりながらも、ハルはなんとか深く座り
直す。

「お、俺はメイドなんかじゃない。それにうるわは」

「カレンが私の主であることには変わりません。ただ、任務中はハルを最優先にするということです。どうか、ご理解下さい」

うるわは深く頭を下げた。

第二十四話・「チーム・ダテ」

「とにかくだ。俺はメイドなんかじゃない。任務だろうと俺は認めないからな」

下げた頭をゆっくりと上げて、うるわがハルと視線を合わせる。

「それでは困ります。私はハルの身を守るためにメイドになるのですから。ハルがもし、生と死のやりとりに快感を感じる、死線をクリック抜けることがたまらない、または、この世に絶望していて自殺も厭わない……そういう人種であるのならば、無理矢理ベッドに縛り付けてでもハルの安全を死守します。これがどういう意味か分かりますね？」

「ひどく物騒な話だな……」

落としたぬれタオルを拾い上げながら、頭をかく。

「ハル、あなたは自分が思っている以上に重大な事件に巻き込まれてしまったのです。本意ではないにしろ、私がメイドにつくことをお認めになって下さい」

ハルは肘をテーブルにひじをつき頭を抱える。

「任務ってことは、うるわにとっては絶対なのか？」

「私にとっては絶対です」

「私にとっては何？ ああ金髪の……カ、カレンは？」

人を気軽に呼び捨てにできないせいか、やはりハルは躓いた。

「はい。私にとっては、です。いくら上層部の命令といえど、カレンを拘束することはできないでしょうね。カレンは任務には忠実ではありませんから。一方で、自分の欲望には忠実ですけれど」

両手で持ったカップに口をつける。ゆっくりとコーヒーを飲み下して体を温める。

「彼女を縛ることは何人たりともできないのです。彼女が右だと言ったら右。左と言ったら左。任務であつてもそれが揺らぐことはありません。これまでも彼女は幾多の死線を越えると共に、敵対する全てのものをことごとく撃滅してきました。それが結果的に任務の達成になっただけです」

ハルの頭に鮮明なのは、フロアの中で自信満々に腕を組み、相手を見下すカレンの姿。

一歩たりとも動かず、その場に鎮座し、相手を傲慢不遜な瞳で見据える。ゴシック調の黒いロングコートをなびかせ、まとうは疾風の風切り音。

ひとたび両袖を突き出せば、風切り音はたちまち荒れ狂う龍と化し、相手を喰らい尽くす。

……マルチメディアビルを崩壊させたのは、よく考えれば彼女なのかもしれない。

カレンから、薔薇に生えたとげを連想するハル。

「撃滅……確かに無茶苦茶だな」

「はい、無茶苦茶です。ですが、私はそんなカレンが好きです」

「メイドになるくらいだからな」

ここでようやくハルは自分のコーヒーに口をつけた。

いつもより苦いと感じてしまうのは、現在の状況がそうさせるのか。

同時にうるわもカップに口をつけ、二人同時にカップを置いた。

「話がそれたけど、俺はどうして襲われなきゃいけないんだ」

ハルの口調が強くなる。

「それは、ハルが《彼岸》を持つ者だからです」

「……悲願？　俺は何も望んでないぞ」

難しい顔をし、首をかしげる。

「ハル、その悲願ではありません。一般的には河の向う岸を指す方の《彼岸》です」

「あ、ああ……理解できた。……で、だ。その《彼岸》だけだな。俺は知らないし、持っていると言われても困る」

メディアビルで抱きついてきた少女にも同じことを言われたことを思い出す。

「彼岸とは、生死の海を渡って到達する終局・理想・悟りの世界を

意味します。ニルヴァーナ……涅槃ねはんとも呼ばれます」

うるわの声以外に音一つない空間に、時計の針の音が混じる。

普段は聞こえないのに、意識したとたんに聞こえ出す。

聞こえ出せば、今度は気になって仕方がなくなる。

まるで事情聴取でも受けるような思い雰囲気、テーブルの周辺に広がっていく。

「《彼岸》は、まさに意味通り、終局・理想・悟りの世界を体现するものです。世界各地に存在する古代遺跡。滅亡した古代文明。これは全て《彼岸》が引き金になっています」

時計の針の音が大きくなる。

「簡潔に言います。《彼岸》は持ち主が望んだことを体现させます。おそらく、自然の摂理すらも歪曲させて。現にこの世は一度《彼岸》という兵器によって滅亡に追いやられているのですから」

「……待て。古代文明は、度重なる戦争により自ら滅亡の道をたどったんだろ……？」

限りなく白紙に近い脳内の教科書をめくる。

「ええ、それが通説となっています。他にも隕石、天変地異説がありますが、信憑性と論理性に欠けるということで、現在論ずる専門家はごくわずか。結果的に、ハルのおっしゃるとおり、一番現実的な論として世間に浸透することとなりました。現在では、世界中の主な教育機関で同様の教授がなされています」

うるわの視線にとらわれるハル。

まるで金縛りにでもあつたかのように。

「しかし、それは見せかけに過ぎません。本質はそれとは異なるのです」

「待て、待ってくれ。だとしたら《彼岸》ってというのは……」

濁流のように流れ込んだうるわの言葉に溺れそうになる。

「いや、そんな馬鹿な話……え、絵空事のたぐいじゃないのか……？ 第一、そんな法外なものが存在していたら、大変なことになるじゃないか……！ 持ち主の願いを叶えるんだろ……？」

時計の針の音がさらに大きくなる。

聴覚を傷つけるかのように。

「教科書とは人々がよりよく暮らしていけるための指標。物事の本質を欺くためのものです。そうでもしなければ、人はまた争うことになる。古代文明のように」

声が出ない。

ハルは息苦しささえ感じ始めていた。

「古代の科学者の願いを《彼岸》が叶えた。世界を一度終わらせるという願いを。……そして、破滅した世界の後で、再び人類は立ち上がったのです。再生は容易ではなかったと思います。長い年月を経て現在の技術力まで取り戻しました」

「まるで見た来たように話すんだな……」

事実を淡々と告げるうるわの姿と、狼狽する自分の姿があまりに対照的すぎて、奥歯をかみしめる。

うるわの告げる話が事実とするならば、人間の価値観が逆転するほど重大なものだ。それを、まるで念仏を唱えるが如くつらつらと冷静に話すことができる。

そこまで達観できるうるわに、ハルはいらだちを隠せなかった。

気がつけば拳を握りしめていた。

「私が言ったことは、全てチーム・ダテによって発掘された資料によるものです。一人の天才的な科学者が人型古代兵器を、《彼岸》を作り、戦争を繰り返すかつての世界を呪い、終止符を打った。一般的には極秘ですが、それが真実なのです、ハル」

どくり。

心臓が脈動した。

「チーム・ダテ……？」

「はい、世界的にも有名な発掘調査隊です。《彼岸》発掘の折に人型古代兵器による襲撃に遭い、大打撃を受け、まもなく解体されましたが……それが何か？」

思い出す。

思い出せる。

「チーム・ダテは……親父の……」

思い出す。

思い出せる。

「……？ ハル？」

「チーム・ダテは、親父のチームだ。俺もその場にいた……！」

腰が浮いてしまう。イスを倒して立ち上がり、テーブルに両手を
つく。

「まさか、信じられません。ハル、あなたがあの伊達シンイチロウ
のご子息だったとは……そうなのですね……そういうことなのです
ね。だとすればつじつまが合います。人型古代兵器との死闘が起こ
った背景。そのさなかに紛失した《彼岸》。それをなぜハルが持つ
ているのか」

うるわは鳩が豆鉄砲浮を食ったような顔をした後、あごに手を当
てて熟考を開始する。

しきりに頷いては、ぶつぶつと何事かを呟いている。

解明されていく疑問に興奮を隠せない様子だった。

対して、浮かした腰をどっかりとイスに落とすハル。

憔悴しきった表情が全てを物語っている。

「俺は……気がついたら病院にいた。親父も大けがを負っていて……ずっと事故だと思っていた。何があつたのか覚えていなかったから……。それにメディアだつてそう断定してた……。事故の後、病院で目覚めて、包帯でぐるぐる巻きにされていて、マキが泣きながらベッドに寄り添っていたんだ……。そうか、親父は《彼岸》を探していたんだな。同行していた俺はそれに巻き込まれて……」

呆けたように言葉を漏らす。

小さいころから、父に連れられて世界を回っていた。
目にするものが全てが新鮮で楽しかった。

しかし、それも事故に巻き込まれるまでのこと。

思い出せば直ぐにでも浮かんでくる当時の妹の泣き顔。何日も生死の境をさまよった末、すんでの所で生をつかみ取った。頭のてっぺんから、つま先まで包帯で簀巻きにされ、ミイラ男同然の姿だった。

目覚めてからも、度重なる偏頭痛と、全身に巣くった疼痛に悩まされる日々。

もう二度と経験したくない日々。

その日々の中で、俺は絶対に発掘を手伝わないと誓った。

「ハル、大変な思いをしたのですね」

「ああ、あんな思いは二度とごめんだ」

思い出ただけで頭痛がした。

痛みはあのときとまったく変わらない。

時計の針が時を刻む音。それすらも身を傷つけられる音のような気がしてならない。

ざく、ざく、ざく。

そうして身を切られるような痛みが、ハルの顔を歪めさせた。長い前髪で顔を隠し、表情を隠す。

今、ハルがどんな顔をしているのか、それはハル自身が一番よく分かっていた。

「《彼岸》は起動した……そういうことね？」

「カレン！」

壁により掛かるようにして、唇を歪めるカレンがハルを興味深げに眺めていた。身にまとうのはコートではなく、フリルが目につく漆黒のゴシック調ワイシャツ。汗でぬらした額や、首下には長い金髪が張り付いている。

吸った汗のせいかな、透けたシャツからは、意外にもその身の細さを感じ取れた。

第二十五話・「俺は、何も願ってなんかいない」

「大丈夫よ、これくらい」

熱い吐息は、大丈夫にはほど遠い。

自分の体を抱くようにして不敵に笑ってみせるが、壁に体を預けることでしか立ってられないようだった。

「そんな強がりには聞きたくありません。まだ服用後の副作用が出ているはずです。カレン、どうかご自愛なさってください」

「いいのよ……私は。慣れていることだし……ね。それよりも、これでやっと分かったじゃない」

カレンの体を支えながら、うるわはハルを見やった。

「《彼岸》は起動していたのよ。……こいつを助けるためにね」

「……」

ハルはうつむいたまま。

「《彼岸》の起動が確認されて……そこで初めて、人型古代兵器は起動するのよ……。その逆はないわ。もしもそうなら……」

言葉を切らして咳き込んでしまうカレン。

長距離を乾燥したマラソンランナーのように荒い息づかいを繰り返す。上気した頬と、多量の汗は尋常な量ではない。

「カレン、後の言葉は私が継ぎます」

「……悪いわね」

黄金の瞳をまぶたの裏に隠して、自虐的な笑いを浮かべる。

「そんな弱音はカレンには似合いません。言われると調子が狂ってしまいます」

「……憎たらしいメイド」

小声でつぶやくカレン。

うるわはかすかな微笑を浮かべたが、それは風に吹き飛ばされるように直ぐに消え去った。

「……ハル。あなたは《彼岸》を持っている。きっかけは何にせよ、伊達シンイチロウが《彼岸》を起動させたのです。おそらくは、ハル……瀕死のあなたを救うためでしょう。そして、それに連動し、人型古代兵器が起動してしまった」

うるわが言葉の後に唇をかんだ。

スペシャル・アサルト・メイド

「当時最高のSAMが三人失われただけではなく、数少ない古代兵器の使い手も命を落とした。……その戦いのさなか、《彼岸》はハルの手に渡った。そして、年月が流れ」

「あの二体の人型古代兵器が起動したってわけ」

ため息をつくカレンを、優しく抱え直すうるわ。

「そうです。その間、人型古代兵器が起動することはなかった。チーム・ダテの事件後は、一度も起動を観測されていなかった人型古代兵器……起動が確認されたのは、ごく最近のことです。情報部が観測した古代兵器の起動は二つ。一つはこの近辺、そしてもう一つはこの町から少し離れた古代遺跡です」

いつだったか、朝のニュースで大々的に取り沙汰されていたのを思い出す。

コメンテーターの苦々しい表情と、荒々しい論調が朝に似つかわしくなかった。

「ハル、アンタ、起動させたのね？」

「知らない」

「嘘ね」

即答に、即答で返される。

「俺は、何も願ってなんかいない」

もう一度だけ、もう一回だけ。

「願ってなんか……ない」

ふいに脳内でリフレインしたのは、白と黒で彩られたホールで流れていた歌だった。

「ま、いいわ」

室内に張り詰めた緊張の糸を断ち切るカレン。

「今日はこのぐらいにしましょ。疲れたわ」

「それならばなぜ起きてきたのですか……とはあえて聞かないことにします」

ポケットから出したハンカチでカレンの汗をそつなく拭っていく。

「うるわが珍しく異性と楽しそうに話をしていたから気になったのよ」

意地悪な瞳がうるわとハルを往復する。

「な、なんのことだ」

「な、なんのことですか、カレン」

「うるわにしては珍しく言いよんだわね？ 二人ともまんざらじゃないってことかしら？」

「カレン、何を根拠にそのようなことを。心外です」

「そうだ、勘違いするな。俺はただ、客人へのもてなしは、人として当然で、べつにそういう意味で」

「ああ、はいはい。悪かったわね」

「そうです。ハルも私もいい迷惑です。そうですね、ハル？」

「あ、ああ……知らない憶測でものを言わないでくれ」

うるわの有無を言わさない無表情の眼力がハルの言葉を引き出した。

すでに切られた緊張の糸は、セレモニーのテープカットだったようだ。

陽気な雰囲気がかす玉からはじけるように広がっていく。

その雰囲気を作り出した張本人が、疲弊した体を物ともせずにいやらしい笑みを浮かべる。

黄金の瞳は悪戯心で輝いていた。

「『いい香りです。それに　美味しい』 安上がりな舌なんだな…… ああ、なんて甘酸っぱいやりとりかしらね。ブラックコーヒーもこれじゃカフェオレね」

「カレン！　あなたって人は……！」

「あらら、顔が赤いわよ、うるわ？」

心なしか頬を赤くするうるわの頬を、カレンがおもしろがってつつく。

「止めてください、カレン！　いくらカレンでもこれ以上は怒ります。ハルからも何か言っておさ……ハル？」

疑問符を浮かべたうるわの目に、真っ赤な物体が飛び込んでくる。

自分の言葉を他人から聞かされ、改めて自分のしたことに身もだえるハルがいた。口を酸欠の金魚のようにぱくぱくとさせている。真っ赤な顔の穴と穴いう穴から、いまにも蒸気が噴き出しそうだ。うつむき、慌てて長い前髪で顔を隠すが後の祭り。

「良かったわね、うるわ。うるわだけじゃないみたいよ？」

「……………カレン、あなたは二つの意味で病気です」

そう言いながらも、うるわはカレンの体を支え続ける。

「病気でもいいわ。楽しいものが見れたもの……………っ」と

背中を向けて歩き出そうとすると、とたんによろける。

「強がるのもあなたらしいです。カレン」

「……………うるさいわね。私は元々強いんだから」

「強がる必要はない」

うるわがカレンの言葉尻を奪う。

「カレン、確かにあなたは誰よりも強い。強いからこそ、さらに強くあろうとする。それもまた強がりなのです」

「……………難しいことは分からないわ」

カレンが難しそうな顔をして、うるわに体を預ける。

完全に体重を任せてしまっているのに、うるわは憎まれ口ひとつことうとしない。

去り際にうるわが振り返る。

「ハル、ありがとうございます。あなたが《彼岸》の持つ主で良かったかもしれない」

「……」

「おやすみなさい、ハル」

冷めたコーヒーのカップが二つ、テーブルに残される。

「《彼岸》……人型古代兵器、古代文明、カレン、うるわ……俺は、暗記が苦手なんだ」

混濁する情報に、知らず特大のため息をつくのだった。

第二十六話・「お父さん」

明け方の空を、冷たい風が流れていく。

人々がベッドの中の温もりにすがっていたと思う時間帯、スーツ姿の少年が駅のホームに立っている。

銀色の髪が風を浴びれば、ビルを抜ける太陽光と戯れる。透き通る髪の本一本が芸術の域にまで昇華されていた。

「なんて空虚な町なんだろう……」

少年の顔が明け方の町に美しく映える。

「お父さんがいない世界で起動しても、意味がないよ」

ビルの谷間をカラスの群れが抜けていく。捨てられた新聞紙が、遠く路地裏を転がっていった。

少年は両足に力を込めると、ホームから線路へと降りて、悠々と線路の上を歩き出す。

じやり、じやり、じやり。

線路に敷き詰められた小石を足の裏に感じながら、ポケットに手を突っ込んで歩いていく。

黒いスーツのジャケットにはほこり一つない。中に着た白のワイシャツが、目覚めた朝日を浴びて白銀に輝く。着崩した着衣はホストと見紛うばかりだが、少年の面輪ははとも幼い。さらさらの銀

髪を揺らしながら、何度となくため息をつく。

「お父さんが世界を滅ぼしたのも分かる気がする。起動してからずっと世界を観察してみたけれど、あのときとちっとも変わっていない。ゆつくりと昔見た風景に近づいていくだけ。同じ結末に向かって進んでいくだけ」

欄干を軽く飛び越えると、道路の真ん中に着地する。

「今はまだいいけど、行き着くところは同じ。人を憎んで、殺し合って、戦争して……お父さんが作った《彼岸》はそれほどのものだとしても、人を殺す理由にはならないのに」

数少ない昔の記憶を呼び起こす。

ハードディスクに記憶された記録を呼び出せば、少年を作り出した父の声音が鮮明に再生される。

少年の開発途上。

視界がまだないころの記録。

ナナが猫のように父の足下まとわりつく音を、少年はベッドに横たわった状態で聞いていた。父は優しくそんな声で少年とナナに語りかけながら、コンソールに何かを打ち込んでいく。

ほら、ナナもうすぐだよ。もうすぐ兄妹ができるからね。名前はハチ。八番目だからハチ。我ながら単純かな。

何億回と打ち込まれた情報の音が、少年のハードディスクに刻まれ続ける。

……にゃ？ ナナは七番目だから、ナナ？

そうだよ、よく分かったね。

喜ぶナナの声がする。

それよりそれより、きょーだいつて、ナナより強いのか？

幼い声が、父の足下から聞こえる。好奇心を隠せないといった様子だ。

ナナ、それは違うよ。ハチはね、ナナの弟なんだよ、分かるだろう？ ナナと同じなんだよ。

ナナの髪の毛を撫でたのだろう。くしゃっと髪の毛が乱れる音がした。

ナナは気持ちよさそうな声を出してのどを鳴らす。

にゃ！ 分かった！ ナナと同じくらい強いんだね！

ほんと手を叩く音がする。

はは……そうそう、ナナはいい子だね。

ナナの素っ頓狂な声の後、困ったような、悩むような声がコンソールを叩く音に混じる。

にゃ！ ナナはいい子！ だからハチ、ナナをよろしくね！。

耳元で楽しそうなナナの声。暗闇の中で誰かに揺られているよ

うな感覚はナナがそうするからだろうか。

おっと！ ナナ、まだ途中だから、むやみに触っちゃ駄目だよ。……いいかいナナ、ハチと遊ぶにはまだもう少しかかるから、それまでおとなしくしているんだよ。

はい！

ぱたぱたと軽やかな足取りが、父の声がした方向に寄っていく。それきり静かになった空間に、コンソールを叩く軽やかな音。

時を刻む振り子の音のように、長い時間をかけて、少年はその声や音を聞いた。

ただ、ナナに楽しそうに話しかける父の顔を見たくて、優しく話しかけてくれる父の姿を見たくて、ずっとその音を聞いていた。

「そう……人は自分たち同士で争うことが破滅に向かうだけだって分かってるのに、どうして飽きずに繰り返すんだろ。お父さんなら、僕にその答えを教えてくれるかな？」

記憶の再生が途切れる。

「お父さん……」

空につぶやく。

交差点を猛スピードで横切るバイクの音が、ハチの声をかき消した。

「《人機》として作られた僕がこんなことを考えていいのか分から

ないけれど」

スクランブル交差点を歩いていく。

途中ですれ違った水商売風の若い女性が、ハチを見てため息をついていた。すれ違う全ての人々が、ハチの端正な顔立ちに釘付けになり、あるいは、身にまとう雰囲気にあてられ、知らず目で追いつける。

銀髪がハルに従い後ろに流れれば、彼、彼女らの目にはつきりと焼き付いた。

「お父さん」

ハチは交差点の中心で立ち止まる。

「僕は会いたい。この目で見たい」

神々しい光に包まれ、息を吹き返し始めた都市の真ん中で、深い群青の空に手を伸ばす。

何かを求めるように、手のひらを広げた。

「寂しいんだ。お父さんのいないこの世界が」

ハチは淡い微笑みを浮かべて、暁に手をかざす。

「だから僕は……《人機》である意義を捨ててでも」

手のひらを拳に変える。

「《彼岸》を手に入れる」

拳に握りしめたのは決意。

その決意に呼応するように、ハチの背中が蠢く。

「僕は、願いを叶えるんだ」

日の出が映し出した背中、鈍色は 巨大な機械の翼だった。

第二十七話・「お願い、お兄ちゃん……」

ナナが眠るベッドに寄りかかって、ハルはずっと考えていた。

新聞を届ける軽排気量バイクの音が、朝の訪れが近いことを告げている。

「体は疲れているのに眠れないってのは、なんだか嫌な感じだ……」

ちらと振り返れば、どこかかつての愛猫に似たナナの寝顔がある。

「《彼岸》……か」

欲しいなどと願ったことはない。持っている実感したこともない。使おうとしたこともない。第一どこにあるのかも分からない。持っていると言われても、あまりにも漠然としすぎている。

「でも、俺は願ったと……うるわもカレンも、俺は願ったと……そう言っていた」

自分が意識していなくとも、発動していたとしたら。

ふとした瞬間に、願っているとしたら。ハルが確信の持てる範囲外において。

……頭痛がする。

よぎるのは白と黒。場景が次々に反転し、記憶が錯綜する。

「くそ……！」

怒りを床に叩きつける寸前。
ノックの音が拳を留めた。

「誰だ？」

「お兄ちゃん、マキだよ」

「……なんだよ」

頭痛からか、ハルの声に不機嫌さが混じる。

「寝ないの？ お兄ちゃん」

音もなく入室したマキが、後ろ手にドアを閉める。

「別にいいだろ、お前こそ寝ないのか。もう朝だぞ、さっさと寝ろよ」

「うん、ちょっと……ね。マキを心配してくれてるのかな？ お兄ちゃん」

「別に……そんなんじゃない」

長い前髪をいじりながら答える。

「マキと少しだけ話ししてくれないかな？」

「……」

「マキは今の沈黙を肯定と受け取るであります」

びしつと笑顔で敬礼してみせる顔が、どことなく愁いを帯びていた。

ハルの勘違いか、それとも薄暗い部屋のせいであろうか。

ハルが目をこすっている内に、マキは、すとな、とハルの隣に腰掛けた。

小柄な妹の体が、ハルに最接近する。

「離れる」

「……やだ」

「……」

「マキは今の沈黙を肯定と受け取るであります」

「……勝手にしろ」

「ありがと、お兄ちゃん」

鼻歌でも歌うような楽しさで感謝を告げる。

「……そう言えば、今考えても不思議だね。朝起きたら、マキはお兄ちゃんのベッドにいて、お兄ちゃんがひどく怒った顔でマキをばかすか殴ってるの」

ハルは思い出す。

ベッドの上で横たわるナナと戦闘をし、マルチメディアビルの崩落からハルを救い、天高く飛翔した妹の姿を。

声の限りに叫んだハルに、全力で応えようとする意思。

天翔る妹は、崩壊を開始したビルの中でこう言った。

お兄ちゃんが信じてさえくれれば、マキにできないことはな
いって……バカみたいだけど、そんな気さえするんです！

「思い出すだけで涙が……ぐす。お兄ちゃん、愛情表現とはいえ、
マキに容赦ないんだもん」

ハルの回想の合間合間に、マキが声を優しく入り込ませる。

「気がつけば私……ベッドの中で何も着ていなくて、下着すら着て
いなくて……あれね、マキ、本当に記憶にないんだよ？」

兄に向けられた強固で純粋な意思の瞳は、あつと言う間にハルの
意思を染め上げた。

あれほど即座にマキに従ったのは、ハルが覚えている限り、初め
てのことだった。

「あのときは恥ずかしかったよ……。でもね、痛みとか恥ずかしさ
の奥で、マキはなんだか嬉しかったの。こそばゆくて、心がうきう
きしているようで……。まるで遠足前の夜、リュックにお菓子を詰め
るときのような……。そんな、なんだかはしゃぎたくて仕方がない感

じだったの」

ハルは考える。

マルチメディアビル崩壊の折にマキが持っていた瞳の強さ。

向けられたそのときは、そのときだけは、なぜか妹のことが信じられた。何よりも、誰よりも。

「お兄ちゃんが……お兄ちゃんが、こうなるように望んでくれたんじゃないかって……マキの勘違いでも、ちよっぴり、ほんのちよっぴりそう思えたから」

冗談ばかりで、しつこくつきまとうばかりで、迷惑としか感じられなかったはずなのに。

まるで世界を知らぬ赤ん坊が、母の優しい手によって引かれ、成長していくように。導かれるように。

驚くほどすんなりと信じられた。

「全部……マキの自分勝手な妄想だけどね……えへ」

自虐的な微笑み。

訪れる沈黙。

聞こえるのは、二人の息づかい。

「……静かだね、お兄ちゃん。まるで世界で二人きりになっちゃったみたい」

目をつぶり、息を吸い込む。

「マキは……時々、これが夢なのかなって思うの」

ゆっくりと目を開け、息を吐く。

つぶらな瞳には、薄暗い天井が写り込んでいた。

「マキがずっと見ている夢。お兄ちゃんが、病気の私の手を、ずっと握りしめていてくれたとき……あの病院の、ベッドの上で見ている夢……。目が覚めたら、やっぱりお兄ちゃんがマキの手を握っていてくれるの。頑張れ、頑張れって、弱いマキを応援してくれるの。……でも、マキは弱いから、病気に負けて、それで……お兄ちゃんと……二度と……会えなくなつて……死んじゃつて……」

「何を馬鹿なことを言ってるんだ。お前はここにいるだろうが、馬鹿」

マキの消え入りそうな声を聞いて、ハルは妹の頭に軽いげんこつを落とす。

小さな悲鳴。

亀のように首を縮ませたマキが、意地悪な兄を上目づかに睨めつけるが、直ぐに向き直つて口を開く。

「うん……。そうだ、お兄ちゃんは覚えてるかな？ 幼いころの……マキが幼稚園生だったころ。発掘調査でお父さんとお母さんはいなくなつて、二人で留守番をしていたときのこと……。その日は家族で一緒にすごそうって決めていたマキの誕生日で、ケーキも買って、後はろうそくをさして吹き消すだけだったのに……」

ハルは改めて隣に座る妹を観察する。

遠い目をする妹。よく見ればしつとりと濡れた髪。

その首筋や、体のあちこちからはかすかな熱が立ち上る。

時間外れのお風呂を済ませてきたのだろうか。

「寂しくて寂しくて、ずっと泣きじゃくっていた……そんなマキにお兄ちゃんは怒って部屋から出て行っちゃって……マキは寂しくてもっと泣いちゃって」

右の前髪だけを逆さまに留めるマキの特徴的な髪型。そこにいつもの赤い髪留めはない。

広いおでこに落ちる前髪が、マキの表情を隠す。

「……でも、物音がして振り返ったら、お兄ちゃんが複雑な顔をして立ってた。……『泣くな』……そう言っ、顔をそらしてたまま、ぶっくらぼくに指しだした手には、これが握られていた……」

ハルの眼下に差し出されたマキの拳。

花開くように指を広げると、手のひらには真っ赤な髪留めがあった。

「……覚えてない。忘れた」

「……いいもん、マキは覚えてるから」

にっこりと笑う。

「……安物だ」

「それでも、マキがお兄ちゃんからもらった初めてのプレゼントだもん」

栗色の髪からはフローラルな香りが漂う。共用で使っているシャンプーの香り。

慣れている香りなのに、それはまったく別物の、女らしい香りに溢れていた。

シャンプーの匂いだけではない、妹の……マキの……。

女の子の香り、なのだろうか。

ハルの思考回路が、妹を一人の女性に仕立て上げようとする。

「驚いて、涙すら忘れるマキに、お兄ちゃんは髪留めをつけてくれた。右の前髪をかきあげて、そこにパチンって」

一つまばたきをいれる。

思い出に浸ったせいか、潤んだ瞳で兄を見上げる。

「お兄ちゃん、そのときなんて言ってくれたか覚えてる？」

「覚えてないって言ってるだろ」

マキの言葉が思い出の引き出しを開ける鍵となった。

……に、に、に……似合ってる、ぞ。

忘れかけていたが、離れたわけではなかった思い出。
手に取るように思い出してしまった効果が、ハルの顔に赤みが差す。

「もう、マキは覚えているのに、お兄ちゃんはそうやって直ぐ忘れて……」

可愛らしく頬をふくらませるマキに、ハルの心臓が早足になる。
いつもとは違う髪型がマキを別人のように変える。

「お兄ちゃん、あのときのように髪留めをつけて欲しいな」

前髪一つで、ここまで表情を変える妹の姿にハルはどぎまぎしてしまふ。

たかが前髪、されど前髪。

「お願い、お兄ちゃん……」

たかが妹、されど妹。

「ば、馬鹿……お前な」

ためらうハルを急迫するように、栗色の髪の毛が胸に飛び込んだ。

抱きついたマキが顔を胸に埋め、腰に手を回す。ゼロ距離で飛び込んできた濃密な香りが、ハルに鼻腔をくすぐったばかりか、肺を満たし、体中に素早く、深く浸透してきた。

抗いがたい熱さと苦しさがハルを襲う。

「ナナがいるんだぞ。そんな恥ずかしいこと……！」

「そんなの、関係ないもん。それでもいいもん。その方がいいんだもん」

「お、お前……！」

「お兄ちゃん……マキは……」

……すぐるのような瞳が揺れていた。

第二十八話・「すき」

「お兄ちゃん……マキは……」

すぐるような瞳が揺れていた。

瞳の表面は、湖面のように濡れそぼっている。

「マキは……お兄ちゃんが……」

湿気を帯びたマキの髪の毛から立ち上る香り。鎖のように心臓を縛り付ける。

足早にかける心臓が、身動きをとれずに締め付けられた。

今すぐにでもその鎖を引きちぎってしまいたいという衝動が、ハルの中で沸々とたぎっていくのが感じられた。

それはハルがそうしたいと望む意思よりももっと奥、男という生き物に帰属する感覚であった。

本能、そう言い換えられたかもしれない。

ハルは兄である自分に危機感を抱き始めていた。

胸の中のマキは風呂上がりで、いつもよりも温かく、柔らかく、それでいて綺麗だった。

赤い髪留めを握りしめたまま、ハルの胸で震えている。

小さな双肩。長いまつげ。ブラックオニキスのような瞳。

そのどれもが妹の粹を越えようとしている。

「マキは欲張りで、わがままで」

妹である以上に少女だった。

「やきもちやきで、こらえ性がなくて……」

少女である以上に女性だった。

「寂しがりで、独占欲が強く……」

女性である以上に異性だった。

思わずマキの背中に回しかける両手。

マキの熱が伝わってくるからなのか、思考回路がオーバーヒートしているからなのか、はたまた緊張しているからなのか。そのどれであるにせよ、ハルには理解できなかった。

もしも、腕を回し、マキを抱きしめ、体と体をもつと密着させてしまったら。

きっと連鎖反応が起こる。

肌と肌を触れあわせること。

それが意味するところ。

「お兄ちゃんがそばにいてくれないと」

あと五センチで、マキの柔肌に届く。

「お兄ちゃんがずっと望んでいてくれないと……」

ハルは兄で。

「きつときつと……！」

あと三センチで、マキの体温に届く。

「きつとマキは、消えてしまっんです……」

マキは妹で。

「お兄ちゃんの視界の中にマキがない……そう考えただけでざわざわするんですよ……？」

あと一センチで、マキの心に届く。

「マキも分からないくらい、焦っちゃっんですよ……？」

二人は兄妹である。

「どうしようもなく気持ちが揺れるんですよ……？」

……ハルの手が止まった。

触れそうなマキの肌からゆっくりと離れ、強く両手を握りしめる。感情の起伏をひと思いに絞め殺すように、握力を振り絞った。葛藤をひと思いかみ殺すように、下唇をかみしめた。

やがて双方を殺したのか、ハルの手、あごから、力が消失していた。

「お兄ちゃんが」

言いかけるマキの両肩をつかみ、やんわりと引きはがした。

「もう、寝ろ」

ハルは自分の中で鍵の閉まる音を聞いた。

「……たく、まじめな顔して来たからなんだと思えば、そんな馬鹿話を聞かせに来たのか？ お前はいつもそうだ。自分勝手だとか、わがままだとか分かっているんなら、少しは意識して改善しろっていうんだ」

壊れかけたガラス細工を思わせるマキの姿を、ハルは直視できなかった。

「……お兄……ちゃ……」

焦点が定まらない目と、戸惑う姿、脆弱な声。

ハルは逃げるように持ち前の長い前髪で自分の視界を隠す。自分の表情を隠す。

「……えへへ、そう……だよ。お兄ちゃんは……手厳しいなあ……」

…」

明らかな空元気。今にも泣き出しそうな感情を、無理矢理に元気に変換している。

「分かったら、さっさと出てけ。俺は忙しいんだよ」

人払いをするように手を振った。

「ごめんね、お兄ちゃん……ごめんね」

立ち上がるマキの頬からに何かが落ちた。

「ああ」

ハルはベッドに腰を預け、うつむき、虚空を見続ける。

「おやすみなさい、お兄ちゃん」

ノブを回す音。

「……おやすみなさい、お兄ちゃん」

ドアが開く音。

「お休みなさい……お兄ちゃん……」

ドアの閉まる音は、しなかった。

「……マキ？」

「お兄ちゃん……………すき」

ドアの閉まる音がマキの声を相殺した。

マキの裸足の足音が自室へと遠ざかっていくのに耳をすませながら、ハルは大きなため息をつく。

肺の中に染みついてしまった香りを、ありったけの肺活量を使って吐き出す。

頭を強く小突き、痛みで思考を乱そうとする。

「…………マキにはマキの生活がある。俺がそれを左右するなんてしてはいけないんだ。間違っているんだ。そうするべきじゃないんだ……！ だから、俺は兄としてマキを見守らなきゃいけない。しっかりとした目で、強い意志を持って、断固として…………」

それでマキが悲しむことになっても、結果的にそれが正しい方向に傾いてくれるはずだから。

一時的に悪い方向に向かってしまっても、最後に軌道を修正することができれば。

マキが、最後の最後で、兄が伝えようとした正しさに気がついてくれれば。

きつと丸く収まるはずだから。

「そのためにも、俺はマキと距離を置かなきゃいけないんだ」

強く願い、思い込む。

「また、あのときのように。マキのいなくなった……一人になって

しまったときのように……俺は気持ちを強く持たなければいけないんだ。気持ちを強く……」

強く頭を小突いてしまったせいか、頭痛がひいていかない。それどころか、痛みが増していくようだった。自分でも強くやりすぎたかなと、ハルは後悔する。

「……………にや!？」

「お、目が覚めたか」

突然、布団を跳ねとばして起き上がったナナが、なにやら口から灰色の煙を出して、再びぼたりと倒れる。

小さな破裂音がしたかと思えば、今度はパソコンを起動するような、ファンの回転数の上がるような音。

何が何やらわからず、ハルは目をぱちくりさせてナナを見ていた。

「……………自動起動シーケンス開始……………記憶領域ローディング開始……………記憶領域破損率八十パーセント……………《人機》構成部品破損率六十パーセント……………自動起動不可……………修復処理開始……………記憶破損部消去中、新規領域変換処理開始……………修復処理終了……………構成部品破損部確認、自動修復処理開始……………修復処理終了……………記憶領域ローディング再開……………成功……………《人機》再起動処理実行……………バイオス起動……………バージョン認識……………総修復状況六十パーセント……………通常起動不可……………《人機》ナナ、セーフモード起動……………起動終了……………持主認識作業開始」

意味不明の声を漏らした後に、ナナの瞳が開かれた。

「……にや……？」

「お……き、気がついたか？」

眠たげな瞳がハルの目をとらえた。しばしの間、無言で見つめ合い続けるハルとナナ。

平行線をたどるにらめっこに負けたのはハルで、慌てて前髪で表情を隠した。

「……………パパ」

「……………は？」

聞き慣れない単語に、耳をそばだてる。

「パパ！」

きらきらと目を輝かせるナナ。

「パ………パパ？」

ハルがオウム返しにつぶやくと、ナナはうんうんと嬉しそうになぜいた。

確認のために、恐る恐るハルが自分自身を指さす。

「……パパ？」

すると、先ほどとまったく同じ調子でナナは首を上下に振って見せるのだった。

第二十九話・「誰がヘリウムよ！」

「やっと起きたわね」

リビングにはいると、つまらなそうにニュースを眺めるカレンがいた。

アンティーク調のカップを口に運び、優雅にたしなんているのはどうやら紅茶のようだった。

「退屈で退屈で仕方がなかったわよ」

袖の長い白いワイシャツに、黒い短パンという、何ともアンバランスなカレンの出で立ち。ボタンを開けて着崩した胸元は鎖骨があらわになっており、うっすらと隆起した胸のふくらみがシャツのぎりぎりで影を作っていた。すらりと伸びた足を惜しげもなくさらし、はわわ、と大きなあくびを右手で受け止める。見目麗しい生足がハルの目には毒だ。

「……一体何をしてる」

「何をつて見て分かるでしょ？ テレビを見てるのよ。アフタヌーンティーを楽しみながら、午後の優雅なひとときってわけ。……にしても、ここにはろくな紅茶がないわね」

鼻を鳴らして小馬鹿にする。ハルは反射的に、だったら飲むな、と言いかけたが、寝起きの気だるさがそれを許さなかった。

「で、うるわは？」

「ふふん、気になるの？」

半眼でのぞき込んでくるカレン。中腰になって下からのぞき込むとするから、胸元からシャツが離れる。小高く白い双丘がちらちらと見え隠れする。

突然のシチュエーションに顔が赤くなっていく。

「気になるんでしょう？」

「べ、別に」

「あれ、顔が真っ赤っか」

ハルの背中にはナナ。

「う、うるさい、ナナは黙っていてくれ」

カレンは頭に疑問符を浮かべている。

どうやら自分のこと対しては割と鈍感なようだ。

「ま、うるわはああ見えて一途で譲らないところあるしね。今まで何人の男どもにも求婚や交際を申し込まれたことか。ま、私には到底及ばない数だけ。そうそう、ここだけの話、某国の大統領にも求婚されたのよ。どう、すごいでしょ？」

自分のことのように腕を組んで、自慢げに胸を反らす。組んだ腕の下では、形の良い胸が歪む。

どうやら、下着を身につけていないらしかった。思わず、ごくりと生唾を飲み込んでしまうハル。

「ナナも、頼むから背中から降りてくれ」

「にゃ……？ ナナは降りないよ？ パパの背中ぬくぬくだもん」

「……パパですって？」

「ばっ！ ……い、いや、なんでもないんだ」

ハルが慌てて手のひらでナナの口を押さえる。隠れるようにカレ
ンに背を向けると、小声になる。漏れ聞けば、パパじゃなくてハル
だ、二度と間違えるなよ、と鋭いまなざしでナナを叱っていた。

ナナは人質の如く口をふさがれたまま、こくこくとうなずく。

「……ふはっ！ ハルー」

ハルが口から手を離すと、開放感からか、枕に頼ずりするように
ハルの背中に体を密着させる。小柄な体でもその柔らかさは折り紙
付きだ。体に張り付く服装が好きなのか、活発だからなのか、ナナ
はスパッツに、ハルが貸したジャージの上着という出で立ちだった。

ハルは自問する。

古代兵器とは名ばかりで、本当はただの女の子ではないだろうか。
無邪気なナナの様子を見ると、刀で斬りつけられたことがま
るで夢幻にさえ思えてしまう。

「そうそう、うるわなら、私が寝ていた部屋で始末書を書いている
わよ」

「始末書？」

「しまつしょー」

「そ、この始末書」

カレンがあごをしゃくった先はテレビ。

「あ、昨日ナナのいたところ！」

マルチメディアビル崩壊のニュースが大々的なテロップと共にトップニュースとして取り上げられていた。

「構造上の欠陥、コスト削減による強度不足、設計段階のミスも指摘……はあ！？」

「にやつ！……ハル、声が大きい」

びつくりしてハルの背中から落ちそうになるナナ。

「いいリアクションね、多少大げさすぎないこともないけど」

「明らかにおかしいだろ！ この報道は！」

ニュースでは、マルチメディアビルのモデリングを用意して、一級建築士と共に多角的な角度から事故を検証している。司会者やゲストはしきりにうなずき、視聴者に早鐘を鳴らしている。

「どう見ても、この犯人はお前だ！」

「おまえだー」

二人に指を刺され、むっとするカレン。

「何よ、この私がやったって言うの？」

「他に誰がやったって言うんだ……？」

「そこのチビ黒がやったんじゃないの？」

「ナナは壊してないもん！　ちょっと傷つけたただけだもん！　変なものぶんぶん振り回したのはカレンだもん！」

「うるっさいわね、私を気安く呼ぶんじゃないわよ、このチビ助。それに、私の《千手》を変なものの扱い、万死に値するわ。百歩譲ったとしても、ピアノ線で緊縛したあげく、燃えないゴミの日に出すわよ、ポンコツ」

「べーだ、ナナはポンコツじゃないもん。あのときは多勢に無勢だったんだもん！」

「負けは負け、認めなさいよ、ガラクタ女」

「むむ、そっちこそ、ドーピング女のくせに！」

カレンが服用した《遺片》を指してのことだろう。

ハルはうるわの落とし物をポケットに入れっぱなしだったの思いうす。

「このミジンコ兵器……気がついていないでしょうけど、アンタ今、

言っではいけないこと言っただわよ……！」

「知らな〜い……ねえ、ハル、ナナこの人嫌いー」

「あ、り、が、と、う。私も大っ嫌いよ、ゲテモノ兵器」

にらみ合う女二人。

「悪いが、俺にすれば二人とも役立たずだ」

「にやにやつ！？ は、ハルが、ハルがナナを役立たずって言ったあ……」

「ふふ、いい度胸ね、ハル。外に出なさい、後遺症で《千手》が使えなくても、今の台詞を後悔させてやることぐらいできるのよ」

「そうか、行つてらっしゃい。俺は寒いから外には出ない」

徐々にボルテージを上げるカレンに対し、ハルはひどく反応が冷めている。

「ハル……ねえ、ハル？ ナナは知らない子なの……？ 捨てられちゃうの……？」

「ふん、ハルは怖いんでしょう？ 意気地なし、悪人顔、シスコン、猫中毒」

「猫を馬鹿にする気か！」

大好きな猫を馬鹿にされて、憤怒が一気に顔中にあふれ出る。

「あの、大変申し訳ありませんが……少々静かにしていただけますか」

「うるわ……」

言い争う三人の目が、入り口で額に手をやるうるわを映す。
子供のしつけに困った母親の顔に似ている。

「報告書はいいの？ 早く書かなきゃいけないんじゃないの？ こんなところで道草食っていいわけ？ 駄目でしょ？ 上層部に怒られても私は知らないわよ？」

「カレン、今のあなたの言葉に多大な憤りを感じる私がいるのですが」

色白のうるわがさらに顔を蒼白にさせている。疲れが体中に充満しているようだっただ。

「それとですね。この違和感……誰も聞いたりしないので、説明して欲しいのですが」

けだるげなうるわがハルの背中を指さす。

「それはなんですか？」

震える指先は子猫のようにじゃれるナナを指し示す。

「これはただのガラクタ」

「いや、人型古代兵器だろ」

腕組みしながら鼻で笑うカレンと、正しく訂正するハル。

「もう！ ナナはナナだよ！ ガラクタじゃないよ！」

ハルの首にぶら下がりながら、背中でしたばたもがきだす。

「……どうしてそんなに平然とできるのですか？」

「だって《千手》を使えないもの。使えるようになったらバラバラにしてやるんだけど」

「俺はただ捨て置けないだけだ。別に可愛がつてやろうとか、捨て猫みたいで放っておけないとか、うるわが考えるような感情的なものじゃない。そここのところ勘違いしないでくれ」

「分かりました。つまり、カレンは冷戦状態。ハルは可愛い捨て猫を捨てたと」

「おい、勘違いを」

「ナナ、と言いましたね」

ハルは無視された。

「にゃ！ ナナと言います」

「いいえ違うわ。たった今、ゴミに改名させたの。ねえ、ゴミ？
そうよね、ゴミ？ 何か言いなさいよ、ゴミ」

頭一つ小さいナナを見下して馬鹿にする。

「……………性悪」

「にゃ！　今、ハルがいいこと言った！」

ハルが味方してくれたのが嬉しいのだろう。ジャンプ一番で胸に飛び込んでいく。ハルのあごにナナの頭が命中した。ノックアウト。仰向けに倒れ込んでしまう。

「カレンは話の腰を折らないでください。ハルも火に油を注がないでください。カレンはただでさえ沸点が低いのですから」

「誰がヘリウムよ！」

「そんなことは誰も言ってません」

「ハル、ヘリウムってね、沸点がマイナス268・9なんだよ」

尻餅をついたハルの腰にまたがりながら、ナナがすらすらと答えをみせる。

「知らなかった。ナナは物知りだな」

愛らしい笑みに、ハルは自然とナナの頭を撫でていた。愛猫の頭を撫でた過去がりフレインする。

「うん、ナナ、物知り！」

うれしがる猫のように目を細めるナナ。

「宴もたけなわ申し訳ありませんが、続けます。……この際です、始末書は後にします。すでに半分の百二十枚は書きましたから、一時間ほどで書き終えることができますから。現在の最優先事項は、今後の方針を決めることです」

体と精神の疲れを一瞬で吹き飛ばして、顔を引き締める。

プロ根性という言葉が、あごをさするハルの脳を横切った。

「……そう言えば、ハル、マキが見あたりませんが」

「そういえばそんなのもいたわね」

「ナナ知らない」

首を振る。

自動的に、答えるのが最後になってしまったハルを三人の視線がとらえた。

「……………寝てるんだろ」

深夜の出来事を思い出して、ハルの胸がちくりと痛んでいた。

第三十話・「マキがいなくても」

騒がしい階下の音に引かれて、マキは静かに階段を下りていく。

抜き足差し足……まるで泥棒にでもなったかのように、階段を下りてダイニングのほうに向かっていく。

そつと扉から中を盗み見ると、まるで家族会議でも開くように食卓につく四人の姿があった。

優雅に紅茶をすするカレン、寝起きのせいか苛立ち気味のハル、その直ぐ隣でハルにじゃれつくナナ。最後、三人に向かい合う形で座るうるわ。

それでは、これより第一回、人型古代兵器対策会議を行います。

咳払いをしたところを推測するに、どうやら教師と生徒の構図のようだった。

その光景を扉の影から見たマキは、知らず体が震えるのが分かった。

体の内側から何かが燃え上がり、今にも爆発しそうなのに、足は一步も前に出ず、声帯はちっとも震えようとしなない。

胸が締め付けられる痛み。心はざわつくばかりで、思考が乱されてばかり。

その全てにおいて、マキには対処のしようがなかった。

一応、扉の中に入ろうと脳が体に命令しようとするものの、まるでその権利がないとでもいうように、体は動くのを拒否し続けた。

……思い出すのは、昨夜のハルとのやりとり。

マキは心のざわめきに体を震わせながら、テーブルを囲む四人の会話に耳を傾ける。

マキの存在を無視するかのように、明るい雰囲気では話が続いていた。

ナナはハルに積極的にスキンシップを図る。まるでハルが大好きだった愛猫のアルフレードを思い出させるよう。ハルもそんな思い出を重ねているからなのだろうか、言葉では嫌がりつつも、ナナを引きはがしたりはしない。どことなく昔を懐かしむようなまなざしで、ナナを見ていた。

見守るような、優しい目。

無表情のうるわには信頼さえも感じさせる雰囲気、カレンとのやりとりは、まるで犬猿の幼なじみを想像させる。ハルはそのどれにもぶっきらぼうな態度で応戦しているが、席を立ったりもしないし、心底怒りをあらわにしたりもしない。

どこかハル自身が慣れていくようで、どこかハル自信が少しずつ変わっていくようで……少しずつ遠い人になっていくようで、マキは心痛を発する胸に手を置いた。

心の中で、マキは呟く。

お兄ちゃん……お兄ちゃんはマキがいなくてもいいんだよね。

勝手に透けてしまう自分の体を抱きしめ、寒さに身震いする。

お兄ちゃんが、マキを思ってくれないと……願ってくれないと……マキは……。

薄く透けた手の平には、赤い髪留めがある。

マキは願いを込めるように胸に抱いた。

第三十一話・「……………マキ？」

「それでは、これより第一回、人型古代兵器対策会議を行います」

うるわの声が開会を告げ、ナナが嬉しそうに拍手する。

カレンは我関せずの体で紅茶をすすり、ハルは難しそうな顔で頬杖をついていた。

「…………対策される側の人型古代兵器にしか拍手をいただけないのは心外ではありますが…………とにかく、人型古代兵器について考えたいと思います。正確には《人機》といいましたね、それについては間違いありませんか、ナナ？」

「うん、間違いないよ。《人機》は最高の兵器で最重要機密なの。自立型の単独兵器で、思考性も備えてるんだよ。もちろん自己修復機能付きで、対人対物、対空対地なににでも対処できるようにお父さんが設計してくれたんだ。それでねー、ナナは七番目に作ってもらったんだよ。ハチは八番目で最新モデルなの。すごく強いんだよ」

「…………空耳？ 最重要機密って聞こえた気がしたんだけど」

「はい、私も聞こえました。ですが好都合です」

「えへへー、すごいでしょ？ ハル、ほめてほめて？」

ハルのつく頬杖をぐいぐいと引っ張る。ハルのいらだたしげな表情が左右に揺れていた。

「では、ナナ、質問です。あなたは《彼岸》を手に入れるためにハ

ルを襲いましたね。なのに今はその気配はない。私に納得がいくように説明できますか？」

「ナナは今セーフモードで起動してるの」

ハルはうるわに向き直るナナを見ながら、パソコンのセーフモードを思い浮かべる。

「セーフモードはね、ナナが活動するために、最低限必要な機能だけを起動させている状態だよ。ナナ、前回の戦闘で故障しちゃって、大部分が機能を停止させて自己修復中だから。しばらくは何もできないの」

「では、ハルを襲う恐れもないと？」

うるわの真剣な問いかけに、ナナはきょとんとする。

「うん、戦闘行為は出来ないようになってるよ。それに、どうしてハルを襲うの？ ハルはナナのパパだよ？」

「……すみません、ナナ、私の聞き違いならばよいのですが……今なんと？」

「ば、馬鹿！ ナナ！」

大あわてでナナの口をふさごうとするが、突然の羽交い締めで身動きが取れない。

ハルが肩越しに犯人を見れば、そこには嫌らしい笑みを浮かべるカレンがいた。

抗おうとするが、カレンの力は予想以上に強い。

「うゝん……パパはパパだよ。間違っているのかな？ だったら、ハルはナナのご主人様、オーナー、主、マスター、ダーリン……」

「アンタ、そういう趣味があるわけ？ 軽蔑するわ」

「ハル……私もあなたを買いかぶっていたのかもしれませんが」

冷ややかなまなざしが二つ。

「俺じゃない！ 俺が決めたんじゃない！」

声を荒げて抵抗する。

「私はハルがどのような嗜好、性癖の持主であろうと、メイドたる責務は果たします。どうかご安心下さい」

「うげ、私は嫌よ」

羽交い締めを解いたカレンが、心底嫌な顔をする。
グロテスクなものを見る目で、嘔吐するふりのおまけ付き。

「いい加減にしろよ……」

長い前髪を震わせて、握り拳を作るハル。

「ハル、ハルは何がいい？ ナナはパパがいい！」

「ハルだ！ それ以外は認めない！」

体に染みついた癖か、ナナの頭に手刀を振り下ろしてしまう。

「にやうつ！ 分かった……」

ハルの手刀に首を縮ませると、唇をとがらせてすねるような仕草を見せる。

上目遣いが何とも愛らしい。うるうると揺らぐ瞳は捨てられる猫のよう。

「わ、分かればいいんだ……分かれば」

ハルも怒るに怒れなくなってしまう、渋々イスに腰を落ち着けた。

「とすると、このポンコツは本当にポンコツなのね。あえて例えるなら……電源はつくけど、チャンネルの設定がされていないテレビみたいなものね。全チャンネルが砂嵐で、見る価値がないって感じ？」

足と腕を組んで胸を張る。

「ええと……それはつまり、人型古代兵器たるアイデンティティがないということですか？」

うるわの補足でハルはようやく納得することができた。

「そ、ガラクタそのものよ」

「……あえて例える必要があったか？」

「ハル、それは分かっていると言わないほうが賢明というものです」

「ナナはテレビじゃないよ?」

カレンを口々に批評する三人。

「く……黙りなさい! ポンコツと馬鹿メイドとその他!」

少し恥ずかしそうに頬を染める。誰も賛同してくれなかったのが
よほど悔しいのだろう。

「それを言うならば、今のカレンも同じではないですか」

「カレンはテレビなの?」

ナナが小首をかしげる。

うるわはうつむき加減に首を横に振ってから、改めて顔を上げる。

「ポンコツなのはカレンも同じだということです」

「カレン、ポンコツなの? 使い物にならない? 機能不全?」

「そうなのか?」

ハルがカレンの上から下を順に眺める。

同性もつらやむ均整の取れた体つきで、外傷は全くない。

昨夜は衰弱の極みだったが、今朝は一見するにすっかりと良くな
っているように見える。

「……こつち見るな、悪人顔」

「ええ、カレンは……今は、ポンコツ同然です」

今は、の部分を強調する。

「カレンは前日の戦闘の折、《遺片》を使用しましたから」

悲しげなうるわの瞳が、皆の視線から逃げるカレンに向けられる。
カレンは腕を組みながら、揺れるカーテンを見つめていた。

「《遺片》は、使用者の能力を一時的に増大させ、限界以上の力を引き出す薬のような古代兵器です。あのかの時のカレンを思い出していただければ明解かとは思いますが、服用者には例外なく副作用が伴います。服用直後から襲う、動悸、息切れ、めまい……」

無表情は相変わらずだが、うるわの言葉には説得力があった。

カレン本人も口を挟もうとせず、腕組みをほどこき、むすっとしたままテーブルを指でとんとんと叩いている。

「……一言で言えば《遺片》は麻薬なのです。もちろん麻薬と言うからには、中毒性もあります。そして……後遺症も。《遺片》は服用者の力を引き出す代わりに、人の身体機能を容赦なく奪っていく。カレンの体力のなさ、視力の悪さはそこからきています」

「当たり前だよ。あれは《人機》用のサプリメントだもん。人間が使ったら体をこわしちゃうよ？」

「壊している本人を前にあつけらかんと言ってくれるわね。逆にすがすがしいわ」

背もたれに体を預けて、大きく体を反らす。伸びをするように首をそらすと、金色の髪が床に垂れ下がる。きらきらと輝く、きめ細やかな髪。

「カレン、気休めかもしれませんが、乾燥梅です」

ポケットから取り出した乾燥梅を一粒、カレンに差し出した。カレンは伸ばした体を元に戻して、うるわの差し出す乾燥梅干しをしばらく見つめていた。

「……ありがとう。……ん、美味しい」

口内で梅を転がすと、かみしめるようにつぶやいた。

「ホント、この味……そっくりなのよね。馬鹿みたいに」

寂しそうな微笑みに、ハルはなんと声をかけていいか分からなかった。そして、なぜかその梅干しを無性に食べてみたくなった。意思のこもった声がテーブルを飛び越える。

「うるわ、俺にもくれないか」

「ハル……どうぞ、高級品ですよ」

雪解けの山頂を思わせるうるわの表情。
ハルに差し出した空の右手を、結んで、開く。
すると手品のように種が出現した。

「ちょっと、ハル！ あんた何言ってるのよ！ それ私の」

「よいではないですか、カレン。ストックはまだまだあるのですから」

トランプを広げるように、ストックされているパッケージを扇形に広げる。

「あ、美味しいな、これ」

「あー、いいなー、ナナもナナも！」

だだをこねるナナを押しつけて、ころころと口内で転がす。

「……ふん、あつたり前じゃない」

「ああ、満更じゃない。どちらかと言えば癖になりそうだな。そうだな……この調子で《遺片》だって食べられそうだな」

「……バカ、強がるんじゃないわよ」

鼻で笑うカレンが、どこか嬉しそうに肩をすくめる。

「いや、俺は本気だ」

「はいはい、分かったわよ、そういうことにしといたげる」

取り合おうとしないカレン。

「この……！ お前が飲まなくとも、《遺片》ぐらい、俺が飲んでもなんとかなるはずだ。いや、なんとかする」

根拠のない自信を吐き出し、テーブルに手をついて抗議する。熱くなっているハルにため息をつく、あきれると言うよりは嬉しそうにカレンが言葉を紡いだ。

「それが強がりなのよ。いい？ アンタは私たちが意地でも守る。このガラクタからも、ハチっていいいけ好かないガキからもね。だから、アンタが気を遣う必要なんてないのよ。もちろん、強がられても困るわ。アンタのすべきことは、こつよ」

ハルの鼻先に五本の指を立て、指折り数え始める。

「黙って従って、黙って守られて、黙って自分の心配して、黙って安心して、最後に私たちのことも黙っていればいい。だから、アンタは素直に私たちに守られなさい」

五つ数えた握り拳で、ハルの胸を軽く小突いた。

「それぐらいの強さは、私にもうるわにもある。少しは信頼しなさいよ」

仏頂面のハルの肩に手を置いて、自信満々。

「ま、上層部からの命令でもあるし、守りきってみせるわよ」

不敵に笑う。

カレンの形の良い唇。長いまつげ。
小さい鼻と、細く描かれた柳眉。

ハルはその全てで構成される笑みに、初めて、心からの笑みで返したいと思った。

「カレン」

声が静かに広がる。

それは、うるわの柔らかい発声だった。

「それが正しい強がり方です」

雪解けの隙間から、新芽が芽吹く。

そんな風景を思い浮かべてしまうほど、ふいのうるわの微笑みは色鮮やかだった。

「カレン、私は嬉しい。いえ、それだけではない……とても誇らしいのです。自分のためではなく、誰かのために強がるカレンを見ることができて、そして、そんなカレンのメイドでいられて」

うるわの声が浸透するにつれて、朱を帯びていくカレンの頬。

ハルの肩に触れている手を慌てて引っ込める。

「そ……それが私たちの、し、仕事でしょうが。珍しく感情を見せるんじゃないわよ、調子狂うじゃないの」

自然とハルに触れてしまった手。

その手をこねながら、カレンは金色の髪の毛を振り乱し、明後日の方向を向いた。

「ねえ、ハルー、何ぼーっとしているの？」

「してない。ぼーっとなんかしてない。断じて」

「ふーん、顔、赤いよ？」

「赤くない。赤くなんかなくてない。断じて」

講師うるわは、バラバラになってしまった場の雰囲気を組み合わせてるように咳払いをする。

「ナナ、今あなたがハルを襲う意思がないのは分かりました。これは私たちにとっては僥倖といえます。残る敵は八手だけとなりましたからね。そこで肝心要の対策ですが……」

会議に戻ってきたハルとカレンが、うるわの視線を受け止める。

「時間の問題でしょう」

「何よそれ？」

「ですから、時間の問題なのです。今日かもしれないし、明日かもしれない」

「意味分らないんだけど」

「覚えているでしょう、カレン。マルチメディアビルの件。私たちはなぜ、ナナと戦闘に入ったのか、ハルを発見することができたのか。行き当たりばったりでしたか？」

「ふーん、そう言うことね」

疑問が氷解し、優雅に紅茶をすする。

「なんだ？　どういうんだ？」

いまだに理解できないハルが、うるわとカレンを交互に見やる。
ナナはにこにこ顔のまま、滑稽なハルの顔を楽しそうに眺めている。

「古代兵器同士は引かれあうのよ。例外なくね」

頬杖をついたまま、カップの縁を指ではじく。

「御名答です、カレン。《彼岸》であるならばなおさらです。さらには、ここにはおあつらえ向きにナナもいます。同じ《人機》であるならば発見はなお容易でしょう。要するに、私たちには選択権もなければ、拒否権もないということです。私たちは受け身でしかいられません。ゆえに、二十四時間態勢で邀撃できるように備えなければいけないのです」

頬にかかる黄金の髪を乱暴に払う。苛立ちを隠すつもりはないようだった。

「そ、うるわ参謀の言うとおり。あつちには自分の都合でいつでも仕掛けられるって訳。言い換えるならアポなしって感じかしら。女性に嫌われるタイプね」

「ええ、私も嫌いです」

「ねえねえ、ハルも？　ハルも嫌い？」

眉間にしわを寄せて体を緊張させる。

これからは訪れる一分、一秒を危険に備えなければいけないのだ。

「……ああ」

「にやつ！　じゃあ、ナナも嫌いー」

ハルに向けてびしっと手をあげ、気持ちよく宣誓する。

ハルは無垢なナナの意思に、この世からいなくなった愛猫アルフレードの姿を思い出す。

寂しいとき、悲しかったとき、そつとドアの隙間から入り込み、足下に寄り添ってきた。居眠りをしてしまつて目覚めたときには、いつも隣で丸くなつて眠っているアルフレードがいた。美しい毛並みが上下に動いている。

生きている。呼吸している。

丸まつた背中にとつと触れると、温かさが染みこんできて、寂しさはどこかへ飛んでいった。

「にゃ……」

ハルはナナの頭を撫でてやる。

そのひたむきな純粹さに感謝するように撫でた。

ナナは目を閉じて、ハルの手の感触に感じ入っているようだった。

……そこに物音が飛び込んでくる。

わずかに空気が動くような気配がして、ハルは思いつく最初の単

語を口にした。

「……………マキ？」

探し人を求める声は、がらんとした家に空しく消えていった。
扉の外に出たが、そこにあるのは虚空と無音。

「ハル、どうかしたのですか？」

「何よ、敵でも来たわけ？」

「ハルー……………にゃ？ 何もないよ？」

そばに寄ってきたナナが、扉の外をきょろきょろと見回す。

「いや……………気のせいかな」

ため息。

差し込む朝日のコントラストの中、微細なほこりが空中で光り輝く。

際だつほこりが揺らいでいた。

第三十二話・「心の隙間」

マルチメディアビル崩壊事件から、一週間が経った。

紙面もその事件ばかりで削っていらなくなり、日を増すことに減っていった。今ではほとんどのメディアが大物政治家の収賄事件をトップニュースに持ち上げだしている。

「……何をやってるんだ、俺は……分かっているのに」

ハルはマキの部屋の前に立ち、扉をノックしようとする手を止めていた。

自嘲するようにきびすを返し、階段を下りていく。

「これで、何日目だ……？ マキがいなくなつて……」

マルチメディアビル崩壊事件は、崩壊の規模に反して、けが人が数人という奇跡的なものだった。もしこれで何百人という人命が失われていれば、もう少し事件は長引いたのかもしれない。

加え、おそらくはカレンやうるわがしばしば口にする、上層部が沈静化をはかったのだろう。事件は驚くほど簡単に原因究明がなされ、あつと言う間に集束していった。

「ハルー、ハルー」

事件の当事者の一人が、ぱたぱたとかけてきて、ハルの懷に飛び込んでくる。

「ナナね、カレンに勝ったの！」

ティーシャツに短パンという活発的な出で立ちがハルの胸の中ではしゃぎ出す。

「……そうか、それは良かったな」

花咲くような笑みをたたえて見上げられるが、ハルはその喜びを分かち合う気にはなれない。

ナナの喜びとは別の次元で、心の奥に何かが引つかかっているようにで気持ちが悪かった。

「待ちなさい！ このポンコツ兵器！ いい？ 手加減してやったのよ！ アンタの勝ちじゃないんだからね！」

勢いよく客間から飛び出してくる。

フリルのついた黒ワイシャツと白いレースが縁取る黒のミニスカート。相変わずのゴシッククロリータはカレンだ。手には無線のコントローラーが握られており、慌てていたのか眼鏡がずり落ちている。

カレンはブリッジを持ち上げて焦点を正すと、コントローラーをナナに突きつけた。

よく見れば、ナナの手にも同様のコントローラーが握られていた。

「勝ったのは一回じゃないもん！ 三連勝だもん！」

「ふん、私が本気になればアンタなんて、こてんぱんのけちよんけちよんでスクラップで粗大ゴミ送りなんだから、身の程を知りなさいよ、身の程を！」

耳をすませば客間からはスタジアムの歓声がもれ聞こえてくる。どうやら流行のサッカーゲームに興じていたようだ。試合後の実況によると五点差をつけられての大敗らしい。

「それに、チームによって力の差があるんだから。ポンコツ、アンタは手加減されているってこと自覚しなさいよ」

「それでもナナの勝ちだもん！ 三連勝したもん！ ハルー、カレンが見苦しい言い訳するよー、大人げないよねー？」

「ああ、悔しがってるんだろ？ カレンは負けず嫌いだからな」

「馬鹿言ってるんじゃないわよ！ アンタ私の、真の、实力を知らないわね？」

「それなら、知ってる。ナナより弱いんだろ？ うるわは一番上手いし、俺はその次だ。一番弱いのはカレン。改めて勝負するまでもないな」

「ふふ……ふふふ……アンタ達まとめてあの世に送ってやるわよ」

スタジアムの歓声に混じって、壁をひつかくような風切り音が聞こえ始める。カレンの髪の毛がふわりと揺れ、肌をぴりぴりとした緊張が包み始める。

「にや？ カレン、やる気？ だったらナナも負けないもんね！」

ハルをかばうようにして前に出ると、くるりと一回転。モザイク画像のようにナナの服装が乱れたかと思うと、直ぐに黒いレザースーツ姿に変身……は出来なかった。

「にゃ？ ……セーフモードで起動してるの忘れてた」

「やっぱりポンコツね」

「むむう……ドローピングしなきゃ勝てないくせに！」

牙をむき出しにして、挑発しあう二人。

カレンに熱がこもる度、風切り音は加速し、フローリングがへこみ、壁にかすり傷をつける。

「まだ体調は万全とはいかないけど、このままでも十分余裕よ」

「にゃ！ それは負けたときの言い訳だねっ！」

カレンが巻き起こす風の余波がハルの前髪を巻き上げる。

ハルはそれをまるで他人事のように黙って眺めている。

家の内装が傷つこうが、汚れようが、特に気にならない。それは不思議なことだった。

「馬鹿ですか、あなたたちは」

炸裂したのはげんこつだった。

木魚を叩くような二回の盛大な音のあとには、屍が二人。

カレンは頭を抑えてうずくまり、ナナは頭から煙をあげて伸びている。

「……仮にもメイドが暴力振るうわけ？」

「仮にはありません。メイドです。それに、何度言っても聞かな

い主人には愛の鞭というものです」

「……ふにゃあ……ハルが二人に見える……視覚が故障したかも……」

「ナナもカレンを挑発するのは止めてください」

無表情のまま腕を組んで、はいつくばる二人を見下ろす。
これでは誰が主人で誰がメイドなのかは分からない。

「ハルも……二人を止めていただかないと困ります」

「悪い、うるわ……」

うるわの目に寂しそうに微笑むハルが映り込む。

上層部の特命で取り付けられた一時的な主人は、どこか不器用でぶっきらぼうな反面、小さな優しさに溢れていることを知った。ただ彼はそれを素直に表に現せないでいるだけなのだ。

「俺がそうしなくても、うるわが止めてくれると思ってた」

そんなハルが、ふいに寂しそうな一面を見せるときがある。今がそうだ。

長い前髪の隙間からのぞく、曇った瞳。まるで彼自身、過去に大事な物を置き忘れてしまったかのように。うるわはときどきハルの寂しそうな姿を見つけるにつけ、自身でも不明の衝動に駆られてしまつを感じていた。外敵からハルを守る以外で何ができるかも分からないのに。

その度にくるわは戸惑う。

「……わ、私は忙しいのです。余計なことで労力を使わせないでいただきたいものです」

無表情がかすかに崩れる。うるわはその場から逃げるように話を中断させた。

「掃除の邪魔です、お二人とも、こちらで納得がいくまで勝負なさって下さい」

エプロンドレスにはかすかな汚れ。ポケットにはたき、廊下にぞうきんが置いてあることから、どうやら掃除中だったようだ。

うるわはカレンとナナの首根っこをむんずとつかんで、荷物よろしく客間に引きずっていく。

うるわに乱暴に引きずられながらもいがみ合う二人は、結局最後までコントローラーを手放さなかった。

「ちょっとナナ！ そのチーム使うの反則よ！」

「いいんだもん！ ナナが使いたいんだもん！ カレンはナナに負けるのが怖いからそんなこと言うんだ」

「ば、馬鹿なこと言ってるんじゃないわよ！ そんな資本主義チームなんてね、格下のチームで葬ってやるわよ。時代は生え抜き、後でほえ面書くんじゃないわよ！」

客間からは騒々しい声の応酬が聞こえ始める。

「今のどう見てもファウルでしょ！？ 何で流すの審判！ レッドカード出さないよ！ レッド！」

「……。……ナナの時代 にゃ！」

客間から、ゴールを告げる高らかな実況の声。

「馬鹿じゃないの！？ キーパー！ それぐらい死守して見せなさいよ！ 男でしょ！？ 私だったら止めてるわよ！ そんなへなちよこシュート！」

ハルは客間の喧騒にため息をつきながら、自室に戻ろうとする。

「……ハル」

客間から出てきたうるわがハルを呼び止めた。
ハルはうるわを振り返り、無表情を見つめる。

「マキと何かあったのですか？ この家に来てから、彼女の姿を見ていません」

「別に、何もない」

話は終わりとばかりに、階段を上ろうとする。

「ハル……お許し下さい。私はあなたのことを色々と調べなければなりませんでした。現状、過去……その他色々なことを」

うるわの平板な声が揺らぎを伴う。

それは表情にも現れ、無感情に苦しさという歪みが生じた。

「マキは、一度この世を去っているんですね」

「……」

「ハルが《彼岸》を起動させたのは、マキを」

「うるわ」

そのあまりにも冷たい声に、うるわの肩が震えた。

ハルと一つ屋根の下で生活を共にするようになってから、一番温度の低い声だった。

「うるわには、関係ないだろ？」

階段に一歩足をかけ、肩越しに微笑んだ。

微笑むと言うよりはあまりにも壊れかけている。

築き上げてきたと思った物が全てかりそめのもので、それがかりそめであると白日の下にさらされ、挙げ句の果てには瓦解していく。

うるわが感じた冷たさは、拒絶と言えるものだった。

「ナナの勝ちー！ 四連勝！」

「て、手加減！ 手加減したのよ！ 私は大人なのよ、アンタなんかに負けたって、ポンコツなんかに負けたって……悔しくなんか、悔しくなんか……！」

「にゃ、ハルに報告しに行こうつと！」

「……待ちなさいポンコツ。黙ってコントローラーを握りなさい。今からアンタがが待ちに待った私の隠された力を見せてやるわよ！」

「にやう……カレンは、もう何も隠してないような気がする」

別世界のように明るい風が、凍り付くようなハルとうるわの間を流れていく。あまりにも対照的な世界だった。

うるわには、二人の間を流れる嬉々とした風が、そのまま二人を分かつ絶壁になっているようにさえ感じられていた。

「ハル……私はメイドです」

「ああ」

背中を向けたハルが、前髪で目元を隠す。

「メイド・イン・ジャパンという肩書きの無力さを今日ほど痛感したことはありません。私は、主を……ハルを助けられないでいる。それどころかハルを不快な気分になえ」

「うるわには助けてもらってる。感謝するのはこっちのほうだ」

階段を一步、また一步と上がり、ハルの体が遠ざかる。

……会話はそれで終わりかと思われた。

「ハルの……心の隙間を埋めることはできないのですか？」

うるわは自分でも信じられないほど強く、エプロンドレスのスカートを握りしめていた。
うつむいたままのうるわの声。

切実に、真摯に。

二つの思いがハルを引き留めようとする。
ハルには、はっきりとその感情が聞こえていた。

「ハル、待つのはもう止めましょう」

決意表明をするかのようにうるわが顔を上げた。
勇ましい足取りで、階段に足をかける。

「《彼岸》を巡る私たちの戦いも」

階段をハルのいる高さまで上って来ると、ハルの手を取る。

「ハルにとってのマキの存在も」

「……うるわ」

「受け身ではいけないのです。少なくとも私はそう思えるのです」
おかつぱの髪を揺らして告げる。

「マキを探しに行きましょう」

心の奥に引つかかっていたもの。引つかかったまま、いつかはそれが取れるだろうと待ち続けること。

確かにいつかは取れるのかもしれない。

……でも、取れないかもしれない。

一方で、マキが帰ってくることを待ち続けること。

やがては帰ってくるかもしれない。

……でも、帰ってこないかもしれない。

父と母が発掘調査で行方不明になり、愛猫のアルフレードを失い、一度はマキさえも失った。

幾度も訪れた悲しみ。それらをこらえ続けること。

いつかは悲しみも消え去るのかもしれない。

……でも、消えないかもしれない。

「行きましょう、ハル」

「それはメイドとして……？」

「うるわとして、です」

うるわの一途な瞳が鮮烈な光を蓄えていた。

そのまぶしさに、ハルは思わず前髪で表情を隠す。

昔からの悪癖。気がつけばそうしてしまう、都合が悪ければそうしてしまう悪習だった。

「さあ」

うるわはそのハルの前髪を優しくかきあげ、頬に手を添える。

隠さないで、ハルはそう言われた気がした。

押さえ込まないで、抱え込まないで、そう言われた気もした。

勘違いかもしれない。勘違いだろう。

しかし、ハルはそれでもいいような気がしていた。

「行きましょう、ハル」

うるわの堅固な意思の瞳は、蒼穹に輝く太陽の如く。

「探しましょう、ハル」

まるでハルの瞳をおおっていた曇天を晴らすかのように。

「やあ」

ハルを見つめ続けていた。

第三十三話・「……雨が降るかもしれません」

自室。

鏡で自分の顔を見るハル。

ハル自身でも固いと思えるほどの無愛想。作り笑いをしようとするが、それは単に引きつっているだけだった。長く伸びた前髪と、切れ長の眼。一重まぶたがより眼を陰のあるものになっている。ハル自身背が高いこととその顔つきもあってか、誰もハルには寄ってこない。普通にしているだけでも不機嫌だと感じ取られてしまう。それでも、それだからこそ、そんなハルに話しかけてくれる数少ない人を大切に思える気がしていた。

「……」

両親を失い、愛猫アルフレードを失い、マキを失った。

一人になってしまったはずなのに、一人で過ごしていかなければと覚悟していたはずなのに、まるで誰かがそうさせまいと画策するが如く、突然、周囲は喧騒に満ちあふれた。

うるわ、カレン、ナナ……そして、マキ。

たった一週間の内に、騒がしくなった身の回り。現実から逸脱した騒がしさに面喰らいながらも、ハルはそれらを巻き起こす彼女たちとのやりとりに、なぜか心が満たされていくのを感じた。

なぜだろう、それはとても温かった。

冷え切った心身が解きほぐされていくようだった。
心身を溶かすもの。

くすぐったくて、懐かしくて、それでいて温かいそれは何なのか。
その答えはまだ見つかっていない。

黙っていても見つからないような気がした。ここにも答えは見つからない気もしていた。
そしてそれは、案外直ぐ近くにあるような気がした。

「……よし」

襟を正し、ハルは自らの両手で頬を打った。根拠のない思いこみを否定しようとするネガティブな自分の心を叱咤するために。

最後に、鏡の中の自分をにらみ付けると、ドアに向かう。

その途中、机の上に置いてあった白色のカプセルが目についた。
ハルはそれをひつつかんでポケットに入れると、ドアを開ける。

「うるわ……」

驚くハルの目の前には、うやうやしく一礼するメイドが一人。

「行くんですね、ハル」

「……うるわ、これは俺の問題なんだ。俺一人で」

うるわの横を素通りしようとする。

「ハルは勘違いなさっているようですね。私は夕食の買い出しに行くのですよ。決して、ハルと同行しようなどとは思っていません」

手に持った買い物かごを掲げてみせる。

「……」

「ですが万が一、歩く方向がハルと同じであるとすれば、それはものすごい偶然ということになりますね。時に今日は絶好の散歩日和。スーパーまでの道中、寄り道もいいかもしれません」

淡々と、無表情。

ハルが面食らったような顔つきになる。

「偶然とは恐ろしい物です。万が一といえど、確率は存在するのですから」

「そうか……なら仕方がないな」

「そうです。仕方がないのです」

「仕方ないな」

「仕方ないのです」

「偶然だもんな」

「偶然なのです」

「……」

「……」

無表情を貫く二人の間に、どちらともなく小さな笑いがこぼれた。

玄関に向かう途中では、相も変わらず、カレンとナナがゲームに興じている。

うるわは客間に顔を出すと、二人に声をかける

「ナナ、カレン、私はハルと夕食の買い出しに行ってきます」

「あつそ、行つてらっしゃい」

「にゃ！ ナナもハルとお出かけする！」

ゲーム中にもかかわらず、コントローラーを放り出そうとする。

「ポンコツ！ 負けそうだからって逃げるんじゃないわよ！」

カレンがナナの襟首をぐいっと捕んで引き寄せる。首を絞める形となったのか、ナナが苦悶を漏らす。

「にゃうっ！ ……カレン、負けず嫌い。前半だけでナナ、カレンに三点差つけてるよ」

「これからよ、これから。勝負は下駄を履くまで分からないってね」

「……ナナ、カレンになら下駄を履いても勝てる気がする」

「言ったわね？」

ナナに鋭い視線が突き刺さり、客間の空気が鋭く動き出した。
見れば、カレンの袖が揺らめいている。

「二人とも、留守番しててください。もしもその間、家の中で何かが壊れていたり、一カ所でも傷がついていたりすれば……夕食は抜きです。よろしいですね？」

「……わかった」

沈むナナの隣で、カレンの袖が動きを止める。

「分かったわよ、うるわはここに来てからますます小姑になったわね」

「……余計なお世話です」

眉をぴくりと動かすうるわ。

「ねえ、うるわ、今夜の献立は？」

「カレーライスの予定です」

「たまにはいいわね」

「ナナ、カレー大好き！」

納得するようにうなづくカレンと、挙手しながらよだれをこぼすナナ。

「では、行ってきます」

ゲームに舞い戻る二人に声をかけ、うるわは玄関口で待つハルと肩を並べる。

「行きましょう、ハル」

「ああ、行こう」

玄関の外は神々しい光に溢れている。騒ぎ出す体に従うように、ハルは外へと駆け出していく。疲れるそぶりも見せず無言でハルの後を追隨するうるわ。

ふと、うるわが遠く山際の空を見やる。

「……雨が降るかもしれません」

天気予報を覆すどす黒い雨雲が、青空を浸食しようとしていた。

第三十四話・「あの馬鹿妹……！」

もう一度だけ、もう一回だけ。

町中を走り回るハルの頭の中では、ずっとこの言葉が回っていた。しめやかに営まれていたマキの葬式。白と黒で配色されたホール。喪主となったハルがたった一人で葬式を取り仕切っていた。

バックグラウンドでかかっていた音楽はマキが生前大好きだった曲だった。アコースティックギターで弾き語るアーティストのしゃがれた声が、もの悲しさをいっそう膨れあがらせた。

「ハル、休みますか？」

「……いや、いい」

かれこれ三十分以上走り続けている。

その間中、あてもなく町中に視線をさまよわせ、適当な路地を曲がり、赤信号の横断歩道を駆け抜け続けた。海にまでつながる一級河川。それを渡す町一番の大橋を走破する。息つく暇も惜しんで才フイス街へ。

約束の場所だとか、思い出の場所だとか、そんな都合のいい場所なんて存在しない。

思い出は町中に溢れている。

どれが一番だとか、決めることは出来ない。

それでも、あえて順位付けをするならば、どれもがベストで、どれもがワーストだ。

思い出そうとして初めて解き放たれる小箱。

頭の奥に存在し、大事にもせずに無造作に放り込まれてある思い出。

その中に必ずといっていいほど映っている、赤い髪留めをした栗色髪の少女。

ハルは闇雲にその少女を捜し続けていた。

……なくなるまでは、それが大切なものだったなんて気がつくことができなかった。

騒がしくて、しつこくて、扱いにくくて……全てひっくりくるめて迷惑千万極まりない。

そう思ったから、何度も何度も叱ったし、叩いたし、ぞんざいに扱ってしまった。後悔はない。言葉で言っただけだから、手をあげてしまうのは当然の成り行きなのだ。

毎日そんな風だったから、日常に疲れて、いい加減に抜け出したと思うようにもなる。本当は大切な物も、大切とは思えなくなっていく。

たとえ一度失い、大事であることに気がついて、再び失ったものが手元に戻ってきたとき……また同じ日常が繰り返されるとなれば、大切に思う気持ちはもとの路線に戻ってしまう。

……戻ってしまった。

「マキ……！」

何がしたいのかも分からず、開口一番の言葉も用意せず、ハルはただ探し続ける。

「あの馬鹿妹……！」

ある時、マキが風邪をこじらせた。

肺炎と診断される一週間前の出来事。

お兄ちゃん、マキはふらふらです！　どうかお兄ちゃんの温もりでマキを癒してください！　理想的なのはですね、え〜と……ベッドで横たわるマキのおでこにお兄ちゃんのおでこをくつつけて熱を測るんです。熱が高いと分かったお兄ちゃんは、マキのためにおかゆを作ってきてくれて、レンゲスプーンでふ〜ふ〜してくれた後に、こう言っんです。はい、あ〜ん、して。あうう……考えただけでのぼせてしまいそうです。

その後、無理がたたって倒れるのだが、そのときのマキはそんなそぶりを見せることはなかった。気丈に振る舞い続けた。

病人が健常者のふりをするのではなく、健常者が病人のふりをするように見えたから、ハルは気がつくことができなかった。たいした役者根性だ。

そうして、お兄ちゃんの愛情料理で身も心も温まった後は、マキがかいた体中の汗を、体中の汗を……お、お兄ちゃんがタオルで丹念に拭ってくれるのです……！　もう、お兄ちゃん、さっきからそこばかり拭ってるよ？　……あつ……ん……お兄ちゃん、なんか触り方がやらしい……なんて！　なんて言っちゃったり！　もう！　お兄ちゃんのえっち！

四十ほどの熱がある人間が、こんな台詞を吐くことが出来るだろうか。反射的に空手チョップで迎撃してしまったが、それでもマキは懲りずに追いかけてきた。
それはもう、楽しそうに、嬉しそうに。

「ハル、何がそんなに楽しいのですか？」

空の買い物かごを小脇に抱えながら、うるわが問ってくる。

「……ん？ 何のことだ？」

「さっきからずっとにやついていましたから」

ショーウィンドウに映る自分の顔を見てしまうハル。

「そ、そうか」

「マキのことですか？ 彼女のことを考えていたのですか？」

「……別に、そんなんじゃない」

ぶっきらぼうな言葉を置き去りにする。

「では何を考えていたのですか？」

「……」

「ハルは素直ではありませんね」

肺がフル稼働しているハルに比べて、うるわはまるで座禅でも組んでいるように落ち着いた声だ。同じ早さで併走しながらも、圧倒的な体力の差。

さすがメイド・インの称号は伊達ではないと言ったところか。

通り過ぎていく人並みを見れば、エプロンドレス姿の少女目を丸くし、メイド・イン・ジャパンだと気がついた人は、通りで黄色い声を上げている。

「でも、ハルのそういう不器用なところは」

追いかけてくる者もあるが、体力が続かないのかあきらめてしま
う。

「私は嫌いではありません。むしろ、親近感すら抱いてしまいます」

青になった中央交差点。四方から中央へ流れてくる人並みを、い
の一番に駆け抜ける。

「親近感？」

答えはない。

そろそろ限界を迎えたハルは、立ち止まって振り返る。

何車線にもなる車道の先には都市一番の駅がある。遺跡産業で発
展した都市らしく瀟洒な駅。外観はまるでコロセウム。天井はガラ
ス張り近代的な作り。天井から採光するので、太陽がさんと
輝くときには、それはそれは幻想的な光が駅内に降り注ぐ。

遠くに来たものだなど、一息つくハル。

「
こんな話があります」

心拍を感じながら、うるわの声に耳を傾ける。

「あるところに一人の少女がいました。その少女は表情を作ることが不得意でした。不得意でしたけれど、それを悔いることもありませんでした。感情的にならなければ争いごとやめ事は起こらない。全てがフラットな関係でいられるからです」

働く町。オフィスビルに囲まれる真ん中で、うるわとハル、二人だけが足を止めていた。

「でも、ある時少女は、一人のメイドと出会います。そのメイドはいつも笑顔でした。主に尽くすことに、喜びを感じていました。粉骨碎身を尽くして誰かのために尽くすこと、それを己の喜びとすること。そこには争いごとなど無く、ただ笑顔だけがあつたのです。少女はそのメイドを見て思いました。私もメイドになる、と。少女が見たメイドのように笑いたいと」

おかつぱ頭の上で光る純白のカチューシャ。

「そして、数年後……少女はメイドになることができたのです」

うるわの表情は、今日も今日とて無表情。間をつなぐように遠雷がビルを震わせる。

どす黒い雲が遙か空の向こうに集結しつつある。

「……そっか、よかった。でも」

天気は急な下り坂になるだろう。すれ違うサラリーマンがそうつぶやいていた。

「その少女は、今、笑えているのか？」

頭をぼりぼりとかいて、目をそらすハル。

「ハル、あなたはもう思うのですか……？」

長い前髪が風に揺れている。その隙間からうるわの黒い瞳を見る。思わずうるわの笑顔を想像したハルは、とたんに顔が赤くなる。

笑い声が出るほど、うるわが笑えたなら。見ることが出来たら。その可愛らしさにきつと正面切って見ることは出来ないだろう。このエプロンドレス姿の少女にとって、クールビューティーさも魅力の一つではあるけれど。

笑顔はきつと、もっと魅力的なはずだ。
隠された魅力。それはどんな秘宝も及ばない。

そんな笑顔を、一度だけでもいいから見てみたい。

そう願ってしまう。

「……む、無表情にも色々あるだろ」

酸欠のせいなのか、今頃痛み出す頭を振って、ぼそり。
背中を向けて、歩いていってしまう。

「ふふっ……不器用なハルらしいです」

そして、うるわは自分の口を慌ててふさぐ。

「私、今……ハル？」

距離のあるハルに確認の問いかけをするが、ハルは気がつかない。うるわを置いてどんどん先に行ってしまう。

「……ハル、あなたは不思議な人ですね」

一步を踏み出し、誰に言うでもなくひとりごちる。

ハルに追いつこうと足早になるうるわが、買い物かごを抱え直す。

「ん？ 何か言ったか？」

そのハルの前を横切る一匹の黒猫。

湿気が増し、にわか雨でも降りそうな雰囲気の中、ハルはふいの闖入者に頬をだらしなくさせている。

「猫……やはりいい」

立ち止まっとうんうんとうなっている。

つんとした態度で横切る猫が、空を見上げた。猫が何かに反応するように毛をびくりと逆立て、植え込みに隠れる。名残惜しそうに肩を落とすハルの周囲を、黒い影が覆い始めた。

「……雨が降るのか？」

影は次第に濃くなっていく。

ハルは手を広げて、頭上を見上げた。

それは確かに雨だった

銃弾の。

「ハル！」

爆音と共に、弾丸がアスファルトに突き刺さり、粉みじんにしていく。

周囲の人々の悲鳴がビルにこだまする。

はげたアスファルトに着地したのは、黒いスーツ姿の少年。
時間差で降ってくる薬莢が、少年の周囲をきらびやかに彩る。

まるで黄金の雨の如くに。

「挨拶もなしとは……失礼な人ですね」

ハルを背後に隠しながら、うるわが構える。

「そうかな、僕はそうは思わないよ。だって約束していないし」

ガトリングガンに変化させた腕を元に戻しながら、《人機》ハチは、軽薄な笑みを浮かべた。

第三十五話・「いかなる時も、冷静・笑顔・優雅であれ」

「確かハチと言いましたか」

「そう言う君はうるわだね。そして、その主《彼岸》を持つ者ハル」

「俺を知ってるのか……？」

腹に力を入れて、何とか言葉を吐き出す。銃弾の雨にさらされて萎縮した体を、次に起こりうる厄災に備える。そのためには何でもいい、緊張をほぐさなければいけない。

ハルはそう考え、拳を開いたり閉じたりしていた。

「それもう、否応なく知っているよ。《人機》であれば否応なしに相手の情報を知ることになるんだ。組み込まれた学習機能と情報収集能力はなかなかすごいよ。故人は言ったものだよね。敵を知り己を知れば、百戦危うからず。無意識のうちに僕の体にプログラミングされているんだから。お父さんに感謝しなきゃ」

胸に手を当てて感謝の意を示す。ハチが念じる先は、遙か古代に存在した父の面影だろうか。

「……確かに。いまだ解き明かされることのない古代の文明の科学力であれば、それも可能でしょう。せいぜい私たちが知りうるところと言えば、八体ある《人機》で、最後に作られたこと。至高の兵器で最重要機密。自立型の単独兵器で、思考性も備える。あまつさえ自己修復機能付きで、オールラウンドで対処できるように設計されたことぐらいでしょうか」

間合いを計りながら、うるわは周囲の地形を把握している。

街路樹、車道、オフィスビル、背後に立つハル。

その全ての配置を頭にたたき込む。

「なんだ、機密がただ漏れじゃないか。まったく、ナナときたらこれだから困るよ」

「その余裕……知っていて野放しにさせたのですね」

「余裕？ 野放し？ 違う違う」

肩をすくめてうるわを見る。

「障害は極力少ない方がいい。僕はどちらかというと合理的な人間なんだ。好きこのんで苦勞する主義じゃないよ。つまりは、楽な道を選んだんだよ」

「……それはどういう意味ですか」

うるわの背後に控えるハルの肌が焼け付くようなプレッシャー。

放つのはハルの目の前にいるうるわ。おかっぱ頭が逆立つような錯覚。

それは東大寺南大門に立つ運慶、快慶の傑作、仁王像の髪の毛を思わせる。

「分かっただけで聞くかな？ 普通。でもいいや、ハルは理解していないようだから教えてあげるよ」

黒いスーツをまとう少年が嗤う。

「君では僕は止められない。役不足。そして、僕にとってはそれが好都合なんだ」

少年の肩から先が鋼色に染まっていく。

右腕が膨張を繰り返し始めると、そこからはおおそ現実ではお目にかかれない兵器の数々が、飛び出しては吸い込まれていく。

やがて腕の先に雫のようにたまると、八子の腕から鋼色の固まりがちぎれ、落下する。

足下のコンクリートに吸い込まれていく水銀のような鋼の液体。

「……あなたは、身をもって知ることになるでしょう」

うるわの声は氷のように冷たい。

「メイド・インの名は、虚飾ではないということ」

「僕も見せてあげるよ。《人機》がどれほどのものかをね」

それが、二人の宣戦布告だった。

ファーストアクションは八子。

指をぱちんと鳴らすと、地面から巨大な腕が生えてくる。

どういう構造でそうなったのか。考えても理解できない。

アスファルトと砂で作られた腕の中には、血管のように配線が混じっている。それが激しく脈打って、生きているように動き始めたのだ。

「ハル、いいですか？ 私から離れては駄目です。ハチの狙いはあなたですから。私はあなたを守護します。そう……最大の犠牲心を持って奉仕します」

うるわの瞳に決意の灯がともる。

ハルは、その声に覚えがあった。うるわが一時的にせよ、ハルと主従関係を築いた日。自分が世界に名だたるメイドであることを自負するような。あるいは、大切なものを投げ打ってでも守ろうという、最大の自己犠牲精神を主張するような。

小さな体に宿る、大きな責任。

「来ます！」

車一つを簡単に押しつぶせそうな拳が、ハルとうるわの頭上を襲う。

地面から生えた腕は、アスファルトにひびを入れる。

街路樹が揺れ、車が揺れ、地面が揺れた。

街路樹から落ちる葉の間を縫って、うるわは地面に突き刺さる標識を引っこ抜く。雑草を引っこ抜くようにあっさりと。

「ハル、知っていますか！」

凜としたうるわの声が路上に響く。

「な、なんだ!？」

殴りつけてくる巨大な腕が、街路樹をなぎ倒す。ハルは地面を転がりながら難を逃れ、うるわを探す。

声の出所は、巨大な腕の根本。うるわが標識を腕に突き刺すところだった。

「メイド・イン・ジャパンは武器の携帯を許されてはいません！」

「それが、どうしたんだ!？」

標識の根本がずぶずぶと巨大な腕に突き刺さっていく。

うるわは貫通したのを確認するや、バックステップで腕から離れる。

一撃して離脱。迅速かつ的確な攻撃。

「メイド・インの称号を持つ者は、各国の首脳や最重要人物を主とし、守護します。それはつまり、それだけメディアへの露出も多いということ。物騒な獲物は視聴者の目の毒にかなりませんか」

巨大な腕が痛みによがるように暴れ出す。

「『いかなる時も、冷静・笑顔・優雅であれ』メイド・インたるものは、臨機応変に対処できなくては一流とは呼べないのです。会食時にはフォークですら武器にしますし、ベッドでは脱ぎ捨てた下着さえ武器にします」

ハルに向けた背中が語る。

「武器は携帯しないのではなく、携帯する必要がないだけ。メイド・インは存在そのものが武器であり、刃なのですから」

刺さった標識を引き抜くことも出来ずにその巨体を揺する腕。それを見てため息をつくハチ。

「じゃ、僕がその刃を折るしかないね」

スーツが地面を加速する。

巨大な手の根本から駆け上がり、頂点に到達すると、すぐさま跳躍。

背中から鋼が生えたかと思うと、それは中東でよく見る対戦車用ロケットランチャーに形作られる。

ハチは楽しそうにそれを引きずり出すと、目標をハルに定める。

「RPG!？」

ハルの叫びと同時。

砲身から発射されるやいなや弾頭が点火。白煙を伴って一直線にハルに向かっていく。ハルは路上駐車していた自動車のボンネットを飛び越える。

着弾、発火。

大爆発を起こした自動車が炎をまといながら空中を回転する。爆発の余波に体をもんどり打つハルが、柔らかいうるわの腕に抱かれる。

「いい判断でした、ハル」

声が耳に入るとなぜか体に力が戻る。転がってきたハンドルをうるわが打ち払う。

「ですが、安心するのは早いです」

うるわの視線の先を見るまでもない。

ハルは体をうるわの腕の中から起こして、地面を蹴る。巨大な腕から引き抜いた標識を今度はハチが投げ返してきた。

ハルがいた場所に突き立つ標識。

命からがらとはこのことか。ハルは背後を振り返る余裕もない。

「逃げられるとやっかいだからね。もう少し、難易度を上げるよ」

両手を同時に膨張させて、対戦車用ロケットランチャーを両手に作り出す。さらに巨大な腕がどんどん地面からはい出てきたかと思うと、とたんに真つ二つに折れて転がる。

「準備、オーケー。頼むよ、僕の欠片」

四本足の蜘蛛のような兵器へと変貌する腕の残骸。

命令を聞き届けたのか、車をはじき飛ばしながら、ハル達を追いかける。

例えるならば、機械の蜘蛛。

つま先は鋭利な金属そのもので、車のボンネットを容易に貫いて突進していく。

乗り捨てられた車であふれかえる道路を横切るハルとうるわに、さらなる追い打ち。

次から次に発射されるロケット。

路上の自動車が次々に爆発していく。

ハルとうるわはその間をジグザグに駆け抜け、頭を低くして爆風をやり過ぎすしかない。

自動車爆砕、回転し、地面に叩きつけられる。ガソリンに引火し、さらなる爆発。窓ガラスがはじけ飛び、ハルの頬を傷つけた。真っ赤な炎が頬を焼き、飛ばされてくるドアに足下をすくわれて転びそうになる。

それを見て嘲笑するハチが、スーツの裾を揺らして舞い上がる。次から次に現れる携行対戦車弾は、旧式であつたり、最新式であつたりとまちまちだ。

今取り出されたるは、レーザーポイントで弾頭を誘導するもの。

ハルの背中に赤い光点をあわせると、ニヤリと唇を歪ませて引き金を引く。ダットサイトの向こうでは、必死に逃げるハルの背中。白い煙の尾を引いて、その背中を追いかける。

ハルの背中で光る赤い点は、まさに死の刻印だ。

そのとき、うるわは近くで鳴り響く自動車の防犯ベルを聞き逃していた。

「何でもありですか……！」

赤い直線に気がついたうるわは振り向いて、弾頭をたたき落とそうと模索する。

……が、振り向いた瞬間に体は痛みと衝撃で宙を舞っていた。

四足歩行をする機械蜘蛛が、その足でうるわを跳ね上げたのだ。

足下にはフロントガラスを突き抜けた蜘蛛の足が見える。

鳴り響く車の防犯ベル。それはうるわの頭で鳴り響くサイレンとなる。

訓練のたまものか、素早く空中で体勢を整えると、ハルを見つけて出するわ。

ハルは接近してきたミサイルを、街路樹を身代わりにして逃れようとしていた。

ハルとハチを結んだ直線の途中。そこ街路樹を割り込ませる形へすべく、体を酷使用する。

作戦はハルの思惑通りにいった。

赤いレーザーポインタの示す先は街路樹となり、寸分の狂いなく街路樹を爆砕させた。枝葉が吹き飛び、ハルの体を叩く。

煙から逃げるように、幹の半分を削り取られた街路樹が、道路側に倒れた。

さらに噴煙から続けて飛び出してくる物体が一つ。

ハチが生み出した兵器。機械の蜘蛛。

ハルは痛みにくめくことも出来ずに対応に追われることになった。

主が危険にさらされている。
心が急いていくるわ。

うるわは車のボンネットに着地すると、そのまま次の車へ飛び移った。まもなくして、うるわが着地した車は炎の手に落ちる。

無限の砲弾を持つハチの追撃がうるわに息をつかせない。

昼過ぎの町はすでに戦渦に落ちた。

街路樹にまで火の手は周り、火の粉は国道を包む。どす黒い煙が、逃げまどう人々の肺を締め上げる。ガードレールは曲がり、突っ込んだ車が炎上していた。そこに頭から飛び込むタクシー。壊れた料

金メーターは振り切れ、車内から小銭が飛び出した。
空を舞うつるわの眼下では、横倒しになったミキサー車からもれるセメント。

「この私が、防戦一方ですか……！」

ハルと分断されてしまったつるわが毒づく。

「ハル……！」

「よそ見してられる立場じゃないでしょ？」

耳元で発せられた声に背筋を凍らせる。

声の方向に拳を走らせたが、声の主はその反対。

二度凍った背中に浴びせられる大鎌。

いつの間に出現させたのか、ハチの手にはマルチメディアビル事件の時に見たものとそっくりのものが握られていた。

最大限に反らした背中が、大鎌の刃をぎりぎり回避した。

エプロンドレスが切り裂かれ、ちぎれたヨークが空中を漂う。

距離を取って地面に降り立つ二人。

「どうする？ あつちはそろそろ終わりそうだよ？」

ハチがしゃくったあごの先では、機械の蜘蛛の背中が開き、そこから二門の砲塔が飛び出していた。戦闘機に搭載されていてもおかしくない大口径のノズルが、ハルを攻撃対象として認識する。

「ありがたいことに、《彼岸》は持ち主の生死を問わず取り出せるんだ」

「くっ、ハル」

太い砲身から吐き出される弾丸。
マズルフラッシュがハルの眼を焦がした。

第三十六話・「行くよ、僕の欠片」

とつさに体が動いたのは奇跡といつていい。

目がくらむような光に遅れて、音が届く。

銃弾、銃弾、そして、銃弾。

葉莢を噴水のようにまき散らしながら、蜘蛛が砲台に変わる。

四本の足を地面にしっかりと固定し、発射の反動に耐える。照準は、ぶれるどころかハルの背中をとらえつつある。

緋色の弾丸が、アスファルトを蜂の巣にした。

命を削り取られるような錯覚。死が迫ってくる恐怖。

ハルは通りを駆け抜ける。

ハルの走った後は凄惨そのもの。ハルが街路樹の脇を通り過ぎれば、街路樹が銃痕でなぎ倒され、車の隣を通り抜ければ、給油口を直撃して爆発炎上する。

コンビニの自動ドア。

不動産屋の自動ドア。

旅行代理店の自動ドア。

ガラスは共に粉々。

中では伏せておびえるツアーコンダクター。

「……っ、くそっ！」

なおも、銃弾の斉射はとどまるところを知らない。正確性を増す銃弾がハルの脇腹をかすめた。

ハルの脳裏に絶望の二文字が浮き上がる。

「私の主人に仇なすもの」

救いは天空から現れた。

「壊れなさい」

表現としては単純明快。

エプロンドレスが、高空から落ちてきた。隕石のような加速を伴ったそれは、跳躍力と重力加速度を味方につけている。

ハチの追撃をかわしながら、うるわはハルとの距離を目測で判断していた。足下にした自動車が爆発する煙に紛れて、一息で跳躍。

ガードレールを歪ませる跳躍力は、常人の蚊帳の外に位置する。

ビルの壁沿いに舞い上がり、さらに看板を手がかりにして腕力だけで体を空に舞いあげる。舞い上がったまま体勢を逆さまにし、今度はビルの強化ガラスを蹴って直下へ。

ガラスに蜘蛛の巣状のひびを走らせながら、そのままの勢いで蜘蛛の背中に強烈な打撃をたたき込む。

蜘蛛の背中がくの字に折れ曲がった。

さらにうるわは、無表情のまま、蜘蛛の背中についていた銃砲を力任せに引っかく。

引きずり出されていく内部。

配線がちぎれる音、鉄板が曲がる音、あるいは裂ける耳障りな音。それにもうるわは眉一つ動かさず、引きはがした銃砲を乱暴に捨て去る。油圧式だったのだろうか。

蜘蛛の駆動部から真っ黒な油が噴出する。

それはまさに蜘蛛の鮮血だ。

蜘蛛が発する断末魔。

それは八チの一言によつて遮られる。

「あはは、強い強い！ 人間にしてはやるよね！」

両手に持つていた大鎌を体内に戻して、両手を大きく横に広げる。

「それは負け惜しみですか？」

「何を言つてゐるの？ まだ、うるわの刃は折れていないでしょ？」

「ええ、折れるどころか研ぎ澄まされていますが」

蜘蛛の背中で大胆に宣言する。

「そうこなくっちゃね。この戦いが終わったとき、その研ぎ澄まされた刃が折れたとき……うるわは一体どんな顔をするんだろうね？ 無表情でいられるのかな？ 悲しみに歪むのかな？ 命乞いをするように媚びるのかな？ それともやっぱり最後まで無表情のままかな？」

「答えましょう、八チ。あなたが倒れた後の私は、無表情です。主を守護することが最優先。そこには勝利の余韻ありません」

頬に付いた油を丁寧にハンカチで拭う。

「これは、ただ単に、主に降りかかる火の粉を払うだけの作業です。肩についたゴミを払うことと同等です。それ以上でも、それ以下でも」

「いや、違う……」

ハルが折れた街路樹に手をついている。

「笑顔だ。うるわは笑う。笑わせてみせる」

うるわが無表情と言われるのが悔しくて、ハルは声を振り絞っていた。

悔しさがそうさせるのか。息を切らしていた体が活力を取り戻していく。

「決まりだね。うるわの表情を賭けたゲームの始まりだよ」

手を広げたまま、ハチが大きく息を吸い込んだ。

ハルを取り巻く周囲が震え出すのが分かる。スーツの裾が揺れ、立てたシャツのえりが揺れる。銀髪は波打ち、紅い目は爛々と輝く。地面に散らばった破片が震え出している。

「ハル、賭はあなたの負けかもしれませんよ」

蜘蛛の背中から飛び降りたうるわが、ハルの隣に並ぶ。

「私は表情審査で零点だったのです」

自嘲するような無表情。そこには自慢など無い。

「……………このカレンダーを破ったのは誰だ。カレンダー」

「……………」

「マキ、薪割りをするの巻」

「……」

うるわがあっけにとられた顔でハルを見た。
ハルは鼻をかきながら頬を強ばらせている。

「笑えよ」

「笑えません」

「……面白いだろ」

「ハルは面白いと思うのですか？」

「……いいや、ちつとも」

二人が見つめる先は共に敵であるハチ。

ハチが吸い込んだ息を吐くと、大地が共鳴するように揺れ出した。
少年のような体躯とは見合わない力の胎動。

それを目の当たりにしながらも、ハルとうるわは静かに冗談を交える。

「そうです。面白くありません。それどころか、カレンが怒る様子が目に浮かびます。……でも、不思議です。なんだか、笑えそうな気分です」

うるわが隣にすることで頼もしさを感じるハル。

カレンも、いつもこんな感覚を味わっているのだろうか。マルチメディアビルで自分の後先を考えないで力を駆使したのも、こんな頼もしい感覚が日々の自分をおおっていることを知っているからで

はないのか。

ハルは未知の恐怖に震える体を押さえつけた。

ならば、なおさらだ。格好悪い自分を、メイドであるうるわに見せたくない。

そんな上辺だけの見栄でも、力に出来そうだった。

「賭は俺の勝ちだな」

「ええ、そうかもしれませぬ。でも、そのときは……あなたも笑ってください、ハル」

二人の前方。

力尽きようとしていた機械蜘蛛が液体金属に戻っていく。それに連動するように、うるわによって引き裂かれ、投げ捨てられた配線、砲門、その他部品の数々も液体に戻っていく。

それは素早く互いに寄り合わり、溶岩のように気泡を発し始めた。

「それこそ、賭は俺の勝ちだ」

力をみなぎらせたまま、ハチが銀色の溶岩に近づいていく。

炎をまとうようにハチの周囲に陽炎が発声する。

一步一步、歩く度に景色が乱れた。

「……でも、俺もなんだか笑えそうな気がする」

虫の鳴くようなハルの声を、うるわは心に刻む。

メイドである以上、主の微笑みほど嬉しいものはない。

カレンもそう。そして、ハルもそうだ。

ハルに話した昔話。そこに登場する少女が出会った一人のメイドのように、主の微笑みを自らの嬉しさに変えること。

それがうるわのメイドとしての原点だから。

「ふふん、行くよ二人とも？ 今度のはさらに難易度が高いからね。おしゃべりしている暇なんてないよ？」

唇をつり上げて、美少年は笑った。

「行くよ、僕の欠片。今度はもつと強くなるんだ」

少年が溶岩に触れた瞬間、まるで間欠泉のように溶岩が天へ吹き上がった。

少年の袖もたら大量の金属が流れ込んでいる。

ずるずる、ずりずり。

スーツの袖は裂け、そこから古今東西の武器や兵器、機構が溶岩に飲み込まれていく。

びちゃびちゃ、ぐちゃぐちゃ。

壮大な擬音とともに液体金属が成長していく。

まるで食べ物を与えて太らせるように。蜘蛛のなれの果ては、その巨体をさらに増長させていった。銀色の巨体作り出す影が、ハルとうるわをおおっていく。

影は恐怖を萌芽させるための栄養分。

さらに大きさは増していく。

「上手くできた方かな」

指を鳴らしたハチが、二十メートルはあろうかという銀色の巨体に手について、誇らしげに見上げる。

両手、両足、その他全身は鈍色の鉄骨に鎧われ、頭はフルフェイスの鉄仮面をかぶっている。

仮面の中には紅い光がたたえられており、口元からは生暖かい吐息。

それはまるで血を求める狂戦士。

古代中世、戦場で朽ち果てた騎士を思わせる風体は、禍々しさに溢れている。

威風堂々とはほど遠い。粗野な作りの鎧と、精神を病むような低い呼吸音が駆動音に混じりながら、ハルの鼓膜を刻んでいく。

「ハル、合図と同時にビルの中へ。相手に真正面からぶつかるのは愚の骨頂です。本体はハチです」

「ああ、指示は頼む」

「分かりました、ハル。最大の犠牲心を持ってその期待に応えます」

構えた体は動かさず、口だけでやりとりする。

「さ、第二ラウンドの始まり」

ハチが楽しそうに主とメイドを指し示す。

鋼の巨人が、音階の低い汽笛のような咆哮を上げた。

大気が震え、周囲のビルが振動する。周囲のビルに及ぶかというほどの巨人の身長。

雄叫びは、まるで衝撃波だ。

と、同時に体に見合わない素早い動きで、拳が振り下ろされる。

「うるわ！」

の、直後に体に見合う轟然たる力が、地面をとらえた。

地面に巨大な拳がめり込む。

攻撃は避けたものの地面が上下に振動し、体が跳ね上がった。

ハルとうるわは、足下をもつれさせながら、近くの新築ビルの中に転がり込む。中央が吹き抜けになっていて、そこにエスカレーターが交互に施設された作りになっている。

エレベーターは向かって正面に、エスカレーターはその左右。

ハルは、うるわ同様、構造を頭にたたき込もうとする。

「ハル、こっちです！」

うるわに腕を引かれて、走り出す。

背後では、巨人の足が正面玄関に入り込んでくるところだった。

自動ドアが左右に開く。

それを無視して、巨体はガラス張りの玄関口ごと破壊して侵入してくる。

「……礼儀知らずだ」

「まったくです」

その巨体のせいで、立ったままビル内部に侵入できず、四つんばいになって迫り来る。エスカレーターに向かう二人を捕まえようと、鋼の手のひらが突き出された。

捕まったらひとまりもないだろう。

ミニトマトを握りつぶすように、鋼の拳から体液がしみ出すのがオチだ。

うるわとハル、左右によけることで手のひらから難を逃れた。

ハルは背筋がぞつとする想像を抑えて、エスカレーターを駆け上り始める。

「ハル！　上りはこっちです！」

「そう言うことは、早く　！」

肩越し。

ハルは、巨人と目があつた気がした。

恐怖にすくみ上がる足を叱咤して、上り始めて間もないエスカレーターの手すりを飛び越える。

背後では、今いたエスカレーターが、手すりごとたたきつぶされていた。配置された観葉植物がぺしゃんこになり、ごみくずへ。

ハルはうるわが待つ上りのエレベーターに足をかけると一気に二階へ到達する。

第三十七話・「会いたいよ」

「どうするんだ？　これから！」

「ゲリラ戦です」

鋼の巨人が体を玄関ホールに押し込んでくる。

凶悪なまなざしがハルとうるわの背中をとらえた。逃げる獲物を悔しがるように、ひときわ高い雄叫びを上げる。

叫びの波動が玄関ホールのガラスにひびを入れた。

悔しさを力に変換するように、非常階段を駆け上っていく二人を巨大な拳でつぶしにかかる。

「二人とも逃げるつもりかな？　でもそうはいかないんだよね」

四つんばいになって玄関ホールを占拠する巨人の肩の上で、ハチが笑う。そして、楽しそうに巨人の顔に手を触れたとたん、巨人の首の関節がよじれ、玄関ホールに落下した。

巨大な鉄仮面は床にめり込み、受付カウンターを圧壊する。

内線電話の受話器がぶらぶらと鉄仮面の隙間にぶら下がっていた。

……しかし、受話器は何者かによって握りつぶされてしまう。

「よっと」

ハルが首を失った巨人の肩から飛び降りると、ホールにはすでに百をゆうに超える鋼の兵士がいた。目的もなく、ふらふらとたたずんでいる。

鋼の巨人をそのまま小さくしたような姿の兵士達だ。その内の一

人が握りつぶした受話器の破片をつまらなそうに地面に捨てていた。

確認するまでもなく、兵士全員が手に手に武器をたずさえている。ある者は剣、ある者は戦斧、ある者は長槍、ある者はボウガン、銃剣、ショーテル（湾曲刀）、日本刀、そしてまたある者はモーニングスター（殴打用の棍棒で、鎖でつながれた球状の先に棘を付加させたもの）という特殊な武器すら持っている。

その武器形態はやはり古今東西に渡り、何らの統一性も見いだすことは出来ない。

彼らは亡者のように上体を揺らして、武器だけをしっかりと握りしめている。いつのまにか巨人の首はなくなっていた。どうやら、巨大な鉄仮面が液体金属に還元され、分裂し、再構成した果てが兵士達らしかった。

「大は小を兼ねる……よく言ったものだよね」

酷薄な笑みを浮かべるハチ。

とたんに数え切れないほどの兵士達が、我先にと階段やエレベーター、エスカレーターに殺到していく。

おぞましい光景だった。

敵味方の概念もなく、味方を踏みつぶしてでも我先にとハルとうるわを追っていくのだ。生者を食らおうとする亡者の群れ。

それは三流映画で見る生ける屍、ゾンビのようであった。

血みどろに黒ずんだ鋼の鎧を鳴らしながら、階段を上っていく。ハルとうるわを食らわんとする亡者の包囲網が、完成しつつあった。

「早く、お父さんに会いたいな。この目でお父さんを見たいよ」

血なまぐさい機械仕掛けの兵士達を横目に、ハチは割れた床に未来図を投影した。

瓦礫が積もった玄関ホールに入り込んでくる風が、スーツの裾を、えりが立ったワイシャツを揺らす。

未来図を思い描きながら、透き通る銀色の髪をそよ風と遊ばせる。

それだけを見れば、甘えた盛りの少年そのもの。

「声でしか知らないお父さん、僕を作ってくれた人……会いたいよ」

瞳に憧憬を宿し軽やかに舞い上がる。四つんばいになったまま活動を停止している巨人の肩に座り込み、拳を握りしめる。

興奮。

もうすぐ手にはいるという興奮。

夢が叶うという興奮。

夢を見ない古代兵器でさえ夢に見た。本来の、プログラムされた《彼岸》の守護という責務を放棄してまで、自分の存在証明を捨ててまで、ハチは記憶領域に抱き続ける。

声でしか知らない父への思慕。

「《彼岸》があれば、《彼岸》さえあればそれが叶うんだ」

強く、さらに強く、拳を握りしめる。

「そのためにはまず、ハルという人間から《彼岸》を引きずり出さなきゃ。まずはそれから。誰にも邪魔はさせないんだ。そのための力もある。お父さんが、僕のためだけにくれた、この力が。会いたいよ……僕は誰よりも、お父さんに会って、そして」

瓦礫の山から小石が転がり落ちる音。

ハチのセンサーが移動物体を感知する。

「……パパに会いたいの？ ハチ」

「ん？」

巨人の肩から見下ろすハチ。

「パパはもういないよ？」

声の主は、スパッツに、ジャージの上着という出で立ち。ラフな姿は瓦礫が積もるこの場所には不釣り合いだ。ショートボブほどの短い黒髪と、小さな背丈。くりくりとした黒い瞳が、ハチの紅い瞳を見上げている。凹凸の少ないしなやかな体つきは、形容するならば猫のような。

「そうだね、確かにそうだよ。でもね、僕はそれでもお父さんに会いたいんだ。それが例え《彼岸》を使うことになろうとも。君も会いたいよね？ ……ナナ？」

ハチの言葉に、こくりと頷く。

八番目の人型古代兵器ハチに賛同するのは、七番目の人型古代兵器ナナ。

「ナナも、会いたい」

壊れた玄関ホールに差す光が弱まり出す。

逃げ場を失った太陽が雲に遮られる。鈍色に汚れた雲が泣いていた。

内部で雷が発生し、雲の表面から飛び出す。

雷鳴と電光。ヨハン・シュトラウス2世が作曲したそのように激しく、それでいてけたたましく、世界に轟音をとどろかす。

「ナナも、パパ、好きだった」

「そっか、よかったよ」

町中が闇に包まれた。今、太陽はあるべき場所にはない。

分厚い雲の裏側に幽閉されている。

再びの雷鳴。まるで赤ん坊のように、轟音に驚いた空が涙を浮かべる。

ぽつり、ぽつり。

二人の古代兵器が見つめ合う中で、雨はゆっくりと世界を濡らし始めた。

第三十八話・「……降ってきましたね」

非常階段を駆け上がって一分と立たないうちに、ハルは階下から身も凍るような気配が迫ってきていること知った。

手すりから身を乗り出して見おろせば、階段を上ってくる兵士達の姿がある。薄汚れた鋼の鎧を鳴らしながら、まるで魔女狩りをするが如く階段を駆け上っていた。

兵士達の兜からのぞく幽鬼のような紅い目に息をのむハル。

圧倒的な数が群れをなして襲ってくる。

勝てるのだろうか。逃げ切れるのだろうか。

ネガティブな感情に飲み込まれそうになる。

「ハル、早く！ こっちです！」

思わずごとりとつばを飲み込もうとするハルの耳元を、ボウガンの矢がかすめ飛ぶ。存在は完全に気取られているようだった。

敵を目視できたことがそんなに嬉しいのか、疲れ知らずの兵士達は口々に雄叫びを上げた。

「ハル」

強ばった頬に手を添えてくるうるわに、ハルはびくりと反応する。うるわの声すら聞こえなかった。焦る思考回路が熱を帯び、脳をショート寸前にまで焼き付けていた。

「私はあなたに『最大の犠牲心を持って奉仕する』と誓いました。安心してください」

うるわのひんやりとした手がハルにとっては救いだった。かろうじて冷静さを保たせる。

「マキを見つけるのでしょうか？」

「あ、ああ……まだ俺は見つけてもいないんだよな」

落ち着いていく心。うるわの冷静さが良い意味でハルにも感化されていく。

「はい、私はまだ夕飯の買い物も済ませていません」

どこから取り出したのか、空の買い物かごをハルに見せる。戦闘中にどこかへ行ってしまうことには気がついたが、隠し持っていたとは。

ハルは強ばる頬がほころんでいくのが感じ取れた。

「今日は、カレーだよな？」

「ええ、カレーには自信があります。だから、皆さんに食べて欲しい」

階下から迫るどう猛な足音。極限の状況の中、優しい風が二人の周囲を取り巻く。極限の状況だからこそ、リラックスしなければならぬ。

いわば、急いては事をし損じる、だ。そんな言葉が勝手に飛び出してきて、ハルは意識的に肺の空気を入れ換えた。

「みなさん……か」

「はい。ハル、カレン、ナナ、私……そしてマキ、みなさんにです」
「ナナは敵じゃなかったのか？」

上の階へは行かずに、非常ドアから中に体を滑り込ませると静かに閉める。あえて上の階へ行くように見せかけるようだ。

「もう、慣れました。ハル、私が今まで仕えてきた主人を誰だと思いですか？」

「そうか、そうだったな。人型古代兵器とゲームをやるような人間だもんな」

悔しさのあまりコントローラーを床に叩きつける姿が目に見え。

「その通りです。私自身もまた変わっていかねければ、彼女にはついて行けませんので」

通路を行くと、情報ソフトフェア第四事業部と書かれたプレートがつり下げられているのが見えた。整然と並べられた机上にはデスクトップのパソコンがひしめき、各机には働き手の個性がうかがえる物品が数多く置かれていた。

家族の写真、アニメのフィギュア、雑誌、お菓子……。

「……あの家には俺一人だったはずなのに……いつのまにか五人か……。賑やかな食事になりそうだな」

デスクの間を通り抜け、玄関口とは反対側に位置するエレベーターへ。

「賑やかなのは嫌いですか、ハル？」

「ああ、好きじゃない」

エレベーターの開閉ボタンを押そうとするうるわの指が止まる。

「でも、嫌いでもない」

「優柔不断は嫌われるものです」

ボタンを押すと、エレベーターが一階から上がってくる。ランプが徐々にハルのいる階へ近づいてきた。

「誰に嫌われるって言うんだよ」

「そうですね……少なくとも、あなたのそばにいる人に」

うるわがハルを振り向くと、到着を告げるベルが鳴り、エレベーターのドアが開いた。

「……ハル？」

とつさに伸ばしたハルの手が、うるわのエプロンドレスを引き寄せていた。

鞘走りの音とともに、うるわのエプロンドレスが引き裂かれる。

背中を一直線に駆けた刀傷は、うるわの背に真っ赤な花を咲かせる。
うるわはハルの胸に体をあずけて、痛み顔を引きつらせた。

続けざまの斬撃が、ハルとうるわを襲う。

うるわは背後の気配に気がついたのか、背中傷をかばいもしないでハルを突き飛ばす。離れたハルとうるわの中間点に振り下ろされる刀がフロアにめり込んだ。

「うるわ、大丈夫か!？」

思い出される数秒前。克明な記憶。

初手は、不意打ちに近い形だった。エレベーターが空いた瞬間、中から鋼の兵士達があふれ出てきた。先陣を切った兵士が刀を振り下ろしたときにはもう遅く、うるわはハルに身を任せることでしか回避できない状況にまで陥っていた。

うるわにしては珍しい、油断だった。

「私は大丈夫です……それよりハル、あなたこそ大丈夫なのですか？」

「俺なんかより、うるわのほうが……!」

兵士達に取り囲まれてしまい、自然に背中あわせに互いをカバーしあう。ハルが命を預けるうるわの背は、赤い血が止めどなく流れ落ちている。真っ白なエプロンドレスはまるで紅い染め物のようだ。今もなお紅い染色は続いている。つまりはそれだけ出血がひどいということ。

「私はメイド・イン・ジャパンです。このくらいの傷は日常茶飯事です」

「日常茶飯事って……」

「ハル、私の背中から離れないで」

戦いの火ぶたは、言葉通り、敵の刃によって切って落とされた。まっさきに切りかかってきた兵士の刀を、上段蹴りで打ち払う。武器を失ったその懷に、力を込めた掌底を打ち込む。

鎧がへこむ衝撃は、兵士を簡単に吹き飛ばした。

後続の兵士を巻き込んでエレベーターの中へ飛んでいく。そのまま中の鏡に激突し、兵士は力尽きる。

誤作動を起こしたエレベーターは自動的に閉まり、一階に戻っていった。

「背中から離れるなって言ってもな……！」

見ただけで分かる。

刀傷は深い。

流れ出る血の量も尋常ではない。

もともと素肌の白いうるわだが、今はそれ以上に青白く見えてしまう。取り囲む兵士の数は十余名。この場をしのぐことはうるわなら容易いはずだ。

しかし、状況は悪い方向に転び始めていた。

非常階段を途中で抜けることで出し抜いたと思っていた兵士達が、この場所をかぎつけてきたのだ。遠くデスクの間を駆け抜けながら、様々な獲物を持ってこちらに向かってくる。

物量で来られたらより困難な状況に陥ってしまう。

うるわは小さく舌打ちし、包囲網を突破するべく舞い上がる。突破口開こうとしていた。一人の兵士の顔面を踏み台にすると、鉄兜があらぬ方向に曲がる気持ちの悪い音がした。

周囲の兵士達は、踏み台にされた兵士共々、うるわを八つ裂きにしようとする。

巨大なハンマーがうるわの顔面を狙うが、外れ。

首の曲がった兵士の顔面をたたきつぶす結果となる。吹き出すのは紅い血潮ではなく、銀色の飛沫だ。

うるわの背中を伝う血が空中を漂った。

「ハル、私を信じてください」

ハルは突き出された槍を、身をよじってかわす。そのまま脇の下で柄を締め上げて槍の動きを封じる。槍を力で引き戻そうとする兵士の腹部はがら空き。そこに渾身の蹴りをいれて吹き飛ばす。

ハルの手元には敵から奪った槍が残る。

「信じる。信じてるけどな……だからって全部を全部任せられないだろ……！」

言葉尻ごと槍を敵に叩きつけた。敵の足を槍で払い、後方から来る兵士を引き戻した槍の後部で突く。のけぞる兵士が、さらなる兵士に突き飛ばされていた。

「俺だつてな……小さいころから伊達に親父について回ったんじゃないんだ！」

槍を振りかぶり、投てきする。風を切る刃が兵士の腹部を貫いた。バーベキューの串のように二人まとめて貫く。

「頼もしい言葉です、ハル」

ハルが声の主を捜す。

うるわは敵の力を利用する戦法に切り替えていた。巨大なハンマーを振り下ろした敵の手首をとって、足を払えば、兵士は簡単に床に這いつくばった。とどめとばかりに背中を足蹴にし、次なる兵士の攻撃に備える。

短剣を投げてくる兵士に対しては、敵の陰に隠れることで同士討ちを誘う。その間すれ違う兵士には、落ちていたショートソードを拾い上げて切り結ぶ。

剣同士がぶつかることに火花が散り、二撃目は見事に剣の軌道を読む。

そのすきを狙って敵を八つ裂きにしていく。死屍累々とばかりに兵士達の死体が積み重なっていった。

二人を囲んでいた十余名の兵士達は床に伏している。そのほとんどがうるわの手によるものだった。

刃こぼれたショートソードを足下に落とし、うるわはふらりと揺らめいた。

慌ててうるわの背中を受け止めるハル。

「ハル、一体どうしたのですか？」

うるわは無表情のまま。

なぜハルが自分を抱いているのか、と問いかけるような瞳が、ハルを見上げる。

周囲には至る所に赤い血が点在していた。敵の間隙をぬった移動

のつけである。極力敵の力を利用する戦法に切り替えようが、動くことには大差がないのだ。

「うるわ……！ これ以上は駄目だ」

「何を言うのですか……？ 信じてくださいと言ったはずです」

ハルを押しつけて立ち上がる。フラットな声は平常通り。電話の戸口であったなら、怪我していることすら感じさせない完璧な声。立ち上がってうるわの肩に手を伸ばそうとするハル。

追いかけたその手は……惜しくも、うるわには届かなかった。

情報ソフトフェア第四事業部のプレートをくぐって、何十という敵が現れる。

迎え撃つべく拳を握りしめるうるわ。ハルの一步前に立ち、血ぬれの背中をさらす。やはり今もまだ、血がじくじくと滴っている。血塗られたエプロンドレス。紅いグラデーションが施されたものと勘違いしてしまいそうになる。

傷。

血。

それでも、うるわは立ち上がる。

他でもない、主のために。

拳に力を込め、床を踏みしめる。

うるわの気迫に、エプロンドレスが揺れた。

地面に横たわる鋼の骸を睥睨すると、うるわは頭上のカチューシヤを正す。

迫り来るは、無限に増え続ける狂気の軍隊。ハチが作り出した凶悪な鋼鉄の軍団。

待ち受けるは、史上最年少でメイド・インの称号を受けしうるわと、その一時的な主。メイドは血を流し、主は困難を打開する力もない。背水の陣にも程がある。

ハルは奥歯を噛みしめる。

何も出来ないこと。助けられてばかりの自分自身のふがいなさに。声には出さなかったが、ハルは心の奥底で激しく自戒していた。

「国際家政婦条項、冒頭」

押し寄せる敵の大群を見据えながら、少女は静かにつぶやいた。

「……いかなる時も、冷静・笑顔・優雅であれ」

悪いことは重なるもの。

うるわとハルを取り囲む四つのエレベータが全て同時に動き出した。

どれもこの階を目指しているのは明らかだ。あと十秒もすれば全ての扉が開き、敵が大挙して押し寄せるだろう。非常階段からは津波のように大群が押し寄せ続ける。

逃げ場はない。

醜悪な輝きを持った紅き瞳がオフィスに残像を残す。

手に持った武器は血に飢え、兵士同様、柔肌を切りつけたくて仕方がないようだ。

「……かつ、最大の犠牲心を持って奉仕せよ」

最大の犠牲心。うるわはたびたび口にする。

ハルはこの言葉を今、初めて理解し、強く噛みしめていた。

最大の犠牲心とは。

メイドが持つ最大の犠牲心とは。

他でもない、命、であると。

周囲のエレベータ全てのランプが停止する。うるわとハルが臨戦態勢を取る。

到着を告げるベルが鳴り、扉が一斉に開いていく。

全方位から接近する破滅の足音が、鼓膜をびりびりと震わせる。

「……降ってきましたね」

いつの間にか降り出した雨音が、窓の外から聞こえてきた。

第三十九話・「うるわ」・前

世界を垂直に切り裂く大粒の雨が、大地に降り注ぐ。
ブラインドごとガラスを突破った兵士が、大地に降り注ぐ。

空気を大きく吸い込むと、うるわは一つ大きく気合いを入れた。
切り裂かれ、血の流れ落ちる背中 of 傷を負ったまま、敵の猛攻
を一心に受け止める。先頭で飛び込んできた兵士をかわしざまの掌
底で吹き飛ばす。

床を滑っていく兵士を踏み越えて、敵はさらに左右から斬りかか
ってくる。

裾の長いエプロンドレスが切り裂かれた。
響く裁断の音。

しかしそれはうるわの予測範囲。ぎりぎりの隙間に体を通すよ
うに舞い上がると、空中で兵士の顔面を蹴り上げた。両足を百八十
度開くことで、左右の兵士は撃退される。のけぞる兵士の兜が吹き
飛んでいく。

着地際はさらに鮮やかだ。

のけぞる兵士の肩を利用して跳躍。次なる兵士の頭頂部にかかと
を落とす。崩れ落ちる兵士をサッカーボールのように蹴り上げると、
得意の掌底が息の根を止める。

壁にひびを入れるほどの衝撃は、流石、スペシャル・アサルト・メイド SAM といったところか。

「うるわ！ ゲリラ戦どころじゃなくなっただな！」

「申し訳ありません。敵のバリエーションがこれほど豊かだとは思

いませんでしたので」

言葉の意味とは裏腹に、うるわの視線は、冷徹そのもの。

周囲を凍らせる無情の雰囲気をまとい、兵士に囲まれながらも奮闘する。敵の群れにもみくちやにされながらも自由に動き回るうるわは、まるで水のようなだった。

どんなに瓦礫が積み重なっていようと、砂利が密集していようと、水はしみ出してくる。

その隙間をすいすいと抜けて、敵を蹴散らしていく。

無理にこじ開けようとするのはなく、その流れに従っている。

困難な状況下で実力を発揮しようとするには、二つの手段がある。

一つは状況を強引にねじ曲げてしまう手段。

ハルは力任せに敵の攻撃を受け止める。

火花散る剣。

紅い目を兜の間からちらつかせてハルに生暖かい息を吹きかける。

ハルはそれに顔をしかめて、力任せに力をぶつけていく。

筋肉の疲労。

腕が棒になりそうになりながらも敵の鎧に剣を突きいれる。仰向けに倒れていく兵士に安堵するまもなく、頭上から小柄な兵士が飛びかかってきた。

手には短剣が握りしめられ、ハルの首もとを狙いすましている。

ハルは感覚のなくなりつつある手をとっさに構え直して、兵士の手首をつかみ取った。もつれ込むように、飛びかかってきた兵士と

地面に転がる。

二転。

三転。

攻めと受けが入れ替わる。悲鳴を上げる筋肉。やむなく受けに回ったハル。

敵の刃とハルの首までの距離は一センチ。

唾を飲み込めば、切っ先がのど仏に突き刺さるだろう。

血管がちぎれそうになるほど、力で対抗する。

噴き出す汗と、気合いの声。

ハルは足をめいっばいに振り上げた。反動でさらに体を一回転させることに成功する。

攻守交代。

短剣を我がものとしたハルは、思いつきり兵士の胸に短剣を突き立てた。

何とも言われぬ金属質の感触の後に、鋼の兵士はどろどろと溶けていった。これでやっと倒した兵士は二体。

激しく息をしながら、休みたいと訴えかける体に鞭をいれる。

立ち上がり際、もつれた足。

揺らめく体を鋼の兵士は目ざとくとらえる。

飛んできた分銅。

何事かと目を見張るハルの右足を、分銅がぐるぐると回る。

締め付けられる痛み顔に顔をしかめると、右足に鎖が巻き付いていないか。外しにかかるうにも鎖ががちりと右足を絡め取ってしまっている。

分銅、そして鎖の先には刃渡り三十センチほどの鎌。俗に言う鎖鎌。

サイレンが頭の中で鳴り響く。

ハルがまずいと思ったときには手遅れだった。鎖鎌を持った兵士が、鎖をぐいと引っ張ると、ハルの体が地面に叩きつけられた。足を引っ張られ、後頭部が床を打つ。

脳が破裂するほどの痛み。意識が遠くへ飛ばされそうになる。

ぐらぐらと揺れる視界の彼方から、うるわが駆けつける。駆けつけついでにうるわを圧殺しようと襲いかかる狂戦士。手に持ったモーニングスターが炸裂する。

受ければ鉄球に突いた棘が体を突き刺し、その質量が骨を粉碎するだろう。

だが、うるわはまるで薄い紙のようにその攻撃を受け流す。

腕を取ると、兵士の力を逆手に取って軽くひねる。するとどうだろう。

巨体を揺らしていた兵士が鎧ごと宙を舞ったのだ。柔よく剛を制するように、地面に叩きつけられる。

最小限の力で、最大限の目的を達成。

溶けていく兵士の手からモーニングスターを奪取し、ハルの下に駆けつけようとする。

舞い上がるエプロンドレス。

散る汗。輝くカチューシャ。

次々に兵士の肩を踏み台とし、空中を舞い続ける。兵士は空を舞

うつるわを引きずり落とそうと、手を伸ばす。その光景は生を求める亡者の構図によく似ていた。飛び降りた先で意識を失いかけるハル。

その痛みを与える兵士を素早く発見すると、モーニングスターを、文字通り流星の如く振り下ろした。

鎧から吹き出す鉛色の液体。

兵士を前蹴りで遠ざけ、ハルの足に巻き付いたままの鎖にモーニングスターを叩きつける。

ハルが拘束から解き放たれる。

そのままハルをかばうようにして、うるわは絶望的なまでの数と向き合った。

困難な状況下で実力を発揮しようとするには、二つの手段がある。

もう一つは状況に順応すること。

状況に自分自身を適応させて、その中で最大限発揮する。

つまりは柔軟になれということ。

ハルは強引に状況に逆らおうとし、うるわは状況に柔軟に対応していた。

敵の力を利用し、最小限の力で敵をなぎ倒す。

前者が悪いというわけではなく、後者が良いというわけではない。ただ、その時と場合による。

その見極めが出来るかどうかハルとうるわの決定的な違いだった。

そして、その二つが二人の疲弊の差である……はずだった。
そう、うるわが手負いであることをのぞけば。

「ハル、夕食までにはまだ時間があります。大変申し訳ないのですが、もう少し付き合っただけませんか」

無感情で機械的声。

「……当たり前だろ。まだ空腹にはほど遠いんだ……」

激痛が走る体を起こし、声を振り絞る。

「ハルの言うことは理にかなっています。空腹は最大の調味料ですから」

やせ我慢が、軽口を叩かせる。

しっかりと床を踏ん張らなければ、立つことも厳しい状況。数を増す敵を見定められない。分泌されるアドレナリンが一時的な麻酔薬と化しているため、痛みは何とか抑えられる。

一方で、感覚はそうはいかない。

ぶれる焦点の中で、うるわは何とか気力だけでハルを守ろうとする。

攻撃のイメージにだんだんと追いつかなくなっていく体が、歯ぎしりするほどに余力のなさを示している。

いくら己を水と見立て、幾百の敵を撃退したとしても、体力に限りはある。

敵が数で制してくる限り、限界はいつか必ず訪れる。

それでも、うるわは自分を奮い立たせた。

掌底、一閃。

鎧を破壊し、余波は敵の体を吹き飛ばす。さらに、槍で突きかかってきた敵の懷に体を滑り込ませると、体重をのせた裏拳を胴体に見舞う。入り込んだ衝撃は、敵の腹部から抜けて背へ至る。背を覆う鎧が割れ、なかから灰色の液体が飛び出した。

「ハル、まだ走れますね？」

背後で敵の足を切り払うハルを振り返る。

「うるわこそ、走れるのか……？」

「ええ。愚問です、ハル」

ハルはそのうるわの背中を見失わないように体を動かし続ける。うるわの動きを少しでも真似ようと、それらしい動きを心がける。

無我夢中だった。

自然に熱を帯びる。

興奮で、頭に血が上っていく。

視界が狭まる。

でも、ふいに話しかけられる頼もしい声に体を叱咤されるようで、戦闘を教授されるようで、ハルは冷静に、熱くなることが出来た。

最適な精神状態。痛みを抱えながらも、体は言うことを聞いてくれていた。

「ハル！ そちらに行きました！」

「ああ！」

落ちていた十手を拾うと、情報ソフトウェア第四事業部からなだれ込んできた兵士と矛を交える。十手独特のかぎの部分で、兵士の振り下ろす刃を防ぐ。

力比べでは不利。

ハルの判断は、うるわが抱いていたものより数段速い。思わずセンスがあると、うなりそうになる。力を入れるべきところは入れ、そうでないところは極力受け流す。先ほどまでは出来ていなかった水のような戦い方が出来るようになっているのだ。

「俺は走るんだ……探さなきゃいけないんだ……だから俺の邪魔をするな！」

ハルは十手で引っかけた剣の力をうけながし、兵士の体勢に揺らぎを生じさせる。

そのまま足払いをかけて敵を転ばせる。

ハルはとどめを刺すことをしなかった。

今は時間が惜しい。

無限に敵が増え続けるのならば、本体を倒さなければ意味はないのだから。

それはうるわも分かっているようだった。
ハルは戦いの合間に気にかけてくれるうるわと視線を交錯させる。
二人同時にうなずき、意思を確認しあう。

「だというのに、この数は……！」

情報ソフトウェア第四事業部の中央までこぎ着けるが、そこから
が遠い。事業部内の通路という通路が敵の群れで埋め尽くされてい
た。

四面楚歌。

受け流すだけでは突破できない。うるわはそう判断した。

判断が早くても、実行が伴わなければ意味がない。

片足で立つうるわが、フリーにした右足で敵を次々に蹴り倒す。

柔軟なひざの動きがそれを可能にさせる。

往復の平手打ちを連想させる、往復の蹴り。

足の甲で振り抜けば、今度はかかどが戻ってくる。強靱な軸足と、
バランス感覚がその技に切れを生む。

倒された兵士がデスクの上に突っ伏して、ディスプレイに頭を突
っ込んだ。

配線が悲鳴を上げて、光と共にちぎれる。机上のフィギュアは兵
士の下敷きになり、お菓子は踏みつぶされて粉々だ。書類の山はま
るで雪のようにうるわの頭上に舞い、ひらひらと舞い落ちてくる。

その下で踊るように回転。

渾身の回転力を込めた回し蹴りを放つ。

鉄板を打ち据える轟音。

鋼の体はへこみ、遠く離れたプリンターに激突。

プリンターを抱え込むように力を失う。するとどういつ具合か、開いたプリンターのスキャン部が光り、兵士の顔を読み取っていく。

排出口からはカラーコピーされた醜い兜の絵が吐き出されていた。

「資源の無駄ですね。カラーコピーは高いのです」

無情な言葉を残す。

回転技の代償が、ここに来て突然うるわを襲った。

めまいを覚えひざが折れてしまう。不覚にも再度力を入れるのに時間を要してしまった。

「うるわ！」

ハルの声が早いか、敵が早いか。その判断は意味をなさない。

デスクの上に駆け上り、そこから二体の兵士が続けざまに飛びかかってきた。

うるわの傷ついた背に棍棒での一撃が加えられる。

「ごすん。」

背骨を折るような鈍い音。肺の空気と、胃液。うるわの口から、

同時に吐き出される。

床に顔をこすりつける。そこに追撃。

二体目の兵士が首を落とすべく斧を振りかぶっていた。

うるわは苦悶の表情で床を転がってやり過ごす。

切り落とされたおかつぱの黒髪。
斧にこびりつく黒髪。

三体目はさらにその上から強襲してきた。

三連射式のオートボウガン。

兵士が紅蓮に燃える目でうるわに照準を定める。

「……くそっ！」

分断されてしまったハルが、うるわのピンチを悟りデスクの上によじ登る。しかし、途中で電話のコードに足を取られてしまい、デスクに前のめりになる。頭をノートパソコンにぶつけて、血がにじんだ。

紅く染まる視界の先で、床を転がって避けようとするうるわがいた。

「うるわ、駄目だ！」

辛くも逃れようとするうるわ。

転がった先には兵士。太い鋼の腕がうるわの体を羽交い締めにした。額の汗がうるわの動きで飛び散る。背後の兵士にひじうちを入れ、逃れようとする。

何とか羽交い締めから脱するも、照準を定める兵士にはそれで十分だった。

一瞬でも停止してしまったうるわ。
放たれる矢。

……後は悪あがきでしかなかった。

僅かな時間の中で体をひねる。

一本目。

羽交い締めにしていた兵士の顔面に突き刺さる。

二本目。

うるわの二の腕を突き抜ける。

三本目。

うるわの太ももに突き刺さる。

うるわの苦悶の声に間に合わず、ハルがオートボウガンを放った兵士に跳び蹴りを放っていた。デスクを駆けつけた勢いを利用しての蹴りに、兵士は武器を手放して吹っ飛ぶ。

ガラス張りの事業部を突き抜けて、ビルの外へ飛び出す。兵士はなすすべ無く雨の中を落下していった。

「うるわ……！」

敵の生死を確認せず、ハルは真っ先にうるわに駆け寄った。

「私は大丈夫ですから……お気に……なさらず」

うるわの血の気が引いている。

無表情でも、顔色だけは隠しようがない。震える手が、心配するハルを押しとどめる。

「私はあなたのメイドです。……最大の犠牲心を持って奉仕する以上……これぐらいはあって然るべきなのです」

ハルが歯ぎしりする中で、会話は遮られる。

敵は二人の会話を待つてはくれない。最大の好機と見て、俄然勢いを増す。

投げナイフが、うるわを抱き起こすハルの背中へ。

うるわはそれを見るにつけ、ハルを突き飛ばした。

加減の伴わない突き飛ばし方だ。痛みに視界が明滅する。

イスに背をぶつけ、キャスター付きのイスは滑っていく。

ハルが背の痛みを忘れてうるわを見れば、うるわの腹部には一本の投げナイフが入り込んでいた。

あふれ出す血液。

床を赤で汚れていく。

それでもうるわは立ち上がろうとする。

どれほどの精神力。

どれほどの使命感。

腹部に刺さったナイフを抜くと、そこから血が飛び出る。真っ赤なエプロンドレスは見る影もない。まるで貴婦人がまとうナイトドレスのように深紅。

垂れ下がった右腕には血が伝う。

指先にまで到達した血が床に滴っていた。

震える足に力を入れれば、傷口からさらなる赤があふれ出る。

迫り来る敵の刃に体を傾け、唯一動く左腕で敵の顔面をわしづかみにするうるわ。

そのまま床に後頭部をめり込ませ息の根を止める。自らの血で作った紅い水たまりの中で、うるわはなおも戦い続けようとする。

「止める！ うるわ！ これ以上は止めてくれ！」

「何を……言うのですか？ ……カレン？ あなたはそんなことを言わないはずです……」

明らかに瞳はハルを映しているのに、うるわはハルをカレンと呼ぶ。

意識がもうろうとしているのだろうか。感情の光を灯さない瞳がまぶたにふさがれそうになる。ふらふらの体をそれでも戦いに駆り立て、敵をなぎ倒していくうるわ。

周囲で亡者のように迫る敵と似た揺らめく動きで、敵に迫っていく。

ハルは攻撃も回避もないがしろにして、うるわに走り寄る。

兵士に殴られようが、蹴られようが、構わない。

血を流すメイドの下へ。

一歩でも、一秒でも早く。

「うるわ、もういい！ もういいんだ！」

うるわの腕を取り、先ほど兵士を蹴り落とした窓際に退避する。

うるわをかばうように抱きしめ、覚悟を決めた。

その感触をわずかだが感じ取ったうるわが、顔を上げる。

淀んだ瞳がうるわの力の限界を如実に表していた。

「カレン……あなたらしくありませんと先程も……あ、いえ……ハル？」

淀んだ瞳が一瞬だけ晴れ、ハルであることを認識する。
いまだ戦おうとするうるわが身じろぐ。

そのうるわの意志には従わず、ハルはうるわを抱え、雨の空に身を投げた。

第四十話・「うるわ」・後

目を閉じて、恐怖心と戦う。

そうでもしなければ、今にも発狂してしまいそうだった。

何の確証があつたわけでもない。自信があつたわけでも、兆候があつたわけでもない。

ただ、ハルはこれ以上うるわが傷つくのを見ていられなかった。

ビルの十階。落ちれば命はない。

機械蜘蛛との戦闘が行われた、朽ちた地面への着地を試みるしかない。

……もしも。

もしも《彼岸》が使用者の願いを聞き届けるのならば、今すぐこの願いを聞いて欲しい。

やり方なんて分からない。どう願えばいいのかなんて分からない。本当に自分が持っているかすら分からない。

……でも、目の前で傷ついている人がいる。

自分の力ではどうしようもない。

山よりも高い自責の念がある。

海よりも深い悔しさがある。

ハルは助かりたいという思いをもって強く念じる。

どんな形でもいい、この高さから落下して助かる方法を……。

体中を雨の冷たさが打ち付ける。耳元を抜けていく風の音。迫り来る地面。

人間なら命はない高さ。恐怖に身体をつぶされ、思わずうるわを強く抱きしめていた。

ハルは迫り来る地面を見る。

スピードは増すばかりだ。

助かる気配なんてどこにもない。

重力と、死に引かれる。

願いは届かなかった。

《彼岸》は発動しなかった。

ハルの心が絶望に占められていく。

「……無茶をしますね……ハル」

主人を守らなければ。

その責任感、使命感が、うるわの体にスズメの涙ほどの力を呼び戻すのか。

血だらけのうるわはハルの胸の中から逃れ、二人が空中を落下していることを確認すると、逆にハルの肩を抱えた。

血を振りまくことを厭わず、うるわはハルの驚きの目に気がつかないまま壁を蹴る。

ハルの判断が必ずしも正しかったとは言えない。

それでも、うるわの身体に染みついたメイドとしての本能が、現

状を打破しようと動き出す。

生死を問う重傷でも、迷い無く自分の身を酷使する。
それがうるわ。

対峙した敵が強大でも、迷い無く自分の心を犠牲にする。
それがうるわ。

間違っていたとしても、迷い無く自分の信念に殉ずる。
それがうるわ。

壁を蹴り、落下のスピードを減退させた上で、乱暴ではあるが、
かろうじて地面に着地することに成功する。着地の衝撃を緩和しき
れなかったのか、地面にうつぶせに倒れ込むうるわ。

おかっぱの髪は乾いた血液でばりばりになっている。

「うるわ！……うるわ！」

仰向けに抱き起こし、閉じかけたまぶたに呼びかける。
着地の際、うるわは細心の注意を払って、ハルへの衝撃を最小限
に抑えていた。

自分の命すら簡単に投げ出してしまえる自己犠牲精神は、他人か
ら見れば病気であると思えたかもしれない。

「ちくしょう……俺は……！」

歩み寄ってくる人影をにらみ付けた。
ハルの切れ長の目が憎悪につり上がる。

「あらら、だいぶやられちゃったね」

ポケットに手をつ突っ込みながら、ハチが壊れた玄関口から歩いてくる。

背後に従わせるのは、情報ソフトウェア第四事業部でも戦った鋼の狂戦士達。

その内の一人の兵士が、肩にぼろぼろのナナを抱えていた。

ハルが貸した服装のまま、ぴくりとも動かない。満面の笑みも、楽しそうな笑い声も聞こえない。そば降る雨に、傷ついた身体を濡らすだけ。

歯ざしりするハルを楽しそうに見つめる目。

「ああ、ナナ？ ナナは僕に刃向かってきたんだ。だから、もう一度、起動できないようにするしかなかった。本人も自覚していたはずなのに。自己修復中で戦闘行為不可な状態……セーフモードで動してるってのにさ。まったく、ナナは何を考えているんだろ？」

戦闘服である黒いレザースーツ。

それに変身することすら出来ないナナ。確かにハチの言葉は正しいようだった。

「《人機》同士で争うなんて、お父さんは望まないのに」

ハルが傷ついたうつるわを背後に隠す様を、紅い瞳で微笑みながら見つめる。

「それはそうと……結局、僕の言ったとおりになったね。やっぱりうつるわでは僕には勝てないよ。当然、賭けも僕の勝ち。うつるわの刃

はもう折れているからね」

「ハルは……下がっていきください……」

いつの間に立ち上がったのか、血を滴らせたままハルの前に回り込む。

立ち上がるうるわには悲壮感すら漂う。

「まだやるの？ 結果は同じだよ？」

「たとえ……私の刃……身体が折れたとしても、心が折れることは決してありません……あなたの賭けが勝つことは絶対にはないのです」

「うるん、それってへりくつだよね？ それともいかさまかな？」

ハチが困ったように頭をぽりぽりとかく。

「なんで……そこまでして……」

震える足で立つうるわ。

「私は……日本でただ一人のメイド・イン・ジャパンなのです……。専守防衛を己の流儀とする……。国際家政婦協会にも誓いました……。『いかなる時も、冷静・笑顔・優雅であれ。かつ、最大の犠牲心を持って奉仕せよ』……と」

右足を引きずりながら、ハチに向かっていく。

ハルはうるわの覚悟を前に追いかけることが出来ない。引き留めようと伸ばす手があっても、うるわをつかむことは出来ない。

小さく、貫き通せるかも分からない感情で、うるわを止められるはずなんて無かった。

「うるわ……駄目だ……」

背中を剣で切り裂かれようとも、ボウガンの矢が貫いた太ももを引きずっても。

戦闘不能の右腕を垂れ下げても、腹部をナイフが貫いても。

全身血だらけでも、うるわは立ち上がろうとする。戦おうとする。

強き瞳。気高き眼差し。

少女のどこにこれほどの意思が宿るのか。

小さな身体。大きな誇り。

雨に濡れても、風が吹いても、決して消えることのない燈火。

「私は……メイド・イン・ジャパンです……！ 世界に誇らなくてはいけない日本のメイドです……！ 愛する国を……愛する主人^{ひと}を守りたいんです……！」

「困ったなあ……これは」

嘲笑するように唇を歪める。

雨に濡れた銀色の髪をかきあげると、背後に控えた鋼鉄の戦士達がハチの前へ出た。ハチと同様の紅い目をぎらぎらとたぎらせる。ひざをつきそうになる身体を何とか支えながら戦闘態勢を取るうるわ。

雨の中、一触即発の雰囲気ができあがる。

けれど、決着は直ぐにつくだろう。
そう……最悪の形で。

ハルの脳裏に耐え難い苦痛の未来図が描かれる。

「ああ、そう言えば……ハル、買い物がまだでしたね」

再び敵に囲まれ、殴り飛ばされる主人とメイド。地面に叩きふせられながら、ハルはカチューシャを落とすうるわを見上げた。
鋼の拳がうるわの傷ついた腹部をとらえ、うるわは身体をくの字に曲げる。

「うるわ……何を言って……！」

うるわは倒れなかった。

傷ついた右足で無理に身体を支えると、太ももの出血が倍加した。
その背中に襲いかかる棍棒。硬質な音にハルは耳をふさぎたくなる。

「出来るならば……ハルには荷物持ちをお願いしたかったです」
うるわがどうしてこんなことを言い出すのかは分からない。

肩越しに語りかける様は、なぜか行方不明になる前の両親の姿に似ていた。

「仮にも主人を小間使いにするなんて、とんだメイドですよね……」

出発の前日。その日も、今日と同じ雨だった。

二度と戻ることのなかった二人の微笑みに。

飛行機に乗り込む二人が振った手のひらに。

「本当は、私などは……メイド・イン・ジャパン失格なのかもしれません」

父と母に行くと言いたかった。一度旅立てば何ヶ月と帰って来ない。

本当は……寂しかった。

広い家で妹と二人。ふいに訪れる寂しさに布団の中でうずくまる。マキもそれを分かっていたのか、当時はやたらと明るく振る舞おうとしていた。

でも、両親にとっての仕事がそれで、家族を支えるために仕方がないことだったから。

自分一人が我慢すればすむことだったから。

「なんで、今更なんだ……」

……なぜ、今そのことが思い出されたのか。

ハルは敵に踏みつけにされながらも、力を振り絞って立ち上がる。

「確かにメイド・イン・ジャパンは失格かもしれない」

寂しさを我慢して。つらさを耐えて。常に顔を強ばらせて。それが、今の俺自身を支えるもの。今の俺自身を構成するもの。

でも、必ずしもそれである必要があるのだろうか。

「でもな……誓ってもいい。俺はうるわをメイドとして失格だなんて思わない」

ハルは心の奥に転がる宝石のようなものを見つける。
手は届かないけれど、その宝石は暗闇の中できらきらと輝いていた。

「……うるわがいなかったら、俺は多分、こんなふうにも走ること出来なかっただろうから。マキを探そうとすることも、きっと決断できなかっただろうから……」

「カレンにも……同じことを言われました」

「あいつと同じなんて……なんか嫌だな」

「カレンが聞いたら……怒りますね……きっと」

「ああ……ふざけるんじゃないわよ……って怒鳴り散らすんだろうな」

会話の合間にも鋼鉄の戦士達が殺到する。

うるわのカチューシャは地面に落ち、迫り来る狂戦士に蹂躪されていた。エプロンドレスは切り裂かれ、柔肌も容赦なく赤に染まる。

避けきれなかった剣閃。

肩口を切り裂かれたところで、うるわの足がくずれ落ちた。

うつろな目。定まらない焦点。身体は泥にまみれ、死人のように冷たい。

眠るように瞳を閉じるうるわ。

血を洗い流すように雨が降る。

止まない雨。太陽は遙か遠い雲の向こう。

「……」

ハルは、身体が、心が震えるのが理解できた。

「これで終わりだね。残るは《彼岸》を持つ者、伊達ハル、君だけだよ」

腕を組んで鑑賞していたハチが、楽しげに指を鳴らす。すると、破壊された玄関口から、首が無くなっていたはずの鋼の巨人が這い出てきた。やがて首もないまま立ち上がり、大きく足を持ち上げる。鉄の足の質量を持つてすれば車ですら一瞬でぺしゃんこになるだろう。

車から立ち上る炎が雨によって鎮火していく。その煙を突き抜けて、巨人の足がハルを踏みつけにする。

雨に頬を打たれながら、ハルはうるわをしっかりと抱える。

長い前髪から落ちる雫。うつむくハルの表情は見えない。

ただ、つぶやくように口元が動くのだけが見えるだけだった。

……マキ、こんなお兄ちゃんでごめんな。

まるで遺言でも残すように、ハルは小さくつぶやいた。

「ふざけるんじゃないわよ」

風切り音が、雨の中に響き渡る。

巨人の足をなぎ払い、ビルの谷間に舞い踊る。

車を空中に跳ね上げ、ハチが作り出した鋼の戦士達をビルの壁に叩きつけた。大気が震え、雨がはじき飛ばされる。

すでに半径百メートル以内はハリケーンに飲み込まれた。

風切り音は容赦なくビルの窓を叩き、削り取り、ガラスを割り、外壁を散らす。

雨あられと路上に落ちてくる瓦礫とガラス片。

まるで戦争でも始まったかのような。

無差別に炸裂する力の行使は、悠々と歩いてくる一人の少女によって巻き起こされている。

裂けんばかりにはためくロングコートの袖もと。

黄金の髪、黄金の瞳。

雨に濡れた眼鏡を投げ捨てる。

「……まったく、どこまで買い物に行っているのよ……」

カレンは、ハルの隣に並ぶと、うるわの頬に優しく手を添えた。

第四十一話・「うるわを、よろしく頼むわね」

ハチとその鋼の軍団は、うるわの《千手》を受けて、煙の中に消えた。

立ち上る大きな噴煙が邪魔をして、中の様子はうかがえない。それをインターバルと見たのか、カレンは敵から目をそらし、ハルを、そして、うるわを見た。

「カレン……お前」

うるわの冷たい頬に触れ、カレンはそつと微笑む。

自信と傲慢が入り交じったいつもの表情とは打って変わって、とても穏や過ぎるくらい。

我が子が頑張る様子を草葉の陰から温かく見守る……そんなカレンの穏やかさ。もちろん、そんな感想を抱いてしまうにはカレンは若すぎるだろうし、言ったところでカレンも激怒するだろう。

ハルは頭の中で完結する。

「この子は……うるわは馬鹿なのよ。自分のことは二次で、メイドである信念ばかりを優先してばかり。うるわはよく言うでしょ？ 最大の犠牲心を持って……とかなんとかって」

頬に添えた手を引いて、握り拳を作る。

「私からすれば、くそ食らえ、よ」

唾棄するような頬の強ばりの後に、カレンは傷ついたうるわの髪を優しく撫でる。

「うるわにはうるわの幸せを見つけて欲しい。わがままでもいい、自分勝手でもいい。人として生まれたからには、犠牲なんて考えなくていい幸せを手に入れてもいいはずよ。メイド・イン・ジャパンとか、家政婦協会とかにとらわれないでね。エゴだつて時には必要」

小降りになつてきた雨の中、カレンはうるわの頬の泥を拭う。

「馬鹿なうるわにはそれが分からないの。表情からは読み取れないくらい、純粋な心を持っているから。これと思ひこんだら真つ直ぐ…… たまたまうるわにとってはそれがメイドであつただけ。本当に頑固者で、礼儀にうるさくて、説教屋で…… 本当に愛らしい」

うるわの綺麗な顔立ちが戻ってくる。

汚れはカレンによつてぬぐい取られた。

「だからこそ、私は許せない」

ハチをにらみ付けた目が振り返り、ハルをとらえる。

うるわのそばに立っていたハルの胸ぐらをつかんで、顔を近付ける。

「ハル…… あんたがうるわをこんな風にしたのよ。私から言わせれば、あのポンコツがうるわをこんなふうにしたんじゃないわ!」

ぶつけられる言葉のつぶてに、ハルはうちひしがれる。

「アンタがあまりにも弱いから！ 男のくせに笑っちゃうぐらいに弱すぎるから、うるわが自分を犠牲にするしかなかったのよ！ それがうるわを苦しめた！」

うるわを心強く感じていた。

うるわの言葉を頼もしく感じていた。

うるわの華麗な殺陣を見ているだけで、強くなれるような気がしていた。

……しかし、それはまやかしだ。

なぎ倒してきた鋼鉄の兵士達。倒れ伏した鎧の数を数える度、強くなったような気がしていた。あたかも死線をくぐり抜けた気になっていた。

「アンタは、それを分かってるの……？」

うるわが、弱い俺に変わり、何倍も身を粉にしていた。俺が見ていないところで、ずっとカバーしていてくれた。俺が敵と一対一で戦える環境を作り出してくれていた。敵を引きつけていてくれたんだ。

ハルは齒ぎしりする。

心臓をわしづかみにされたような感覚に、思わず唾を飛ばしていた。

「できるなら……俺にその力があるのならとくにやってるさ！ それでも！ どうにもならないことだってある！ うるわを守りたかったのは本当だ！ 傷ついていく姿を見たくなんてなかった！ それでも……！」

「……もう一度言っわ」

肺活量の限界まで息を吸い込み、解き放つ。

「ふざけるんじゃないわよ！」

締め上げた胸ぐらごと、ハルを揺り動かす。

「それでも、何よ？ それでも駄目だったからあきらめるの？ 頑張ったけど駄目でした？ 思ったけど出来ませんでした？ 現実主義も結構なものね！ そういうのが私は一番嫌いなもの。負け犬がよく言うのよ、そう言うことを！」

強烈な眼差し。

ハルは思わずその眼差しから逃げて、前髪で表情を隠す。

「カレンには分からないだろ？ 古代兵器を使えるんだから……！」

思わず出た言葉を取り消すことは出来なかった。

負け惜しみ。完全なる逃避。醜い言い訳。

言葉が浮かんでは消える。

「そうね、ハルの言う通りよ。私は強いから、ハルの言っていることは分からない。弱い人間の言うことなんてこれっぽっちも分から

ないわよ！」

張り詰めたカレンの声が、幾分か和らぐ。

「……でも、どんなに弱いアンタでも……うるわの気持ちくらいは分かるんじゃないの？」

「……………」

分かる。

分からないはずがない。

自己を犠牲にしても主人に尽くそうとすること。

痛いはずだ。

苦しいはずだ。

それでも、厭わず助けに駆けつけ、いつもと変わらぬ平静な態度で奉仕する。

主人が不安にならないように、傷ついても変わらぬ言葉遣いで奉仕する。

分かる。

分からないはずがない。

「だからこそ、これは簡単にあきらめていいことじゃない。いい、ハル……アンタは、うるわがこんなに傷つかなくてもいいように、強くなりなさい。うるわの仕事が無くなるくらいにね」

つかんでいた胸ぐらを離すと、カレンは不敵に笑った。ぶつけた言葉に遺恨を残さない、あっけらかんとした態度。

ハルは表情を前髪で隠したまま。

沸々と煮えたぎる思いがのどの奥からこみ上げる。

殻があるのならば破りたかった。

怒りではない、ほとぼしるような気持ちを叫びたかった。

それは産声に近いのかもしれない。

うるわの行動が、カレンの言葉が、ハルの硬質な殻にひびを入れた。

ハルは思う。

前髪がこんなにつつとうしいと思えたことはない。

「このポンコツとは私がやる」

晴れていく煙の中にハチの姿。瓦礫の上に超然と立っている。

ほこり一つ無いスーツ姿が、何よりも不気味だ。

カレンは恐れることなく、無風の中で袖をなびかせ始める。

「一つ言い忘れていたけど、マキの居場所、心当たりがあるわ」

準備運動をするように首や腕をぐるぐると回すカレン。

「もしも、私の推測通りなら……多分、直ぐ近くにいるわよ。びつくりするぐらい近くにね。でも、近いと言ってもここではない」

指を振り子のように揺らし、ニヤリ。

自信でもあるのか、カレンはあえて意味深な言葉を選んでいうだった。

「マキは消えたんじゃないくて、消した。私はそう考えてる」

「消しただつて？　　いつたい……　　一体誰がそんなことを……！」

「さあね……さ、話は終わりよ。私は忙しいの。病み上がりなんだし、早く終わらせてさっさと帰らなきゃ。ナナとのゲームの決着だつて残つてゐるしね。私の真の実力をあの黒チビに知らしめてやるんだから。それに、ハルも知つてゐるだろうけど、夕食はカレーよ。うるわのカレーは絶品なんだから」

名残惜しむようにうるわのそばにひざをつく。

小雨に変わった灰色の雲の下、カレンはうるわのポケットに手を入れる。

血と泥で汚れたポケットの中を探れば、血に染まつた乾燥梅と白いカプセルが出てきた。

「うるわを、よろしく頼むわね」

「カレンはどうするんだ」

「うるわを、よろしく頼むわね」

初めに触れたのは、血でぬれた乾燥干し梅のパッケージ。だが、手の中に握りしめたのは白いカプセルの方だった。

白いカプセルとは言つても、今はうるわの血で染まつてゐるので赤い。

悪いけど、勝手にもらつたわよ。

カレンは声には出さず口の動きだけで謝罪した。

ハルは自分のポケットに手を当てて思い出す。

記憶が正しければ、それは《遺片》という古代兵器だったはずだ。限界を引き出す代わりに人としての営みを奪う諸刃の剣。中毒性を有し、どちらかというと効能よりも代償のほうが勝る薬物……否、麻薬。

「カレンは……どうするんだ」

馬鹿の一つ覚えのように繰り返す。

「何回も言わせないで。言っているでしょ？ うるわを、頼むって」
うるわの名前だけをあえて強調する。

「まったくもう……もう少しおしとやかに出来ないのかな？」

カレンは愚痴を漏らすハチの声を聞き、うるわから離れた。

「悪いわね、私はもともとこういう質なの」

「見れば分かるよ」

「そう？」

肩をすくめながら、ハチと対峙する。

「手加減はなし。五分で片をつけるつもりだから」

手のひらを広げ、うるわの血で赤く染まったカプセルをつまむ。

口を上に向け、舌の上にカプセルをのせる。妖艶ささえ感じさせる鷹揚な仕草で、ごくんとカプセルを飲み下した。嫌らしくくっくめくのもと。

「うるわの味がするわ」

恍惚感を感じているような、カレンの声だった。

「《遺片》ね……。無理はいけないよ？ 人用の兵器ではないからね」

「見せてあげるわ、私の本気。真の実力ってやつをね」

「一度見たような気がするけど？」

「気のせいよ」

小雨に変わった雨が、カレンのまとう気迫だけで吹き飛ばされていく。

大地が振動し、カレンの両袖がばたと暴れ出す。ハチの銀髪がなびき、赤い瞳に好奇心がともる。

「確かに。気のせいかもしれないね」

風切り音の数は増し、ビルを容赦なく削り取る。看板が剥がれ落ち、車のルーフを貫く。

吹き荒れる暴風は、風の刃。

「僕も見せようか？ 実力の片鱗をね」

スーツの下、背中を隆起させる八チ。鋼の巨人も、無限に増える鉄の狂戦士もいつの間にかいなくなっている。

「片鱗……？ 馬鹿にするんじゃないわよ！」

世界で一番長い五分間。

時計の針は、今、刻み始めた。

第四十二話・「強くなりたい」

ハチが着用するスーツの背中を突破するようにして、鋼が生い茂る。スーツの生地はちぎれ、宙に舞う。

まるで巨木が生えるようにハチの背中を鋼が覆っていく。

屋久島に生え、圧倒的な存在感を誇る杉の木。千年という気の遠くなる樹齢を一気に早回しにしたような光景。ハチの小さな背中から膨大な質量が飛び出す。

カレンはその変貌を見守る気はないようだった。

ニヤリと笑い、手のひらを一気にハチに突き出すと、袖を激しく振るわせる。

袖の隙間から吐き出される力の波動は、辺りを滞空する風切り音と共鳴する。何十にも増えた、見えざる攻撃がハチの周囲で炸裂した。

攻撃はそれだけでは済まない。

制御しきれない力は、カレンが作り出す半径百メートル 絶対領域 を荒れ狂う。

《遺片》がもたらす効果はてきめんだった。

ビルの壁面を次々に風切り音が叩く。カレンが操る《千手》は、一般人の目ではとらえきれないが、超高速で放たれる鞭のような形態をしている。

ビルを叩き、窓から窓へ突き抜けると、衝撃でビルが嘔吐する。内容物は噴煙とデスク、書類の山に、パソコン、イスだ。惜しげもなくビルから落ちてきて、地面に叩きつけられる。

カレンが、参ったわね、と言うように舌打ちをする。

周りを見れば、自らの意思を越えて破壊を続ける《千手》の軌跡。背中から飛び出した鋼が一体何であるかを見極めるよりも先に、破壊は八手を襲い続ける。

地面を、八手を。

叩く。叩く。叩く。

壊し、なぶり、しいたげる。

四方八方から蹂躪する。

ビルというビルの窓ガラスが飛び散り、きらきらと地面に落ちてくる。まもなく止むであろう雨と共に、地上に降り注いでくる。

あまりにも美しく、あまりにも鋭利な天からの贈り物。

ハルは傷ついたうるわを背中なかばう。

ガラス中に大きい破片が混じっていたのか、ハルの背中に鋭い痛みが走った。痛みには顔を引きつらせながら、ハルは戦闘のただ中で翻弄されるしかない。

安全な場所を探そうと忙しく首を回すと、ガードレールを抱きかかえるように意識を失っているナナを発見する。

その奥、交差点。

街頭の巨大液晶パネルは、ひびこそ入っているがいまだ健在。表示されている時刻を見れば、戦闘開始からの経過時間が否応なく分かってしまう。

一分、経過。

「うるわ……悪い、我慢してくれよ」

地面に横たえていたうるわの身体を持ち上げるとナナの下へ歩き出す。

足取りは重い。

カレンが作り出す暴風域の中で一步一步、瓦礫を踏みしめながらナナの下へ急ぐ。

道中、隕石のように降り注ぐ。

キーボードやら、マウスやら、マグカップやらに、冷や冷やさせられながらも、ハルはナナの下にたどり着いた。直ぐ近くに落下したデスクの引き出しからは文房具が飛び出す。

「ナナ？　おい、ナナ！」

心の中で謝りながら、ハルはナナを少々乱暴に揺する。

「……………パ……………パ？」

「パパじゃない。俺はハルだ」

「ハル……………ハル……………」

ハードディスクを検索。ナナはしばらく無機質にハルの名前を繰り返す。

「ハル……………ハル……………ハル……………にや？　ハルなの？」

検索にヒットしたのか、意思のこもった声を出す。

「ああ、大丈夫か？ 立てるか？」

「うにゃ……ナナは今自己修復にメモリを全て使っているから、起動維持に精一杯……ごめんなさい、ハル……ナナ、動けそうにない」

「分かった。無理するな」

「にゃ……ありがと、ハル」

ガードレールに覆い被さっていたナナの身体を抱え、折れた街路樹に寄りかからせる。

重傷のうるわも、その隣に寄りかからせた。

ハルはその二人を守ること尽力する。激しい戦闘の巻き添えになりながら、せめて二人の安全だけは最低限確保しようと気を配る。

空から降ってくる瓦礫。

引き出しや、ファイルの束、メディアのケース……。

車のドアを盾代わりにすることによって受け流す。

大きい瓦礫は歯を食いしばって耐え抜くしかない。車のドアをへこませる衝撃。思わずひざを尽くそうになる痛みにも歯を食いしばる。

うるわ、ナナ、そして現在進行形で苦しむカレン。

彼女たちに及ばないにしても。彼女たちほど強くないとしても。

まだ出来ることはある、すべきことはある。

彼女たちに近づくために。強くなるために。守れるようになるために。

最後の最後まで最後まで悪あがきを止めない。

あのととき。絶望が染みこんできたあの瞬間を思い出しながら、胸に刻みつけた。

ちらり。時間を確認する。

二分、経過。

「ナナ……ハチを止められなかった」

車のドアを盾にするハルに悲しげな声が届く。会話をするだけに機能を集中させているのか、会話によどみはなくなっていた。

「ハチは、パパに会いたただけなの。ハチはパパが《彼岸》を起動する前にも後にも起動したことがなかったから。ハチは起動してからずっとパパに会いたがっていた。ナナはパパと会ったことがあるから、パパがどんな風だったか、ナナに聞いてきたよ。ナナ、分かるよ。ハチは寂しがりやなの」

「寂しがりやって言ってもな……」

「ハチは《彼岸》を使ってパパに会おうとしてる。パパがいたところの世界に戻そうとしてる……でも、ナナね、それは駄目だって、ハチに言おうとしたの。この世界で生きている人間……みんなそれを望んでいないから。みんな痛くて、苦しくて、悲しんじゃうよ、って。ハチは聞いてくれなかった……それで、ナナ何度も何度も言ったの。そしたらハチを怒らせちゃった……」

目を伏せるナナ。

笑ってばかりのナナだからこそ、その悲しみの深さが分かる。

今、悲しみの対象は、カレンと一騎打ちのただ中にいる。

道路の真ん中、剥落するビルの外壁の中で、一体どんな戦いが繰り広げられているのか。噴煙の中にいる二人の状況は、ハルの位置からではうかがえない。

巨大液晶に映された時刻を再度見る。

三分、経過。

ハルの焦燥感を見計らうように、それは起こる。

続けざまの閃光と爆発。

爆風よりも先んじた爆音が鼓膜に痛みを走らせる。吹き飛ばされてくるタンクローリーの部品や、街路樹。

加えて、絶望までも吹き飛ばされてくる。

煙を突き抜けて、ハルめがけてトラックがごろごろと転がってきたのだ。

ハルは体中を恐怖で縛りあげられながらも、動けないうるわとナナの前に立ちほだかる。

逃げない。あきらめない。

巨軀の前では役に立たないドアを盾に、ハルは念じる。

その意気に負けたのか、運良く街路樹にぶつかり大きくバウンド

するトラック。

「う……く……！」

鼻先を巨大なタイヤがかすめていった。

心臓がすくみ上がるような恐怖の後に、生きていることを実感させるように心臓が激しく動き出す。

「……それで、あいつの目的は分かった。そのパパって言うのは、ナナやハチとか、人型古代兵器を作った人間のことだよな？」

噴き出す汗を拭って、背中越しにナナへ声をかける。

「うん……《人機》や、数々の古代兵器の設計、プログラミングをしたんだよ。《彼岸》を設計したのもパパ」

「諸悪の根源ってやつだな……！」

奥歯をすり減らすハルの歯ぎしり。

「にゃ！ ハル、パパをそんな風に言わないで！ パパは人の未来を信じていたんだよ。誰よりも人が好きだったの……。ナナ達《人機》が人に似せて作られているのは、そのためなんだよ……。？ 兵器を作るんだったら、それは人型じゃなくてよかったはずなの……。だからね、もともとは《人機》は戦うための存在じゃないの……」

「……俺たちが勝手に、ナナを……。《人機》を人型古代兵器とかいう物騒な名前で呼んだ。その中で、ナナは自分たちを人型古代“兵器”ではなく、《人機》であると言いたいのか……。？ 壊すための兵器ではなくて、人と生きるための機械だっていうのか？」

「にや。ナナは……初めから戦うために作られたんじゃないよ？
守るために作られたんだよ……《彼岸》を守るためだけに。だから
ナナ達《人機》は《彼岸》を奪おうとしないかぎり、使おうとしな
い限りは起動すら出来ないように設計されていたんだよ」

「……突然自分たちの家に踏み込んできて、宝を奪おうとする者が
いる……。それに対して自衛しようとすることは確かに当たり前……
…そんなの当たり前だ。誰だってそうする……俺だってきつとそう
する」

家に土足で入り込んできて、大好きな猫画像を根こそぎ奪おうと
する奴がいる。それは敵と見なして、排除するのが当たり前だ。
そこに即応の理由はあれど、熟慮の余地なんかいらぬ。

ハルは眉間に陰を刻む。

父と海外の発掘調査に同行した。《彼岸》を探す旅。それは父が
主導するチーム・ダテにとってはトレジャーハンティングかもしれ
ない。

しかし、《彼岸》を守る《人機》にとってはどうだ。
家を荒らされ、大事なものを一方的に奪われる。いい迷惑だ。

それに同行とはいえ、荷担していたハル。

二度の起動に荷担し、その度に《人機》は取り戻すための死力を
尽くした。

その彼らを兵器と断定し、全力で排除しようとする人間。

……悪いのは誰だ？

胸の痛みを感じるハル。罪悪感に似た心痛。

そう、悪いのは自分勝手にほじくり返した人間……ひいてはハル達ではないのか。

……ハルは、ナナに対する言葉もない。

「でもね……ハルは悪い人じゃなかったよ。ハルはいいひとだよ……ナナにゲーム教えてくれたもん」

ナナが人懐っこい笑みを浮かべる。

ハルの胸の痛みが少しだけ和らぐ。まるで胸が澄んでいくようだった。

「つまり……私が主人を守護するように、専守防衛を掲げるように……ナナ、あなたも守護すべき《彼岸》があり、奪還のために望まぬ戦をする……ナナ、あなたはそう言いたいのですね？」

「うん、ナナもうるわと同じ……だよ」

ナナがうるわを見てにつこりと微笑む。

「うるわ！ 気がついたのか……？」

「申し訳ありません、ハル……私はメイド・イン・ジャパンでありながら」

身を起こそうとするうるわを押し止めるハル。

「……主人命令だ。頼む、今は休んでくれ。……後は、カレンが何とかしてくれる」

ハルの言葉にはふがいなさがにじんでいた。

「カレンが……？ カレンは療養中、《千手》もまともに操れないはず……まさか……！」

慌ててポケットを探るが目当ての品は出てこない。はっとして暴風域を見れば、爆炎が巻き上がり、ビルが倒壊していくところだった。

雪崩を起こすように噴き上がる煙と、沈んでいくビルの中、うるわの瞳の炎が絶望の風に吹き消されそうになる。

その視線を追うハルの目に飛び込んでくる、時計を表示する巨大液晶パネル。

四分、経過。

「俺は……カレンに言われた。俺が弱いせいでうるわをこんな目に遭わせたんだって」

「ハル、それは違います！」

「いいから聞いてくれ！」

うるわをせき止め、ハルは言葉を落ち着けた。

「カレンは俺に、うるわを頼むって、そう言い残して戦いの望んだ。……だから、俺は全力でうるわを守る。もちろん、ナナもそうすべきだし、俺自身もそう思ってる」

「しかし、それではあなたが……！」

「強くなれって言われた。あいつに、カレンに。……それっていけないことか？ 強くなろうとすることは、駄目なのか？」

ハルの問いかけに、うるわは押し黙る。

「俺は弱い。うるわの足を引っ張ってばかりだし、何一つうるわを支えてやれなかった。うるわが傷ついていくのを見ていることしかできなかった。自分の身を自分で守ることさえ出来なかった。マキに何があつたのかも察してやれなかったし、探すことは出来ても、見つけてやることは出来ない。弱い……なんて弱いんだろうな」

「にや……ハル、弱い」

笑顔のまま、いたずらに同意するナナと、背中越しに笑うハル。

「はは……ナナの言う通りだ。だからじゃないけど……俺は強くなりた。うるわが俺を守ってくれたように、強くなりた。そうだな……せめて」

飛ばされてくる瓦礫。

自動車のドアで二人を守りながら、ハルは声を張る。

「メイドとしての居場所を守るぐらいには、強くなりた。ナナがゲームの相手に困らないぐらいには、強くなりた。カレンが心

おきなく文句を言えるくらいには、強くなりたい。マキが自慢できる兄でいられるくらいには……強くなりたいんだ。強くありたいんだ。そうだ、俺は……そう決めたんだ。今、決めたんだ」

子供のように感情的に言い放つ。

「じゃないと、カレンに笑われるからな」

「ハル……馬鹿ですか、あなたは」

「にゃ？ ……ハル、馬鹿？」

「ナナ、勘違いしないでください。……どうやらハルは、馬鹿は馬鹿でも、前向きな馬鹿のようです」

「……言ってるよ」

ハルは微笑むうるわに恥ずかしくなり、そっぽを向く。

向いた先では今まで以上の破壊の狂想曲が奏でられていた。

規模はすでに半径百メートルでは済まされない。視認できるまでに太く、速く、強力になった《千手》が、ビルの谷間でのたうち回る。

破壊の限りを尽くす鞭の黒い軌跡。

風切り音だったところが、可愛いとさえ思える。

八つ裂きにされるような大気の絶叫が響けば、もれなく立ち並ぶビル群が崩壊していく。内部の鉄筋を折られ、バランスを崩したビルが、隣のビルにもたれかかる。

そこから飛び出す《千手》の黒い曲線。

ビルは真つ二つになり、崩壊していった。

ビルの倒壊と共に、突き上げるような振動がハルのバランスを崩そうとする。駅までの直線道路にはビルの残骸がうずたかく積み上げられていく。

昼下がりのオフィス街は、まるで世界大戦の様相を呈する。

「そつだ……時間は……！」

難を逃れていたビルの液晶を、冷や汗混じりに発見する。

五分、経過。

タイムアップ。

経過をハルに知らせると同時に、巨大な液晶パネルが地面へと落ちていった。

液晶が設置されていたビルがお役ご免とばかりに崩れ落ちていく。風塵が巻き起こる中、ハルはうるわとナナの風よけとなる。

破片がドアに当たり跳ね返る音が激しさを物語る。

口から吸い込む粉塵に、ハルの肺は激しく反発した。激しく咳き込むハル。すでに口の中は砂埃の苦い味で一杯だ。口から唾を吐き出しながらハルはこらえ続けた。

……守ると言った。強くなると言った。

カレンに、強くなれと言われた。頼むと言われた。疲弊したハルの身体に力がみなぎる。

「……二人とも……大丈夫か？」

倒壊の衝撃が過ぎ去り、ハルは振り返る。
うるわとナナがそれぞれうなずいた。

全身を灰色に汚しながらも、二人はどうやら無事なようだ。

まさに台風一過。

雨の止んだ空は曇り空のままだが、激しかった攻防は五分を過ぎ
て直ぐに収まっていた。

崩壊の音はもう無い。

瓦礫の山を石ころが転がり落ちていく。その音だけが響き、空し
く曇天に吸い込まれていった。

廃墟と化した駅前のオフィスビル街。
異様な静けさが周囲に充満していた。

「終わったのか……？」

震災後の町並みに似て、煙があちこちから噴き上がっていた。立
ち上る煙に咳き込みながらも、ハルはカレンを探す。

すると、炎立ち上る向こうから歩いてくる人影があった。

ハル達の下にゆっくりと歩み寄ってくる。

何重にも視界を曇らせる煙のせいで断定は出来ない。

……しかし、ハルはその人影に思わず顔をほころばせるのであっ
た。

第四十三話・「カレン」

カレンの身体は時間の経過を如実に感じ取っていた。

横倒しに崩れていくビルの下をくぐり抜けながら、カレンは身体を押そう倦怠感や激痛に耐えるしかない。

煙を吹き出しながらカレンの頭上めがけて倒れるビルの窓が迫ってくる。窓から降り注ぐのはデスク、パソコン、プリンター、名も知らぬOA器械。

カレンが曇り空に向かって手を突き上げると、袖が激しくはためいた。

黒い軌跡が風切り音を放ちながらひるがえる。

袖の隙間から飛び出してくるのは《千手》だ。

解き放たれた暴力は、倒れてくるビルを豪快にはじき飛ばす。瓦礫が飛び散り、カレンの身の安全を確保する。

「あと……三分！」

戦闘終結までの時間を五分と設定した。もちろんそれは、病み上がりの身体で《遺片》を使った場合に、考えられる限界までのタイムリミット。

時間の経過と共にカレンの動きは精細が欠いていく。早期決着がカレンにとっての理想の筋道だった。

「にしても、疲れるわね……！」

日頃から体力がないというわに言われ続けているつけが、どうや

らこういつときになって回ってくるようだ。時間さえ敵に回すカレンの思考回路では、焦りが徐々に占めつつある。

汗を振り乱し、嘔吐感と戦い、ハチの動きを追いつける。

《遺片》の副作用に悩まされながらも、カレンはハチを追いかけた。

「僕と戦う以前に、自分とも戦わなくちゃいけないなんて難儀だねえ……」

「ふん、アンタ相手にはちょうどいいハンデよ」

隆起したハチの背中には巨大な鋼の翼が広がっている。

キヤタピラ、戦闘機の翼、戦艦の砲塔、サブマシンガン……その全てをミックスした出来損ないの翼だ。

両翼を羽ばたかせれば、金属のこすれ合う耳障りな音が広がる。

「ハンデ？ もらった覚えはないけど？」

腕を組んで余裕の構え。地面を蹴って空中に滞空する。

「知らなかった？ ガキ相手には暗黙の了解なのよ。大人として当然だわ」

「大人？ どこにいるのかな、その大人っていうのは」

遠くを眺めるように目の上に手のひらを添えるハチ。

カレンはそれに舌打ちで応え、言葉は不要とばかりに《千手》を繰り出す。

……戦闘開始直後からすでに二分が経過した。

いまだカレンがハチに与えた有効打はゼロ。

カレンが先手必勝とばかりに繰り出した《千手》での攻撃は、背中から生えたハチの巨大な翼によってことごとく受けられている。金属同士がぶつかる甲高い音の後に、激突の衝撃波が瓦礫や煙を吹き飛ばす。

翼は《千手》を受ける度にへこみ、いびつに歪むものの突破るまではない。

しかも、水のように形を変えて、すぐさま元に戻ってしまう。

ここで誰もが考えつくであろう常套手段は、一点集中。

しかし、ここにきて性格が大雑把なカレンは、攻撃を集中させることが出来ないでいる。

《千手》が大規模戦略兵器であるという特性も、この状況では不利に働いていた。

何十、何百と攻撃を繰り返せど、破壊するのはハチの周囲ばかり。

「けどさ、見た目だけは派手だね、その武器」

身体をひねって黒の旋風をかわした。行き場を失った《千手》は、背後にあったトラックをいとも簡単に空中に跳ね上げる。窓を割り、ビルの五階に突っ込むトラック。

「派手で結構よ。私は派手好きなの」

「蓼食う虫も好き好きだから、とやかくはいわないけど……前にも言ったはずだよな？ ゴキブリ一匹殺すのにチェーンガンを持ち出

すのはナンセンスだつてさ」

「だとしたら、ゴキブリはアンタよ。そして私はゴキブリが大嫌い。相手がそれだけ憎いんだもの、チェーイングンだって持ち出すわよ。出来るなら核兵器で一掃したいぐらい」

「言いたいことは分かるよ。でも、狙いも大雑把だから、ほら、この通り」

言葉通り、軽く身体をスウェーするだけでカレンの放つ攻撃をかわしてみせる。かわされた《千手》はビルの外壁をこっそり削り取った。

「威力は申し分なしだね。……でも、当たらなければ意味がない」

仕方ないかと、肩をすくめる。

「……イライラするわ。特にその顔、その口調、その動きが！」

カレンの怒鳴り声と共に、袖の中から《千手》の力がほとばしる。

《遺片》の副作用と戦いながらの集中力の維持は、困難を極めた。一点集中はカレンにとっては至難の業。向いていないと言えば、一番表現が単純だろうか。

それでもカレンは力任せに数を繰り出す。

一撃一撃は車を真つ二つにするほどの破壊力を有している。当たれば必勝の攻撃だ。

そう、当てるのは一撃で十分。

それ故、数で圧倒し、退路を執拗にふさいでいく。

前後左右の攻撃に、たまらず八手は跳躍する。ビルの壁を蹴り、空中に身を投げた八手。

不敵に微笑み、カレンは両手を突き出した。

身体のを解放、《千手》に伝達する。

周囲で動き回る《千手》の一本一本に意識を通していく感覚。袖が裂けんばかりにはためき、波動が大気を揺らした。カレンの力を得た《千手》は、水を得た魚のように暴れ回る。

空中で身動きの取れない八手に三百六十度方向から襲いかかる。風切り音を取り囲み、したたかに打ちつけられる鞭の音が続く。

攻撃は八手を確実に痛めつけたはずだった。

だが、煙の中からゆうゆうと落下してくるのは、鋼の翼に覆われた八手。

「本当、うつつといいわね……そのポンコツの翼……！」

まるで鋼の翼は生き物だ。

背中からの攻撃、あるいは、前方からの攻撃。第二波の左右同時攻撃。

それら隙のないカレンの攻撃を、鋼の翼はきっちり受けきつてみせる。カレンには、八手の意思の外で動いているようにも見えた。自動迎撃機能、とでも言えばいいのだろうか。八手を包み込むようにして翼は動く。

カレンの《千手》が八手を四方八方から食らいつくが、カレンの意思を読み取るように、《千手》の攻撃の先に回り込むのだ。

体力のない身体で地面を蹴り、カレンは八手に接近する。

瓦礫と瓦礫の間を駆け抜け、車のボンネットからジャンプしながら、八手に右手を突き出す。

カレンの意志に従い、黒い軌跡が八手の翼を打ち付ける。

「無駄だね」

右翼だけで攻撃を受けきられてしまう。そして、広げた左翼からは、何十丁というマシンガンが生え、銃口をのぞかせた。

八手が指を鳴らすと同時に、一斉掃射。

緋色の銃弾が次々にカレンの足下に着弾した。接近を中断し、慌てて車の陰に身を隠す。車のシャーシに穴を空け、フロントガラスを粉々にする。タイヤがパンクし、車高が下がった。

カレンはトランクの後ろからわずかに顔を出し、八手の姿を探す。

翼の中に銃を吸い込み、八手は瓦礫の上に着地した。

車の後ろに身を隠すカレンに声をかける。

「そろそろハンデはいらないよ?」

カレンの肺は悲鳴を上げていた。走った距離はそれほど多くない。それでも身体は休ませると叫び続けている。口から酸素を吸い込む度に、のどに空気が引っかかり、思わず咳き込んでしまう。

肺の痛みがカレンの視界をぼやけさせる。

「あと二分だよ? そろそろラストスパートが必要じゃない?」

「いちいちうるさいわね……言われなく立って分かってるわ。自分を皮肉るわけじゃないけど、身に染みる程ね……！」

握りしめた拳でカレンが自動車のドアを叩く。
八つ当たりの音が楽しいのか、ハチがけらけらと笑った。

「時間がない中で、底力、見せて欲しいな」

カレンに巣くう悪寒と、気だるさ。ひび割れたような気管の痛み。咳が止まらなくなり思わず口元に手を持っていくと、手のひらには赤い液体が付着していた。

指の隙間から地面にしたたていく赤。
のどの奥からこみ上げる鉄の味。

あまりのまずさにカレンはその場で嘔吐した。

「確かに……時間はないみたいね……」

力はみなぎっているのに、身体がついていかない。痛みにもその場でのたうち回りたくなる衝動を抑え込むのがやっとだ。

《千手》はもつと破壊させるとせがみ続ける。

カレンもそのわがままを聞いてやりたいのに、力を伝達できないでいる。

完全な集中力不足だ。

乱れる視界に、途切れる思考。

脳に配線があれば、きつとずたずただろう。

「これじゃ、あいつに笑われるわね……強くなりなさいなんて言った手前、負けてらんないってのに……」

カレンの脳裏にハルの仏頂面が思い出される。

不器用で一見人付き合いが嫌いかと思えば、その実、誰より人恋しい節がある。

長年共に死線をくぐり抜けてきたメイドと似て、頑固であり、不器用。

そのくせ、強さすらないのに自分を押し通そうとするのには、本当に頭に来た。言い訳も含め、自分を主張できるのはそれ相応の力も持った者だけだ。

それがカレンの主義だし、自分自身が心がけてきたことでもある。

でも、カレンはなぜかハルの背中を押してみたくなくなってしまった。うるわがあそこまで気にかける存在が気になってしまった。《彼岸》を持つ以外に何の取り柄もない主人。実の妹ですら簡単に見失う主人。

情けない。男のくせに、本当に情けない。

……でも、それでも期待しなくなってしまう。

頑張ろうとする姿を、もがき苦しむ姿を応援したくなってしまう。強くなつて欲しいと願ってしまう。

妹を見つけてあげたいと思ってしまう。

らしくない。かなり、らしくない。

カレンは自嘲し、こみ上げてきた咳をこらえる。

血の味がのど元までせり上がってきたが、すんでの所で飲み込んだ。

「うるわも、何であんな奴のことを……」

そのとき、カレンはうるわの微笑みを思い浮かべ、ハルの笑顔が想像できないことに気がついた。直ぐに長い前髪で表情を隠し、そっぽを向くハルの姿。

何か心くすぐられてしまうものがあつた。
追い求めたくなってしまうものがあつた。

「……私……あいつの笑った顔、見たことないわね」

袖で口元を拭い、立ち上がる。

「何を考えてるのかしら、私……この期に及んで血迷ってるわ……
あいつの笑顔を見てみたいなんて」

「ラスト一分、万策尽きた？ それとも最後の賭けでも始める？」

鋼の翼を広げながら、瓦礫に腰掛けている。

余裕綽々といった体だ。カレンは口内にたまった血塊を吐き捨て、両手をだらりと下げる。

大きく深呼吸をし、最大限の集中力をかき集める。

周囲に停滞していた風切り音が鋭さを増し、地面や床に鋭利な軌跡を作り出す。

それを不気味に感じたのか、ハチは立ち上がり、翼をさらに大きく広げた。両翼からは数え切れない小型ミサイルが突き出され、弾頭があらわになっている。

撃滅必死の状況。

「のるわ、その最後の賭ってやつに」

血の味は、いい気付け薬だ。

いつになく研ぎ澄まされていく意識の中で、カレンは足を引つ張り続けていた激痛や悪寒を身体の中に押しとどめることに成功する。

精神が身体を凌駕する感覚。

《千手》の中に心を入れ込む感覚。

一体感。

自らが兵器となった感覚。

《千手》が通る筋道をきつちりと感覚で感じ取れる。

武器ではなく、自分の手足のように。まるで針の穴を通すような。

「あの黒チビの真似するようで嫌だけど……」

カレンの中に一本のシナリオができあがる。

「やるしかないわね！」

カレンが自動車のボンネットを足場にして飛び出す。

今までにない加速度に八チの頬が強ばった。

今度は指を鳴らさず、眉毛の動きだけでミサイルを乱射する。

全弾発射。

白煙を噴いて八チの両翼から飛び立ったいくつものそれは、空へ上る途中で弾頭が分裂する。

ミサイルの胴体が割れたかと思うと、その中からさらに小型のミ

サイルが出現。

まもなく推進剤に点火する。

花火のように周囲に散りながらも、狙う目標は全て同じ。

カレンの行き場を無くすほど、小型のミサイルは空を埋め尽くした。

多弾頭ミサイル。

カレンの脳裏に警告音が鳴り響く。身をひねりながら回避するカレンの周囲に、次々に着弾。

背中や髪の毛が炎の渦にさらされる。

全身が炎になったかのような錯覚を感じながら、カレンは炎の中から《千手》を繰り出す。

風切り音は、その名の通り風を切る。

真空すら作り出す旋風は、炎を切り裂き、カレンの道を切り開いた。

すすけた姿で炎から飛び出し、低い体勢のまま疾走。さらに右手を横に突き出す。

カレンの周囲で滞空していた風切り音が、カレンの命を受け、一斉にミサイルを迎撃し始めた。

敵の攻撃が多弾頭であるからこそ、千の攻撃を繰り出す《千手》が生かされる。

カレンの周囲に黒いカーブが描かれると、そこを通るミサイルが破裂する。

カレンを中心に外に広がっていく高速の軌跡。

漆黒の鞭の曲線。

一本はかすめ、一本はへし折り、一本は正面から激突する。

いくつもの弾頭が空中で炸裂し、ミサイルの残骸がぱらぱらとカレンの頭上に降り注ぐ。

カレンは右手だけで《千手》を操り、爆発の中をかくくぐる。

ハチとの距離は縮まるばかりだ。

中距離を利とする《千手》では、あまりにも近い距離。もう一息加速すれば、ハチに殴りかかれるだろう。カレンは地面を蹴飛ばしながら、口角から血をこぼす。

こみ上げる赤い嘔吐感。鉄の味。

それでもカレンは不敵に笑う。

自らの力を信じ、自らの勝利を疑わない。
それがカレンをカレンたらしめる要素だった。

「接近戦？　けどそれは僕も望むところだよ！」

自らの胸に手を突っ込むと、心臓を引きずり出すようにして大鎌を引き出す。横様に構え、振りかぶる。鋼の翼は素早い動きには不向きなのか、一瞬で背中にあたんでみせた。

カレンとの距離はまもなく三メートルを切る。

瞬き一つ許さない時間のせめぎ合い。

ハチの視界が情報を即座に読み取った。

大鎌の攻撃範囲内。

確信を得て、ハチは大鎌を振り下ろした。

刹那、カレンの身体がさらに沈み込む。

その動きはナナのしなやかさを連想させた。ハチの大鎌に頬を切られながらも刃をやり過ぐすカレン。

今、死に神はその手に命を握りしめ損ねた。
そこに現れる光明。

カレンはスローモーションにさえ見えた視界で、冷静に攻撃を実行してみせる。一太刀をかわしたカレンは、温存していた左手を字面につけ、力を送り込む。すると、地面の中に潜り込んだ《千手》が次々に地面から飛び出してくる。

周囲からカレンと八チを包むように暴れ回る《千手》。

爆砕する地面。

舞い上がる破片。

巻き上がる噴煙。

まるで煙幕だ。その中に姿を隠し、カレンは八チの背後を取る。

それは、マルチメディアビルで見たナナの戦い方に酷似している。

最初で最後の最接近。

攻撃を加えず、後ろから八チを羽交い締めにした。まさにそれが鋼の翼をたたんだ八チの誤算でもあり、翼をたたませたカレンの勝算でもあった。

カレンが八チの耳元でささやく。

羽交い締めの力はさらに強くなる。

「これなら……避けきれないでしょ？」

羽交い締めにしたカレンの袖が激しくはためく。二人の周囲で風切り音が舌なめずりする。

激しく、鋭く。

一方で、追撃のミサイルは四方にそれていく。流石に八チこと攻撃する意思はないようだった。

「馬鹿でしょ？　ただでさえ正確な攻撃は出来ないのに」

「……そうね」

カレンの口元からは血が滴り、金色の髪が暴風域の中でしなやかに揺れる。

黄金の瞳はいつそう美麗に輝き、カレンの意思が偽りではないことを体現していた。

「これじゃ、カレンもただでは済まない」

カレンが笑う。

何かに気がついた八チの目が見開かれる。

「まさか！　僕もろとも……！」

「感謝　しなさいよね」

思いの中で浮かべた顔と、カレンの言葉の行き先。

周囲に広がっていた《千手》の攻撃が二人に集束する。

最後の力を振り絞るカレンの攻撃。操りきれず、身勝手にビルを倒壊させていた《千手》までも呼び寄せる。

体中から激痛が飛び出してくる。臓器が爆発するような痛みだ。あるいは、体中の骨という骨にひびが入ってしまったかのような。とうとう抑えきれなくなった《遺片》の副作用。でも、関係ない。

カレンは意識を集中させる。

五分、経過。

風切り音が耳朶をかすめたかと思うと、次の瞬間、二人は果てしない爆発の中に飲み込まれていった。

第四十四話・「犠牲」

五分という時間の経過をハルに知らせると同時に、巨大な液晶パネルが地面へと落ちていく。

液晶が設置されていたビルがお役ご免とばかりに崩れ落ちていった。

風塵が巻き起こる中、ハルはうるわとナナの風よけとなる。破片がドアに当たり跳ね返る音が激しさを物語っていた。

口から吸い込む粉塵に、ハルの肺は激しく反発した。

激しく咳き込むハル。すでに口の中は砂埃の苦い味で一杯だ。口から唾を吐き出しながらハルはこらえ続けた。

……守ると言った。強くなると言った。

カレンに、強くなれと言われた。

頼むと言われた。

疲弊したハルの身体に力がみなぎる。

「……二人とも……大丈夫か？」

倒壊の衝撃が過ぎ去り、ハルは振り返る。うるわとナナがそれぞれうなずいた。

全身を灰色に汚しながらも、二人はどうやら無事なようだ。

まさに台風一過。

雨の止んだ空は曇り空のままだが、激しかった攻防は五分を過ぎて直ぐに収まっていた。

崩壊の音はもう無い。

瓦礫の山を石ころが転がり落ちていく。その音だけが響き、空しく曇天に吸い込まれていく。

廃墟と化した駅前のオフィスビル街。

異様な静けさが周囲に充満していた。

「終わったのか……？」

震災後の町並みに似て、煙があちこちから噴き上がっていた。立ち上る煙に咳き込みながらも、ハルはカレンを探す。

すると、炎立ち上る向こうから歩いてくる人影があった。

ハル達の下にゆっくりと歩み寄ってくる。

何重にも視界を曇らせる煙のせいで断定は出来ない。

しかし、ハルはその人影に思わず顔をほころばせるのであった。

ハルの瞳が現実を追い抜いて、イメージを結ぶ。

崩壊したビルの谷間を抜けて、風が走る。

風ははぜる炎を揺らめかせ、流れる煙の背中を押した。

せかされた煙は急ぎ足で遠のき、煙の中を歩む人物の姿をあらわにした。

煙を晴らした一陣の風が、その者の髪を撫でていく。

揺れる金色の髪。自信みなぎる黄金の瞳。

彼の者の名はカレン・アントワネット・山田。

《アンタツチャブル》の二つ名を持つ最強の少女……。

ハルも、うるわも、同じ思いを、同じイメージを共有していた。
彼女は言っていた。

《遺片》を服用した私は無敵よ、と。

その言葉に疑いはない。

崩れ落ちたいくつものビル。それらの残骸を目に映し、カレンの
無敵宣言を疑うはずなんてないのだから。

体中の痛みを抱え、うるわは目をこらした。見届けなければいけ
ない。

我が主の勝利の勇姿を。気を抜けばかすんでしまいそうになる視
界をなんとかクリアにする。

ハルは持っていたドアを地面に落とし、歓喜に突き上げる腕を用
意していた。

ハルの瞳が現実を追いついて、リアルを結ぶ。

崩壊したビルの谷間を抜けて、風が走る。

風ははぜる炎を揺らめかせ、流れる煙の背中を押した。

せかされた煙は急ぎ足で遠のき、煙の中を歩む人物の姿をあらわ
にした。

煙を晴らした一陣の風が、その者の髪を撫でていく。

揺れる銀色の髪。悔しさみなぎる深紅の瞳。

「嘘……だろ？ あいつは、あの自信満々なあいつは……」

彼の者の名はハチ。

「まさか……そんなはずありません。あり得ません」

《人機》八号機にして、最新最強の古代兵器。

「僕を……ここまで追い詰めるなんて……。正直なところ、驚いているを通り越して、信じられないよ……。でも、もう終わりだ。賭けは……僕の勝ちだ！」

左腕を振り、ハチは声をからした。

声をからす理由は一目見れば明らかになる。

その身は《人機》といえど満身創痍。

右腕は肩から先が存在しない。ちぎれた配線が肩先から飛び出している。修復が間に合っていないのか、火花散らす肩がバチバチと悲鳴を上げたままだ。

「お父さんに……会った。絶対に会った……！ 会って、撫でてもらうんだ、抱きしめてもらうんだ！」

巨大な翼は片方がもげてしまい、かろうじて片翼がその存在を主張している。染み一つ無かったスーツは上着を無くし、ワイシャツも所々が破けている。

侮蔑と軽薄さで溢れていた赤い瞳も、炎の揺らめきと言うよりは、怒りの劫火で埋め尽くされている。

「僕はこんなところで負けていられないんだ！」

思いを爆発させるハチには、かつての大人びた雰囲気や言葉遣い

はない。

身の丈にあつたわがままと、身の丈にあつたむき出しの言葉。

「僕は《彼岸》を手に入れる。お父さんに会うんだ……誰にも妨げさせやしない」

ハチにとつて、破壊寸前にまで追い詰められたことが、より自らの願いの大切さを再認識することになっていた。

片翼をめいっぱいに広げ、残った左腕で大鎌を出現させるハチ。感情を大鎌に込めるように、一度大きく振り抜いた。

「カレンはどうしたのですか！」

ハルの背中から鋭い氣勢が放たれる。うるわがいつの間にか立ち上がり、ガードレールを手すりにして身体を起こしている。

「私の主は！ カレンはどうしたのですか！」

まるで血で染まった身体を忘れてしまったように。

「カレンが負けるはずありません！ カレンは、カレンはどこにいるのです！」

まるで全身を覆う苦痛を感じることも出来ないように。

「うるわ、駄目だ！」

ハルは足を引きずりながらハチにくっつかかろうとするうるわの腕を取る。

「離してください、ハル！　いいえ、離さない！」

うるわをつかんだ腕が、乱暴にふりほどかれる。

そのあまりの勢いに、ハルは地面に倒れ込んだ。うるわの中で広がる巨大な感情の波は、うるわの五感全てを飲み込んでしまっていた。

ハルは眼中にないようで、言葉遣いさえも忘却の彼方。

無表情ですら憎悪に歪み始めていた。

「カレンは、私の主は！？」

「……何を言っているの？　僕がここにいい証拠じゃないか」

「嘘です！　でたらめです！」

うるわの瞳には疑うことを知らない純粹な眼差しがある。

しかし、瓦礫の上で大鎌を構える八チの姿に、空模様同様、徐々に曇り始める。

「カレンはどこにいるのですか！」

ここにいる者と、いない者。その理由。

「私の主はどうしたのですか！？」

覆い隠す黒い雲は、絶望に似ていた。

「カレンが負けるはずがないのです。カレンは……カレンはいつだって強かった！　笑っていてくれた！　だからカレンは！」

大鎌を持った左腕だけで肩をすくめるハチ。

「相手にするだけ無駄だね……いい？ 純粹な結果だよ。彼女は僕もろとも自爆しようとした。《遺片》を使って、身体をこわしてま
でね。……でも、出来なかった」

うるわの拳は怒りに震える。

うつむかせた顔の下、身体全体が怒りで震えている。

「それは僕の方がより強者だったからだよ。僕が生き残り、カレンが犠牲になった。これが全て。カレンはよくやった方だと思うよ。僕をここまで追い詰めたんだからね……でも、その結局は程度でしかないってことだけど」

こらえきれず加速し、飛びだしたうるわ。

うるわの顔があった場所に、きらりと光る雫が舞っていた。うつむいた影の中にじんだ、うるわの感情の残滓。

「うるわ！」

ハルの制止も空しく、うるわはとハチが激突する。

うるわにとつては最後の力を振り絞った攻撃だった。

無理に無理を重ねるような行為。

憎しみすらも力に変えた一撃。

残りの力全てを費やした攻撃。

明日をかえりみない攻撃。

全てを総動員したうるわの攻撃は、あまりにもあっけなく、ハチによって叩きふせられる。

うるわの一撃を軽く身をさばいて避けると、その懷に大鎌の柄をたたき込む。

内蔵を痛めつけられたのか、わずかに吐血し、ハルの前に転がってくる。

うるわは悔しさに齒ぎしりし、うつぶせたまま顔を上げられないでいる。

……うるわは肩を細かく震わせて、小さな嗚咽を漏らしていた。

第四十五話・「もう一度だけ、もう一回だけ」

「ハチ、駄目だよ。お父さんはこの世にはいないんだよ……？」

うつぶせに倒れたまま動かないうるわに変わり、ナナが口を開く。

「少し黙ってよ、ナナ。僕にまだそれを言うならいくら、ナナでも、修復可能な状態ではすまさないからね」

「お父さんが生きていた時代と、ハルたちが生きている世界は違うんだよ」

修復機能を一時的に停止させるナナ。

声帯機能だけをしっかりと保ち、ハチに声を届けようとする。

「ハルの生きている時代はハルたちのもの。私たちはその中で生きていく方法を探さなきゃいけないんだよ」

「ナナのくせに、分かったようなことを言うんだね……でも、それは違うよ、ナナ！ 《彼岸》があれば、お父さんが遺してくれた《彼岸》さえあれば失ったものも、時代も、お父さんも取り戻せるんだ！」

瓦礫の上から大鎌の矛先をナナに突きつける。街路樹の幹に背を預けるナナは、ハチににっこりと笑顔を届ける。

「お父さんは、優しくかったよ、たくさん遊んでくれたし、たくさん教えてくれた。でもね、お父さんはね、その中でもね……ずっとハチのことを考えてたの。ハチができあがったら、ナナと一緒に遊ば

せてくれるって約束したの。ナナ、嬉しかった。だって、やっと一人じゃなくなるんだもん」

「だったら、ナナだって会いたいだろ？ 僕と同じでお父さんがいなくて寂しいだろ？」

「ううん……ナナは悲しいけど、寂しくなんかないよ」

ハチが握りしめる大鎌の柄が、ハチの握力でみしみしと音を立てる。

「ナナには、たくさん友達がいるの」

ブリキの人形のようにぎこちなく指を折る。

「ハルでしょ、カレンでしょ、うるわでしょ、マキでしょ、それに、ハチ……こんなにいるもん、寂しくなんかないよ」

「……ナナはお父さんを捨てるの？ そうなんだね？ お父さんに作ってもらったくせに、可愛がってもらったくせに……僕はそれすらしてもらっていないのに！」

片翼がばさりと広がる。

そこから何百と生えだしたのは、武器ではなくプラグだった。

ヘッドホンの端子だったり、ひげそりの充電用のコードだったり、用途不明の太いコネクタだったり。それらがまるで蛇のようにコードを揺らしながら、翼から身をはい出させてくる。

そして、獲物を定めるかのように鎌首をもたげると、ナナに向かって一直線に飛び出していく。

ナナはなすすべなく右肩と腹部を貫かれ、街路樹にはりつけにされてしまう。

痛がる様子も見せずにハチを見つめる。

火花散る腹部に修復の兆しはない。

「そうじゃないよ、ハチ……ハチもね、ハルたちと一緒に遊ぼう？
一緒にゲームしよう？　そうすればきつと分かるはずなの。ナナたちはね、この時代で生きなきゃなんだよ。この時代の人間たちを不幸にしてまで、元の時代に戻すことなんてしてはいけないんだよ。お父さんはね、好きだったの。人がすごくすごく好きだったから。その証拠に、私たちはその人の形に作られているんだよ？」

さらにもう一本のプラグが、ナナの左肩を貫く。

「止める！」

「ハルは黙っていてよ。これは《人機》の……姉弟の問題なんだ」

止めに入ろうと体を動かした瞬間、ハルは別の配線に体を絡め取られ、地面に顔面をこすりつけられる。

あごの痛みとともに、かんでしまった舌から血が滴る。

「……僕には分からないよ、ナナ。それってさ、つまり、共存しろってことだね？　ナナは、お父さんがどうして《彼岸》を用いて世界を終わらせたのか分かっていないの？　それともナナのハードディスクは壊れているの？　どちらにせよ、ナナはもう一度しっかりディスクに刻んだ方がいいよ。お父さんはね……お父さんは、人に絶望したんだよ。戦争や、環境破壊を繰り返す人類にさ！　今だってそうだ！　僕が作られていたときと何ら変わっていない！」

「それでもね……お父さんはきっと人のことが好きだったんだよ。ナナはそう思うの」

極上の笑顔をナナは浮かべた。

子供のような純真な笑み。じゃれ合う猫。目を細めて幸せに遊ぶ姿。

ハルは地面でがんじがらめにされながらも、その笑顔に心を打たれた。昔に亡くした愛猫アルフレード。勉強していると遊んでほしそうにすり寄ってきた。仕方なく猫じゃらしを眼前で揺らすと、愛猫は楽しそうにワンツーパーンチを繰り返す。勉強時間がなくなるのもかまわずに、ハルは愛猫と遊んでしまう。

ハルの脳裏をよぎる思い出のストロボ写真。

不思議そうに目を丸め、楽しそうに目を細め、飼い主と飼い猫が遊ぶ姿。

きつとその二つの微笑みは同じだったに違いない。

「ハチもきつとこの世界が好きになる」

「……駄目だ。ナナはもう壊れているよ」

ゆらりと太い配線が持ち上がる。鋭い銀のプラグをきらりと光らせ、ナナの心臓に照準を付けた。

ハルは配線の拘束から何とか抜け出そうとめちやくちやにもがく。しかし、体に食い込んでくるばかりでちっとも抜け出せる気配はない。締め付けられる痛みが襲うばかりだ。ハルは唯一、拘束のないうるわに視線を向けるが、うるわは戦意を喪失し、肩をふるわせ

ている。

ハルの心で早鐘が打ち鳴らされる。

カレンはいない。

皮肉も毒舌も聞こえない。カレンが《遺片》を使用し、早五分以上……それも難しい。

「……くそっ！」

ハルはがむしゃらに体を動かし、配線の痛みにもだえるようにもがき出す。すると反動でポケットの中からあるものが飛び出し、ハルの目の前に転がってきた。

ハルは目の前にあるそれに焦点を合わせる。

「バイバイ、ナナ。お父さんにはよろしく言うておくね」

プラグの鋭利な先端が、ナナに向かって急加速。

プラグは寸分の狂いもなく目標を目指し、その先端で突き刺した。

何かが折れ、壊れる音。

突き抜けた部位からは赤い液体がしたたり、ひび割れたアスファルトに染みこんでいく。

激しい表皮の痛み。のどが焼けそうなほど熱い吐息。体中が爆発しそうな高熱。内臓をはき出さんばかりの吐き気。

痛みばかりで混濁しそうになる意識。

「ハル！」

「……なんだよ」

腕を突き抜けた配線が、ハルの胸元で止まっていた。

右腕を犠牲にして、左腕でプラグを握りしめる。腕から流れる生暖かい流れを感じながら、ハルは背後で聞こえるナナの声に安堵した。

「血が出てるよ！ ハルから血が出てるよ！」

ナナが騒ぎ出す。近所で喧嘩をする猫のように甲高い声を上げて。

「ああ……出てるな。でも、それでいいんだ」

プラグを腕から引き抜き、地面にたたきつける。

「ハル……まさかあの拘束を逃れられるなんてね」

感心するようなハチの言葉の裏には、怒りが見え隠れする。

「分かった気がする……カレンが中毒になるわけがさ」

それはまるで乾燥梅のような味がした。

適度な酸味と、ほのかに広がる甘み。本来相容れないものが奏でる上品なハーモニー。

「ハル、まさか《遺片》を飲んだの！？ 駄目だよハル！ ハルが

おかしくなっちゃうよ!？」

胃の中で熱く広がる溶岩は、すぐに体中に浸透していった。
血管という血管が焼かれるような痛み。

筋肉の繊維という繊維が引き絞られるような痛み。
それは細胞を限界以上に活性化させる痛みだった。膨大な情報に
パンク寸前の骨髓と脳が、意味不明な指令を体に下すから、汗が噴
き出たり乾いたり、吐き気を催したりと際限がない。

「ハル……！　なぜあなたが《遺片》を……」

うるわが真っ赤な目でハルを見る。泣いていたのだろう。

「返すの忘れてたんだ」

臨界点を突破した反動で全身が悲鳴を上げている。すでに壊れた
部分もあるかもしれない。

訓練されたカレンと違い、ハルは素人だ。
危険性はナナの叫びが示す通り。

「ナナはいいの！　ナナはすぐに直るから！　でも、ハルは！」

「いいんだ……それでもいいんだ！」

瓦礫と、倒壊したビルの隙間にとどろく叫び。

煙を吹き飛ばし、空に広がり、埋め尽くす灰の雲に吸い込まれて
いった。それに応じるかの如く、雲が裂け、そこから一条の光が注
がれる。

ハルとハチの中間に神々しい光が差す。

曇天に遮られた太陽が、長き沈黙を経て、再び輝きを取り戻そうとしていた。

「最後の最後まで……いや、最後の最後であつても俺はあきらめたくない。カレンも、きっとそう言うはずだ！　そうするはずだ！」

手近に刺さっていた鉄パイプを引き抜き、ハチに向かって突撃していく。活性化した体の筋肉がハルの期待に応える。

人間離れた速度で、ハチに接近。鉄パイプで斬りつける。

……だが、所詮は人間離れの域でしかなく、ハチは軽くさばいてみせる。

「何もできない……でも、何もしないままであつたくないんだ！　目の前で消えていくものを、失っていくものを見過ごすことなんて、もうしたくないんだ！」

旅立つ両親を。

冷たくなつた愛猫のアルフレードを。

病床に伏せた妹を。

犠牲心を貫くうるわを。

説得を試みるナナを。

命をかけるカレンを。

そして、再び消息を絶つたマキを。

「俺は失いたくないんだ！」

失うことで訪れる寂しさ。

一人きりで耐えることが出来るはずだった。人間一人にはあまりにも広い家でも、そこでじっと耐え続けることによって生活していけると思った。悲しみはやがて慣れる。加えて、前髪が伸びる頃には表情すらも隠せるから。悲しいことがあっても隠すことが出来るから。

「無駄だよ。人間が《遺片》を服用したところで《人機》には遠く及ばない」

次々に繰り出すハルの攻撃が、いとも簡単に空を切る。それでもハルは裂帛の気合いとともに、ハチに追いすがる。

「おおああああああっ！」

……クラスメイトを遠ざければ、悲しむ姿を見せることもない、ハルはそう考えた。

不器用なハルにはそれはたやすいことだった。苦手意識を持たれてもよかった。同情されてもどんな顔をしていにか分からなかったから。

一人で猫画像を見て、寂しさを紛らわせる。馬鹿にされたっていい。陰口をたたかれてもいい。

逆に傷つけるよりは、自分から遠ざかっていったほうがいい。遠ざけられた方がいい。

また何かを失うのはごめんだから。

「ぐ……っ！」

足がもつれそうになる。よく見れば、足にハチの射出したプラグが刺さっていた。

「こんなもの……！」

ハルはそれを乱暴に引き抜くと、痛みも忘れて鉄パイプを横にな
ぐ。

「うるわたちの痛みに比べれば！」

……失意に耐え続ける。

それでも、気がつけば聞こえてきた。凍っていく心の中から小さな悲鳴が聞こえてきた。そのたびに悲鳴を飲み込み、さらに冷たい氷で覆っていく。その作業の繰り返し。

しかし、完全には凍らせることが出来なかった。

お兄ちゃん。

楽しそうによってくる妹がいた。幼い頃にプレゼントした安物の赤い髪留めが、定位置にある。前髪を逆さにとめる髪型。プレゼントしたその日から妹の髪型は変わらない。その妹は、そんなに邪険にしても笑いかけてくる。「冗談を言っては困らせてくる。邪魔をし
てくる。たとえ病床に伏せようがそれは変わらなかった。

笑いかけてくれたんだ。

自分がいなくなる恐怖よりも、心配してくれる誰かのために笑う
こと。

優しさ。心遣い。

それをするに必要とする強い心。いったいどれほどだろうか。計
り知れない。

「もっと速く！ もっと速く動け！」

体に鞭打つ。髪を振りみだし、ハチの頭上に鉄パイプを見舞う。

「このおおおおおおっ！」

「無駄だっって言っているのに」

ハチは翼を広げ防御する。けたたましい金属音のあとに、ハルの手から鉄パイプがこぼれ落ちた。しびれた手をそのままに翼にとりつく。歯を食いしばり、その隙間から声をはき出す。

「分かったんだ……俺は」

手のひらを鋼で切り裂かれながらも、ハルは翼から生える配線を引きちぎろうとする。

配線にこびりつく熱い血液。

「やっと気がついたんだ。理解したんだ！」

ハチがハルを振り落とそうと翼を羽ばたかせる。

「ハル！ 無理だよ！ ハチには勝てないよ！」

ナナの声は聞こえない。地面にたたきつけられそうになりながらも、ハルはしがみ続ける。必死の形相は、砕けかけたうるわの心を揺り動かす。

「ハル……あなたはなぜそこまでして……私や、カレンすら……」

うるわ、カレン、ナナ……そして、マキ。

この一週間の内に、身の回りは一気に騒がしくなった。現実から逸脱した騒がしさに面食らいながらも、なぜか心が満たされていくのを感じた。悲しみが薄らいでいき、寂しさがどこか霧散した。

なぜだろう、それはとても温かった。

「気がついた？ 何を言っているの？ ついにおかしくなった？」

悲しみという極寒の中で凍った心身。

まるで解きほぐされていくようだった。

「そろそろ返してもらおうよ！ お父さんの《彼岸》を！」

氣勢とともに翼が再生する。失ったはずの片翼が背中から飛び出し、一段と激しく羽ばたく。翼から転げ落ちそうになり、あわててコードをつかみにかかる。しかし、コードについた血液が潤滑油となり、ハルは翼から滑り落ちてしまう。

瓦礫に体を打ち付け、肺の空気をはき出す。

ハルが空に舞い上がったハチを見れば、大鎌を振りかぶるところだった。

雲間から注ぐ光を背負うハチ。

不気味なほどに美しい銀髪と、烈火のような朱の眼は、まるで墮天使。でなければ、死神だ。

「俺は寂しかった……」

膝をつき、ハチを見上げる。《遺片》の副作用で体中を激痛と倦怠感が襲う。

「……情けないよな」

凍結した心身を溶かすもの。

くすぐつたくて、懐かしくて、それでいて温かいそれは何なのか。見つかった気がする。分かった気がする。

「本当に格好悪くて、最低で最悪だ！ 守ってやるような力もない、弱くて、迷ってばかりの最低なやつだ！」

膝をついたまま、ハルは空に向かって吼える。

「それでも……そんな俺でも、強くなりたい。みんなと一緒にいたいと思えるんだ！」

……確かに、カレンの言うとおり案外直ぐ近くにあった。

なんと言ったか……そう、言葉に出来る、その言葉は。

目には見えない。けれど、しっかりと、堅くつながれていることを示す言葉。

なんと言ったか。

「……そうなんだ」

マキを遠ざけたのは俺。

マキを消したのは俺。

距離をおかなければいけない、そう願ってしまったから。

一人になってしまったときのよう、などと願ってしまったからだ。

お兄ちゃんが信じてさえくれれば、マキにできないことはな
いって……バカみたいだけど、そんな気さえするんです！

「ああ……信じる」

今にもものどから出てきそうな言葉がある。

思い出せないのがおかしいくらい。

きっと誰しもが知っている言葉。

それぐらい簡単な言葉なんだ。

それでいて強い言葉で。

かつ心地よい言葉。

「本当に、今更だけどな。俺は信じる。今なら信じる事が出来る。
なんだってお前は俺にとって」

思い出した。

絆、
だ。

「世界最強の妹なんだからな」

聞こえる、あの歌が。

回る、あの歌が。

もう一度だけ、もう一回だけ。

頭の中で。鮮明なイメージとなつて。強烈な頭痛を発しながら。あのときと……白と黒で彩られたあのときと同じように。

「この波動は、まさか……《彼岸》が起動する！？ クツ！ させないよ！」

大鎌が牙をむく。

「……だから、もう一度だけ。もう一回だけ」

マキ。

近くにいます。顔をみてくださいよ。

泣いた顔でもいい、怒った顔でもいい、笑った顔でもいいから。もう一度だけ。もう一回だけ。

「マあああああああ
キiiiiiiiiiiiiiii
つ！」

雲間から、新たに注がれる光のカーテン。膝をついたまま、ハルはその光に囲まれる。

荘厳な光の中で、ハルの咆哮が響き渡る。

爆発する光。飛び出す帯状の輝き。

目にもとまらぬ早さで帯状の光が球体に集束していく。ハルは頭痛に必死に耐えながら、光球を見つめる。まばゆい光を放つ球体は、卵が割れるような音を伴って四散した。

刹那、死神の鎌が弾かれる鋭い音。

「お兄ちゃんが信じてくれれば、マキは最強です」

膝をつくハルの眼前に一人の少女が降り立った。

第四十六話・「妹は世界最強」

身構えるハチと対峙すると思いきや、マキはくるりと振り返り兄と向かい合う。

「お兄ちゃん、格好悪いですよ。マキ、がっかりです」

「うるさい、黙れ」

マキが膝をつく兄の頬をハンカチで拭こうとする。兄はそれを憚然として受け止める一方で、頬を赤く染めてしまう。久しぶりに見た妹の姿は、やはりいつもと変わらない姿だけれども、ハルにとっては何物にも代え難い感動に変わっていた。

感動はハルの中にとどめておくことが出来ず、顔から漏れ出てしまっている。

マキはそんな兄を嬉しそうに見つめていた。

「なんて嘘です。お兄ちゃんはマキの自慢なのです」

「うるさい、黙れ」

マキのおでこに軽いデコピン。

マキはあまり痛くないはずなのに涙目になり、額を手で押さえる。

「うっ……久しぶりの再会だというのに厳しいお兄ちゃん……相変わらずの愛情の裏返しぶりにマキは感動……快感？　すら覚えてしまいます。でも、そんなところがまたお兄ちゃんのいいところだったり、魅力だったり……えへへ」

体を身震いさせて妄想に頬を染める様は、まさにマゾヒスティックな資質を感じさせた。

「そんなお兄ちゃんを……」

兄を見つめるつぶらな瞳が敵愾心の炎を燃やす。

「マキの大好きなお兄ちゃんを傷つけるなんて、いくら心優しく純粹無垢で純情可憐、なおかつ可愛く純粹無垢なお兄ちゃん大好きっ子のマキでも怒りますよ！」

振り返って、びしり。

気持ちよく指を突きつけ、八手をにらむ。

「同じことを二回言ったな……」

《遺片》の副作用にさいなまれる中、ハルはシニカルな笑みを浮かべている。

「う……お兄ちゃん、マキとしては格好がつかないので、そこは黙って流してくれるとありがたいです！」

兄のつつこみに頬をふくらます。背中では寒い風が吹いたが、お構いなしにマキは指を突きつけ続ける。

「と言うわけで、お兄ちゃんが許しても、マキは許しません！」

「また変なのが出てきた……。許すも許さないも、初めから許されることが問題ではないよ！」

両翼を羽ばたかせるとマキに向かって直滑降。

「お兄ちゃん！ マキを信じてください！ マキはお兄ちゃんにとつてどんな妹ですか！」

「どんな妹だつて……！？」

獲物をねらうワシのように、上空から飛来するハチ。左腕に持った大鎌を大きく振りかぶる。

「そうです！ お兄ちゃんが信じてくれれば、マキは！」

ハルの頭に浮かぶ一つの希望。

「マキは……俺の妹は世界最強だ！」

叫びがすさまじい衝撃音にかき消される。瓦礫が揺れ動く衝撃の中で、ハチとマキが肉眼ではとらえきれないスピードで攻撃を繰り返す。

先制攻撃は、ハチが繰り出した大鎌だ。体を最大限にひねり、ためにためた力を大鎌に付加させる。解放したときには大鎌は音速を超えていた。マキは大鎌の軌道を冷静に読み、地面を蹴る。大鎌が瓦礫をとらえて地面に亀裂を走らせたときには、マキはハチの背後に回っている。

マキの初撃は、ただの正拳だった。

補足すれば、マキが放つのは人間の正拳ではなく、世界最強の妹が放つ正拳。ただの正拳としては雲泥の差がある。

驚きに目を丸くするハチが、あわてて鋼の翼を防御に回した。

「お兄ちゃんの怒りの鉄拳！」

必殺技のような叫び声とともに、拳が八チの翼に入り込む。カレーが幾度となく《千手》を打ち込んでもへこませる程度だった鋼を、マキは一撃でへこませたのだ。それどころか、衝撃の威力は八チの体をはるか遠くへ殴り飛ばしていた。

健在しているビルの最上階にある看板を突き抜けて、ビルの壁に体をめり込ませる。

壊れた外壁が、ぱらぱらと地面に落ちていく。

「まだですよ！ お兄ちゃんたちの痛みはこんなものではないのです！」

跳躍しようとするマキの背中を、ハルが声で制する。

「マキ！」

「なんですか？ お兄ちゃん」

「知ってるか？ 今日の夕食はうるわのカレーだ」

「むむ……聞き捨てならないそのメニュー、マキへの挑戦と受け取りましたよ？ お兄ちゃんがカレー好きなのを知っていることなら由々しき事態ですよ……むむう、これは早急に手を打たなければ、マキのお兄ちゃんが毒牙にかけられてしまいます……ここはカレーチンジャオオロスーではなく青椒牛肉絲なんかで……」

眉間にしわを寄せて腕を組む。唇をとがらせてうるわへの対抗心をあらわにする。

「挑戦かどうかは置いておいて……全員で打ち上げをやる。全員でだ。じゃなきゃ……やらない」

我ながらベタな台詞を言っていると思う。

その恥ずかしさも手伝って顔を背けたと思ったが、ハルはそれをしなかった。邪魔な長い前髪を乱暴にかき上げて、マキの明るい笑顔を目に焼き付ける。

「もちろんです！ お兄ちゃんはマキのものだって宣言しなきゃいけないからっ！」

「お、おい！」

危うい言葉を地面に置き去りにして、マキは地面を飛び立った。マキの周囲の空気が揺れたかと思うと、次の瞬間にはマキは弾丸と化していた。マキの立っていた地面に大きな亀裂が入り、風がハルの顔に吹き付ける。あっという間にマキはビルの屋上に達していた。

めり込んだ外壁から身を乗り出し、ハチが歯ざしりする。

持っていた大鎌をマキに投げつけ、新たに左手に長大な剣を出現させる。身の丈は優に上回る剣。反射する太陽の光は刃の切れ味を謳う。

その後の攻防はまさに怪獣大決戦の様相。

二匹の怪獣が空と陸を激闘の舞台とする。

「お兄ちゃんはマキが守るんです！」

屋上を飛び越えて、遙か上空でハチと激突する。投げつけられた

大鎌を驚異の動体視力で華麗にキャッチすると、そのままのスピードで八ちに斬りかかる。八ちは翼を羽ばたかせて体勢を安定させると、剣の腹で受け止めようとする。

勢いを殺しきれず、ビルの内部に転がり込んでいく二人。

壁を五枚、六枚と突き抜け、八ちの背中が社長室の机にぶつかったところで止まる。花瓶が倒れ、高級なカーペットに染みこんでいく。

「僕は……僕はお父さんに会ったんだ！」

力の押し合いに歯を食いしばり、八ちは腕の筋力を爆発させた。流動しぼこぼこことふくれあがったかと思うと、マキの大鎌を押し返す。

力の増大に目を見開くマキ。

「僕は負けられないんだ！」

対抗しようとするマキの力を自らが引くことで受け流し、マキの体勢を崩す。

現れた好機を八ちは逃さなかった。

鋼の翼を大きく開き、マキの背中に一撃をたたき込む。鉄筋コンクリートを背中にぶつけられたような衝撃に、マキは階下に叩きつけられた。社長室の床を突き抜け、会議室のテーブルさえも突き抜け、さらに階下の営業部の床でバウンドする。クッキーの型抜きのように天井にはマキの体の形が二個、三個と続いている。

三階上の天井からマキをのぞき込む八ち。

翼を羽ばたかせると、剣の先端部をマキに突きつけ、天井に開いた穴から落下してくる。マキは手から離れた大鎌を素早くつかみ、

窓の外に飛び出した。

マキのいた場所に突き立つ長大な剣。

ハチの舌打ちが聞こえた。

ガラスを突き破って、三十階立ての高層ビルから重力落下。ガラスとともに地面へ引かれていくマキ。

「逃がさないからね！」

マキを急迫するのは空を飛ぶハチだ。鋼の翼を羽ばたかせ、マキの落下にすぐさま追いつく。二人は空中できりもみながら、武器を交える。

大鎌と、大剣。

巨大な武器同士が火花を散らす。一階落ちるごとに火花が弾け、景色がぐるぐると回転する。

「マキは！ お兄ちゃんと……！」

空、地面、ビル。

「僕は！ お父さんに……！」

空、地面、ビル。

作用反作用の法則に従い体勢を乱す二人。攻撃を放ち、武器を削りあえば、自ずと反動が襲う。平衡感覚すら失う中で、マキとハチは矛をぶつけ合う。

遠のく空。迫る地面。

そんなものはお構いなしだ。互いの攻撃が互いにヒットし、二人は道路を挟んだ左右のビルにはじき飛ばされる。ともに空中で回転し、ビルを足蹴にして、再激突。

「一緒にいたいのです!」

「会いたいんだ!」

ひととき大きな衝撃が広がり、火花が散る。すさまじい衝撃波に周囲のガラス窓が割れ、雪のように地面に落下していく。その衝撃の中から二つの影が飛び出し、ビルの谷間で攻防を繰り返す。

街路樹が転がり、車が面白いように舞い上がる。

マキがコンビニエンスストアにはじき飛ばされれば、本棚が倒れ、レジが吹き飛んだ。札束と小銭が宙に舞い上がって散乱する。

ハチが地面に激突すれば、道路のアスファルトがめくりあがり、地下の配管があらわになる。水が噴き出し、ハチの翼を洗い流す。ワイシャツが水浸しになり、銀髪をたつぷりとぬらした。

口元の汚れをぬぐうと、へこんだ両翼を残り少ない余力で元に戻す。

「僕が負けるはずなんてない……負けるはずなんてないんだ!」

両翼で地面を叩くように舞い上がる。

奪われた大鎌を構えるマキ。

正面からつつこんでいくハチ。

安直な軌道の連続でも、スピードは増すばかりだ。天から晴れ間がのぞく中で、ビルの上では二つの光がついたり消えたりを繰り返して

いた。超高速でビルの上を飛び、武器を交える。

灯っては消え。消えては灯る。

まるで破裂する流れ星。両端から流れてくる流星群は、互いを削り合う。

殴り飛ばし、はじき飛ばし。殴り飛ばされ、はじき飛ばされ。

隕石のように大地に激突し、周囲の建造物を破壊していく。光を反射する武器の光は尾を引き、戦況を見守る兄の目に焼き付いていく。

「お兄ちゃんが信じてくれてる！」

兄の信じる力を頼りに、大鎌をふるうマキ。

「マキを信じてくれてる！」

その信頼に応えるようにマキの力は増していく。

ハチの翼から射出される数百のプラグ。四方八方からマキを包囲する。ハチ裂きにしようとなるプラグの群れ。ビルの側面を突き刺し、ガラスを突き破り、看板を貫く。間断なく繰り出され、よける隙間すら見あたらない。

一瞬でも判断を見誤れば体を貫かれ、一度でも貫かれれば蜂の巣にされてしまう極限の状況下。

そこしかないという生きるための筋道を、戦闘の中で見いだす。

ビルの屋上、ヘリポート部を駆け抜け、大鎌を構える。

満を持して、ハチへと大跳躍。視界を飲み込むプラグの群れ。

マキに迷いはなかった。

プラグとプラグ。正確に体を滑り込ませ、一ミリの狂いもなくプラグの間隙を縫う。服を破られ、頬を傷つけられても、天を駆ける少女はひるまない。

ついにはそのすべてをよけきつてみせる。

笑顔が弾ける。

「お兄ちゃんが、マキを見てくれてる！」

マキは懷に潜り込む。

ハチの顔が驚愕に震えた。

「嘘だ！ よけられるはず」

ハチは舌打ちして鋼の両翼を防御に回す。そして、横にない大鎌が、ついにハチの翼をまっぴたつに切り裂いた。羽ばたくすべを失い、ガラス張りの駅天井に落ちていく。

重力に逆らうことが出来ず、二人はもつれ合ったまま駅のと真ん中に落下した。

コロセウムのような外観をした駅。天井はどこもステンドガラスのように色とりどりのガラスに覆われている。幻想的な光を構内に提供していたガラスが、落ちてきた二人に突き破られ、無惨にも破碎する。

避難が完了しているのか、構内は無人。

無遠慮な訪問者に改札口が一斉に通路を封鎖する。翼をもがれたハチは、それでもガラスの中から立ち上がる。眼球に流れていく情報を読み取れば、全身の状態は警告だらけ。

修復機能は間に合っていない。

「お父さん……僕は！」

傷ついた体の機能が制限されようが、赤い瞳の中では未だ大きな怒りが燃えさかる。決して燃え尽きることがない怒り。父に会うという至上命題が力を与えている。

長剣を力一杯握りしめると、改札口を飛び越えた先で待つナナに斬りかかる。

大鎌を大きく振りかぶり迎え撃つマキは、その決意の力に押されてキオスクに突き飛ばされる。

ガムが飛び散り、雑誌や新聞が棚から崩れ落ちる。

倒れた冷蔵庫から雪崩のようにペットボトルが転がり、ハチの前に転がってくる。足下のミネラルウォーターを踏みつぶして、ハチはキオスクからはい出してくるマキを見た。

「お互いに譲れないものがある。君はハル、僕はハルが持つ『彼岸』。その点だけは共通しているね」

「ベタな映画にありがちな設定だけど……マキもそれには同意です」

大鎌を支えにして立ち上がる。

「そこで提案」

「あ、マキと和平協定でも結ぶんですか？」

「まさか」

嬉しそうな顔をしたマキを馬鹿にするように肩をすくめる。ハチの背中では、失った翼を探し求めるように、バチバチと火花が散つ

ている。

「お互い次で最後にするっていうのはどうかな？」

「……分かりました。マキもお兄ちゃんが心配でたまりませんから」

左肩を突き出すようにして、大鎌を右に振りかぶる。

「……最後に一ついいかな？」

「なんですか？」

開いた天井から、光が降り注ぐ。

壊れて床に散らばるガラス片が、まるで野に咲く半花のようにきらきらと光り輝いている。

「君は《彼岸》……いや、お兄ちゃんが好き？」

「大好きです」

につこりと笑い、即答。

考えるまでもない答え。

「マキからも一ついいですか？」

「いいよ」

じりじりと間合いを確認しながら、マキは言葉を紡いだ。

「お父さんが好きですか？」

「大好きだよ」

胸を張るように、即答。
考えるまでもない答え。

二人の動きが止まる。

駅の構内を悠々と吹き抜けていく風。

ハチの銀髪を揺らし、マキの赤い髪留めをなでる。

駅の時刻表には全線通行止めの案内のみが点灯している。動かない電車はスライドドアが開けっ放しになっており、車内には置き去りにされた朝刊や、缶コーヒーの空き缶が転がっている。忘れ物らしきバッグからは口紅とハンカチが飛び出していた。

床に落ちている携帯電話が、体を小刻みに揺らして持ち主を呼んでいる。一向に現れない持ち主をあきらめるように、携帯電話には着信履歴だけが募っていった。

バイブ音が止まり、二人の体が動き出す。

どちらが先というわけではない。それが必然であるように、時が重なった。一定の距離を保つように構内を駆け、ホームにつながる階段を上っていく。

滑り込んでくる電車はない。

やはり全線通行止めの電光掲示板だけが、一定間隔でホームにぶら下がっている。

多くの人でごった返すホームも今は二人だけ。

足音だけが駅に反響していく。

微妙な距離感。

力を最大限に発揮できる距離感を探す。マキが電車の屋根に飛び乗り、八チもそれに続く。車両と車両の継ぎ目を飛び越え、先頭車両にさしかかる。

着地の寸前で、滞空しながら振り返るマキ。

それが最後の激突の合図だった。

着地と同時に一転、追いかけてくる八チへと急接近する。保っていた均衡は一気に崩れた。

二人からはき出される鬼気がホームの雰囲気を一変させる。力を宿した烈風がホームを駆け抜けていく。

二つの刃が激突する。

一合、二合。三合目はなく、大鎌の一振りをジャンプで交わした八チが、長剣での唐竹割りを繰り返す。

マキのバックステップ。

制服が縦に切り裂かれ、胸元があらわになる。

電車の天井に突き刺さる長剣。紙一重の一撃だった。

マキの頬を汗が伝い、命が危険にさらされたことを知る。

剣を電車から引き抜き、追撃する八チ。刺突の姿勢。八チの加速度が音速を超える。

一方、バランスを崩したマキの体。迎撃に体を持ち直そうとする。刹那、マキの背筋に戦慄が走った。

かかとが地に着いていない。
背後には何も無い。眼下には線路。先頭車両であることがあだとなる。

さらなるバックステップは無理だと直感が告げた。神速となったハチを止めることは不可能とも。

後退したところで武器ごと貫かれるだろう。
背水の陣。マキは前進することを即断した。

迫り来る白刃。兄の顔がよぎる。
閃く大鎌。兄の願いがよぎる。

走馬灯のように駆けめぐった。

ベッド脇で握りしめてくれた兄の手のぬくもり。優しい声。
聞きたい。もう一度だけ、もう一回だけ。
違う。そんなの嫌だ。

一度なんてやだ。一回なんてやだ。
何度でも、何回でも。
聞きたい。感じたい。
マキは。

マキは欲張りなのです！

ハチの長剣がマキの首筋を抜けていく。
首に血の筋を残しながら、マキはハチの体は大鎌で断ち切った。
上半身と下半身が離れ離れになる。下半身は滑るように線路に落ちていき、上半身はホームに転がった。
火花が散り、漏電した電気がほとばしる。

瀕死の主に呼応するように大鎌が形を維持できなくなる。

マキは溶けていく大鎌をホームに落とし、八ちに近付いていった。

「……お父さん……負けちゃったよ……」

小さな声がホームに流れる。

上半身だけとなった八ちの目元から、綺麗な雫がこぼれていた。

「せつかく造ってもらったのに……会いたかったのに……」

軽薄な瞳も今はどこかへ消えた。

ずっと自信満々だったのは、父親への信頼が故。尊敬する父親が造ったから、負けるはずがない。そう赤子のように信じ続けていたから。

マキは唇をかむばかりで、声を出すことが出来なかった。

誰が悪いわけでもない。互いの願いを貫いた結果がそこにあるだけ。

お互いに譲れない思いがあった。そして、どちらかが願いを叶え、どちらかが叶わなかっただけ。それだけのこと。当然の摂理だった。

「終わったんだな、マキ……」

渴望してやまない声にマキが振り返る。

ハルがうるわに肩を貸し、小脇をナナに支えられていた。瀕死の八ちを見つけるや、ナナはハルから離れ、八ちに駆け寄っていった。

「お兄ちゃん……マキは、マキは……」

「言わなくていい。分かってるから、何も言わなくていい」

兄の優しい声音に、マキの表情が簡単に崩れていった。
その場でぼろぼろと涙を流し、ハチの願いを絶ってしまった自らの選択に苦しむ。

「俺がお前にそうさせたんだ。だから、俺も一緒なんだ」

マキの頭を手のひらでなでると、感極まったマキがハルの胸に飛び込んでくる。子供のように泣きじゃくる妹の姿に、ハルもまた胸を突かれる思いだった。

「理解に苦しみます、ハル。私にはあなたのような考え方は出来かねます」

無表情に冷徹さすら宿して、遠くに転がるハチを見ている。

「俺には……何が正しいなんて分からない。それを押し通すだけの力もない。でも、受け止める力はあると思う。たとえば……憎しみの連鎖。正しさを押し通せば、憎しみも生まれる。連鎖させる力よりも、憎しみを終わりにするための力が必要なんだ。俺はその力の方があると思う。傷つけられても許してあげたいと思う。そういう考え方もあっていいはずなんだ。俺は……悲しむことに慣れてるからな」

ハチに語りかけるナナの姿。

それを悲しげに見つめるハルの顔は、寂しさと優しさにあふれていた。自分の過去を重ねるようなハルの目に、うるわの心が揺れる。

「……ハル、あなたは顔の割にお人好しすぎるのです」

フラットを装う、うるわの声。

「一言余計だと思う」

「ええ、存じています。そして……それぐらいで済ませてしまう私も、十分お人好しなのですが」

「……ありがとう、うるわ」

胸の中でなくマキの頭をなでながら、ハルはうるわに感謝した。

終わりの風がホームをないでいく。

ナナの悲しげな声が、風に乗ってハルに届いていた。

「ハチ……ハチ、大丈夫？」

「……ナナ、僕、お父さんに会いたかった……どうしても……一度でいいから、お父さんに」

声に雑音が混じり始める。まるで壊れかけのラジオのように。

「ナナも、お父さんが好き。ハチも好き。ハルも、カレンも、マキも、うるわも好き。ナナは、みんなで遊びたいの。みんなで楽しくゲームしたりしたいの」

切に願う声がハチのハードディスクに書き込まれていく。

「ナナは誰も欠けてほしくないよ」

「お父さんがいなくても、ナナたちがいるこの世界にはたくさんの楽しさとか、優しさがあふれているの。お父さんが好きになった世界は、お父さんが生きていた世界だけじゃないんだよ。世界そのもの……そこに生きていた人とか、動物とか、生きているすべてのものが好きだったんだよ、きっと」

「でも……お父さんは絶望して……」

「お父さんだって人間だもん」

その言葉にはすべてが込められていた。
人間が犯す、過ち。悲劇、喜劇。奇跡、絶望。
すべてを包み込み、それでもなお見守ろうとする力強さ。

「……………そうなの、かな……………」

「うん！」

純粋な笑顔で頷く少女、《人機》ナナ。
あまりにも無垢な、疑うことを知らない笑みに、ハチの思考制御が一つの答えを導き出す。

「……………そうだね」

「うん」

「ナナの……言うとおりだ……………」

唯一残ったハチの左腕を握りしめ、ナナは弟を最後まで見守った。

積み重なった瓦礫のてっぺんが揺れ、そこからほうほうの体では
出す影がある。

真っ黒にすすけた姿を地面に這わせながら、ごほごほと咳き込む。

「……………うっ……………誰かいい加減に私を助けなさいよ」

ほふく前進しながら、破壊し尽くされた無人の町に顔を巡らせる。

「まさか」

思いついたのは、ある一つの推測。

「私を忘れてるんじゃないでしょうね!？」

崩壊したビルの谷間に、声は虚しくこだました。

エピソード・「絆」・前

午後のかげり始めた日差しが、カーテンの隙間から入り込む。

ベッドの上、少女の小さな体が、暖かい日差しとは別に熱を運び、小刻みに震えていた。やってくる感情の高まりに興奮を隠せない。ともすれば溢れそうになる歓喜を、どうにかのど元で押しとどめる。しかし、それでもこらえきれずにまろび出てしまう高い声が、ベッドの上にカーブを描いた。

汗ばんだ額。こぼれ落ちる汗。

頬を伝い、のどから鎖骨へと抜けて、胸元へと入り込んだ。

「……お、お兄ちゃん……マキは、もう、いっちゃいますよ……？」

震える声で、兄の前髪に触れる。

マキの目の前で一心不乱に目をつぶり続ける兄が、決意にも似た熱い息を吐く。

「ああ、いっていい……そのままいってくれ……！」

汗ばむ兄の頬。

マキはもう止まることが出来なかった。

自分の行為を途中で止めることなど出来なくなっていた。

「分かりました、お兄ちゃん……いっていいんですね？ マキは……
……いっていいんですね？ マキは……マキは……いっちゃいますっ
っ！」

握りしめた拳。

耐えられなくなったようにさらに強く握りしめられる。
高鳴る胸、込み上げてくる興奮の波。

寄せては返し、引き寄せては、引き返す。

徐々に盛り上がっていく二人。

さざ波だった感情が津波と化し、ついには真っ白な光が二人を飲み込んでいった。

ちよきん。

糸の切れた人形のように、そのときを迎えた兄の体から力が抜けていった。

「あ……ああ……マキは……いつちゃったのです………」

「そうか……いったのか」

ベッドの上で激しい呼吸が繰り返される。

熱い吐息をこぼし、マキは体が予想以上に高ぶっていたことに気がつく。

熱い。胸の鼓動はまだ収まらない。

ついに……シてしまった。

今にも燃え尽きてしまいそうなぐらいに。

一つの行為が終わりを告げたところで、マキの体にはどっと倦怠感が押し寄せていた。ほてった体をどうにか起こして、潤んだ瞳で

兄の顔を見つめる。

「お兄ちゃん……！……前髪がなくなっても相変わらず素敵です！思わず抱きつきたくなってしまう！そう！こんなふうにな……ぎゃ！」

ベッドに腰掛けた兄に後ろから抱きつくこうとするが、顔面を手のひらでロックされて全く近付くことが出来ない。ばたばたと手足を動かすが、兄は全く持って相手にはしてくれなかった。

力尽きたマキの手から、ハサミがぽとりと落ちる。

「ん……前髪がないとさすがにスースーするな……そのうち慣れる……か？」

ハルはハンドミラーを駆使して様々な角度から自分の顔を確認している。真っ白なエプロンの上には、切り落とされた長い前髪。目を覆うほどの長さにあった前髪は、今やハルの一部ではなくなった。以前よりも視界が開け、大げさではあるが、世界が変わったようにさえ見える。

「しかし、マキ……これは切りすぎじゃないか……？」

短くなった前髪をつまむハル。目元を完全に覆っていた前髪が、眉毛にも届かない。

「そんなことはありません！お兄ちゃんにはそれぐらいがちょうどいいはずです！……マキが、マキが切ったんですよ？マキが初めて、お兄ちゃんをマキ色に染めることが出来たのです……！これは記念碑的です。歴史的な一歩です！」

ガッツポーズが飛び出す。

マキの背後で絶壁にぶつかる高波。砕けた波が、勢いよくしぶきを上げる。

もちろん、それはハルの錯覚だ。

「ああ、見れば見るほど……………ハア……………ハア……………お兄ちゃん……………マキは、今にもうれしさに昏倒しそうですっ！ もっとよく、もっとよくお兄ちゃんの顔を見せてください……………あわよくばキ、キスひぎゃっ！」

唇をタコのようにとがらせ、生暖かい息を漏らすマキの頂点に、容赦なくエルボーを落とす。マキは頭を赤い髪留めごと押さえて、ベッドの上でごろごろとも悶え苦しんでいる。

涙が果てなく流れ出していた。

「お、お兄ちゃんの鬼……………！ 人でなしです！」

「黙れ、変態が。前髪を切るぐらいでいちいち大げさなんだ、お前は。前髪を切るだけなのに……………へ、変な声をだしやがって……………」

「あ……………まさかお兄ちゃん……………想像しちゃったんですか……………？」

「……………何をだよ」

無然とするハルだが、頬がほのかに染まりつつある。

前髪で顔を隠そうとするが、それは徒労に終わる。何度も助けてもらった前髪とは決別したのだ。今更助けてと言っても、もう遅い。ハルは動揺を隠しきれず、視線を追いかけてくるマキに甘んじて捕まってしまうのだった。

「そ、れ、は、も、う……マキとあーんなことやこーんなことで、あっちうちでえっちちなことです、よっ！」

腰元に抱きついてくるマキの力を利用して、胴払いで床にたたき伏せる。あまりのスムーズな迎撃に、受け身をとれずに背中を打つマキが、海老反りになって昏倒する。

「お、おお……お、お兄ちゃん……今の一連の流れは……オリンピック級です……！」

無視。

エプロンのひもをほどき、切り落とされた髪の毛をゴミ箱へ。

「ああっ！ もったいない！ その前髪は、マキが白紙に包んで丁寧に保管します！」

「俺は切腹した侍かつ！」

ゴミ箱をあさろうとするマキの首根っこをつかんで、ドアの外に放り出す。

「しくしく……いいんです。マキはそれがお兄ちゃんの優しさだっ
て分かっているんです。優等生がたまに悪いことをすると、あ、こ
いつは実は悪いやつだったんだ、って言われる一方で、不良がたま
に善いことをすると、あ、こいつは実は良いやつだったんだ、って
いわれる感じで、お兄ちゃんが時々見せる優しさでマキはすぐに救
われてしまうのです……！ 今までの痛みや、苦しみを帳消しにし
てしまうのです！ ……うっ、涙なしでは語れない浪花節ですね…

……」

ドアの外から聞こえるすすり泣きにため息をつき、ハルは頭を振った。

前髪が目の前で揺れることはない。

「今までありがとな」

ゴミ箱からのぞく長い前髪に感謝する。
切ろうと思ったのはハルの意志。

自分に都合の悪いことがあっても決して逃げない。
不器用であることから逃げない。
感情を隠さない。

その決意があつて、ハルはようやく前髪を切ることを決意したのだった。

「それにしても、これは短すぎる……」

ハルはさらに大きなため息をつくのだった。

「絶対に笑われるな、これは……」

……今日、何度目のため息をつきながら、うるわは思つ。

誰かが、ため息をすればするほど幸せが逃げていくと言っていた。もしかしたら私なのかもしれない。

ポジティブだった思考をネガティブに変えるため息に、どこかリ
アリティを感じながら、うるわはカレンの背中を見つめる。

住宅地を我が物顔で闊歩する背中。
年相応の背中。

それでもぴんと張った背中、後ろを歩く者を問答無用で引つ張
っていくだけのオーラに溢れているように見えた。

金色の髪がゴシック調のコートの上で揺れている。

「うるわ、何してるのよ？ 私を迷子にさせる気？」

怒ったように腰に手を当てて振り返る。

他人が見れば、ひどくわがままな言葉だったに違いない。気遣い
もない上からの言葉。それでもうるわはゆっくりと頭を垂れる。

《遺片》はカレンの方向感覚を奪い、どこへ行くにもうるわの同
行を必要とするようになっていた。

黄金の瞳に不機嫌さを宿しながら、カレンは眼鏡のブリッジを持
ち上げる。

「申し訳ありません、カレン」

遣える者の背中を守るのがメイドたる自分の役目だった。

幸か不幸かを考えるのは私ではない。主が幸福であることが、私
の幸せそのもの。

異議はない。今でも変わらない。

「……『いかなる時も、冷静・笑顔・優雅であれ。かつ、最大の犠牲心を持つて奉仕せよ』」

国際家政婦条項、冒頭の一節であり、宣誓式でも誓った言葉。

笑顔すら満足に浮かべられないのにメイド・インを名乗る自分自身にいらだちを感じながらも、それを認めてくれるカレンという存在。

主従関係にとられない自由奔放な、一風変わった主人。

ハル同様、最大の犠牲心 命を投げ出すこと をかけるに足る大切な主人であると、心が告げている。

「……ん？ どうしたのよ？」

つぶやいたうるわに心配そうな視線を向ける。

「いえ、確認しただけです。カレンのような駄目な主人を持つと、メイドも何かと大変なのです」

うるわの愁いを帯びた眉が、カレンの横にあった。

「それが行き届かないメイドならばなおさらです。私はまたカレンを危ない目に遭わせてしまうかもしれません。自分自身に迷い、悩み、疑問を持つ感情的な人間は、メイドとして失格。メイド・インの名折れです」

どこが感情的なのだろうと小首をかしげたくなるのを抑えながらも、カレンはうるわの頭を優しく撫でる。

銀色に輝くカチューシャが、夕陽に透けていた。

「なんて言うかさ。私も同じだと思うのよ」

カレンはうるわと肩を並べながら、恥ずかしそうにぼりぼりと頬をかいた。

「主従そろって不完全。確かにそれは駄目よ。でも、これからいくらでも良く……強くなっていけるじゃない。うるわも、私もね。今日離ればなれになるわけじゃないし、ましてや明日世界が終わるわけじゃない。私たちの関係は、馬鹿みたいにこれからもずっと続いていくんだから。その中で少しずつ良くなっていけばいいのよ。二人一緒、至らないなりにね。支え合ってこそ主従関係よ」

「……はい」

かけられた言葉が深く心に刻まれていく。

カレンが主人で良かった。うるわは心の底からそう思う。

暮れなずむ住宅街の雰囲気がそうさせるのだろうか。
うるわは胸の中のとげが一本、抜けた気がしていた。
肩の重荷が下りた気がした。
許された気がした。

「アイツと会うの一ヶ月ぶりよね……」

夕陽に向かって話しかける。

「ハルは少しぐらいましになっっているかしらね。前のままだったら、ガツンと言ってやらなきゃ。うるわ、ハルを甘やかすんじゃないわよ」

「ええ、分かっています」

日が落ちるとともに二人の影が伸びていく。

「そういえば、最近よくカレンの会話にハルという単語が出ますね。今日だけで、四十七回聞きました。新記録樹立です」

「……いちいち数えるんじゃないわよ、気持ち悪い。そう言ってるわこそ、今日はどこか楽しそうじゃない？」

カレンがうるわの手元を見る。

うるわの手にはスーパールの袋がぶら下がっている。

ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、若鶏のもも肉……連想ゲームとしては最低難度だろう。

「そうでしょうか。私はメイドとしての義務と約束を果たしに行くだけです」

「昨日、おととい、その前も、その前の前も……いい加減カレーは飽きたわよ？」

カレンがニヤリと口元を歪める。

「……。……カレーは日をおけば美味しくなるのです。ご存じありませんか？」

後頭部で手を組んで、口笛でも吹くようにカレンが夕陽に眼を細めた。

「うるわのカレーは十分美味しいんだから、練習する必要なんてないわよ。ましてやあんなやつのために」

「カレンは何か大きな勘違いをなさっているようですね」

スーパーの袋を右手から左手に持ち替えようとして、中からジャガイモがこぼれる。あわてて拾おうとして、今度はつま先で蹴ってしまい、遠くに転がっていつてしまう。

うるわの無表情が、一瞬だけ渋いものになった。

「そう？　ならいいんだけど」

馬鹿にするような笑み。

「……何か言い足りなさそうですね、カレン」

逃げ出したジャガイモを捕まえて、スーパーの袋へ戻す。

「別に。ただ単に、私は馬に蹴られたくないだけよ」

「その台詞、謹んでお返しいたします。……出来れば、カレンにはもう少し言葉の使う時と場所、用法を心得てほしいものです」

カレンを早足で追い抜く。

「なによ」

「なんですか」

追いつき、にらみつけてくるカレンに対して、うるわは無表情で迎え撃った。しかし、ふいにカレンの頬がふくらみ、耐えきれずそのまま吹き出してしまふ。ひとしきり笑ったあとで、カレンは遠い目をしてつぶやいた。

「……うるわも変わったわよね」

「あなたこそ、カレン」

しみじみとした空気が、橙色の世界に馴染んでいく。

「変わったと言うより……変えられたのかしら」

「あなたこそ、カレン」

二人、視線を違う場所に飛ばして、思い思いの記憶の扉を開く。

そこには同じ人物が映っている。

時と場所は違えど、それは確かに同じ人物。

徐々に心を占拠しつつある無遠慮な人物。

弱々しい姿をさらしながらも、強く前に進むとする意志を持つ人物。

「……ね、乾燥梅、ちょうだい」

うるわに手を差し出す。

「駄目です。夕食が食べられなくなってしまいました」

「私を子供扱いする気!？」

カレンの声に驚いたカラスが、連れ立って夕陽の向こうに飛んでいった。

エピソード・「絆」・後

「むむう……お兄ちゃん、どうして帽子をかぶってしまっんですか？ マキはそれはそれは格好いいと思いますよ！」

マキの言うことは聞かずに、ニット帽を目深にかぶるハル。

「帽子をかぶるなんてそれこそお兄ちゃんらしくないですよ！ こんな帽子、マキがはぎ取ってやります！」

無言で脇を通り過ぎる兄に頬をふくらませる。

ジャンプ一番、兄の背中に取り付いて、ニット帽に手をかけた。階段を下りる途中だったハルは、妹の来襲にバランスを崩す。

「この！ 危ないだろうが！ 止める！」

マキはだだをこねる子供のようにハルの背中にしがみついて離れない。両足でハルのお腹をロックし、両手でニット帽を引っ張る。奪われそうになるニット帽をさらに目深にかぶろうとするハル。

二人は押し合いへし合いしながら、階段を下りていく。

「お前……！ いい加減にしないと階段から転げ落とすぞ！」

ハルが身をよじると、肘がふつくらとした得も言われぬ感触に包まれる。

「あ……ん……お兄ちゃん、あんまり暴れないでください……変なところがこすれて……っ……ん！」

耳元に吹きかけられる吐息は桃色。

悪のりしたマキが余計に押しつけてくる柔らかい感触。
ハルは気になってしまつて、それどころではない。

「あつ……お兄ちゃん、そこがいい……です……！ マキ……そこ
が弱いみたい……です……」

兄の耳朶をなめるような声に、ハルは身震いを隠せない。
マキが弱いところを暴露するのと同様に、ハルの弱点までも露呈
してしまつたようだ。

悪代官もかくやという笑みがマキを覆い尽くす。

「えへへ……お兄ちゃん……耳たぶが弱いんですね？ ここです
か？ ここがいいんですか？ そうなんですね？ ほら、ふー……
お、に、い、ちゃ、ん」

執拗な攻撃に、反撃する力さえも奪われていくハル。

「や……やめ……」

玄関のチャイムが、マキの耳たぶ攻撃にかき消されてしまう。

「ふふふ……うへへ……ついにマキは見つけてしまいました！ お
兄ちゃんの弱点……もとい性感帯を！」

調子に乗って耳たぶに息を吹きかける。

身体から力が抜けそうになり、ニット帽に入れる力を思わず弱め
てしまいそうになる。玄関のチャイムが何度も何度も鳴らされる中、
ハルは何とかニット帽を奪われぬまま、玄関のドアを開けた。

そこには腕を組んで眉をつり上げているカレンと、現れたハルに丁寧にお辞儀をするうるわがいた。

頭を上げると、うるわの視線がハルの背後に抱きついていてマキに動く。

そして、ぼそりと言。

「……不潔です、ハル」

身も凍るような絶対零度。

「主人命令よ、もつと言つてやりなさい」

額に血管を浮き立たせたカレンの指示に、こくりとうなずくうるわ。

「変態、腑抜け、間抜け、優柔不断、愚兄、シスコン、近親相姦」

ハルの胸に次から次へと突き刺さる冷たい棘。

「隙あり！」

致命的な連続攻撃を受けて、ハルの力が弱まる。それをマキは見逃さなかった。

土に埋まった作物を引っかくように、思いつきニット帽をはぎ取る。勢い余って、マキの手から離れたニット帽が、カレンとうるわのちょうど中間点にふわりと舞い降りていく。

主人の黄金の瞳と、メイドの漆黒の瞳が、しっかりとニット帽をとらえて上から下へ。

「うーん、やっぱり、この髪型が最高ですよ！ マキのお兄ちゃん
はかくあるべし、です！」

頬ずりするように兄の頭 前髪を撫でる。

マキの言葉を止めるすべはない。

解き放たれた言葉を打ち消すすべもない。

ハルの背筋に悪寒が走る。

背筋を駆け上がるのは蟻走感。恐ろしくもおぞましい未来への絶望だった。

マキの言葉を耳にした主従は、玄関に落ちたニット帽から、マキの額へ視線を移す。

「へ？」

口をぽかんと開けるカレンの隣で、うるわがスーパールの袋を地面に落としていた。

……今まさに、ハルの未来は現実のものとなった。

ハルがいつになく仏頂面でイスに座っている。
足を組んで、そっぽを向いて、頬杖までついて。

「ハ、ハル……ア、アンタ……どうしてまた……また……また……
ぷっ！」

伸びきってしまったニット帽。

どうやら、かぶるのはあきらめたようだ。

床で伸びているマキの顔面に臨終が如くかぶせられている。マキの頭には、アイスクリームのように、たんこぶがいくつも重なっていた。

たんこぶから上がる煙が、見るからに痛々しい。

「くくく……あははははっ！ やっぱり駄目よ、笑いが止まらないわ……ああ、お腹が痛い。傑作、本当に傑作……くくく……もう駄目！ もう駄目！」

目をそらしては笑い、目を合わせてはまた笑う。

お腹を抱えて笑うカレンの金色の髪があわせるようにふわふわと揺れている。見かねたうるわが、キッチンからカレンを冷静にたしなめた。

振り返ったうるわの手には包丁とジャガイモ。

皮は薄く、綺麗に剥かれている。

「カレン、笑いすぎです。そんなに笑っては……そんなに笑っては……いけま」

調理に戻るうるわ。

「今、絶対に笑っただろ！？」

「いえ、気のせいです」

ちつともハルの方を向こうとはせずに、調理に集中しようとする。うるわの肩が小刻みに震えているのを見たハルは、むっとしてイスにどっかりと腰を据えるしかない。

「あはは……全く、本当に面白いわね、アンタって。私の予想の斜め上をいつてくれるわ」

笑いすぎで溜まった涙を指先で拭う。

「好きでこうなったんじゃない。本当はもっと長めにするはずだったんだ」

「勘違いして欲しくないんだけど、別に似合ってないって訳じゃないのよ?」

「あれだけ笑った後に言う台詞かよ、それが」

仏頂面は堅さを増す。

「確かにそうね。……あゝ、久しぶりに大笑いしたわ」

嬉々とした表情を見せていたカレンが、ふいに表情を軟らかくする。

「それはそれとして。……ねえ、あれからどう?」

手を組んだ上に顔をのせて、小首をかしげる。
透き通るような金髪が首筋を流れ落ちた。

「すこしはましになった？」

悪魔のような天使は、天使のような悪魔の微笑みを浮かべてハルを見つめる。

「前髪のことなら笑っただろ、それに」

「そんな表層的なことじゃないわよ」

カレンの言葉が追求する先。

ハルには分かっていた。

ハチとの戦いの折にカレンがハルに言った言葉が蘇る。襟首を持ち上げてカレンがハルに告げたこと。頭を打ち付けるような強い言葉だった。

キッチンで調理するうるわも手を止めて、二人の会話の行く末を探っている。

「……俺に分かるか、そんなこと」

「お兄ちゃんは、頑張ってますよ」

イスに座った兄の肩を揉むようにしてマキが顔を出す。たんこぶはいつの間にか治っていた。

「ベッドの下にあったエッチなコスプレ本は、全部トレーニンググッズに変わりましたよ！」

「……ハル、ジャンルはちなみにどのようなものでしょう？ 返答によっては今後の対応を改めねばなりません」

ジャガイモをまな板ごと叩ききつたうるわが、背中でもの申す。

「うるわ……なぜそこだけ絡んでくる……」

ハルのつぶやきを上書きするマキの声。

「前髪を切ったのだって、前向きに生きる決意の証なんです!」

「それは妹としてのひいき目かしら?」

眼を細めるカレン。狩獵者のような瞳の輝き。

「違います。女としての男を見る目です!」

挑発をはねのけ、兄の首に嬉しそうに抱きつく。逆に、カレンを挑発的に見つめ返す。

「女らしさもないくせに、女を語るなんてね」

「それは、少しぐらいマキよりも胸があるからそう言っんですか……? でも、いいんです! お兄ちゃんは、私ぐらいの大きさの方が好きだっていつてくれたんです!」

「……………は?」

記憶にない。証人喚問でも同じように断言できる。
完全なマキのでっち上げだ。

「そつなのハル? アンタはこんな小振りなのがいいわけ? 大は小を兼ねるのに?」

「……は？」

マキの胸を指さして、自らも胸を張る。

本人が誇示するように、確かにマキよりも一回り大きい。

「そうですよね？　ここにいる誰よりもマキの方がいいって言うてくれましたよね？」

「ハル、本当ですか？」

「う、うるわ……包丁をしまえ」

一瞬の早業。ハルの鼻先に無表情のまま包丁をあてがっている。
無表情でありながらも影をまとうその姿に、ハルは脅迫されているように感じられた。

命の危険を察知した汗が、逃げるように頬を流れ落ちる。

「にゃー！　ハルのピンチだー！」

ドアを蹴破つて現れる小柄な影。

空中で二回転し、ひねりを加えると、見事にテーブルの上に着地した。

ハルを取り囲んでいた三人の動きが止まる。

「にゃっ！　ハルー、やっと会えたー、ナナ寂しかったよっ！」

イスに座るハルに、正面からまたがるように胸に飛び込む。ハル

に頬ずりしながら、ごろごろとのを鳴らす。

まるで猫のような仕草。

反射的にハルの胸が高鳴ってしまふ。

反射的に頭をなで、反射的にナナの背中に手を回してしまい、反射的に抱きしめるような格好へ。

「お兄ちゃん！」

「ハル、アンタ……」

「ハル、不潔です」

殺気立つ三つの眼光に、ハルが我に返る。

反射的に回してしまった手を離すと、ぶんぶんと首を横に振る。

「やれやれ、我が姉ながら、はしたないことこの上ないね」

ナナが蹴破ったドアの上に立ちながら、銀色の髪が揺れていた。

「お久しぶり、ハルと愉快的な仲間達。その節はお世話になりました」

うやうやしく頭を下げると銀色の髪が揺れる。

「ナナ、それに……ハチだったよな」

「僕の名前を覚えていてくれたんですね。そうです、八体目の《人機》にして至高の兵器ハチです」

「……直ったんだな」

「この通り」

返答として、ハチはスーツを開いて懷を見せる。白い齒をこぼして微笑む様は、年相応のものに溢れていた。

「やろうと思えば、今からでも戦えるよ」

ニヤリと歪めた口の端を待たずに、ハルを取り巻いていた三人の少女達が一斉に戦闘態勢を取る。

マキは襲いかかる熊のように手をあげ、カレンは緩やかに袖を揺らし、うるわは包丁を逆手に構える。

「にゃ？ みんなどうしたの？」

目を丸くして首を回らせるナナ。危機感は無塵もない。

「……なんてね、嘘だよ、嘘。冗談。僕はそんなつもりはないよ」

「本当なのか？」

ハルの低い声にハチはため息をつきながら、肩をすくめる。

「嘘つくことで僕になんのメリットが？」

「メリットならあるわね。油断した不意をつけるじゃない？」

鼻を鳴らすカレン。

「あ、言われれば確かにね。……でも、僕にそのつもりはないよ。僕がこうしてここにいられるのも、ハルのおかげだし。あのとき…

…ハルが僕を助けてくれた理由が知りたくてさ」

手を広げて、ハルを指し示す。

「僕は敵だった。紛う事なき敵だった。うるわやカレンを倒したし、ナナでさえ敵に回した。ハルには僕を助ける理由なんて無かったはずだよね？」

全員の視線がハルをとらえる。

「お前がいなくなったら、ナナが悲しむだろ、それだけだ」

「ハル―！」

嬉しそうにハルの頬をなめるナナ。ハルはくすぐったそうにしながらも、言葉を付け加える。

「それに……この世界だって捨てたもんじゃない。俺も色々あったけど、それでもこの世界で生きていこうと思える。失ったものと同じくらい大切なものが見つかるかもしれないだろ」

「見つからなかったら？」

赤い瞳がハルを見透かそうと細められた。

思わずカチンと来たカレンが、声を荒げようと口を開こうとする。

「見つけるんだよ。初めから後ろ向きでどうするんだ」

カレンの口が開いたままで止まる。

のと元までせり上がってきた台詞は、ハルと全く同じ。台詞を取

られた悔しさは不思議と表れなかった。

それどころかハルの横顔に頼もしさに似た暖かさを感じ、カレンはゆっくりと自分の言葉を飲み込んだ。

「ふふ……人間だね。絶望の中に希望を見いだそうとする。たとえそれが、はかないものだとしてもさ」

「……ああ、そうだよ、悪いか」

眉間に力がこもる。

「悪くない。だって、僕のお父さんも人間だから」

「にゃ！ お父さんは人間だよー」

「幸い、ナナはもう見つけているようだし、僕も僕なりに探してみるよ」

《人機》二人の表情が砕けたものに変わっていた。

「ホント、上層部も愉快的な判断下すわよね」

テーブルを指でとんと叩きながら、カレンはハチを睥睨する。

「もともと捕獲が任務でしたからね。上層部としては丸く収まってめでたしといったところでしょうか。任務も無事達成、瓦礫の山も

破格の予算投入で再生間近、法律による箝口令で事件もあつと言つ間に集束……加えて私とカレン、《人機》監視任務に着任、平行して《彼岸》を守護するとともにここで暮らせと言つんですから」

「そういうところは素早いよね、相変わらず」

「上司というのは責任を取るために存在するのです」

危うく流してしまいそうな軽い会話に、ハルがくっつかかる。

「おい！ 俺は聞いていないぞ！」

あまりの勢いにイスがひっくり返りそうになる。

「今、言いましたが」

しれつと言つてのけるのは日本一のメイド。

「あ、あのな……今日はただの打ち上げだと思って」

「どちらかと言えば、快気祝いだね、お兄ちゃん？」

「た、確かに　ってどっちだっていい！」

テーブルを叩くとスプーンが飛び上がる。

「そう騒ぎ立てないでよ。決まっちゃったんだから仕方が無いじゃない。長いものには巻かれるのが一番。なんなら私の《千手》にも巻かれてみる？」

スプーンに自分の顔を映して遊んでいるナナを横目に、いたずらに笑う。

「それに世界最強の妹がいるんだもの心配ないでしょ？」

「そうです！ お兄ちゃんはマキが守ります！」

「ナナも守る！ ナナもハルを守るよ！」

仲良く拳手をする二人に盛大なため息をつき、ハルは力なくイスに腰を預ける。

「あなたの負けのようですね、ハル」

「はなから勝敗の見えたいかさま勝負だったみたいけどな」

顔を手のひらで覆い、指の隙間からうるわをにらむ。

「疑心暗鬼を生ずです、ハル」

湯気が立ち上るカレーをテーブルに並べていくうるわ。

「くそ……で、始末書は書き終わったのか？」

「ええ、今回はカレンにも手伝っていただきましたから」

ハルの前に置かれたカレー。

スパイスのきいた香辛料が香り豊かに広がり、食欲をそそる。形良く切りそろえられた具材が、ルーから顔を出している。

「半月よ、半月。部屋に閉じこめられて、一日中デスクワーク、うるわもよくやるわよ」

「よくやったのはカレンです。よくもあそこまで破壊したものです」

「うまい皮肉だね、流石に主人とは違ってメイドは優秀。このカレーも美味しそうだし」

ハチが浮かべるのは、得意の軽薄な笑み。

「コイツ……大晦日の対戦カードは決まったも同然ね」

「どっちもどっちだろうが……」

ハルの今日何度目か分からないため息で、湯気が吹き飛ばされる。

「ねえ、お兄ちゃん、早くいただきますしましょう！ マキはもうお腹がぺったんこです……」

「にゃ！ ナナも、ナナも！」

ハル、マキ、カレン、ナナ、ハチ、うるわ。

計六人の狭い食卓ができあがる。

それぞれの前には大皿に盛られたカレーライス。

「それでは、ハル、乾杯の音頭といきましょうか」

「乾杯？ ……い、いつの間にジュースが」

カレーの隣には、オレンジジュース。

「それがメイド・イン・ジャパンですよ、ハル」

「早くしなさいよ、冷めるでしょ」

カレンがグラスを掲げると、他のメンバーもそれぞれにグラスを掲げる。

全員の期待の目にハルは引っ込みがつかなくなってしまって、何を言おうか考え込んでしまう。

見渡せば、賑やかな食卓と、それを取り囲む個性豊かな面々。

……それほど遠くない昔、一人になってしまった食卓が確かにあった。

一人には広すぎる食卓で、一人には広すぎる家で、たった一人いだけますの発声をすれば、あまりにも空しく声が響き渡る。それはまるで洞窟。太陽の光が届かない、冷たく湿った洞窟だった。

そこでハルは孤独と悲哀と共に暮らしていくことを決めた。

「あゝ……その、なんだ……」

それがどうだ。

今や食卓を囲むのは、世界最強の妹と、世界最強のメイド、世界最強の女主人、世界最強の兵器達。

なんて賑やかで、どうしようもない食卓だろう。

響き渡る喧騒は、近所迷惑だといわれるかもしれない。警察だつて呼ばれるかもしれない。

「お兄ちゃん！ 頑張るのです！」

「ハル、落ち着いて深呼吸です」

「あと十秒ね、それ以上は待てないわよ？」

「僕はカレンとは違って、待つよ」

「ナナも待つー！」

…… たく、どいつもこいつも、好き放題笑いやがって。

ぼつかりと空いた心の隙間に暖かい光りが入り込んでくる。

あまりにもすんなりと。

あらかじめ場所を用意していたかのように。

初めから決まっていたかのように迷い無く。

身体の隅々まで染みこんでいく。

気持ちいい。

長く絡まっていた糸が、解かれていくようだった。

ハルは暖かい空気を肺一杯に吸い込んで、グラスを高々と掲げた。オレンジジュースがグラスの縁からこぼれるほどに。

ハルの高らかな声。次の瞬間には、食卓に響くだろう。
短くなった前髪から、見たこともない表情がのぞく。
ハル以外の全員がその顔を目に焼き付ける。

「 絆に、乾杯！」

ハルは笑っていた。

【END】

エピローグ・「絆」・後（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

長らくおつきあいいただき、本当にありがとうございました。色々ありましたが、何とかプロット通りに書ききることが出来ました。それも、たくさんの栄養を下さった読者の皆様方のおかげです。

……また、たくさんの誤字脱字、本当に申し訳ありませんでした（泣）

寛大なお心遣いに感謝感謝です。

さて、立つ鳥跡を濁さずと言うことで、後書きはこれくらいにします。

最後になりますが、よろしければNAOの次回作「スクール・オブ・ザ・デッド2」でお会いできたらと思います。

それでは、評価、感想、次回作の栄養になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5717c/>

ボンバー・ガールズ～妹は世界最強

2010年10月10日15時06分発行